岩波文庫
33-805-7

アウグスティヌス

神の国

(五)

服部英次郎
藤本雄三 訳

岩波書店

Aurelius Augustinus

DE CIVITATE DEI

目次

はしがき

この訳書は、つぎにかかげる『トイブナ書店版、ギリシア・ローマ著作家文庫』に依るものである。

S. Aureli Augustini Episcopi De Civitate Dei Libri XXII ex recensione B. Dombart, quartum recognovit A. Kalb. Vol. I, Libi. I–XIII, Vol. II, Lib. XIV–XXII. Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri MCMXXVIII, MCMXXIX.

各巻の各章の見出しは、読者の参考のために訳者がつけたものである。

本書は、全五分冊からなり、第一分冊は原著第一―第五巻を、第二分冊は第六―第十巻を、第三分冊は第十一―第十四巻を、第四分冊は第十五―第十八巻を、第五分冊は第十九―第二十二巻をおさめ、解説は第一分冊に、索引、文献目録は本分冊の巻末につける。

神の国（五）

第十九巻

第一章

何が最高善であるかということについて論じたヴァルロの見解

さて、つぎに、二つの国、すなわち地の国と天の国との定められた終極について論じなければならないとおもわれる。それで、わたしがこの仕事のために限界を付した計画がゆるすかぎり、死すべき人間たちがこの世の生の不幸のなかで自分たち自身のために幸福をつくり出そうと苦労を重ねているその論拠をまず説明しなければならない。それは、かれらの空虚な現実と神がわたしたちにお与えになったところのわたしたちの希望、および、神がわたしたちに与えようとしておられる現実そのもの——これこそは真の幸福である——とのあいだにどのようなちがいがあるかを明らかにするためである。このことを、たんに神的な権威にうったえることによってのみでなく、わたしたちが不信仰な人たちの益のために適用しうるような理性の力をも用いることによっておこなうことにする。

哲学者たちは、もろもろの善と悪の究極について、たがいに多くのこみ入った論争に従事したのであった。かれらは、この問題にかんしてひじょうな注意力を集中して、人間を幸福にするものが何であるか見いだそうと努めたのである。というのは、わたしたちの究極の善は、他のものがそれのために欲求せられるところのものであるのにたいして、それ自身のために欲求されるところのものである。(一) 究極の悪は、他のものがそれゆえに避けられるべきところのものであるのにたいして、それ自身のゆえに避けられるべきものである。それゆえに、わたしたちがいま究極の善を語るとき、それによって善が消費されつくして存在しなくなるようなものではなく、それによって善が完成されて実現へもたらされるところのもののことである。そして、究極の悪を語るとき、それによって悪が存在を止めるようなものを意味するのでなく、それによってたえず損っていくものを意味している。したがって、これら二つの究極のものは、最高善と最高悪である。

わたしが述べたように、これらのものを見いだすため、そして、この世の生において最高善を達成し、最高悪を回避するために、この世の虚しさのなかで(二)知恵の探究をその仕事としてきた人びとはひじょうに骨を折ったのであった。しかしながら、かれらはさまざまな仕方で迷っていたけれども、自然本性によって課せられた境界は、かれらが真理の道から逸脱することをゆるさなかったのであって、もろもろの善と悪との究極を、ある者は魂に、ある者は身体に、そしてある者はその双方においたのであった。哲学的な諸学派の分類とよぶところのものの三通りの区分にもとづいて、マルクス・ウァルロ(三)は、哲学についての書のなかで、きわめて多く

の多様な見解を詳細に、そして入念に吟味することによって書き留めたのであって、かれはその区別にかんしてある基準を適用することにより、全部で二百八十八の学派にいとも容易に達したのであった。それらは、じっさいに存在している学派ではなく、存在しうると考えられた学派である。

このことを簡潔に示すために、わたしは、いま言及した書においてかれ自身が認め、書き留めているところからはじめねばならない。すなわち、人間が、教師もなく、何らかの教育の助けもなく、また徳とよばれて疑いもなく学ばれる勤勉も生きるための技術もなしに、自然本性的に希求する四つのものが存在する。それは身体的感覚を刺激して快感を与える快楽であるか、あるいは、だれも身体的な煩わしさを受けることがなくなるような休息であるか、それとも、これら二つのものの結合、すなわちエピクロスが快楽という一つのことばにまとめたところのものであるか、(五)さらに包括的に自然本性の第一のもの、(六)つまり、それらのもののうちにはエピクロスのいう快楽も含まれるが、その他のもの——身体にかんしては、たとえばその諸部分の健康や損傷のないこと、また精神にかんしては、たとえば人間の生得的な資質に見いだされる大小の能力など(七)——である。

したがって、これら四つのもの、すなわち快楽、休息、それらの両方、そして自然本性の第一のものがわたしたちのうちにあるのは、徳——教育がのちにそれを植えつけるのであるが——がこれらのもののために求められるものとなるのであるか、それとも徳のためにそれらのものが求められるものとなるのであるか、あるいは、両方がそれ自身のために求められるもの

となるのであるか、というような仕方においてであろう。このことによって十二の学派が生じるのである。というのは、このような仕方によって、それぞれのものは三倍にされるからである。このことを一つのものによって示そうとおもう。そうすれば、他のものについてもそれを見いだすのに困難はないであろう。

身体的な快楽が精神の徳のもとに服属されるのであるか、それともその優位にあるのか、あるいは同等に一まとめにされるのか、いずれかであるから、三つの異なった学派が存在することになる。身体的な快楽が徳のために用いられるようになるとき、徳に服属することになる。じっさい、祖国のために生きることや祖国のために子どもを儲けることは徳のつとめに属しているが、それらのいずれも快楽なしにはありえないのである。というのも、このような快楽なしには、生きるために飲んだり食べたりされないからであり、また、子孫を増やすための交接もないからである。

他方、快楽が徳の優位におかれるとき、快楽はそれ自身のために求められるのであり、徳は快楽のために添えられるものと考えられる。すなわち、徳はただ身体的な快楽の達成と保持のためにあるにすぎないのである。これはたしかに醜い生である。これが徳とはよばれるべきでないとしても、そこでは徳のほうが主人である快楽に仕えることになるからである。それにもかかわらず、この恐るべき不面目が、ある哲学者たちをその支持者、擁護者としてもったのであった。さらに、快楽と徳とが他のもののために求められるのではなく、両方がそれ自身のために求められるとき、同等に一まとめにされる。それゆえに快楽は、それが徳の下に服属する

か、徳の優位に立つか、一つに結合されるかによって三つの学派を生むのであるが、それと同じように、休息、休息と快楽との結合、自然本性の第一のものについても、それぞれ三つの学派を生むことが知られるであろう。

じっさい、人びとの見解の異なるのに応じて、これらのものはときには徳に服属せられ、ときには徳の優位におかれ、ときには徳と一つに結合されるのである。それで全部で十二の学派に達することになる。しかし、さらにこの数はもう一つの区別に適用されて二倍となる。すなわち、社会的生[八]である。というのは、これらの学派のどれかを支持する者はだれでも、自分のためにそのことをなすのであるか、あるいはまた、かれの仲間のために――その仲間のためにかれは自分自身のために欲しているのと同じものを欲すべきなのであるが――そのことをなすのであるか、そのいずれかであるからである。

それゆえに、自分自身のためにのみ何らかの見解を保持すべきであると考える者たちの十二の学派が存在することになり、また、自分たち自身のためだけでなく他者のためにも、自分自身の善と同じようにその他者の善を志してあれこれの哲学的立場をとるべきであると決定する者たちの十二の学派が存在することになる。これら二十四の学派は、新アカデミア派から他の区別が加えられるとき、さらに倍加されるのであって、したがって四十八の学派を得ることになる。すなわち、各人は確実なものとしてこれら諸学派の一つの見解を保持し擁護することができるわけである。それはちょうどストアの徒が、人間を幸福にするところの善はただ精神における徳にのみ成り立つのであるという自分たちの見解を擁護したごとくである。また、他の

者はそれらのある見解を不確実なものとして保持しうるわけであるが、それはちょうど新アカデミア派の徒が、かれらにとって確実なものではなく、確実とおもわれる見解(蓋然的な真理)を擁護したごとくである。

このようなわけで、自分たちの見解が確実なものとしてその真理ゆえに従うべきであると考える者たちから成る二十四の学派が存在し、他方、不確実ではないけれども、真理とおもわれるゆえに従うべきであると考える者たちから成る別の二十四の学派が存在するのである。さらに、各人はこれら四十八の学派のおのおのに、哲学者たちの一般的な生活の流儀によって従うことができるのであるが、一方、他の者はキニク派(九)の徒の生活の流儀によって従うことができるのであるから、この差異からも全体が倍加されることになり、九十六の学派となる。

それに加えて、それらの哲学的教説のそれぞれが、教説の探究のほか何ごとにも時間をかけようとはせず、また、かけることもできぬような人びとのごとく、閑暇の生を愛好する人びとによって支持されたり従われたりするのである。あるいはまた、哲学的なことがらに専念しながらも、同時に国家の政治や人事の管理にかんするもろもろの用務に忙しくする人びとのごとく、多忙な生を選ぶ人びとによって支持されたり従われたりするのである。あるいはまた、閑暇な探究と差し迫った業務との交互の生のために時間を配分する人びとのごとく、両方の種類からの混和の生を選ぶ人びとによって支持されたり従われたりするのである。この区別のために、学派の数はまた三倍となり、二百八十八に達するのである。

わたしはこれらのことを、わたしにできるかぎり簡潔に、そして明らかに、ウァルロの書か

ら取りあげてわたし自身のことばでかれの意見を説明した。しかし、ウァルロは、自分の選んだ一つの学派を選び、他の学派をしりぞけるのはどうしてであろうか(それは古アカデミア派であって、プラトンが創設したのであるが、かれののちアカデミアとよばれるその学校の第四代目の学頭であったポレモン(一〇)の時まで存続したのであった。この学校は教説を確実なものとして保持したのであって、このことによって、すべてのものは不確実であるとした新アカデミア派からは区別されると見られることをウァルロはのぞんでいるのである。この学校はポレモンの後継者であったアルケシラオス(一一)からはじまった哲学の系列に属している)。ウァルロは、その学派すなわち古アカデミアの学派は、懐疑からと同様、誤謬からも免れていると判断するのである。これをすべての点にわたって示すことはあまりに長すぎるであろう。けれども、この論議のすべてを省略してしまうわけにもいかない。

そこでウァルロは、まず、学派の数を増大させるところのあのすべての区別を取り除くのである。かれが、なぜそれらの区別が取り除かれねばならないと考えたのかといえば、それは、それらの区別のうちには善の究極が含まれてはいないからである。すなわち、もろもろの善と悪との究極について異なった見解をもつことによって他と相違しているのでなければ哲学の学派ということはできないとかれは考えるのである。じっさい、ひとが哲学するのは、ただ幸福となるためなのである。しかし、ひとを幸福にするもの、それはまさしく善の究極にほかならない。したがって、ひとが哲学するのは、善の究極のためであってそれ以外ではないのである。それゆえに、いかなる善の究極も追求しない学派は、哲学の学派ということはできないのであ

る。

したがって、社会的生について、賢者は人間を幸福にするところの最高善をその友のために自分自身のためと同じように求め、かつ配慮すべきであるか、それとも、賢者がなすところのことはすべて、ただ自分自身の幸福のためにのみそれをなすべきであるか、と問われるときには、この問いは最高の善にかんするものではないことになる。そうではなく、賢者が自分自身の善をよろこぶようにその仲間の善をよろこぶため、この善を共に分有し合うのに仲間をもつのであるか、もたないのであるか、ということにかんするものである。

同様に、すべてのものは不確実であるとした新アカデミア派について、そのようにすることが哲学の対象となるところのことがらにたいする正しい道であるのか、それとも、わたしたちは、他の哲学者たちに確信されたように確実なものと見なすべきであるか、と問われるときには、この問いは、何が善の究極として追求されるべきであるか、ということにかんするものではなく、追求されるべきであると見られているほかならぬその善の真理について疑うべきであるか、ということにかんするものである。これをいっそう明白にいうなら、それを追求する者が、これが真の善であると主張するような仕方で追求すべきであるか、それとも、もしかして虚偽であるかもしれないが、自分にとっては真実であるようにおもわれると主張するような仕方で追求すべきであるか、ということにかんするものである。——もっとも、両方とも一つの同じ善が追求されているのではあるが。

また、キニク派の流儀や習慣から取られたあの区別においては、究極の善が問題とされるわ

けではなく、それが何であっても自分にとって真実でありかつ追求されるべきであるとおもわれるところのものを真の善として追求する者が、キニク派の流儀や習慣によって生活すべきであるかどうかということが問題とされるわけである。要するに、ある者は徳を、他の者は快楽を追求して、異なった対象を究極的な善として求めておりながら、それにもかかわらず同一のあの流儀と習慣を保持することによってキニク派の名をよばれた者たちが存在したのであった。

このように、キニク派の哲学者たちが他の哲学者たちから区別されるゆえんとなったものが何であっても、それは、ひとを幸福にするところの善の選択と保持にはまったく何の影響もおよぼさないのである。じっさい、もしもそれがこのようなことがらに何らかの関係をもつものであるのなら、同じような品行が同じ目的の追求を強いるものとなったことであろうし、また、異なった品行は、その目的の追求をはばむものとなったことであろう。

(一) アウグスティヌスはアリストテレスに従っている(アリストテレス『ニコマコス倫理学』一の二参照)。
(二) ここでいわれている「この世」とは、「神の国」に対照的におかれている精神的な意味を含む世のことである。
(三) ウァルロについては本書第三巻第四章(注)一参照。ここに触れられているかれの著書『哲学について』は残存していない。
(四) プラトン『メノン』八六以下およびアリストテレス『ニコマコス倫理学』二の一の三参照。

(五) エピクロスについては、本書第五巻第二十章および第十四巻第二章参照。
(六) この「自然本性の第一のもの」(prima naturae) はストア学派の用語にしたがっている(キケロ『最高善と最大悪について』二の一一、五の七参照)。
(七) これは知的な資質を意味する。
(八) vita socialis(友人たちや仲間たちとの生)。
(九) キニク派はアンティステネス(前四四五年頃生れ)によってはじめられた。ソクラテスに学び、その死後、アテナイに自分の学校を開設、その場所(キュノサルゲス)の名からこの派の名がとられたといわれるが、また一説では、かれらの生活の流儀が犬(キュオン)に似て、原始的、自然的な生を実践したからであるともいわれている。
(一〇) ポレモン(前二七〇年頃の人物)はクセノクラテスに学び、師のあとアカデミア派の学頭となった。本質的にはプラトンの説を保持したが、ストア学派の影響も受けて実践的な傾向の哲学を強調した。善の問題にかんしては、徳以外に身体的、外的な善を幸福の要素として認めた。
(一一) アルケシラオス(前三一五年から二四〇年頃)は、中期アカデミア派(本文では新アカデミア派とされている)の創始者である。ストア学派に反対してピュロンの懐疑論を採用し、「判断中止」(ἐποχή)の説を導入した。かれは実践上の行動基準として、ただ蓋然的なもっともらしさを説き、それだけで生活上の成功のために十分であるとした。

第二章

ウァルロは究極の善を三つの種類に限定する

そこで三種類の生が存在することになる。すなわち、その一つは、怠惰にすごすのではなくして真理の観想やその探究にすごされる閑暇の生である。第二は、人間的なことがらに忙しく従事する生である。そして第三は、その両方を適度な仕方で組み合わせた生である。そこで、これらのもののどれが優先的に選ばれるべきであるかと問われるとき、ここには善の究極については議論はないのであるが、問題は、これら三つのうちのいずれが善の究極を求めたり確保したりするのに困難を伴うのか、あるいは容易にするのか、ということであって、それがさまざまに考えられることになるのである。というのは、だれでも善の究極に到達するとき、善の究極はすぐにかれを幸福にするからである。それにたいして、学問の閑暇や公的な仕事によっては、あるいは両方を交互にいとなむときには、ひとはただちに幸福になるわけではないのである。

たしかに、多くの人びとがこれら三つのうちのいずれかの生を生きることができる。そして、かれらは人間を幸福にするところの善の究極を希求することにおいて誤りうるのである。このようなわけで、善と悪の究極にかんする問題はそれぞれの哲学の学派をつくるのではあるが、しかしそれは、社会的生についての、アカデミア派の哲学的懐疑やキニク派の服装と食生活の習慣についての、あるいはまた、閑暇な生や活動的な生、およびそれら二つから混合された生という三様の生についての問題とはまったく別のものであって、これらの問題はいずれも善と

悪の究極にかんする論議を伴っていないのである。

それゆえに、マルクス・ヴァルロはこれら四つの区別を適用して(四つの区別とは、社会的生から生じるもの、新アカデミア派から生じるもの、キニク派から生じるもの、生の三様の仕方の区分から生じるもの、である)、全部で二百八十八の学派に達したのであるが(同じようにして他の区分から生じるものの区分を付け加えることも可能であろう)、それからかれはこれらの区別のすべてを取り除いてしまうのである。なぜなら、これらの区別は最高善の追求ということにかんしては何の問題も差し出さないからである。だからして、これらはほんとうの学派でもなければ、またそのようによばれるべきでもないのである。そこでヴァルロは十二の学派に還るのである。この学派においては、それを達成することによって人間を幸福にするところの善が問われているのであって、このことによって、かれは、これらの学派のうち、ただ一つが真実のものであり、他は誤っているということを示すのである。

たしかに、生を三つの種類に分けるところの区分を除去することによって、数の二つの部分(全体の三分の二)が取り除かれて九十六が残るであろう。キニク派から加えられた区別が除去されることによって、数は半分となり、四十八となる。もしもわたしたちが新アカデミア派から加えられた区別をも取り除くなら、ふたたび半分を、すなわち二十四を残すことになろう。同様に、もしも社会的生について付加されたことを取り除くとすれば、十二が残ることになる。これは、この区別によって二十四となるよう倍加されていた数である。この十二の学派は、かの四つのもの――快楽、休息、それらの両方、そしてヴァルロが本源的なるものとよんでいる

ところの自然本性の第一のもの(一)——を三倍することによって生れるのである。たしかにこの四つのものは、ときとしてそれぞれが徳に服属されて、それら自身のために求められるのでなく、徳を助けるものとして求められるべきものと考えられる。また、ときとしてそれらのものが徳よりも優位におかれて、徳がそれ自身のために必要であるというのではなく、これらのものの獲得や保持のために必要であると考えられたりする。さらに、ときとしてそれらのものは一つに結び合わされて、徳もこれら四つのものも、それ自身のために欲せられるべきものとおもわれたりするのである。かくして四という数が三倍されて十二の学派に至ることになるのである。

しかしながら、ウァルロは、これら四つのもののうち三つを片付けてしまうのである。すなわち、快楽、休息、そしてその両方のもの、である。それは、かれがそれら三つのものを否認するからではないのである。そうではなく、自然本性の本源的なものが快楽と休息をみずからのうちに包含しているからである。そうであれば、その二つのもの(快楽と休息)から三つのものをつくり出す必要が何かあるのであろうか。つまり、二つのものとは快楽と休息とが別々のものとして求められるばあいであり、そしてそれら二つのものが結合されて第三のものが求められるばあいである。じっさい、自然本性的な第一のものが他の多くのものと並んでこれら三つのものを包含しているのだからである。

それゆえ、ウァルロは、(自然本性的な第一のものをめぐって)三つの学派にかんしていったい何がむしろ選択されるべきであるか、十分な検討を要すると考えるのである。正しい理性は、

真正の学派が、これらのもののうちの一つであるとしても、あるいは、のちに見るであろうように他のところにあるとしても、一つ以上の存在をゆるさないであろう。とにかくわたしたちは、できるだけ簡潔かつ明瞭に、ウァルロがいかにしてこれら三つの学派から一つを選んだのかを説明しなければならない。これら三つのものは明らかに自然本性の第一のものにかんする三つの見解から生じているのである。すなわち、それらのものは徳のために求められるべきであるか、徳がそれらのもののために求められるべきであるか、それとも、徳および自然本性の第一のものの両方がそれら自身のために求められるべきであるか、という三つの見解である。

(一) 本源的なるもの (primigenia) は前章から出ている「自然本性の第一のもの」であるが、これはストア哲学においては、自己愛、自己の保存、およびそれらの実現へ向かうところの、そして、それら原初的傾向を妨げるものを避けようとするところのすべてのものを意味した(キケロ『最高善と最大悪について』第二巻)。

第三章

ウァルロは、もろもろの哲学の学派のなかから古アカデミア派の教説を採用し、それを基礎とする

そこで、これら三つの見解のうち、どれが真実であり、求められるべきであるか、ウァルロは以下のとおり説得しようとしている。まずはじめに、哲学において問い求められる最高の善とは、樹木の善や動物の善、さらには神の善などではなく、人間の善なのであるからには、人間とは何であるか、と問われねばならないのである。かれは、人間の自然本性にはたしかに二つのもの――魂と身体――が存すると考える。そして、これらのもののうち、魂がよりすぐれており、はるかに重要であるということをいささかも疑わないのである。しかし、魂はそれだけで人間なのであって、身体は人間にたいしてあたかも馬が騎手にたいするごとくにかかわっているのであるか(じっさい、騎手は人間と馬ではなく、ただ人間なのである。そしてその者が騎手とよばれるのは、馬にたいしてある意味で関係をもつからである)。それとも、身体が魂にたいしては、あたかも飲み物の器が飲み物にたいするような関係にあって、それだけで人間なのであろうか(というのは、杯とその杯が内に入れているところの酒を一緒に飲み物の器とよぶのではなく、ただ杯だけをそのようによぶのだからである。しかしながら、それがそこに入れられる飲料に合ったものであるがゆえに飲み物の器とよぶのである)。あるいは、魂だけでもなく、また身体だけでもなく、その両方が一緒に人間なのであって、魂と身体とはそれぞれ人間の部分であるが、その全体は両方から成り立って人間となるのであるか(これは一緒にくびきにつながれている二頭の馬を「二頭立て(ビガエ)」とよぶごとくである。右側と左側の馬はいずれも「二頭立て」の部分であるが、それらのどちらかの馬が他方に関係していてもそれを「二頭立て」とはよばないのであって、組み合わせにある二頭をそのようによぶのである)。

さて、ウァルロは、これら三つのもののうち、第三番目のものを選ぶのである。人間は魂だけでも身体だけでもなく、魂と身体とが組み合わされていると考えるのである。それゆえにかれは、人間を幸福にするところの最高善は、両方の善から、すなわち魂の善と身体の善とから成り立つ、というのである。それゆえにかれは、自然本性のもろもろの第一のものは、徳もそうであるように、それら自身のために追求されるべきであると考えるのであって、この徳というのは、生活の技術として教育によって植え付けられて、魂の善のうちでもっともすぐれたもののことである。そのために、この徳、すなわち生活を導く技術が、自然本性の第一のもの――それは、徳なくして存在していたものであるが、まだ教育を欠いていたときでさえ存在していた――を受けとったときには、それらのすべてをそれら自身のために欲し、同時に自己自身をも欲するのである。また、それらのすべてと自己自身とを同時に用いるのであるが、それは、徳がそれらのすべてをよろこび、かつ享受するためである。それらのもののそれぞれがたがいのあいだでより大であったりより小であったりするのに応じて、この享受はより大きいものであったりより小さいものであったりするのである。とはいえ、徳は、それらのすべてをよろこびながら、もしも必要ならば、より大きな善を獲得し保持するために、より小さな善を軽んじるということがあるのである。

しかしながら、これらのすべての善について、それが魂であれ、身体の善であれ、徳がみずからの上に置くようなものは何もないのであって、それというのは、徳は、自己自身と人間を幸福にするところの他のすべての善とを善く用いるからである。けれども、徳自身が存しない

ところでは、どれほど多くの善があっても、それが善の所有者となすことはなく、したがって、その者の善とよぶこともできないのである。善を悪しく用いる者にとっては、それらの善は有益なものではありえない。

それゆえに、徳および徳がそれなくしては存しえないところの魂と身体の他のもろもろの善を享受する生は、まさに幸福な人間の生とよばれるのである。しかし、もしも生が他の何らかの生を、そのいくらかなりとも享受するなら、それが徳がそれらなくしても存しうるような善であるけれども、その生はいっそう幸福であるといわれる。さらに、魂と身体に属するところの善のただ一つも欠けることなくすべての善を享受するなら、それはもっとも幸福な生である。

じっさい、すべての生が徳であるわけではなく、ただ賢明な生が徳であるから、生は徳と同じものではない。すくなくとも、いかなる徳もなくしてある種の生は存在しうるのであるが、それにたいして、徳はいかなる生もなくして存在することはできないのである。記憶や理性、そして何か他のそのようなものが人間のうちにあるならば、このことはいえるとおもう。

すなわち、これらのものは教育に先んじて存在しているのである。それらのものなくして教育はまったくありえず、したがって徳もありえない。徳が学ばれるものであるのは確かだからである。他方、よく走ることや身体において美しくあること、また力において際立ってすぐれていること、その他これに類するようなものは、徳なくして存在しうるのであって、それは徳がそれらのものなくして存在しうるごとくである。にもかかわらず、それらは善きものであり、この人たち(古アカデミア派の哲学者たち)にしたがえば、徳はそれらのものをそれら自身のた

めに愛好し、徳にふさわしい仕方で用いたり享受したりするのである。

かれらは、この幸福な生は社会的であるといっている。それは、友人の善を自分自身の善のようにそれ自身のために愛好するのであって、自分自身のために欲するところのことを友人にたいして友人自身のために欲するのである。ここでいう友人とは、妻や子ども、そのほか家族の一員のように同じ家のうちにいる人びとを意味することもあれば、あるいは、自分の家をもっているその場所、たとえば都市などにいて、その市民とよばれている人びとを意味することもある。また、全世界において、人間の共同体に加えられているような諸民族を意味することもあれば、さらには、わたしたちが天と地という名によって認めているところの全宇宙にあって、かれらが神々とよび、知恵ある人間にとっての友であることをのぞんでいるところのもの——わたしたちがより親しい名によって天使とよぶところのもの——を意味することもある。

ところで、かれらは、善の究極とその反対の悪の究極とにかんして、何らかの疑いがあるということを否定する。そして、これが、かれら自身と新アカデミア派とのあいだの相違なのであると断定する。また、真実の目的であると見なすところのこれら究極目的の追求のため各人が哲学するにあたって、キニク派の衣服を採用するか、他の何らかの生活習慣を採用するか、ということにかんしてかれらはまったく関心をもたないのである。さらに、生の三種類、すなわち閑暇な生、活動的な生、そしてそれら二つから混合された生について、かれらは第三番目のものがよいと断言する。

古アカデミア派の徒はこのように考えかつ教えたのであって、ウァルロはキケロとかれ自身

の師であるアンティオコスの権威によってそれを主張するのである。キケロは、アンティオコスは多くの点で古アカデミア派よりもストア派と見られると主張するのであるが。——けれども、これがわたしたちにとって何であろうか。わたしたちは、各人がそれらのことについてどのように考えたかを知ることに得意がるのではなく、むしろ、そのことがら自体について判断しなければならないのである。

第四章

哲学者たちの見解に相対して、キリスト教徒は最高善と最大悪についてどのように考えるのであるか

それゆえに、もしもわたしたちが、これらの問題点のそれぞれについて神の国はどのように答えるのであるか、第一に、究極の善と究極の悪についてどのように考えているのであるか、と訊ねられるなら、つぎのように答えるであろう。すなわち、永遠の生が最高の善であり永遠の死が最大の悪である、そのため、前者を得、後者を避けるためにわたしたちは正しく生きなければならないのだ、と。そのゆえに、「義しい人は信仰によって生きる」と記されているのである。なぜなら、わたしたちはわたしたちの善をまだ見ていないからであって、そこからして、わたしたちは信じることによってそれを求めねばならないのである。そして、その信仰をお与

えになったかたが——その信仰によって、わたしたちはそのかたによって助けられねばならない者であることを信ずるのである——信じかつ祈り求める者を助けてくださるのでないなら、正しく生きるということはわたしたちの力のうちにないのである。

それにたいして、善の究極と悪の究極がこの世における生に見いだされると考えた者たちは、最高善を、身体に、あるいは魂に、またはその両方に(より明らかに語るなら、それを快楽に、あるいは徳に、またはその両方に)おいたり、休息に、あるいは徳に、またはその両方においたり、快楽と休息との結合に、あるいは徳に、またはその両方においたり、自然本性の第一のものに、あるいは徳に、あるいはその両方においたりして、おどろくべき虚しさをもって、この世で幸福になること、そしてみずからの力で幸福になること、をのぞんだのであった。真理であられるかたは、預言者の「主は人の思いを知っておられる」[二]ということばや、使徒パウロが証言として引用したときの「主は知者たちの思いの虚しいことをご存知である」[三]ということばによって、これらの人びとを嘲笑されるのである。

じっさい、この世の生の悲惨を説明するのに、言論を川の流れのように述べ立てても、だれがそれを十分になしうるであろうか。キケロは、自分の娘の死にかんする『慰めについて』においてどれほど嘆き悲しんでいることであろうか。[四]しかし、かれがなしえたところのことがどれほどのものであったろうか。本当のところ、自然本性の第一のものとよばれるものが、この世の生において不確定なものや偶然のできごとに揺り動かされることのないよう、よき状態に保たれることのできるのは、いつ、どこで、そしてどのようにしてであろうか。快楽に相反す

る何らかの苦痛、休息に相反する何らかの不穏が賢者の身体に降りかかることはありえないのであろうか。

確かに、人間の手足の切断や衰弱は健全な状態を台なしにし、醜さは美しさを、病弱は健康を、疲労は体力を、鈍麻や無気力は敏捷さを損うのである。これらのもののうちで、賢者の身体を襲わないものが何かあるであろうか。身体の姿勢や動きは、それが優美で調和のとれたものであるとき、自然本性の第一のもののうちに数えられるであろう。しかし、もしも何らかの病気が手足を揺り動かしたり震わせたりするならどうであろうか。もしも人間の脊柱が、その手が地につくほどに曲がって、あたかも四足獣のように変わるならどうであろうか。

これは、身体の姿勢や動きの形姿や優美さをすべて破壊しないであろうか。魂そのものの、善とよばれる本源的なるものについてはどうであるか。そこにおいて第一のものとして置かれた二つのものは感覚と知性であって、なぜなら、それらのものは真理の把握と認識を得させるからである。けれども、もしも人間が耳がきこえなくなったり目が見えなくなったりしたら、他のことは語らぬにしても、どんな種類の、どれほどの感覚が残るのであろうか。また、もしも何らかの疾患によって狂気となったとすれば、理性と知性はどこへ去り、どこでまどろむのであろうか。気が狂った人びとは、多くのつじつまの合わないことを語ったりおこなったりするかに、自分たちの善き意図や習慣に反するものであるが、わたしたちがそれらのことを考えたり目にしたりして、かれらの境遇を相応に考慮するなら、わたしたちはほとんど、あるいはお

そらく涙を抑えることができないであろう。

また、ダエモンらの攻撃を受けた人びとについて、わたしは何をいえばよいであろうか。邪悪な霊がかれらの魂や身体を意のままに用いるあいだ、かれらの知性はどこに隠れ、ひそんでいるのであろうか。このような災いがこの世において賢者にはおこりえないとだれが確信するであろうか。そして、わたしたちが、真理を告げる『知恵の書』に「この朽ちる身体は魂の重荷となり、この世の住まいは数多い心配にふさがれている精神を圧しつけます(五)」と読むとき、わたしたちはこの肉にあってどのような、そしてどれほどの知覚があるのであろうか。

さらに、はたらきへの衝動や欲求も——もしもこれが、ギリシア語でホルメーといわれているところのものをラテン語で正しくいいあらわしているものであるなら(六)——自然本性の第一の善のうちに数えられるとすれば、これらのものは、感覚が異常となり、理性が眠っているとき、わたしたちを震えさせるところの、狂気の人びとの惨めな動作や行為を惹きおこすところのものではないであろうか。

そしてさらに、徳そのものについてはどうであろうか。それはもろもろの自然本性の第一のものではない(七)。それというのは、それらは、その上に教育によって導入されて加えられるところのものであるからである。それらは人間の諸々の善のなかで最上の位置を要求しているのであるが、そのはたらきは悪徳との間断なき争闘以外の何であろうか。これらのものは外的な悪徳ではなく、内的な悪徳であり、そして他人のそれではなく、明らかにわたしたちの、そしてわたしたちの固有のそれである。とくに、ギリシア語でソーフロシュネーとよばれ、ラテン語

で節欲という名でよばれるところのものである。〔八〕つまり、それによって、肉的な情欲が、精神がそれに同意したりすべての不品行へ引き込むことのなきよう、抑制されるところの徳のことである。

すなわち、使徒がいっているように、「肉の欲するところは霊に反する」〔九〕とき、悪徳が存在しないということはけっしてないのである。そして、同じ使徒がいっているように、「霊の欲するところは肉に反する」というとき、この悪徳に反する徳が存在するのである。「じつに、これらのものはたがいに相逆らい、その結果、あなたがたは自分でしようとおもうことをすることができないようになる」からである。しかし、わたしたちが最高善の目的によって完成されることをのぞむとき、わたしたちがなすことを熱望するのは、肉が霊に反して欲求しないこと、そして、霊が熱望するところのことに相反する悪徳がわたしたちのうちにないこと、でないなら何であろうか。

わたしたちはこれをいかにのぞんでも、この世の生においてなすことはできないのであるから、すくなくとも神の助力のもとに、霊に反する肉の欲に霊が屈服して譲歩することがないように、そして、わたしたちが同意して罪を犯すことへ引きずられることがないようにするのである。それゆえ、わたしたちがこの内的なたたかいにあるあいだ、わたしたちが勝利によって達せんとのぞむところのあの幸福をすでに得ているなどと信じるようなことがあってはならない。情欲に対するいかなる闘争ももたないほどだれが賢明であるだろうか。〔一〇〕

思慮分別とよばれるあの徳についてはどうであろうか。それは、善を悪から区別して、善を

追求し悪を避けるときにいかなる誤りも忍び入ることのないよう、あらゆる用心をはらうのではないであろうか。そのことによって、この徳自身、わたしたちが悪のうちにあることを、あるいはむしろ、悪がわたしたちのうちにあることを証言しているのではなかろうか。というのは、その徳は、罪を犯すために情欲に同意することは悪であり、また、情欲に同意しないことは善である、と教えるからである。しかしながら、思慮分別がその悪に同意しないようわたしたちに教え、節欲がそれを果たすのではあるが、思慮分別も節欲もその悪をこの世の生から抹殺することはないのである。

公正さについてはどうであろうか。(二二) 公正さの務めはそれぞれにその帰すべきものを割り当てることであるが(そこからして、人間自身のうちに、自然本性のある正しい秩序が生じて、魂は神に、身体は魂に服属し、かくして身体も魂も神に服属するのである)、このはたらきをなすことによって、公正さはそのはたらきの終局に達して休らっているというよりも、むしろ、なおもそのはたらきに労しているということを明証していないであろうか。じっさい、魂はその思考において心のうちに神を抱くことが少なければ少ないほど、神に服属することは少ないのであり、霊に反する肉の欲望が大きければ大きいほど、肉が魂に服属することは小さいのである。それゆえに、この弱さ、この病気、この無気力がわたしたちのうちに存するかぎり、いかにしてわたしたちがすでに健康であるとあえて主張しうるであろうか。そして、もしも健康でないなら、いかにしてわたしたちはかの究極の至福によって幸福であるとあえて主張しうるであろうか。

さらに、勇気という名のあの徳が（二二）、それを見せる人の知恵がいかに大きくても、忍耐をもって耐え忍ばねばならない人間的なもろもろの悪についての紛れのない証拠である。わたしは、ストア派の哲学者たちが、厚顔にもそれらの悪は悪ではないと主張するのにおどろかされるのであって、かれらは、もしもこれらの悪がきわめて大きなものであって、そのために賢者がそれらを持ちこたえることができない、あるいは持ちこたえるべきでないときには、みずから死を招きよせて、この世から別れ去るのもやむをえない、ということを認めているからである（二三）。この世において善の究極を所有し、かつ自らの力によって幸福になりうると考えるこれらの人びとの愚かな尊大さは、はなはだしいものであって、かれらの賢者――それは、かれらのおどろくべき蒙昧さによって賢者として描かれているような者のことであるが――は、これらのもろもろの悪がふりかかっても、その生は幸福な生であるとよぶことに何の恥ずかしさも感じないのである。すなわち、たとえ目が見えず耳がきこえず、またものがいえなくとも、たとえ手足が衰弱し、苦痛に責めさいなまれても、そして、みずから死を招きよせることも余儀ないような悪を述べたり考えたりできるなら、そのような何かがふりかかってくるとしても、である。

何と幸福な生であることか。死の助けを借りてそれを終結させねばならぬとは。もしもそれが幸福な生であるのなら、それに留まりつづけるがよいであろう。勇気という善を打ち負かし、その同じ勇気がしりぞかざるをえないようにするだけでなく、狂気に陥った生を幸福とよんで、そしてそれから逃れるべきであると説得するようなこれらのことが、どうして悪でないわけが

あろうか。もしもこれが幸福な生であるのなら、それから逃れるべきではないということがわからないほどまでに盲目な者がだれかあるであろうか。

けれども、かれらは、弱さを明白にあらわしてそれから逃げるべきであると告白するのである。それなら、なにゆえにその高慢の首を折り曲げて、それは悲惨な生であると認めないのであるか。カトが命を自ら断ったのは忍耐によってであるか、むしろ忍耐力の欠如によってではないか。[一四] というのは、カエサルの勝利を耐えて持ちこたえていたなら、かれはこのようなことをしなかったであろうからである。いったい、勇気はどうなったのであろうか。明らかに屈服したのであった。明らかに敗北したのであった。明らかに征服されたので、この幸福な生を放棄し、捨てて逃げたのである。それとも、それはもはや幸福な生ではなかったのであろうか。そうなら、それは悲惨な生であったわけである。そこから逃れねばならぬほど生を悲惨にしたものが、どうして悪でないわけがあろうか。

それゆえに、たとえばペリパトス派やウァルロによって支持された古アカデミア派に属する人びとのように、そのようなものが悪であると認めた人びとは、いっそう許容できることを語っていることになる。とはいえ、かれらも不思議な誤りを犯しているのであって、その主張するところによれば、それらの悪が由々しいものであるために、それを蒙る者が、自分自身に死を課することによって逃れるべきであるとしても、これらの悪の只中にあっても、なお幸福な生があるのである。ウァルロは、「身体の責め苦や拷問は悪である。そして、それらの悪は、それが大きければ大きいほど、いっそう悪である。それらの悪を免れるために、ひとはこの世

の生から逃れるべきである」という。いかなる生からであるか。わたしは教えてほしいのだ。かれは答えていう。「そのように大きな悪に悩まされるようなこの世の生からだ」と。

それでは、あなたをしてひとはそこから逃れるべきであるといわしめているところのこれらの悪の只中にあって、確かに幸福なのであるか。それとも、死によってそれらの悪から去ってもよいのであるがゆえに、幸福であるとあなたはいうのであるか。それでは、もしもあなたが神の何らかの判決によってそのような悪にとらえられて、死ぬこともゆるされず、その悪なしには生きることもけっしてゆるされないとするならどうであるか。もちろん、そのばあい、すくなくともそのような生は悲惨であるとあなたはいうことであろう。それがすぐに放棄されるがゆえに、その生が悲惨でないわけではない。というのは、もしも悪がいつまでもつづくのなら、あなた自身さえ、その生は悲惨であると判断するであろう。したがって、その生が短いゆえに、何ら悲惨な生ではないと見られるべきでもなければ、また、これはいっそう無意味なことであるが、悲惨が短いものであるがゆえに、その生が幸福な生とよばれるべきではないのである。

それらの悪のうちにも大きな力が存在するのであって、それはひとを、これらの哲学者たちによれば賢者をも、人間であることをみずから取り去るよう強いるのである。もっとも、つぎのようにかれらがいうのであるが、そのときは真実をいっているのである。すなわち、人間が自分自身に親しくして、そのために自然に死を避け、また、自分が生命あるものとして存在することや、身体と魂とのこの結合によって生きることをつよく欲したり希求したりするほど自

分自身に好意をもつこと、――このようなことが、ある意味で自然本性の第一にして最大の要求であるというのである。また、これらの悪のうちには、あらゆる仕方でわたしたちの力と努力の限りをつくして死を避けようとするこの自然本性の感覚に打ち勝つような大きな力があるのである。避けられるところの死がのぞまれ求められるまでになって、もしも死が他のところからかれの身におこることができないなら、その人間自身によって死が自分に課せられるほどの大きな力なのである。

これらの悪のうちには、勇気を殺人者となすような大きな力がある。もしも勇気が、これらの悪によって完全に打ち負かされて、統御し保持するように引き受けたところの人間を、その忍耐力によって保護することができないばかりか、なおその上に、その人間を殺すまでに強いられるときも、勇気とよばれるべきであるならば――。じっさい、賢者は確固として死をも耐え忍ぶべきではあるが、しかしそれは、かれ自身の外側からかれにおこってくる死のことである。それにたいして、この哲学者たちのいうところにしたがって、もしも賢者が自分自身に死を課すよう強いられるならば、それはたんに悪であるというだけでなく、我慢ならない悪である――賢者をしてこのようなことを果すよう強いるときには――ということをほんとうに認めるべきなのである。

したがって、かくも大きな、そしてかくも苛酷なもろもろの悪の重荷によって打ちひしがれ、そのような不幸のもとに隷属するような生は、けっして幸福な生とはいえないであろう。もしも、それを幸福な生とよぶ人びとが、いっそう重くなる悪の重みに征圧されるときに自分自身

に死を取り入れて不幸に身をゆだねるごとく、幸福な生を求めるときに確実な理論に征服されて真理に身をゆだねて、死すべきこの世の生において究極の最高善をよろこぶべきであるなどと考えることをしないのなら、けっして幸福な生とはいえないであろう。まさしくもろもろの徳は、この地上において、それ以上により善く、それ以上により有用なものは人間のうちに何も見いだされないようなものであって、そのばあい、それらの徳は、人間の危険や労苦や悲嘆の力に相対してより大きな助け手となればなるだけ、人間の悲惨を示すより確かな証拠となるのである。

すなわち、もしもそれらが真の徳——真の徳は真の敬虔な心をもつ者においてのみ存在する——であるなら、それをもつ人びとがいかなる悲惨も蒙らないと保証することができるなどと公言しはしない（真の徳はそのようなことを公言するほど虚言者ではない）。それは、かくも多くの重い悪によって悲惨な存在へと強いられる人間の生は、来たるべき世を希望することによって救いとなるように、幸福ともなると公言するのである。

じっさい、もしもまだ救われていないのなら、いかにして幸福でありえようか。だからして使徒パウロも、思慮や忍耐、節欲や正しさのない人びとについてでなく、真の敬虔にしたがって生きる人びと、したがって真の徳をもつ人びとについていうのである。「わたしたちが救われたのはこの希望においてである。しかし、目に見える希望は希望ではない。すでに見ているものをどうして希望するであろうか。しかし、もしもわたしたちがまだ見ないものを希望するなら、忍耐によってそれを待ち望むのである(二五)」。

それゆえ、わたしたちは希望によって救われているように、わたしたちが幸福にされるのは希望によってである。そして、わたしたちはまだ現在の救いをもってはおらず、未来の救いを待望しているように、わたしたちは現在の幸福を享受してはおらず、未来の幸福を待望しているのであり、これを「忍耐によって」期待しているのである。それというのは、わたしたちは、あの善に到達するまでは耐え忍ばねばならない悪のうちにあるからなのであって、そこには、ことばでいいあらわすことのできないよろこびをもってたのしむすべてのものが存在するであろう。そして、もはや耐えねばならないものは何もないであろう。来たるべき世における救いは究極の幸福そのものであろう。けれども、これらの哲学者たちは、それを見ないがゆえに、この幸福を信じようとはしないのである。かれらは、高慢であればあるほど欺瞞的なものとなる徳によって、まったく虚しい幸福をつくりあげようと努めるのである。

(一)「ハバクク書」二の四、「ローマ人への手紙」一の一七、「ヘブル人への手紙」一〇の三八。
(二)「詩篇」九四の一一。
(三)「コリント人への第一の手紙」三の二〇。
(四)キケロの『慰めについて(De Consolatione)』は断片しか残ってはいない。前四五年の自分の娘トゥリアの死に際して書かれたものである。
(五)「知恵の書」九の一五。
(六)ホルメー(*ὁρμή*)は、キケロの『最高善と最大悪について』(五の六の一七)において、「心の欲求」(adpetitus animi)と訳されている。
(七)アリストテレス『ニコマコス倫理学』二の三参照。

(八)　キケロは『トゥスクルム論議』(三の八の一六)において、ソーフロシュネー(σωφροσύνη)を意味するいくつかのラテン語を示唆している。そのうちの一つが「節欲」(temperantia)である。
(九)　「ガラテヤ人への手紙」五の一七。
(一〇)　思慮分別(prudentia)。
(一一)　公正(iustitia)は、アリストテレスの『エウデモス倫理学』五の四の二、五の五の二において言及されているものと同義である。
(一二)　勇気(fortitudo)。
(一三)　本書第一巻第二十二章参照。
(一四)　本書第一巻第五章参照。
(一五)　「ローマ人への手紙」八の二四以下。

第五章

のぞまれながらも、たえず多くの障害によってくつがえされる社会的生について

哲学者たちは、賢者の生は社会的であることを主張するが、このことをわたしたちはより以上に是認する。神の国についてわたしたちはすでにこの書の第十九巻に従事しているのであるが、じっさい、もしも聖徒たちの生が社会的でないとすれば、この国はどこから出発点を得、いかにしてその経過に沿って進展し、いかにしてその定められた終極に達するであろうか。け

れども、この世の辛苦にあって、人間の社会がどれほど多くの、そしてどれほど大きな災いに満ちているか、だれか数を数えることができるであろうか。だれかそれを定めることができるであろうか。哲学者たちは、自分たちの喜劇作品において、すべての人間が同意し、感じるようなことばを吐いている人物のいうところに耳を傾けるがよい。

わたしは妻を娶った。そして、なんと
悲惨であるとわかったことか。
子どもたちが生れた。そこでも別の心配が生じた（一）。

さらに、同じテレンティウスが愛（アモール）の疾患について述べているところでは何といわれているであろうか。「もろもろの不正や疑惑、敵意や戦闘、そして平和がふたたび（二）」。これらのものは、至るところ人間的なことがらのうちに充満していないであろうか。それらは友人たちの高貴な愛（アモール）においてさえ、しばしば生じていないであろうか。人間的なことがらはあらゆる点でそれらのものに満ちており、そこでは、わたしたちは、不正や疑惑、敵意や戦闘を疑う余地のない悪と考えている。それにたいして、平和は不確かな善である。わたしたちは、平和を共に保持しようと欲している人びとの心を知らず、また、かりに今日それを知りえたとしても、明日はどうなるのか、まったく知らないからである。

さらに、一つの家のなかにいる者たちよりも、だれが日頃よりいっそう友好的であったり、あるいはよりいっそう友好的でなければならないのだろうか。ところが、そのような由々しい悪が、あまりにもしばしばその家の内部にいる人びとのひそかな陰謀から存在するので、いっ

たい、だれがそのような状況のなかで心穏やかであるだろうか。じっさい、真正なものと見なされていた平和が甘美であっただけ、それだけに、それがじっさいにはたんなる見せかけであったときには、これらの悪はいっそう苦々しいものとなるのである。トゥルリウス(キケロ)がつぎのようにいっているところのことが、すべての人の胸に迫って溜息を吐かずにはおかないのも、そのような理由からである。「忠誠の装いや何らかの近親関係の名のもとに隠されているもの以上に狡猾なものはない。というのは、公然の敵に対しては、あなたはみずから警戒してそれを容易に避けうるのであるが、それに反して、家や内部に存するひそかなこの悪は、あなたがそれを見つけ、探索することができる以前に、あなたを圧しつぶすからである(三)」。

このためにまた、「人の敵はその家の者たちである(四)」という神的なことばが、心の深い悲しみをもってきかれることとなるのである。それというのも、もしも各人がこれらの悪を落着いて耐えるだけのつよさをもっていたり、その人に敵対して見せかけの友情によってたくらんでくるところのことにたいして予め用心して慎重にかまえて十分に注意しているとしても、それにもかかわらず、その人自身が善き人であるなら、不信実な者らの邪悪さに直面して、かれらがまったく悪しき者であることを知るとき、ひじょうな苦悶をおぼえざるをえないであろう。かれらがつねに悪しき者であって偽りの善さを見せているにせよ、善良さから邪悪へと変化したにせよ――。それゆえ、人類にふりかかるこれらの悪からの共通の避難所を与えてくれる家庭に安全が見いだされないのなら、国家(キウイタス)について何というべきであろうか。たとえ国家が、たんに混乱からだけでなく、しばしばおこる流血の反乱や内乱から静まっていたとしても、国家

は大きいだけに、それだけ法廷は民事の訴訟や刑事裁判で満ちることになるであろう。国家は、ときとしてこれらの事件から免れてはいるが、それらの危険からはけっして自由ではないのである。

（一）テレンティウス『アデルフィ（兄弟たち）』五の四の一三以下。テレンティウス（Publius Terentius Afer）は、前一九五年から一五九年頃、ローマの喜劇作家である。北アフリカに生れ、奴隷としてローマに連れて来られたが、のち、保護者のテレンティウスによって教育を受け、劇作品を書きはじめる。喜劇作家というよりも人生批判家といわれる。

（二）テレンティウス『エウヌークス（宦官）』一の一の一四以下。

（三）キケロ『ウェルレス弾劾演説』二の一の一三。

（四）「マタイによる福音書」一〇の三六。

第六章

真実が隠されているときの人間の裁きの誤りについて

いかに多くの平和を享受するとしても、国家の存続に欠くことのできない、人間による人間についてのこの裁判にかんしてはどうであろうか。わたしたちは、それがどのようなものであると見なしているであろうか。それはいかに悲惨で嘆かわしいものであることか。じっさい、

判決を下す人びとは、それを受ける人びとの良心を見通すことはできないのである。だからして、かれらは、しばしば潔白な証人たちを、本人の関係していない事件においても、拷問にかけることによって真相究明にあたらざるをえなくなるのである。しかし、本人がみずから関係している事件において採られる拷問についてはどうであるか。そこでは、その者が有罪であるかどうかが問われるのであるが、かれは拷問にかけられ、たとえ潔白であったとしても、不確かなその罪のゆえにまったく確かな罰を受けることになる。それは、かれがその罪を犯したことが判明したからではなく、かれが罪を犯さなかったということが判然としないからである。

これは、裁判官の無知がしばしば潔白な者にとって災いであるということを意味する。さらに、いっそう耐えがたく嘆かれるべき、そしてできることなら涙の泉を注ぎたいものがある。それは、無知な裁判官が潔白な者を本来は殺さないために拷問にかけるのに、かれはその哀れな無知によって潔白な者を殺してしまうということである。潔白な者を殺さないために苦しめたところのその者を、である。もしもこの告訴された者が、あの哲学者たちの知恵にしたがい、これらの拷問をそれ以上耐えるよりは、むしろこの世の生から逃れることを選ぶなら、かれは、犯さなかった罪を自分が犯したのだというであろう。

そこで裁判官は、判決を下し、刑に処したのちも、有罪な者を処刑したのか潔白な者を処刑したのか、まだ知らないままでいることになる。もともと、無知によって潔白な者を処刑することを避けるために拷問にかけたのであるが。したがって、判事は真実を知るために、潔白な者を拷問にかけ、無知のままにその者を殺してしまうのである。社会的生のこの暗やみのなか

で、賢明な裁判官は法廷の椅子にすわるであろうか。それともそうしようとはしないであろうか。明らかにかれは椅子にすわるであろう。というのは、人間の社会はかれを拘束し、この職務へと引きずって行くであろうからである。かれはこれを見捨てることは許されないと考えるのである。

じっさい、裁判官はつぎのようなことが許されないことであるとは考えないのである。すなわち、潔白な証人が自分に関係のない事件で拷問にかけられること。——告訴された者が潔白であるのに、すでに拷問にかけられてのち、しばしば苦痛によって屈服し、みずから偽りの自白をおこない、潔白にもかかわらず罰せられること。——たとえ死刑に処せられることはないとしても、拷問によって、あるいは拷問を受けた結果として、死ぬことがよくあること。——犯罪が罰されぬままに済まされることのないようにすることにより、人間社会に益をもたらそうという意図をもつ告発者自身が、ときとして有罪宣告を受けること。つまり、証人たちが偽りの証言をおこない、被告自身が拷問を受けても長く抵抗して耐えぬいて自白を拒否したため、告発者の告訴がいかに真実であってもその真実を証明することができないで、裁判官の無知によってその告発者を有罪としてしまうのである。

かれはこれらすべての重大な悪を罪であると見なさないのである。というのは、賢明な裁判官は害を加えようという意志からこのようなことをおこなうのではなく、避けがたい無知からおこなうのであって、すくなくとも人間社会がかれをして判決を下さざるをえぬように強いるのだからである。それゆえ、わたしたちが述べているこれらのことは、たとえそれが賢明な者

の悪意ではないとしても、まちがいなく人間の悲惨である。避けがたい無知と義務づけられた裁判とによって、罪なき者を拷問にかけたり、罪なき者を罰して、かれ自身は負い目がなく、そしてその上にじっさいに幸福でないとすれば、それはかれにとってまったく取るに足らぬことなのであろうか。このような避けがたい条件のなかで、かれがそれを悲惨と認めて、その条件を自己自身の行為において憎み、そしてもしもかれが敬虔な感覚をもっていて神に向かって「わたしのなわ目からわたしを解き放ってください(一)」と叫ぶなら、それはどれほど思慮深くかつ人間として価値あることであろうか。

(一)「詩篇」二五の二七。

第七章

人間の社会を分かつ言語の相違と戦闘の悲惨について

国家（キウイタス）や都市（ウルブス）のあとに、哲学者たちが人間社会の第三段階においている地上の世界（オルビス）がくる。人間の社会は家からはじまって、そこから都市へと進み、そして世界へと至るのである。まったく世界は水の合流のようであって、それが大きければ大きいほど、それだけに多くの危険に満ちている。この段階においては、何よりもまず言語の相違が人間と人間とを遠ざける。じっさい、もしも二人の人間が出会って、かれらが通り過ぎることをせず、何らかの余儀ない事情

かれらは人間であるけれども、かれらよりはむしろものをいわぬ動物たちのほうが——その類はちがっていても——いっそう容易に結び付くことであろう。

すなわち、たんなる言語の相違ということだけで人間がたがいにその考えるところを伝え合うことができないとき、かれらが共通としている人間の本性の類似性は、かれらを仲間に結び付けるのには何ら役に立たないからである。そこで人は、見知らぬ人と共にいるよりは、自分の犬を仲間としているほうがいっそう快活であるということになるのである。また、強大な力をもつ国家は、征服した民族に軛を課するだけでなく、平和的友好的方法によって自国の言語を課そうと骨折ったのであった。その通訳者は不足しないどころか、かえってあり余るほど多く存在する。

これはほんとうである。しかし、いかに多くの、そしてどれほど大きな戦闘によって、いかに多くの人間の殺戮によって、どれほど人間の血が流されることによって、このことが成し遂げられたことか。これらの戦闘は過去のものとなっている。しかし、それらの悲惨は終わってはいない。というのは、つねに戦闘がなされてきた、そしていまもなされている敵対する外国の民は欠けることがなかったし、いまも欠けてはいないけれども、すくなくとも、帝国の広大さそれ自身がいっそう悪質な戦闘、すなわち同盟者間の戦いや内乱を惹き起こしてきたからであって、戦闘がいつか静められるためにおこなわれるばあいであっても、ふたたび起こらぬよう恐れられるばあいであっても、それによって人類はいっそう惨めに動揺させられるのであ

る。

もしもわたしが、これらの悪の幾多のさまざまな災いや、苛酷で有害な運命をそれに適しく語ろうと欲するなら、このことがらが要求するようには到底語ることはできない。また、どれほどこの議論は長くなるであろうか。しかし、人びとは、賢者は正しい戦闘を遂行するであろうという。あたかも賢者は、自分が人間であるということを思い起こすなら、これらの正しい戦闘の必要が自分におこるのであるから、いよいよもってそれを嘆くことをしないかのごとくである。もしもそれが正しくないものであるなら、かれにとってはその戦闘はおこってはならないのであって、したがって賢者にはいかなる戦闘もありえないことになるであろう。賢者に正しい戦闘の遂行を強いるのは敵対する側の不正義なのである。たとえその不正義から戦闘の必要性が生じないとしても、それが人間の不正義であるからには、この不正義は確かに人間にとって嘆かれるべきものである。

したがって、かくも重大な、そしてかくも恐るべき残酷な悪を考察する者はだれも、それが悲惨であることを認めねばならない。しかしながら、心からの悲しみをもつことなくそのような悪を経験したり考えたりする者は、もはや人間的な感覚を失ってしまっているのであるから、たしかにいっそう哀れむべき仕方で自分を幸福な者であると見なしているのである。

第八章

誠実な人びととの友情も、この世にあってはさまざまな危険に晒されているということについて

ところで、もしもこの世の生の悲惨な境遇にあってしばしば生じる愚かさに似た無知が生じないとすれば、その無知とは、敵である者が友人と信じられたり、友人である者が敵と信じられたりするような無知のことであるが、――そのときには、誤謬と艱難の充満したこの人間社会において、真実で誠実な友人の偽りのない信頼や相互の愛情（ディレクティオ）のほかに、何がわたしたちを慰めてくれるであろうか。(一) けれども、わたしたちがそのような友人を数多く、そしてより広範囲にもてばもつだけ、わたしたちはより長い時間、そしてより広範囲に、この世のもろもろの悪の堆積のなかの何らかの災いがかれらにふりかかってくるのではないかと恐れるのである。

というのは、わたしたちがひどく心配させられるのは、かれらが飢饉や戦争、病気や捕囚によって苦しめられたり、奴隷の身となってわたしたちの考えられないようなことを蒙ることを恐れるだけでなく、かれらが不誠実や悪意や不品行に変わるのではないかという激しい恐れがあるからである。このようなことがおこって（そして友人たちの数が多ければ多いほど、それはしばしばおこるのである）、それがわたしたちの知るところとなったときには、わたしたちの心がどのような革鞭でもってはげしく苦しめられるか、このようなことを経験した者でなけ

れば、だれが気付くことができようか。いっそ、わたしたちは友人の死を聞くほうがましである。これもまた悲しみなしには聞くことはできないけれども。

じっさい、かれらの生が友情の慰めゆえにわたしたちをよろこばせたのなら、どうしてかれらの死がわたしたちにいかなる悲しみももたらさないことがあるであろうか。そのような悲しみを禁ずる者は、もしもできるなら、親しい会話を禁じなければならない。すべての親愛の感情を禁ずるか、中止させるかすべきであろう。すべての人間的な親しい関係の絆を無情な無神経をもって打ち砕くか、そうでなければ、人間の心に甘美なよろこびを注ぎ入れることのないようにそれを用いるべきであると認めねばならないであろう。もしもこのことがけっしてありえないのなら、その生がわたしたちにとって甘美なものであったその友人の死が悲痛でないということがどうしておこらないであろうか。ここからして、人間的な感覚を失わない心の悲しみというものは、いわば傷や潰瘍のごときものであり、それを癒やすために誠実な慰めのことばが当てられるのである。

精神がより高貴であればあるだけ、治癒はよりすみやかでより容易ではあるが、それだからといって、癒やされるべきものは何もないというわけではない。したがって、もっとも親愛なる者の死によって、とりわけ人間社会にとってなくてはならないつとめをもつ者の死によって、死すべき人間の生は、ときにはよりゆるやかな、ときにはより厳しい苦しみを受けるのである。しかしながら、わたしたちは、わたしたちの愛する者が信仰から転落したり、良き習慣から転落したりすること――これはすなわち、魂において死ぬことにほかならない――を聞いたり見

たりするよりは、その死を聞いたり見たりするほうを好むであろう。じつに地はもろもろの災いの素材の巨大な集積で満ちており、聖書に「地上における人間の生は試みではないか(二)」と記されているのも、このゆえではなかろうか。主御自身が「つまずきがあるゆえに、この世に呪いあれ(三)」といわれ、さらに、「不義がはびこるので、多くの人の愛が冷えるであろう(四)」といわれるのも、このゆえである。

このことからして、わたしたちは、善き友の死をよろこんで感謝するのである。かれらの死は、わたしたちに悲しみをもたらせるけれども、このことによってわたしたちはより確かな慰めを見いだすのであって、かれらは、この世の生において善き人びとをも打ち砕いたり損ったり、あるいはその両方の危険に晒されたりする災禍を免れているのだからである。

(一) 友情についての高い評価は、初期のキリスト教の文献よりも(『ヨハネによる福音書』第十五章に明確なかたちで示されているのではあるが)、むしろ異教徒において特色づけられている。しかし、この箇所において、それはアウグスティヌスによって深い理解を与えられ、また力づよい表現を得ている。

(二) 「ヨブ記」七の一(七十人訳)。

(三) 「マタイによる福音書」一八の七。

(四) 同上、二四の一二。

第九章

友情にかんして、聖なる天使たちの社会とわたしたちの関係

しかしながら、聖なる天使たちの社会においては——神々がわたしたちの友人であることをのぞんだかの哲学者たちは、(一)いわばこの地の世界から宇宙へと進むのであるかのように、天使たちの社会を第四の段階に位置づけたのであって、このようにして、ある意味で天を包括しようとするのであるが、——その社会においては、そのような友がみずからの死によってか、あるいは堕落によってか、わたしたちを悲しませるのではないかという恐れはけっしてないのである。

けれども、かれらは人間と同じような親しい関係においてわたしたちと交流するのではなく(このことはそれ自身、この世の生に伴っている困難の一つである)、また、聖書に読まれるように、悪魔はときとして、あたかも光の天使であるかのようにみずからの姿を変えて、(二)このように訓育される必要のある者たちや、そのように欺かれるに値する者たちを試みようとするがゆえに、神の大いなる憐れみを必要とするのであって、それは、人が、じっさいには悪しきダエモンを虚構の友としているのに自分は善き天使たちと友情の関係にあるのだとおもったり、その狡猾さと欺瞞に応じてそれだけ有害であるような者たちの敵意を蒙ることのないためである。

じっさい、これらの霊の見せかけによってたやすく欺かれるほどの無知に沈められているような人間のまったく惨めな状態のほかに、神の大いなる憐れみが必要とされないところがどこにあろうか。不敬虔な国のかの哲学者たちは、神々が自分たちの友であると主張したのであるが、かれらは邪悪なダエモンらの手中に陥ったことはまったく確かなことであって、この国は、まさにこのようなダエモンらのもとに服属せしめられており、永遠の罰を受けるであろうところの国なのである。もちろん、神聖なというよりは冒瀆的というべき儀式や不浄な見世物によってあがめられているものが、いったいだれであるかはこの上もなく明白である。この儀式によってこれらのダエモンらがあがめられるのは正当なことと考えられており、また、この見世物によってダエモンらがなだめられるべきであると考える者たちがかれらの罪行をもてはやすのであるが、このような恥ずべきことがらの張本人にして執行者は、ほかならぬダエモン自身なのである。

（一）本書第九巻第二十三章。
（二）「コリント人への第二の手紙」一一の一四。

第十章

誘惑にたいする勝利の報酬

しかし、一にして真なる最高の神の聖徒たちや誠実な礼拝者たちも、ダエモンらの欺瞞やそのさまざまな誘惑からまもられているわけではない。じっさい、無力さのこの地において、そして悪意に満ちたこの時代において、このような憂慮もまた無益ではないのであって、平和がまったく完全で確かに存するあの静安をいっそう熱烈な願望をもって求められることになるのである。

というのは、そこにおいては、本性の贈り物、すなわち、すべての本性の創造者によってわたしたちの本性に授けられている贈り物は、たんに善きものであるだけでなく、永久のものとなるのだからであって、これは、知恵によって癒される精神のみならず、復活によって新しくされる身体においてもそうなのである。また、そこにおいては、徳は何らかの悪徳や悪と争うものとはならず、勝利の報酬、すなわち、いかなる敵対者も乱すことのない永遠の平和をもつであろう。これは究極の至福であり、それを限界づける目的をもたない完成の終極である。

わたしたちがこの世において、それがどれほど小さいものであろうと善き生においてもつことのできる平和を享受するとき、わたしたちは幸福であるといわれるのである。けれども、この幸福は、わたしたちが究極のものとよんでいるあの幸福と比較するなら、まったく不幸であるということがわかるであろう。それゆえ、わたしたちが死すべき人間として可死的条件のもとに、この世に存在しうるような平和をもつとき、わたしたちが正しく生きているなら、徳がその善を正しい仕方で用いるのである。他方、わたしたちがその平和をもたないとき、徳は人間が蒙る不幸をも善用するのである。しかし、徳が真実の徳であるのはつぎのときである。す

なわち、それが善用するところのすべての善、および善きものと悪しきものとを善用することによって成し遂げるすべてのもの、そして、かの終極――そこにおいては、わたしたちの平和が完全で大いなるものとなって、それ以上に良くなったり大きくなったりすることはありえない――にかかわるときである。

第十一章

聖徒たちがその終極において得る永遠の平和の祝福について

それゆえに、わたしたちが永遠の生命について述べたように、平和について、それはわたしたちのもろもろの善の究極であるということができるであろう。とくに聖なる『詩篇』のなかで、この骨の折れる論議の主題である神の国についてつぎのようにいわれているからである。「おお、エルサレムよ、主をほめたたえよ。主はあなたの門のかんぬきを強くし、あなたの子らを祝福されたからである。主はあなたの国境(くにざかい)を平和にされた(一)」。エルサレムの門のかんぬきが強くされたとき、もはやだれもその国に入ったり、その国から出たりはしないであろう。それゆえに、この国境によってわたしたちがその終極のものとして明示しようとしている平和のことと解さねばならない。じっさい、この国自身の名、すなわち「エルサレム」は神秘的な意味をもっているのであって、それというのは、すでに述べたように、「エルサレム」とは「平

和を直視すること」と訳されるのだからである。しかし、平和という名称は、この可死的な状態のもろもろのことがらについても——そこにはいずれにしても永遠の生は存在しないのである——用いられるのであるから、最高善が見いだされるこの国の終極目的を述べるにあたっては、平和ということばの代わりに、むしろ永遠の生ということばを選んだのである。この終極目的について、使徒は、「しかし、いまやあなたがたは罪から解放され、神の僕となって聖化に至る実を結んでいる。その終極は永遠のいのちである」〔三〕といっている。

これに反して、聖なる書に通じていない人びとによっては、邪悪な者たちの生も永遠の生と受けとられうるのであって、それは、かれらが魂の不死性を考えるある哲学者たちにしたがっていたり、あるいはまた、不信仰な者についての果てしのない罰というわたしたちの信仰にしたがっていたりしているのであるが〔四〕——つまり、永遠に生きるのでないなら、永遠に苦しみを受けるということもありえないのは明らかであるから——、そのために、つぎのようにいうことによって、だれにとってもより容易に理解されうることになるであろう。すなわち、そこにおいて最高善を所有することになるであろうこの国の終極は、「永遠の生における平和」あるいは「平和における永遠の生」というべきなのだということである。

すなわち、平和はひじょうに大いなる善であって、この世的で可滅的なもろもろの事物にかんしてさえ、これほどわたしたちの耳につねに好ましくひびくものはないのである。じっさい、これ以上に熱望して求められるものはない。要するに、これ以上に善きものは見いだされないのである。わたしたちがそれについてすこしでも長く時間をかけて語ることをのぞむとしても、

わたしのおもうのに、読者に負担を課することにはならないであろう。いま、わたしたちが話題としているこの国の終極目的のためだけでなく、すべての人びとにとって懐かしい平和のよろこびそのもののためにも――。

(一)「詩篇」一四七の一二以下。
(二) visio pacis. このような意味は定かではない。「平和の都」という意味は考えられうるものである。
(三)「ローマ人への手紙」六の二二。
(四) 不信仰な者についての罰が論じられるのは、本巻第二十八章、第二十一巻第三章、第四章等においてである。

第十二章

すべて人間の戦闘や動揺は、かの究極の平和を獲得せんとする努力である

人間的なことがらや人間の共通の本性について、わずかでも観察しようとする者はだれでも、わたしと共につぎのことを認めるであろう。よろこぶことをのぞまない者はだれもいないように、平和を得ることをのぞまない者はだれもいないということである。じっさい、人は戦闘を欲するときでも、かれが欲するのはただ勝利を得ることである。それゆえ、人はたたかうことによって栄光ある平和に至ることを切望しているのである。じっさい、勝利とは対抗する側を

服属せしめることでなければ何であろうか。そして、これが成し遂げられたときには平和が存するであろう。したがって、戦闘もまた平和をその意図として遂行される。命令を下すことによってか、あるいは、じっさいの闘争によってか、それが好戦的な武勇を実行しようと努める者によって遂行されるときでもそうである。

だからして、平和は戦争によってのぞまれる終極であるということが成り立つ。というのも、すべての人間は戦いを遂行することによってさえ平和を求めるのであるが、しかし、平和を結ぶことによって戦いを求めはしないからである。事実、現に存する平和の状態が乱されることを欲するときですら、人びとは平和を憎むのではなく、自分たちの意向にかなってその平和が変えられることを欲するのである。それゆえ、かれらは平和が存しないことを欲しないのではなく、たとえかれらが騒乱によって他の者から分離されたときでも、自分たちの同盟者や共謀者と共に共謀することによってある種の平和の姿を保持することとなくして自分たちの意図を達成することはできないのである。さらに、強盗でさえ、他の人びとの平和を激しくおびやかしながら、自分たちの仲間との平和をもとうとするのである。

たとえそのなかの一人が、力において他の共謀者にまさってすぐれ、仲間のだれをも信用せず、ひとりで待ち伏せし、圧倒して殺害できた者から略奪した物をひとり占めしようとするほど用心深いとしても、すくなくとも、自分が殺すことができぬ者や自分のおこなうことを隠しておこうとはおもわぬ者とはある種の平和の影を保とうとするであろう。同時にかれは、自分の家では、妻や子ども、あるいはそこに同居している者があれば、確かにその者たちとは平和

であろうとのぞむであろう。じっさい、疑いもなく自分の指図に従順である者をよろこぶのだからである。もしもこれがなされないなら、かれは憤激するであろう。小言をいったり、罰したりするであろう。必要とあれば、自分の家に統合をもたらすために荒々しい方法を用いることであろう。平和は、同じ家族集団のなかで他の者たちが一人の頭に服従するのでなければありえないと感じているからである。そしてかれ自身の家では、この頭はかれ自身なのである。

このようにして、もしもかれが、それが国家であろうと民族であろうと、数多くの者の隷従を自分の家で隷従を欲していたのと同じようにして受けるなら、そのときにはかれはもはや略奪者のように隠れてはおらず、自分自身を王として高め、人の目に立たせることであろう。同じ貪欲と悪意とがなおかれのうちに残っているであろうけれども。したがって、すべての人びとは、自分の意志にしたがって生きることを欲する自分自身に属する者と共に平和であることを欲しているのである。なぜなら、かれらが戦いを遂行しようとするときも、もしもできることなら、相手を自分自身のものとすることを、そして、かれらを服属せしめて自分自身の平和の法を課すことを、欲するのだからである。

しかし、わたしたちは叙事詩的な伝説物語に吟じられているようなある人間を想像することにしよう。かれはまさに反社会的で野蛮であるので、人間とよぶよりもむしろ半人間とよぶのを選ぶであろうようなものである。ところで、かれの王国は恐るべき洞穴の孤独のなかにあったが、その邪悪さにかんしては他に例がないほどであって、そのことからしてかれの名が付けられたのであるが（かれはカークスとよばれたのであるが、それというのは、ギリシア語では

「悪」は「カコス」といわれるのだからである(一)、かれには、へつらいのことばをかけてくれる妻も、一緒にたわむれる小さな子どもも、命令を下すかなり大きな子どももいなかった。また、いかなる友とも話をしてたのしむこともなく、自分の父親であるウルカヌスとさえそうであった(かれは、自分のような怪奇なものをもうけなかったというそのことでは、自分の父親よりはしあわせであった)(二)。かれはけっしてだれにたいしても何も与えず、かえって自分の欲するものを、奪い取ることができる者から自分ののぞむときに、それを奪い取ったのであった。にもかかわらず、その詩に描かれているように、

つねに地面はま新しい血潮にまみれた(三)、

その洞穴の床の孤独のなかで、かれが欲したのはただ平和であった。だれもかれを煩わせず、力も恐怖もその休息を乱すことのない平和である。要するに、かれが欲したのは、自分自身の身体との平和であった。それが保たれているかぎり、すべてがうまく行ったのであった。

じっさい、かれが命令すると肢体は服従したのであるが、しかし、その死すべき本性は飽くことを知らぬ欲望ゆえにかれに逆らい、魂を身体から引き離し魂を閉め出そうとする飢えの争いを惹きおこしたのであった。かれはその死すべき本性をできるだけ迅速に静めようと努め、強奪し、殺害し、そしてむさぼり食らったのである。このようにして、野蛮で凶暴であったけれども、かれはなお、自分の生命を保つために、このように野蛮で獰猛なやりかたで平和の保持を目ざしたのである。それゆえに、もしもかれが洞穴で自分自身に得ようと懸命であったところの平和を他の人びととも保持しようとのぞんでいたなら、かれは悪者とも怪物とも半人間

ともよばれはしなかったことであろう。

あるいは、かれから人間の結び付きを追い払ったのはかれのからだの形とかれから吐き出される火の煙であったとすれば、それはおそらく、危害を加えようという欲望からではなく、自分が生きる必要から荒れ狂ったのであろう。このようなものは存在しなかったということもありえよう。あるいは、これはいっそうありそうなことであるが、かれは叙事詩的な幻想によって描かれたようなものではなかったのであろう。じっさい、カークスがはなはだしい非難を受けないのなら、ヘラクレスは不十分な賞賛を受けているのである。それゆえ、このような人間——というよりはむしろ半人間——の存在は、わたしがいったように、他の多くの叙事詩的な虚構と同じように信用されないのである。

じっさい、カークスがその本性の野獣的な部分をそこからして得たあのまったく獰猛な野獣でさえ(カークスは半獣ともよばれているからである)(四)、一対となって結び付き、子どもを生み、養い、はぐくみ育てることによって、一種の平和をもって自分自身の種を保持するのである。それらの多くは、羊や山羊、鳩や椋鳥(むくどり)、蜂のようにではなく獅子や狼、狐や鷲、ふくろうのように、群居せず孤立してはいるけれども——。

雌虎はどうであるか。その子どもにのどをやさしく鳴らさないであろうか。その獰猛さを静めて子どもを愛撫しないであろうか。とびは獲物の上で舞うときには孤独であるけれども、相手を見つけて一組となり、巣をつくり、卵をかえし、ひな鳥を養い、いわば家族の母親と共にできるだけ平和に家族集団を守ろうとしないであろうか。まして、人間は、本性の法によって

社会に交わり、その社会にあるかぎり、ある意味ですべての人びとと共に平和を固持せんとするようになるのではなかろうか。悪しき者たちでさえ、自分たちの平和のために戦いをおこない、もしもできるなら、すべての人びとを自分自身のものとして、すべての人びととすべてのものとが共にただ一人に仕えるよう欲するのだからである。愛からであるか、恐れからであるか、かれらがその一人の平和において協同するというのでなければどんな方法によるのであろうか。

このように、高慢（スペルビア）は転倒した仕方で神を模倣しているのである。すなわち、高慢は、仲間と共に神のもとに等しくあることを嫌い、神の代わりに自己の支配を仲間に課することを欲するのである。それゆえ、神の正しい平和を嫌って、自己の不正な平和を愛しているのである。しかし、どんな種類であっても平和を愛さないということはけっしてできない。じつに、いかなる者の悪徳といえども、本性の最後の痕跡まで消去するほどに本性に反しはしないからである。したがって、よこしまなものよりも正しいものを選び、転倒したものよりも正しく秩序づけられたものを選ぶことを学んだ人は、不正な者の平和は、正しい者の平和と比べて、平和という名に値しないということを知るのである。

しかしながら、転倒したものも、それがそのうちに存在し、それがそれらから成り立っているところの事物のある部分において、また事物のある部分からして、そして事物のある部分と共に、平和でなければならないのであって、そうでないなら、それ(転倒したもの)はまったく存在しないことになるであろう。たとえば、だれかが頭からさかさまに吊り下げられたとする。

そのばあい、身体の位置や四肢の秩序はまちがいなく倒錯しているわけである。なぜなら、本性の要求するところによって本来は上方にあるはずのものが下方にあり、本性が下方にあることを欲するところのものが上方にあるのだからである。この態勢は肉体の平和を乱し、そのために苦しめられることになるのである。しかし、それにもかかわらず、魂はすくなくとも身体と平和的状態にあり、その安全をまもるために難儀するであろう。もしも魂が、その難儀を取り除かれて身体から離れることになっても、四肢の組合わせがそこに存続しているあいだは、残存しているものは身体の諸部分のある種の平和をもっていないわけではない。だからこそ、なおもそこに吊り下げられた人間が存するのである。

土の身体は地の方向へ向かい、それを吊しているなわは抵抗しているので、身体は自身の平和の秩序を目ざし、ある種の重さの声によってそれが安らぐ場所を要求するのである。したがって、身体はすでに死んでいてあらゆる感覚を欠いているが、その秩序にかなった本性的な平和から離れているわけではないのである。身体がその平和を保持しているときであっても、あるいは、その平和へ向かっているときであっても——。

さらに、薬剤や治療が採用されて死体のかたちが溶解したり分解したりすることが防がれるなら、なおも一種の平和が部分と部分とをたがいに結び付け、死体全体を地上の条件にふさわしい場所に——それゆえに平和な場所に——置くであろう。しかし、いかなる保存の処置もほどこされず、身体がその自然の成りゆきにまかされるなら、死体にはしばらくのあいだ一種の乱れが存在する。それはわたしたちの感覚には一致しない不快な蒸発気によるものであって

(これはすなわち、腐敗において感じられるものだからである)、これは宇宙の諸元素と結び付いた身体が、徐々に、そして小量ずつ、それら元素の平和へと解消するまでつづくのである。それにもかかわらず、この経過において、何ものも全宇宙の平和を統宰する最高の創造者であり主権者であるかたの法の支配をけっして免れない。というのは、小さい動物はより大きい動物の死骸から生きるとしても、これらの小体はすべて、創造者の同じ法によって、それらのものを保存する平和において生き物に仕えるからである。また、死んだ動物の肉は他の動物によって食われるとしても、それがどこへ引かれて行こうと、どんなものと結合されようと、どんなものに変えられたり変形されようと、すべての死すべき種の保存のためにあらゆるものにわたって拡散されて、適合するものを調和によって和合させるその同じ法を見いだすのである。

(一) *κακός*.

(二) カークスはウルカヌスの子。三頭の三つの口から火を吐く怪物である。英雄ヘラクレスの牛を奪って自分の洞穴にかくしたが、ヘラクレスはそれに気が付き、カークスを退治して、牛を取り返した。ウェルギリウス『アエネイス』八の一八五以下。

(三) ウェルギリウス『アエネイス』八の一九五―六。

(四) 同上、八の二六七参照。

第十三章

いかなる混乱においても本性の法によって奪い去られることのない普遍的な平和について

したがって、身体の平和は構成部分の秩序づけられた調和である。非理性的魂の平和は、もろもろの欲求の秩序ある静安である。理性的魂の平和は知識と行為との秩序ある一致である。身体と魂との平和は、生きているものの秩序ある生と健全さである。死すべき人間と神との平和は、永遠なる法のもとにおける信仰による秩序ある従順である。人間のあいだでの平和は、秩序ある和合である。家の平和は、共に住まう者のあいだでの命令する者と従う者との秩序ある和合である。国の平和は、市民たちのあいだでの命令する者と従う者との秩序ある和合である。天上の国の平和は、神を享受する者と神においてたがいに享受しあう者との、もっとも正しい、もっとも和合した共同である。そして、あらゆるものの平和は秩序の静けさである。

秩序とは、等しいものと等しくないものとにそれぞれその場所を当てがう配備である。それゆえに、悲惨な者は、かれらが悲惨であるかぎりにおいて、たしかに平和のうちにないのであるから、そこにはいかなる動揺もないような秩序の静けさを欠くのであるが、しかし、かれらの悲惨はそれに当然値するものとして正当であるがゆえに、まさしくその悲惨においても、かれらは秩序の外にはありえないのである。じっさい、かれらは幸福な者たちと結ばれているの

ではないが、かれらが隔てられているのは秩序の法によることなのである。そして、動揺をもたない者たちはそのかぎりで、かれらが存しているところの境遇に、いかに小さなものとはいえ、ある程度の和合をもって適合しているのである。このゆえに、かれらは自分たちのうちに秩序のいくらかの静けさを、したがって、いくらかの平和をもっているのである。

しかし、かれらがたとえある程度の静安のうちにあって苦しんでいないのであっても、すくなくとも静安であって苦しみから解放されているべきところにいるわけではないから、かれらはやはり悲惨である。しかし、もしもかれらが、自然本性的秩序を統宰するところのほかならぬあの法と共に平和でないなら、なおいっそう悲惨である。かれらが苦しむとき、かれらの平和は、かれらが苦しみを受けるその部分によって妨げられる。しかし、苦痛が激しく傷つけることをせず、結合そのものが解体しないところには、まだ平和は存在している。それゆえ、苦痛のないある種の生は存するが、何らかの生がなくしてはいかなる苦痛も存在しえないように、いかなる戦いもなくして平和は存在するが、何らかの平和なくして戦いは存しえない。このことがあるのは、戦いが存するということによってではなく、戦いというものが何らかの本性をもつ人間によって、あるいは人間においておこなわれるということによるのである。かれらが何らかの平和によって存在するのでないなら、このことはけっしてないであろう。

そのために、そのうちにいかなる悪もない、あるいは、いかなる悪もありえない本性は存在するが、いかなる善もないような本性は存在しえない。したがって、悪魔自身の本性でさえ、それが本性であるかぎりにおいて悪ではない。かれを悪しき者となしたのは、みずからの転倒

である。したがって、悪魔は真理のうちに立たなかったのであるが、(二)真理の裁きを逃れたわけではなかった。悪魔は秩序の静けさのうちに留まらなかった。とはいえ、だからといって、かれが秩序を与えたかたの権能を逃れたわけではない。かれの本性に神によって与えられたその善が、かれを罰へと定めた神の正義によってかれから取り去られはしなかった。しかし神は、みずからがおつくりになった善を追及されたのではなく、悪魔が犯した悪を追及されたのである。

神はその本性にお与えになったものすべてを取り去られることはなく、あるものを取り去り、あるものを残されたのであって、それは、悪魔が剝奪を苦しむようになるためである。この苦しみはそれ自身、取り去られた善と残された善との証拠である。というのは、いかなる善もそこに残されなかったのなら、失われた善を悲しむこともしなかったであろうからである。じっさい、罪を犯す者が公正さを失うことによってよろこぶなら、かれはいっそう悪しき者である。ところが、苦悶する罪人は、その苦しみから何ら善を得ないとしても、すくなくとも健やかさの喪失を悲しむのである。そして、公正さと健やかさとはいずれも善であって、何らかの善の喪失は、よろこばれるべきであるよりは悲しまれるべきであるから(より高次の善――たとえば、魂の公正さは身体の健やかさよりもより高次の善である――によって補われないとするなら)、たしかに、不正な者が罰によって悲しむことは、罪を犯してよろこぶことよりもより適切である。

それゆえ、罪を犯して善の放棄をよろこぶことは悪しき意志の証拠であるように、罰を受け

て善の喪失を悲しむことは善き本性の証拠である。というのは、人が本性の平和の喪失を悲しむとき、かれの悲しみはその平和がいくらかでも残っているところから生ずるのであって、これは、平和によって本性がかれ自身にとって親しい間柄となっているからである。ところで、最後の審判においてはきわめて正当なことであるが、不正で不敬虔な者は苦しみ悶えて本性のもろもろの善の喪失を悲しみ、そして、これらの善を取り去られたのは完全な正義であられる神であることを悟るのである。かれらは最高の寛大さをもって善を与えられたそのかたを軽んじたのである。

それゆえに、すべての自然本性を最高度の知恵をもって創設され、それらのものをもっとも正しく秩序づけられた神は、人間の死すべき類を地上のもっとも大いなる飾りとして立てられ、この世の生にふさわしいある種の善きものを人間にお与えになった。すなわち、健康と安全、同じ人間の共同性において、死すべき生に相応した仕方で時間的な平和をお与えになったのである。さらに、この平和を保持したり回復したりするのに必要なもの(わたしたちの感覚にふさわしく、近づきやすいもの、たとえば光、声、呼吸のための空気、飲み水、身体を養育し、覆い、強壮にし、飾るのに適したもの)をお与えになったのである。これはこの上もなく公正な仕方でなされるのであって、人間の時間的な平和に適合されるべきこのようなもろもろの善を正しく用いる者は、さらに大きな、さらにすぐれた善すなわち不滅の平和を受けるであろう。また、永遠の生にあって神を享受し神において隣人を享受するため、その者にふさわしい栄光と栄誉とを受けるであろう。他方、これらの時間的な善を不正に用いる者は、時間的な平和を

失うであろう。そして、不滅の平和を受けることもないであろう。

（一）「ヨハネによる福音書」八の四四参照。

第十四章

人間および人間社会における秩序と平和について

したがって、すべて時間的な事物の使用は、この世の国における地上的な平和の享受に関係づけられるが、天上の国においては永遠の平和の享受に関係づけられる。それゆえ、もしもわたしたちが非理性的な動物であるなら、わたしたちは身体の諸部分の秩序ある調和ともろもろの欲求の落ち着きのほか何ものも欲求しないであろう。というのも、身体の平和が欠けているなら、非理性的な魂の平和も妨げられるからであって、それは非理性的な魂がもろもろの欲求の落ち着きを得ることができないという理由によるものである。

ところで、二つのものは共に、魂と身体とのあいだのかの平和、すなわち秩序ある生と健康とに益をもたらすものとなる。というのは、動物は苦痛を避けることによってその身体的平和を愛することを示し、そしてまた、欲望の欠乏を満たすために快感を追求することによって魂の平和を愛することを示すからである。このように、死を避けることにより、魂と身体とを統合する平和をどれほど愛するかということをまったく明らかに示しているのである。

けれども、人間には理性的魂が存在する。それは動物と共通にもつところのすべてを理性的魂の平和に従属させるのであるが、精神によって何ごとかを熟考し、それにしたがって何ごとかをなすためである。また、このようにして、わたしたちが理性的魂の平和とよんでいる知識と行為との秩序ある一致が人間に存するようになるためである。(一)

このような目的により、人間は苦しんだり悲嘆したりすること、欲望をもったり動揺したりすること、死によって分解してしまうことなどないようにのぞまなければならないのであって、それは、人間が何らかの有益な知に達し、その知にしたがってみずからの生と死をととのえるためである。しかし、人間は、確信をもって従うことのできる神的な教師や、自由を失うことなく従うことのできる神的な助け手を必要としている。それは、知識に熱狂して、人間の精神の弱さゆえに何らかの誤謬の災いに陥ることのないためである。人間は、この死すべき身体においてあるかぎり、主から離れて異国の旅をつづけているのであるから、見えるものによらないで信仰によって歩いているのである。(二)人間が、身体の、あるいは魂の、あるいは両方すべての平和を、死すべき人間が不死なる神と共にもつあの平和に関係づけるのもこのような理由によるのであって、それは、永遠の法のもとに、信仰において秩序づけられた従順がかれに存するためである。

けれども、わたしたちの教師であられる神は二つの主要な掟、すなわち神への愛と隣人への愛とを教えておられる。(三)それらの掟には、人間が愛するところの三つの対象が見いだされる。神、自己自身、そして隣人である。神を愛する者は自己自身を愛することに誤らない。そこか

ら、人間は、自己自身のように愛するように命ぜられているその隣人が神を愛するように心を用いるということになるのである(その妻にも、子どもにも、家を構成する者にも、そして可能なかぎり他の人びとにもそうなのである)。そのため、人は、隣人にもしかして欠けるところがあるなら、自分に配慮を求めてくれるよう欲するであろう。これによって、人は、すべての人びとがかれに依存するかぎりにおいて、かれらと平和的であることであろう。すべての人びとのあいだにおけるその平和によって秩序ある和合が存在するであろう。そして、この秩序の基礎はつぎの点にある。──第一に、だれをも害しないこと、第二に、だれであってもできるときにはその人のためになること、である。

それゆえ、まずはじめに、人間には自分自身に属する人びとの配慮ということがある。明らかに、本性の秩序や人間的社会そのものの秩序において、これらの人びとにより容易でより直接的な配慮の機会をもっているからである。だからして、使徒は、「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえりみないばあいには、不信仰な者よりも悪い。かれは信仰を棄てた者である」(四)といっているのである。したがって、ここに家の平和がはじまることになる。すなわち、共に住まう者たちの、命令を下す者とそれに従う者との秩序づけられた調和である。

すなわち、他を配慮する者が命令するのであって、たとえば、夫が妻に、両親が子どもに、主人が僕(しもべ)に命令するごとくである。それにたいして、配慮を受ける者が従うのであって、たとえば、妻が夫に、子どもがその両親に、僕が主人に従うごとくである。けれども、信仰にもとづいて生きる、天上の国から離れてなお旅の途上にあるところの正しい人の家においては、命

ずる者でさえ、命令すると見られる者たちに仕えるのである。[五] それというのは、その者たちが命令するのは支配欲からではなく、他の人びとのためになるよう義務づけられたつとめからであって、支配しようとする高慢によるのではなく、配慮しようとする憐れみによるのだからである。

(一) 本巻第十三章参照。
(二) 「コリント人への第二の手紙」五の六参照。
(三) 「マタイによる福音書」二三の三七以下参照。
(四) 「テモテへの第一の手紙」五の八。
(五) 「あなたがたの中でいちばん偉い人はいちばん若い者のように、指導する人は仕える者のようになるべきである」(「ルカによる福音書」二二の二六以下)。

第十五章

本性的自由と罪による奴隷の状態

この関係は本性の秩序が定めているのであって、神はそのように人間をおつくりになったのである。じっさい、神は「海の魚と空の鳥と地に動くすべての生き物とを治めよ」[一] といっておられるからである。神は、ご自身にかたどってつくられた理性的なものがただ非理性的なもの

のみを支配することをおのぞみになったのであった。人間が人間を支配することをのぞまれたのではなく、人間が動物を支配することをおのぞみになったのである。それで、最初の義しい人たちは、人間の王としてよりも、むしろ家畜の群れを飼う者として立てられたのであって、このようにして神は、もろもろの被造物の秩序が要求するのは何であるか、そして、罪人の報いとして取り立てられるのは何であるか、わからせようとされたのである。たしかに、奴隷の状態は罪人に課せられたものと解されるのは正当である。

だからして、わたしたちは「奴隷（セルヴス）」ということばを、義しい人であるノアがこのことばで自分の息子の罪を罰するまでは、聖書のどこにも見いださないのである。[二] したがって、この息子がこの名に値したのは、かれの本性ゆえではなく、かれの罪過ゆえである。ところで、ラテン語の「奴隷」ということばのおこりは、戦いのきまりによって殺されていてもよいような者たちが征服者に助けられて救われた者となったとき、その「救われること（セルヴァーレ）」[三]からこのようによばれるようになったという事実に由来すると信じられている。このことも罪の報いのためでなければおこらなかったであろう。なぜなら、正しい戦いが遂行されるときでも、罪のために相手方によって戦われるのだからである。そして、すべての勝利は、それが悪しき者らの成功するところとなったときでさえ、かれらの罪を正すためであれ、あるいは罰のためであれ、神的なさばきによって、征服者を謙遜にするからである。

わたしたちはこのことの証人として神の人ダニエルをもっている。[四] かれは捕われの身となったとき、自分の罪と自分の民の罪とを神に告白し、心からの悲しみをもって、これらのことが

その捕囚の原因であることを証言するのである。したがって、奴隷の状態の第一の原因は罪であって、その結果、人間はその境位の拘束を受けて人間に服従せられるのである。これはいかなる不正もない神のさばきによってのみおこるのであって、神は罪を犯した者のその値にしたがって異なった罰を割り当てることを知っておられる。わたしたちの上にいます主がいっておられるように、「すべて罪を犯す者は罪の奴隷である」(五)。だからして、多くの信仰をもつ人びとが不正な主人に仕えているけれども、自由な主人に仕えているわけではない。「人は征服されたとき、征服者の奴隷となって仕えるからである」(六)。この支配しようとする欲情は、死すべき人間の心を苛酷な支配力によって荒廃させるからには、他のことには触れないとしても、すくなくとも人間に仕えるほうが欲情に仕えるよりは幸いである。しかしながら、ある人びとが他の人間に従わしめられるかの平和の秩序においては、謙遜(フミリタス)が仕える者たちにとって益するものであるように、高慢(スペルビア)が支配する者たちにとって害を加えるものとなる。しかし、神がはじめに人間をおつくりになったときの本性においては、だれも人間や罪の奴隷ではないのである。

しかし、罰としての奴隷の状態は、かの法によって定められている。それは、自然本性の秩序を保つことを命じ、それを乱すことを禁ずる法である。じっさい、もしも誰もかの法に違反するようなことをなさなかったなら、罰としての奴隷の状態によって拘束することは何もなかったからである。それゆえに、使徒も、僕はその主人に従う者であること、そして真心から善き意志によって主人に仕えるべきであることを戒めるのである(七)。すなわち、かれらがその主人たちによって自由とされえないのなら、陰険な恐れによるのでなく誠実な愛情(ディレクティオ)によって仕え

ることにより、ある意味でみずからその奴隷の状態から自己を解放することになるのである。すべての不正が過ぎ去り、人間的な権威と権力とが空しくされ、神がすべてにおいてすべてとなられるときまでは――(八)。

(一)「創世記」一の二六。
(二) servus.「創世記」九の二五参照。
(三) servare. ――アウグスティヌスの見解はかならずしも正当とはいえないとされる。
(四)「ダニエル書」九の三以下参照。ダニエルはバビロン捕囚時代(前六世紀)に、異教の地にあっても神にたいする正しい信仰を失わず、迫害にあっても忠実な生活を守りとおした信仰者である。
(五)「ヨハネによる福音書」八の三四。
(六)「ペテロの第二の手紙」二の一九。
(七)「エペソ人への手紙」六の五参照。
(八)「コリント人への第一の手紙」一五の二四、二八。

第十六章

主人と僕の関係における公正さについて

このようなわけで、わたしたちの正しい父祖たちは奴隷をもっていたとしても、かれらはこの世のもろもろの時間的な善にかんして子どもたちの身分と奴隷たちの境位とのあいだに区別

を設けて家の平和を管理したのであった。しかし、永遠の善が希望されるべきかたである神の礼拝ということがらについては、その家を構成する者たちすべてにたいし等しい愛情（ディレクティオ）をもって配慮したのであった。このことは本性の秩序の指示するところであって、「家長」という名称もここから来ているのである。そして、不正な仕方で支配する者たちですら、この名でよばれるのをよろこんだほどこの名称はひろく用いられたのであった。

しかし、真実の家長たちは、神の礼拝とそれに値する行いとにかんして、その家に属する者たちすべてのために、あたかもかれらがすべて息子であるかのように天上の家に至ることができるよう切望し祈り求めて配慮する。その天上の家においては、家長は死すべき人間に命令を下す必要がないのであって、なぜなら、すでにあの不滅の幸福にある者たちにかんして配慮せねばならぬつとめはなくなっているからである。その家に至るまで、家長は、奴隷が僕としての境位によって負うつとめよりも、主人として力をおよぼすというより大きなつとめを耐えなければならない。しかしながら、もしもその家のだれかが不従順によって家の平和に違反するなら、その者は、人間の社会が認めるかぎりにおける言葉や笞打ちなど、その種の何らかのものによって矯正されるであろう。これは違反を犯した者の益のためになされるのであって、それによってかれが破壊した家の平和が再びととのえられるのである。

じっさい、人を助けるにしても、それによって人をより大きな善を失わせることになってしまうばあいには、それは善行とはならないように、人を大切にすることによって、人がより重大な悪へ陥らせられるばあいには、その行為に罪がないとして済まされるわけではない。それ

ゆえ、潔白な者のつとめは、だれにも災いをもたらさないというだけではなく、人を罪から抑止したり、罪を罰したりすることも含むのであるが、それは、罰を受ける者がその経験によって矯正されたり、他の者がそれを範とすることによって罪の行為を思い止めたりするためである。

したがって、人間の家は国家（キウイタス）のはじめであり、その小部分であらねばならない。すべてはじめはその種類に属するもののある終極へと関係づけられ、すべての小部分はそれを部分として含む全体の完全性へと関係づけられるのであって、それゆえに家の平和は国家の平和に関係づけられるということが明らかとなる。すなわち、同じ家に共に住まう人びとのあいだでの命令を下す者と従う者との秩序づけられた和合は、市民たちのあいだでの命令を下す者と従う者との秩序づけられた和合へと関係づけられるのである。そのようにして、家長は国家の法からその規則を得るべきであり、国家の平和に適合するようにその家を治めるべきなのである。

（一） paterfamilias.

第十七章

天上の国と地上の国の平和の源泉はそれぞれ異なっていること

しかし、信仰から生きない人間の家は、この世の時間的生に属する事物およびその便益にも

とづいて地上の平和を追求する。それにたいして、信仰から生きる人間の家は、未来に永遠なるものとして約束されているところのものを待ち望み、異国にあって遍歴をつづける者のごとくに地上的時間的な事物を用いるのである。かれらはそれらのものによって捕えられぬように、そして神へ向かう道から逸れぬように、かえって、それらのものを「魂に重荷を課す朽ちる肉体」〔二〕の荷物をより容易に耐えるよう、そしてその増大を最小のものとするよう用いるのである。それゆえに、これら両方の人間、これら両方の家にとって可死的なこの世の生に欠くことのできない事物の使用にかんして共通するのであるが、それぞれのそれを用いる目的はまったく異なった固有のものである。

このように、信仰から生きない地上の国は地上的平和を目ざしていて、それは命令を与える者と従う者において市民たちの調和のある一致に限定され、可死的な生に関係している事物について人間の意志のある種の合成が得られることになるのである。他方、天上の国、というよりはむしろ天上の国の部分も――それは可死的な条件のうちにあって遍歴の旅をつづけ、信仰から生きているところの天上の国の部分である――この地上の平和を必要とする可死性そのものが消え去ってしまうまでは、この平和を用いることを必要としているのである。それゆえに、この世の国において、いわば捕われの身とでもいいうる異国人として遍歴の生をいとなむあいだは、すでに贖いの約束とその担保としての霊の贈り物とを受けているけれども、この天上の国はこの世の国の法に従うことは疑いない。この法とは、死すべき生を支えるために適合せられているもろもろの事物を管理している法のことである。このようにして、可死性に属してい

るもろもろの事物においては、両方の国の間に和合が保たれることになる。なぜなら、いずれの国もこの可死性にかんしては共通であるからである。

しかしながら、この世の国は神の教えによってしりぞけられたある賢者たちを擁していたのであって、かれらは、自分自身の想像によってか、あるいはダエモンらに欺かれてか、人間的な諸用件に世話をやく多くの神々の存在を信じたのであった。それら神々のそれぞれに、ある意味で異なった職務が属しているのであり、したがって、身体にはある神が、魂には他の神が、また、身体そのものにおいても、頭部にはある神が、首にはある神が、そしてそれ以外の個々の部分にはそれぞれの神が関係するのである。同じく、魂そのものにおいても、生得の資質にはある神が、学識には他の神が、怒り、欲望にはそれぞれの神が関係する。生活に属することがらにおいても、家畜、穀物、酒、油、森林、貨幣、航行、争闘や勝利、結婚、出生や多産など、それぞれの神が関係する。

それにたいして、天上の国は唯一なる神のみが拝されるべきであることを知っており、また、その神にたいしてのみ、ギリシア語で「ラトレイア」[三]とよばれて神以外に帰せられてはならないあの礼拝をもって崇められるべきことを信仰の敬虔をもって認めている。それゆえに、つぎのようなことがおこったのであった。——すなわち、この天上の国はこの世の国と宗教の法を共通してもつことができなかったのであり、そして、その法をまもるため、異なった考えをもつ者らから反対され、難儀な妨げを受けねばならず、かれらの怒りや憎しみ、そして迫害の攻撃を耐えねばならなかったのであった。いつの日かその国が、その数の大きさによって惹きお

こされる恐れやつねに神から受ける助けをもって敵対者の士気をくじくときが来ないかぎり――。

そのようなわけで天上の国は、この世にあって遍歴の旅をつづけているあいだ、あらゆる民族からその国の民を召し出し、多様な言語を語る寄留者の社会を集めるのである。その国は、唯一にして最高の真の神を拝すべきことを教える宗教を阻止しないなら、地上的平和を得させ、保持している慣習や法、制度の相違を慮ることなくそれらのうちの何ものかを無効にしたり廃棄したりせずに、かえってむしろそれを維持し、追っていくのである。というのは、さまざまな民族のあいだに相違が存するけれども、しかし、一つの同じ目的――地上的平和――が目ざされているからである。

それゆえ、地上において旅をつづける天上の国も地上の平和を用いるのであり、また、人間の可死的な本性に属するもろもろの事物にかんしては、それらが健康的な宗教と敬虔に害を加えることなくゆるされるかぎり、人間の意志の合成をまもり、かつ求めるのである。その国は地上的平和を天上的平和へと関係づける。この平和は真の平和であって、すくなくとも理性的被造物にとっては、それのみが得られるべきであり、平和とよばれるべきものである。すなわち、神を享受することにおいて、神において相互を享受することにおいて、もっとも秩序づけられた、もっとも和合のある社会なのである。そのような平和に達したとき、そこには死すべき生はなく、明らかに確かな生ける生が存するであろう。腐朽によって魂に重荷を課する動物的な身体はなく、いかなる欠乏もない、あらゆる部分において意志に従う霊的な身体が存する

であろう。

天上の国はこの平和を遍歴の旅にあるあいだは信仰によって得るのである。国(キウイタス)における生というものはいずれにしても社会的なものであるからには、その国は、神と隣人とにかんしておこなうすべての善き行為をかの平和の獲得に関係づけるときに、信仰にもとづく正しい生を生きるのである。

(一)「知恵の書」九の一五。

(二) λατρεία. ラトレイアについては、本書第五巻第十五章および第十巻第一章において触れられた。神にたいしてなされる奉仕(礼拝)としてのラトレイアと人間にたいしてなされる奉仕としてのドゥレイアとが区別された。

第十八章

新アカデミア派の疑いとキリスト教徒の信仰の確かさ

ところで、ウァルロが新アカデミア派から引き出したところの、すべてのものは不確実であるというその派の独自の見解にかんしては、神の国は、そのような疑いはまったく愚かなことであるとして忌避するのである。精神や理性によって把捉する事物について、たとえその知識は「魂に重荷を課す朽ちる肉体」(一)のゆえにごく小さなものであるとはいえ(使徒もいうごとく

「わたしたちの知るところは一部分である」から)、すくなくとも、人はまったく確実な知識をもつのであり、あらゆる事物の明証性においては精神が身体をとおして用いるところの諸感覚に信頼をおくのである。それらはけっして信頼できないと考える者は、感覚の明証性に信頼をおく者よりもより悲しむべき誤謬に陥っているのである。

神の国はまた、わたしたちが正典とよんでいる旧新約の聖書を信じるのである。それは、義しい人がそれにもとづいて生きた信仰の源泉である。主から離れて異国人としての旅をつづけるあいだ、わたしたちは疑うことなくこの信仰によって歩いているのである。この信仰が健全で確実であるかぎり、わたしたちがつぎのような事物について疑うとしても、それは非難されるべきこととはならないであろう。すなわち、感覚によっても理性によっても知覚されない事物、正典の聖書によってわたしたちに明らかでない事物、そして、信じないのは不適当だとするような証拠によってわたしたちの知るところとはならないような事物、――である。

(一)「知恵の書」九の一五。
(二)「コリント人への第一の手紙」一三の九。
(三)「ハバクク書」二の四。

第十九章

キリスト教徒の生活の流儀について

神へと至る信仰に従う各人が、どのような服装によって、どのような習慣によって生きるかということは、神の戒めに反しないなら、その国にとってまったく問題ではない。だからして、哲学者たち自身がキリスト教徒となるときも、かれらが服装や食べたり飲んだりする習慣を変えねばならないわけではない。それらは何ら宗教を阻むものではない。変えねばならないのは、ただ偽りの教えである。だからして、ウァルロがキニク派からとりあげたあの生活の特異な流儀も(一)、もしも無作法や節度を欠くほどのものでないなら、まったく問題とはならない。しかし、閑暇の生、活動的な生、それら二つから混合された生という三種類の生活については、健全な信仰によってそれらのいずれかの仕方で生を導くことも可能であり、永遠の報いへと至りうるであろう。しかしながら、問題となるのは、人は真理への愛によってどのような教えを所有しているのであるか、そして、愛（カリタス）のつとめに応えて何を犠牲として支払うのであるか、ということである。

だれも閑暇において隣人の益を考えないほど暇であるべきではない。また、神の観想を求めないほど活動的であってもならない。閑暇において怠惰な自由をよろこぶべきではなく、かえって真理の探究や発見をよろこぶべきであって、各人はそれによって進歩し、そして見いだし

たものを出し惜しみをして他者に知らせないようであってはならない。他方、活動において愛されるべきものはこの世の生の名誉や権力なのではない。じっさい、「日の下にあるすべてのものは虚しい(二)」からである。もしも、正しい仕方で、そして有益となるような仕方で成し遂げられるのなら、名誉や権力を媒介として成し遂げられる仕事そのものが愛されるべきなのである。すなわち、それが服属する人びとのしあわせを促進するようになされるということであって、わたしたちがさきに論じたように(三)、そのしあわせは神の意志に沿うものである。

　このことゆえに、使徒も「監督の職をのぞむ者は、よい仕事をのぞむ(四)」といっているのである。使徒は「監督（エピスコパトゥス）」というものが何であるか説明しようとしているのである(五)。なぜなら、これは仕事の名であって、名誉を示すものではないからである。このことばはギリシア語であり、指導者として任ぜられた人が、その指導の下にある人びとを監督する、すなわち、その人びとの配慮を司るということから出ている。じっさい、「スコポス(六)」は「見守ること」である。それゆえ、「エピ・スコペイン(七)」は、わたしたちがのぞむなら、ラテン語で「何々を見守ること(八)」ということができるのであって、そのため、他のためにあることよりも、他の先頭にあることに執心する者は、監督ではないと悟るべきであろう。そのようなわけで、だれも真理の認識に専心することを妨げられない。それは賞賛されるべき閑暇に属しているからである。しかしながら、高い地位は、それなくして人びとは統治されないけれども、それ自身が熱望されるのは見苦しいことである。たとえその地位がふさわしい仕方で保持され管理されるとしても——。

それゆえ、真理への愛（カリタス）が聖なる閑暇を求めるのである。愛がわたしたちを強いて正しい業務を引き受けさせるのである。もしもだれもこの荷を課さないときは、わたしたちは真理の把握とその考察とのために閑暇であるべきである。しかし、そのような荷がわたしたちに課せられているばあいには、愛の力に強いられてそれを引き受けるべきである。しかし、このばあいも真理へのよろこびが完全に見捨てられてはならない。そのよろこびが失われて愛の力がわたしたちを圧しつぶすようなことがあってはならないからである。

（一）　本巻第一章参照。
（二）「伝道の書」一の一四。
（三）本巻第十四章。
（四）「テモテへの第一の手紙」三の一。
（五）監督——episcopatus. 一世紀終わりの使徒後時代には教会制度が発達し、異端思想やローマ帝国の弾圧などとも対決しなければならなくなり、使徒に代わって人びとの霊的指導をおこなう監督の役割が強化されるようになった。
（六）σκοπὸς. ——保護する者、監督する者、見張る者などの意をもっている。
（七）ἐπισκοπεῖν. ——指導的立場にあって、人びとを保護監督すること。
（八）superintendere. ——「監督はより高い位置におかれるのであって、それは人びとを保護監督し(superintendit)、いわば人びとを見守る(custodiant)ためである」(アウグスティヌス『詩篇注解』一二六の三)。

第二十章

神の国の民はこの現実の生にあっても希望によって幸福である

それで、神の国の最高善は、永遠で完全な平和であるので、死すべき人間が出生から死へと通過するような平和ではなく、もはやいかなる敵対者を耐える必要もなく不死なる者としてそこにおいて存続する平和なのである。これが最高の至福の生であることをだれが否定するであろうか。また、その生と比較するなら、この世における現実の生は、それがどれほど魂と身体や外的事物の善に満たされていようとも、まったく悲惨であるとだれが判断しないであろうか。

しかしながら、もしもだれかがこの世における現在の生を、この上もなく熱心に、かつまったき確信をもって愛するかの生を目的としてそれへと関係づけて用いるようであれば、その人は現実においてよりもむしろ未来の希望においていまなお幸福であると正当にいいうるであろう(一)。それにたいして、その希望のない現実の生は虚偽の幸福であり、大きな悲惨である。というのは、この生は精神の真実の善を用いていないからである。なぜなら、知恵が真の知恵であるのは、聡明な判別をはたらかせ、勇気をもってことをなし、節度をもって自己抑制をおこない、公正に分配をおこなうために、その意図をかの生の目的へ向けているばあいのみだからであって、まさにその生において、確かな永遠性と完全な平和によって神はすべてにおいてすべ

てであられるであろう(三)。

(一) 希望については、本書第十四巻第九章、第十五巻第十八章において触れられた。

(二) 「コリント人への第一の手紙」一五の二八。

第二十一章

法と正義について——国家についてのスキピオの定義にしたがって、ローマ国家はかつて存在したのであるか

さて、わたしたちはいま、わたしがこの書の第二巻でおこなった約束(一)を、わたしにできるかぎり簡潔にかつ明らかにそれを果たさねばならないところに来ている。すなわち、キケロの『国家論』の書においてスキピオによって用いられた定義にしたがって、ローマ国家はけっして国家といえるものではなかったということを明らかにするという約束であった。というのは、かれ(スキピオ)は国家(レス・プブリカ)を簡潔に定義して「人民の福利(レス・ポプリ)(二)」といっているからである。さて、もしもこれが真の定義であれば、かつてローマ国家はけっして存在しなかったわけである。なぜなら、ローマ国家は人民の福利であったことはなかったからである。かれはそれが国家の定義であると主張したのであった。かれは「人民(ポプルス)」を「法の同意、および利害を共通することにより結合せられた集団」と定義づけたのであった(三)。

ところで、かれはその議論によって、国家は正義なくして維持されないことを示して、その「法の同意」が何を意味するのかを説明しているのである。真の正義の存しないところには、法も存しえない。すなわち、法によっておこるところのことは、たしかに正しくおこなわれるのであるが、不正におこなわれるところのことは、法によっておこなわれるのではないのである。というのは、不正な人間によって設けられたことは法とよばれるべきではないし、また、法と見なされるべきでもないからである。かれら自身も、法は正義の泉から流れ出たものであり、心得違いをした人びとによってよく主張されるような、強い力をもつ者にとって有益であるところのものが法であるという、法についての観念が誤ったものである、と述べているからである。それゆえに、真の正義が存しないところには「法の同意により結合せられた人間の集団」はありえず、したがってまた、スキピオやキケロの定義に相応する「人民」も存しないのである。そして、「人民」が存しないなら、「人民の福利」も存せず、人民の名に値しない何らかの人間の群れが存するのみである。

したがって、国家というものが「人民の福利」であるなら、そして、「法の同意により結合せられた集団でないもの」は人民でないのなら、しかしまた、正義の存しないところに「法」というものが存しないのなら、疑いもなく、正義の存しないところには国家は存しないと結論せざるをえないわけである。さらに、正義は、各人にその人のものを分配する徳である。そうなら、人間自身を真実の神から取り去って不浄なダエモンらに服従させるのは人間の正義であろうか。これは各人にその人のものを分配しているのであろうか。それとも、地所を買った人

間からその地所を取り上げて、その権利をもたない者に手渡すなら不正であり、人間をおつくりになった主であられる神から自分自身を取り去って邪悪な霊に仕えるようになった者は正しいというのであろうか。

たしかにこの同じ『国家論』の書において、不正義に反対して正義のために、きわめて激しい、強力な議論がなされている。そして、はじめに、正義に対して不正義の側のためにおこなわれ、国家は不正義によらずしては存続しえず、また増大もされないと主張される。このばあい、つぎのことがいわば重要な強調点として設定されるのである。すなわち、人びとが他の人びとに自分の支配者として隷従しているのは不正義であるが、しかし、国家（レス・プブリカ）をその大きなものとして自己に属せしめている強大な国家（キウイタス）は、不正義を伴うことなくしては属領を支配することは不可能である、ということである。

そこで、正義の側から答えが出される。すなわち、そのような人びとにとって隷属の状態は有益なのであって、それが正しい仕方でおこなわれるときには——つまり、無節度な人間から不正をなす自由を除去するときには——人びとに有益なものとなるがゆえに、これは正しいのである、というのである。そしてまた、支配されている人びとはより良い状態にあるからである。というのは、支配されなかったときは、もっと悪い状態であったからである。この理由を確かなものとするために、いわば本性からとられたというべき有名な例がおかれており、つぎのようにいわれるのである。「それでは、神が人間を、魂が身体を、理性が欲望およびそのほかの悪しき部分をなにゆえ支配するのであるか」。この例によって十分に教示されているのは、

隷属の状態はある人びとにとっては有益であり、そして、神に仕えることはすべての人びとにとって有益である、ということである。魂は神に仕えるとき身体を正しく支配し、また、魂それ自身において主なる神に従う理性は欲望およびそのほかの悪しき部分を正しく支配する。そうであるから、人間が神に仕えないばあいには、その人間にどれだけの正義が存すると考えるべきであろうか。じっさい、神に仕えない者には、けっして正しく身体を支配することはありえないし、人間の理性が徳を支配することはできない。そして、そのような人間にいかなる正義も存しないなら、疑いもなくそのような人間から成り立つ人間集団にも正義は存しない。それゆえ、ここには、多くの人間の群れを「人民」となすところの「法の同意」は存しないのであって、この人民の福利が国家とよばれているのである。

「利害」については、わたしはいったい何をいう必要があるであろうか。つまり、それを共通とすることによって人びとの集団が「人民」とよばれることになるあの「利害」のことである。というのは、よくよく考えてみるなら、不敬虔な仕方で生きる者たちの生にとっては何らの益も存しないからである。それはちょうど、神に仕えることをせずダエモンらに仕える者たちすべての生のごとくであって、ダエモンらはこの上もなく汚れた霊であるのに、まるで神々にささげられるように自分自身に犠牲がささげられることを求めるほど、不敬虔な存在なのである。しかしながら、すくなくとも、わたしが「法の同意」について語ったところのことは十分であると考える。すなわち、それは、あの定義によって、正義が存しないなら「人民」――福利はその人民のものであるが――も存しないということを明らかにするところのものである。

もしもローマ人が自分たちの国家において不浄な霊に仕えたのではなく、善にして聖なる神々に仕えたのだといわれるなら、わたしたちがすでに十分に述べた同じことを――じっさい、十分といえる以上に十分に述べたのであるが――くり返して述べねばならぬのであろうか。本書の先行する諸巻を経て、いまここまで読んできた人ならだれも、ローマ人が邪悪で汚れたダエモンらに仕えたことを疑わないであろう。それを疑うのなら、その人は異常に鈍い人であるか、そうでなければ無節操なまでに議論好きな人であろう。しかし、ローマ人たちが犠牲をささげて崇めた神々の性格についてはもはや語らぬことにして、真実の神の法には「主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は断ち滅ぼされなければならない[六]」と記されているのである。したがって、かくも由々しい警告をもってこれを命じたかたは、善き神々であれ悪しき神々であれ神々にたいして犠牲をささげることをのぞまれなかったのであった。

(一) 本書第二巻第二十一章。
(二) res populi. ――人民のもろもろの事がら、要件、利益、などを含むものとして「福利」とした。
(三) キケロ『国家論』一の二五――Pupulum autem non omnem coetum multitudinis, sed coetum iuris consensu et utilitatis communione sociatum esse determinat.
(四) プラトン『国家篇』におけるトラシュマコスの論(一の三三八C以下参照)。
(五) これはアリストテレスの定義に照応する(『ニコマコス倫理学』五の五の二)。
(六) 「出エジプト記」二二の二〇。

第二十二章

唯一にして真実の神——そのかたにのみ犠牲がささげられるべきである

しかし、つぎのように答えられるであろう。「この神はだれなのか。ローマ人が従順であるべきであってそのかたのほか、いかなる神々にも犠牲をささげて拝されてはならないとする神であるということを、いかなる正当な根拠によって証明されるのか」。——いまに至ってなお、このように問うのは、はなはだしい盲目である。このかたは、わたしたちが見た出来事を預言者たちが予告したあの神である。アブラハムが「あなたの子孫において地のすべての種族は祝福されるであろう(一)」という答えを受けたその神である。

この約束は、肉にしたがえばかれの系統から出られたキリストにおいて成ったのであって、この御名に対して敵対者でありつづけた者たちでさえ、好むと好まざるとにかかわらず、それを認めているのである。かれは、神の霊が預言者たちの口をとおして語った同じ神であり、その預言は、わたしたちが先の諸巻で述べたように全世界に拡がったのを見る教会によって成就されているのである。

この神は、ローマ人の学者のなかでももっとも博学なウァルロが、自分は何を語っているのか知らないのであるが、ユピテルと同一視している神である。すくなくともこのことに言及しておくべきであるとわたしは考えたのである。なぜかといえば、かれが自分の最高としている

神と同じであると見なした以上、かくも学識あるひとりの人間が、このような神が存在しないとか、つまらないものだとか考えることができなかったのだからである。最後に、哲学者たちのうちでもきわめて学識あるポルフュリオス(二)――かれはキリスト教徒たちにとって激しい敵対者であるが――が、この神は、かれが神々であると考える存在の神託によっても偉大な神であると認めているところの神である。

(一)「創世記」二二の一八。

(二) ポルフュリオス(二三三年から三〇四年頃)については、本書第七巻第二十五章参照。アウグスティヌスが「もっともすぐれた異教哲学者」とした。

第二十三章

ポルフュリオスによるキリストにかんする神々の託宣について

じっさい、ポルフュリオスは『神託からの哲学(一)』と称する書を著したのであって、それは哲学にかんすることがらの神的な解答と見られるものを記述し、まとめたものなのであるが、そのなかで述べているギリシア語からラテン語へと訳したかれ自身のことばを用いようとおもう。「ある男が自分の妻をキリスト教から呼びもどすにはどんな神を宥(なだ)めればよいか、アポロンにきいたところ、アポロンのことばはつぎのとおりであった」といっており、次いで、アポロン

のことばとされるつぎのような答えがつづくのである。「あなたは、不敬虔で汚れた妻の意識をよびもどすことよりも、水の上に着色された文字で書いたり、軽やかな羽を微風にひろげて大気中を飛ぶ鳥のようになることのほうが、ずっと容易であろう。かの女を虚しい迷妄のうちに残して好きなようにさせておくがいい。もっとも残忍な死をもって滅ぼされた死せる神への嘆きのうたをうたわせておくがいい。その神は、盛りの年齢に正しい裁判官たちの判決を受け、鉄鎖でしばられて滅ぼされたのだ」。

次いで、ポルフュリオスは、これらのことば――それは韻律のかたちを保ってはいないけれども――のあと、さらにつづけていっている。「アポロンはこれらの句においてキリスト教徒たちの矯正しがたい教えを示したのである。ユダヤ人たちのほうがキリスト教徒たちよりもいっそう神を受けいれているからである」。見るがよい。かれはユダヤ人たちが神を受けいれていると認めて、キリスト教徒たちよりもユダヤ人たちに優位を与えて、いかにキリストを揶揄しているか。ユダヤ人たちがあたかも正しい判決を下して、キリストがあの罰を受けるに値したのだ、とでもいいたげに、キリストは正しい裁判官たちによって殺されたというとき、ポルフュリオスはアポロンの句をこのように説明したのであった。

キリストについて、アポロンの偽りの予言者が何を語り、ポルフュリオスが何を信じたのか、あるいは、おそらく予言者は語らなかったのに、それを語ったのだとして虚構したものが何であったか、わたしは見たいのである。ポルフュリオスがどこまで首尾一貫しているか、あるいは、これらの神託をどこまでたがいに一致するようにしたのか、のちに見ることにしよう。こ

こでは、すくなくともかれは、いわば神の支持者としてのユダヤ人たちはキリストについて正しい判決を下し、キリストは最悪の死をもって責め苦を受けるべきであったと考えた、というのである。このようなわけで、ポルフュリオスはユダヤ人たちの神にこの証言を提示したのであるから、この神が「主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は断ち滅ぼされなければならない[二]」といわれるとき、かれはこれに耳を傾けるべきであった。

しかし、わたしたちはいっそう明白なことがらに言及することにしよう。そして、ユダヤ人たちの神の偉大さにかんするポルフュリオスのいうところをきくことにしよう。たとえば、「言（ことば）ないしは理性と法とは、いずれがよりすぐれたものであるか」とたずねたのにたいしてアポロンはそれに答えて、「これらの詩句でいった」といっている。ポルフュリオスはアポロンのその詩句を引用しているのであるが、そこから十分と見られるだけ取り出すとすればつぎのとおりである。「創造者にして万物にまさる王である神。その神を天はおののき、地も海も黄泉（よみ）の国の隠れた深処（ふかみ）も、もろもろの神霊たち自身もおそれる。それらのものの法とは聖別されたヘブライ人たちが大いにうやまう御父のことである[三]」。――ポルフュリオス自身が、自己の神たるアポロンのこの神託によって、ヘブライ人たちの神はもろもろの神霊たちでさえおそれおののくほど偉大であるといったのであった。それゆえ、わたしがおどろかされるのは、「他の神々に犠牲をささげる者は断ち滅ぼされなければならない」といっているのはこの神であるのに、ポルフュリオスは、他の神々に犠牲をささげて根絶されることをおそれもせず、またおののきもしなかった、ということである。

この哲学者はキリストについてよいこともいっているのである。そのときには、かれは、わたしたちがたったいま語ったような自分自身の侮辱のことばを忘れてしまっているかのようである。また、かれ自身の神々は、いわば眠りにあるときにはキリストについて悪しざまに語り、目覚めているときにはキリストが善き者であると認めて然るべき称賛をおくっているかのようである。——とにかく、ポルフュリオスは、何かおどろくべき、そして信じがたいことを公言するかのようにいうのである。「わたしのいわんとすることは、ある人びとにとってはたしかに意外なことのようにおもわれるであろう。すなわち、神々は、キリストがひじょうに敬虔な存在であったことを、また、キリストは不死なる存在となったことを告げたのだ。そして神々は、賛辞をもってキリストを記憶したのだ。ところが、神々は、キリスト教徒たちは汚れた者であり、はずかしめられた者、誤謬に捲き込まれた者である、といっているのである。そして、神々は、キリスト教徒たちに対するそのような多くの中傷を持ち出しているのである」。

そこで、ポルフュリオスは、神々がキリスト教徒を中傷していると見られる神託のいくつかを付け加えて、さらにつづけている。「ところで、キリストについて、かれが神であるのかどうかと訊ねた者たちに向かって女神ヘカテ(四)はこう答えた。『不死なる魂は、肉体を去ったあとも歩いていくということはあなたがたも知っているでしょう。しかし、知恵から切り離されたときには魂はつねに道に迷うのです。かの魂(キリストの魂)は最高に敬虔な男の魂に属しているのです。しかし、かれら(キリスト教徒たち)は真理から離れているのでその魂をあがめるのです』。この神託めいたことばを引用してのち、ポルフュリオスは自分自身の解釈を組み合わ

せていう。「このように、女神ヘカテは、キリストがもっとも敬虔な男であり、その魂は他の敬虔な者たちの魂と同じように、死後、しかるべく不死を与えられたのであるが、キリスト教徒たちは無知のゆえにこの魂を礼拝しているといったのだった。さらに、『それでは、なにゆえにかれは断罪されたのか』とたずねる者たちにたいして、この女神は神託によってつぎのように答えるのである。『じつに肉体は、その力を徐々に弱らせる苦しみにいつも曝されています。けれども、敬虔な者の魂は天上の住居に住まうのです。ところで、かの魂(キリスト)は他の魂にたいして致命的となってそれらを誤謬のなかへ捲き込んでしまいました。その他の魂とは、運命が、神々の贈りものを所有することも、不死なるユピテルにかんする知をもつこともゆるさなかった魂なのですが。——ですから、それらの魂は神々に憎まれたのです。なぜなら、それらは神を知ったり神々の贈り物を受けとったりするような運命に定められてはおらず、かの魂(キリスト)によって致命的な仕方で誤謬のなかへ捲き込まれてしまうということになったからです。しかし、すくなくともかれ自身(キリスト)は敬虔でした。それで、ほかの敬虔な者たちのように天へ移されたわけです。ですから、あなたがたはかれを非難するのではなく、人びとの愚かさを憐れむべきなのです。その愚かさによって、めくら滅法の危険がかれらを容易におそうことになったのです』」。

これらの神託がキリスト教徒たちに対してはげしく敵対する人間の考案であるか、それともそのような意図によって考えられた不浄なダエモンらの返答である、ということを悟らぬほど頭の鈍い者がだれかいるであろうか。すなわち、キリストを称賛するのはなぜかといえば、キ

リスト教徒についての非難が真実なものとして信用されて、そのようにすれば、もしも可能ならば、各人がキリスト教徒となるための永遠の救いの道を切断するであろうからである。たしかにダエモンらは、自分たちのキリストの称賛が信じられるなら、それはキリスト教徒についての非難も信じられるというかぎりにおいてであって、この自分たちの有害で勝手気ままな策略は別段矛盾していないとおもっているのである。これは、人がかれらの称賛と非難の両方を信じるとき、そのような者がキリストの称賛者とはなってもキリスト教徒になることをのぞまないように仕向けるためであって、そのようにすることによって、キリストはその者によって称賛されるけれども、しかしキリストがその者をダエモンらの支配から解放する者とはならないということになるわけである。

ことにこのことは、ダエモンらによって公言されているようなキリストを信じる者はだれも、真のキリスト教徒とはならずにフォティヌス(五)の異端者となるような仕方でキリストを称賛するがゆえに、ほんとうである。それはキリストをただ人間としてのみ認めて、神としても認めようとしない者である。したがって、そのような者はキリストによって救われることもできないし、虚言を吐くダエモンらの罠を逃れることも解くこともできない。

しかし、わたしたちはキリストについてのアポロンの中傷も女神ヘカテの称賛も認めることはできない。じっさい、アポロンは、キリストが不義なる者であったと信じようとするかのごとく、正しい判断をもつ裁判官によって死を課せられたというのである。ヘカテのほうは、キリストがもっとも敬虔な人間であったが、たんなる人間にすぎないというのである。

しかしながら、これらいずれもその意図は一つである。つまり人間がキリスト教徒となることをのぞまないのである。というのは、人びとは、キリスト教徒でなかったなら、神々の権力から抜きとられないからである。しかし、わが哲学者は、あるいはむしろキリスト教徒たちに反対してそのような神託を信じる者は、何よりもまず、できることなら、キリストにかんしてヘカテとアポロンとのあいだで非難か称賛かのいずれかにおいて一つとなるよう、一致させるべきである。それがうまくいったとしても、にもかかわらずわたしたちは偽りのダエモンらを避けるであろう。かれらがキリストの中傷者であっても称賛者であっても。しかし、かれらの神と女神とはキリストについてたがいに意見を異にし、前者は非難し、後者は称賛するのであるから、人びとは、みずから正しく考えるとき、キリスト教徒を悪しざまにいう者たちをたしかに信じはしないであろう。

じっさいに、ポルフュリオスまたは女神ヘカテがキリストを称賛しながらも、一方で、キリストは(他の魂にとって)致命的となってキリスト教徒たちを誤謬のなかへ捲き込んだというとき、ポルフュリオスは同時にその誤謬の原因を自分が考えているとおりに明らかにしている。わたしはその原因をかれ自身のことばによって説明しようとおもうが、それに先立ってまず問いたいのである。もしもキリストが致命的な仕方でキリスト教徒たちを誤謬のなかへ捲き込んでしまったのなら、キリストはみずから意志してそうしたのであるか、それとも、知らずにそうしたのであるか、と。もしもみずから意志してそうしたのなら、キリストはいかにして正しい存在でありうるであろうか。もしも知らずにそうしたのなら、キリストはいかにして至福な

存在でありうるであろうか。――けれども、わたしたちはいまやその誤謬の原因に耳を傾けよう。かれはいう。「世界のある部分に、悪しきダエモンらの勢力のもとに服属したきわめて小さな地上の霊が存在する。ヘブライ人の賢者たちは――あなたがアポロンの神託からきいたとおり、このイエスもまたそのひとりであった。したがって、ヘブライ人たちは――信心深い人びとをこの極悪なダエモンらやより小さい霊たちから差し止め、むしろ天上の神々を尊敬することを、しかし、それ以上に父である神を尊敬することを指示したのである」。「しかし、このことを」とかれはつづけていう。「神々も教えたのであった。そしてわたしたちもさきのところで、かれら（ヘブライ人たち）がどのようにして、心が神に向かうように教えさとし、かつ、到る処で神を拝するように命じたか、示したのである。しかしながら、運命が、神々の贈り物を所有することも不死なるユピテルにかんする知をもつこともゆるさなかった無学で不敬虔な本性は、神々や霊感をもつ人びとのことばに耳を傾けずに、すべての神々を拒絶したのであるが、しかし、禁じられたこれらダエモンらを憎むことをせず、かえってダエモンらを尊敬さえしたのである。神を拝するごとくに見せかけながら、かれらは、それによってのみ神があがめられる行為をおこなわないのである。じつに神はすべてのものの御父として、たしかに何人をも必要とはしないが、わたしたちが正義や貞潔、その他の徳によって神をあがめ、神に倣い、神を探究することによってわたしたちの生活そのものを神への祈りとなすことは、わたしたちにとって幸いなことである。というのは、神を探究することはわたしたちを浄め、神に倣うことは神自身への愛をおこすことによってわたしたちを神となすからである」。

たしかにポルフュリオスは、父である神をよく公言したのであった。そして、どのような行状をもってその神を礼拝すべきであるか、よく述べたのであった。ヘブライ人たちの預言的な諸書は、聖徒たちの生が指示されたり称賛されたりするとき、そのような訓戒で満ちているのである。けれども、ことキリスト教徒にかんしては、かれが謬見に陥り、中傷しているのは、かれが神々と見なしているダエモンらの欲するだけのものをおこなっているのである。――それはあたかも、神々をうやまう行為として劇場や神殿で演じられることがらがどれほど淫らで、どれほど破廉恥なものであるか、おもい出すことがだれにとっても困難なことであるかのようである。あるいは、教会では何が読まれたり語られたりしているのか、また、何が聞かれたり、真実の神に何がささげられたりしているのか注目すること、そして、ここからして、道徳がどこに建設され、どこに倒壊するのか理解すること、これらのことがだれにとっても困難なことであるかのようである。しかし、ヘブライ人たちによって崇拝が禁じられたダエモンらを、キリスト教徒たちは憎むかわりに尊敬さえしたというような、いわれのないまったく明らかな偽りをポルフュリオスに語ったり吹き込んだりしたのは、悪魔的な霊でなければだれであろうか。

けれども、ヘブライ人の賢者たちが拝したあの神は、天上の聖なる天使たちや神の能天使たち(六)にたいしても、犠牲をささげることを禁じられたのであった。それは、わたしたちがこの過ぎゆく遍歴の旅にあるときに、もっとも祝福された同胞市民としてうやまい、愛する天使たちであり能天使たちである。神はこのことを、ヘブライ人の民にお与えになったご自身の法において大きな叫び声で禁じられるのである。威嚇をおびた重々しい調子で「神々に犠牲をささげ

る者は断ち滅ぼされなければならない」(七)といわれるのである。

だれかが、この戒めは極悪のダエモンらやポルフュリオスがきわめて小さいとかより小さい霊とよんでいる地上の霊に犠牲をささげることを禁じているのだと考えることのないように(というのは、聖なる書ではこれらのものも異教徒の「神々」――ヘブライ人たちの「神々」ではなく――とよばれているからであって、これは、七十人の翻訳者たちが『詩篇』のなかで「もろもろの国民の神々はすべてダエモンである」(八)といって明らかにしている)、――それゆえ、だれかが、ダエモンらには犠牲が禁じられているのに、天上のすべての、あるいはいくらかの存在にはそれがゆるされているのだ、と考えることのないように、このことばにただちに「主のほか」と加えているのである。これは「主にたいしてのみ」ということである。このばあい、もしかして「主にたいしてのみ(ドミノ・ソリ)」(九)といっているところにおいて「主なる太陽(ドミヌス・ソル)」(一〇)の意味であるとおもい込み、これに犠牲がささげられるべきであると考えることがあってはならない。これがそのように解すべきでないことは、ギリシア語の書によってまったく容易にわかるのである。(一一)

したがって、このようにすぐれた哲学者でさえもヘブライ人たちの神にそれほどの重要な証言をおこなっているのであって、その神が、みずからのヘブライ人の民にたいしてヘブライ語で書かれた法をお与えになったのであった。その法は、不明瞭なものでもなく、また理解されないものでもない。すでに、すべての国民(くにたみ)のあいだにひろく知られた法であり、この法のうちに、「主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は断ち滅ぼされなければならない」と記されて

いるのである。神のこの法や神の預言者たちのうちに、このことがらにかんする多くの説明を求める必要が何かあるであろうか。けっして求める必要はないであろう。というのは、これらは隠されたものでもなければ、また稀でもないからである。けれども、明白で多くの証言が集収されてわたしのこの議論のうちに用いられることが必要なのであって、その議論によって、真実にして最高の神が、ご自身のほか他の何ものにたいしても犠牲のささげられることを欲せられなかったということが、日の光よりも明らかになるためである。

　見るがよい。ここに短かいけれども重々しい仕方で、そして威嚇しているようではあるが真実に語られた神の一つのことばが存するのである。これは、かれら(異教徒たち)のうちでももっとも学識のある者がかくも際立った仕方で表明しているのであって、このことばは傾聴され、おそれられ、そして遂行されねばならないのである。これに従わぬ者が滅ぼされてしまうような結果とならぬために。――「主のほか、他の神々に犠牲をささげる者は断ち滅ぼされなければならない」。これは、神がだれかの所有物を必要としておられるためではなく、わたしたちが神のものとなることはわたしたちにとって有益だからである。じっさい、この神にたいして、ヘブライ人たちの聖なる書において(詩人が)うたっている。「わたしは主にいう、『あなたはわたしの主、あなたはわたしのもっている善きものの何ものをも必要とされないからです[一二]』」。

　しかし、この神の最良の、そしてもっとも光り輝く犠牲とは、わたしたち自身、すなわち、その神の国である。この犠牲の神秘を、わたしたちは、信仰深い者にはよく知られているわたしたちの奉献によって祝うのであって、そのことはさきの諸巻で述べたとおりである[一三]。すなわ

ち、ユダヤ人たちが来たるべきものの影としてささげたところのいけにえの動物は中止されるであろうこと、そして、諸国の民は日の昇るところから日の沈むところに至るまで一つの犠牲をささげるであろうこと、これらのことがヘブライ人の預言者たちを通じて神的なお告げをもって声高く叫ばれていたのであって、わたしたちは、いまやそれが成っていることを知っているのである。わたしはこれらの神託のうち、十分と見られるだけ、いくつかを取り出して、すでにこの著作にひろく置いたのであった。

それゆえに、唯一にして最高であられる神が、ご自身のほか他の何ものにも犠牲をささげることのないように、ご自身の恩恵によって従順な国に命じられ、そしてそのことによって、その国に属し、かつその神に従順に従うすべての人間にあっては魂が身体に命令し、また理性が服従の規則正しい秩序によって悪徳を確固として支配すること。ひとりの正しい人間が愛（ディレクティオ）によってはたらく信仰にもとづいて生きるように、[一四] 正しい者たちの集団や人民は愛によって――それは、神を愛すべきであるように愛し、隣人を自分自身のように愛する愛によって――はたらく信仰にもとづいて生きること。このような正義が見いだされないところには、たしかに、法の同意、および利害を共通することにより結合せられた人びとの集団は存しないのである。もしもこのようなことが存しないなら、人民についてのこの定義が真実であるとするとき、けっして人民は存しない。それゆえに国家も存しないわけであって、それというのは、人民そのものが存在しないところには、「人民の福利（レス・ポプリ）」[一五] は存在しないからである。

（一）　*ἐκ λογίων φιλοσοφίας.*　断片が残存している。

（二）「出エジプト記」二二の二〇。
（三）ラクタンティウス(三世紀の護教家)がその書のなかでこのギリシア語による引用を用いている(『神の怒りについて』二の三一二)。
（四）ヘシオドスによれば、この女神ヘカテは、人間に、あらゆる富、雄弁、戦いや競技における勝利、漁業、家畜の飼育、育児など、あらゆる面での幸せを与え、ゼウスもかの女を尊んだとされる。しかし、のちに地下の冥界と関係づけられて、呪法の女神となったと伝えられる。
（五）フォティヌスはシルミウムの司教であったが、三五一年、司教の職からしりぞけられた。かれは三位一体説を否定した一種のサベリウス主義の説を説いたものと見られる。
（六）能天使(virtutes Dei)は天上的位階の一つである。本書第八巻第二十四章参照。
（七）「出エジプト記」二二の二〇。
（八）「詩篇」九六の五(七十人訳)。
（九）nisi Domino soli.
（一〇）Dominus sol(アポロン神)。
（一一）*κύρῳ μόνῳ.*
（一二）「詩篇」一六の二。
（一三）本書第十巻第五、第六章。
（一四）「ガラテヤ人への手紙」五の六。
（一五）res populi(本巻第二十一章)。

第二十四章

人民および国家にかんするいまひとつの定義について

けれども、人民についてはこれとは別な仕方での定義づけがなされるであろう。たとえば、「人民とは、その愛の対象を共通とする和合によって結合された理性的な人間の多数の集団である」といわれるかもしれない。そのばあい、それぞれの人民がどのような人民であるかを知るには、かれらの愛する対象が何であるかをよく見なければならない。しかしながら、その対象がどのようなものであっても、それが獣たちの多くの集まりではなく、理性的な被造物の集団であり、そして、その愛の対象を共通とする和合によって結合されているのなら、それが「人民」という名でよばれるとしても不当ではないであろう。たしかに、和合の対象がよりすぐれたものであればあるだけ、その人民はよりすぐれたものであり、その対象がより下劣なものであればあるだけ、その人民はより低劣なものである。わたしたちのこの定義にしたがって、ローマの人民は人民であり、その福利は疑いもなく国家である。

ところで、その人民は、その初期の諸時代には何を愛したのであったか。そして、それにつづく諸時代には何を愛したのであったか。いかなる道徳によって、はなはだしい血をもって血塗られた反乱へ、そしてそこからして社会や市民のあいだでの内乱へと至ったか。それらは、ある意味で、人民の健康とでもいうべき和合そのものを引き裂き、かつ頽落させたのであった。

歴史はこれらのことを証言しており、それにかんしては、わたしたちは先行する諸巻において取り扱ったことであった。とはいえ、それだからといってわたしは、それが人民ではなかったとか、その福利が国家でなかったとかいうつもりはない。それがどのような集団であったとしても、愛の対象を共通とする和合によって結ばれた理性的な人間の多数による集団がそこに存するかぎり——。

しかし、わたしがこの人民やこの国家について述べたところのことを、アテナイ人や他のいずれのギリシア人のそれについても、あるいはアッシリア人の以前のバビロンのそれについても[(一)]——かれらが、その規模の大小にかかわらず国家のうちに支配権をもっていたとき——、そして他のどのような民族のそれについても述べたのであり、かつ考えたのであると理解されたい。じっさい、一般に不敬虔な者たちの国は正義の真理を欠いているからであって、神はその国にたいしては、みずからに従順である者たちに命じられるようには命じられないのである。それは、ご自身のほか他の何ものにたいしても犠牲をささげることのないように、そして、その者にあっては魂が身体を、理性が悪徳を、正しくかつ忠実に支配するように命じられるものである。

（一）　ローマは第二のバビロンとして示された（第十八巻第二十二章）。

第二十五章

真の宗教のないところに真の徳はありえない

魂が身体に、理性が悪徳に、称賛されるような仕方で命令しているように見えても、もしも魂や理性自身が、神自身に仕えるべきであると神みずからが教えておられる仕方で神に仕えていないなら、それらはけっして身体や悪徳に正しく命令しているわけではないのである。じっさい、心が真実の神について無知で、神の命令に服従せず、はなはだしく邪悪で堕落したダエモンらに身売りしているなら、身体や悪徳のどのような女主人でありえようか。それゆえに、徳をもっていると自分にはおもわれて、その徳によって身体や悪徳にたいして命令するとしても、その徳が神以外の何らかのものを対象としてそれを獲得し保持するためにかかわるなら、その徳は徳であるよりもむしろまさに悪徳でさえある。

すなわち、ある人びとによって、もろもろの徳はそれ自身にのみ関係づけられ他の目的のために求められるのではないときに真正で高貴なものと見なされているのではあるが、そのときでさえ、それらの徳は膨れあがって高慢にされているのであって、それゆえに、それらは徳というよりも悪徳と判断されねばならないのである。というのは、身体を生気づけるところのものは、肉からくるのではなく、肉をこえる何ものかであるように、人間の生を至福となすところのものは、人間自身からくるのではなく、人間をこえた何ものかであるからである。(二) そしてこのことは、人間についてのみ真実であるだけでなく、天上のどのような主権や能力についても真実なのである。

（一）天上の主権や能力については、さきに第二十三章で触れられた（他に第八巻第二十四章参照）。

第二十六章

神の民は、神から遠ざけられた民の平和をも用いることについて

それゆえに、肉の生命は魂であるのと同様、人間にとっての幸福な生命は神である。それについては、ヘブライ人たちの聖なる書が「神を主とする民はさいわいです」（一）といっているのである。したがって、この神から遠ざけられた民は不幸であらざるをえない。とはいえ、そのような民も、否定されないそれ自身のある種の平和を愛してはいるのである。しかし、それは終局において所有することのない平和である。なぜなら、終局の以前に、それを善き仕方で用いないからである。しかしながら、この民がこの世において、しばらくのあいだその平和を所有していることは、わたしたちにとっても重要である。というのは、二つの国が混在しているあいだは、わたしたちもバビロンの平和を用いるからである。——神の民は、信仰によってバビロンから自由にされてはいるけれども、しばらくのあいだ、バビロンのもとで遍歴の旅をつづけるのである。

このようなわけで、使徒は、王たちや地位の高い人びとのためにも祈るよう、教会に促し、そしてそれに加えて「それは、真の敬虔と愛とをもって、平安で静穏な生をおくるためであ

る」[二]といっているのである。預言者エレミヤも、古い神の民に捕囚のおこることを告げ、忍耐づよく神に仕える者としてバビロンへ赴くよう神の霊感によって命じたとき、かれ自身の忠告として、バビロンのためにも祈りがささげられるべきことを付け加えていっている。「なぜなら、その都市（バビロン）に平安があるなら、あなたがたも平安を得るからである」[三]。――これは、善き者にも悪しき者にも共通するしばらくの時間的な平和であることはいうまでもない。

(一)「詩篇」一四四の一五。
(二)「テモテへの第一の手紙」二の二。
(三)「エレミヤ書」二九の七。

第二十七章

この世において完全な仕方では経験されない神の民の平和について

ところで、わたしたちに固有である平和は、現世においては信仰によって神と共に存在するのであり、永遠においては直視によって神と共に存在するのである。[一]けれども、この世でのいまの平和は、それがすべての人びとに共通のものであっても、あるいは、わたしたち（神に仕える者）に固有のものであっても、幸福のよろこびとなるような平和であるよりもむしろ悲惨にたいする慰めとなるような平和である。わたしたちの正義そのものも、それが関連づ

けられるのは真の善の究極にたいしてであるからには、真実の正義ではあるが、しかしなお、それは徳の完成においてよりもむしろ罪の赦しにおいて成り立つような正義である。

この世において遍歴の旅をつづける神の国の全体の祈りがこのことの証人となっている。じっさい、この国の全体が、これを構成するすべての者の口をとおして神に向かって叫んでいるからである。「わたしたちに負い目のある者をゆるすように、わたしたちの負い目をもおゆるしください[二]」。この祈りは、「信仰もおこないを伴わないなら死んだものである」といわれるような者たちのためには効果をもたない。ただ、「愛（ディレクティオ）によって信仰がはたらく[三]」といわれるような者たちのために効果をもっている。

このような祈りは正しい人にとっては欠くことができない。なぜなら、理性は、神に従ってはいるけれども、この可死的な境位にあっては、そして「魂に重荷を課す朽ちる肉体[四]」にあっては、完全な仕方で悪徳を支配することがないからである。

じっさい、理性はもろもろの悪徳に対して支配力をもっているけれども、争いなくしてはけっして支配することはない。ひとがたとえ悪徳に対してよくたたかってそのような敵を征圧し、抑制して支配しているときでさえ、この弱さの状態のうちに何ものかがひそかに忍び入り、そこからして、容易な行動においてではなくても、すくなくとも唇を滑って出ることばやつかの間の想念において罪を犯すことがあるのである。したがって、理性がもろもろの悪徳を支配しているかぎり、完全な平和というものは存在しない。なぜなら、抵抗するこれらの悪徳は、危険を伴うたたかいによって征圧されるからであり、また、打ち負かされたそれらのものにたい

して静安な閑暇をもってよろこびの声をあげることはできず、なおも不安を胎んだ支配を迫られているからである。

このようなわけで、わたしたちは試錬のなかにいるのであって、これらすべてについて神のことばのうちに簡潔に「地上の人間の生は試錬ではないか」(五)といわれているのである。そのような試錬において、「わたしたちの負い目をもおゆるしください」と神に向かっていう必要のないような生をみずからおくっていると考える者がいるなら、それはひじょうな自負心をもった者でなければだれであろうか。かれは真実に偉大な人間ではなく、高慢によって膨れあがり、得意になっている人間である。かれに対しては、へりくだる者に恵みをお与えになるかたは正義をもって抗(あらが)われることであろう。それゆえに「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」(六)と記されている。

したがって、この世にあっては、各人のうちに正義が存するのはこのようなときである。——すなわち、神が神に従順な人間を支配され、精神が身体を支配し、理性がもろもろの悪徳を、それらが謀叛をおこして理性を打ち負かしたり反抗したりすることがあっても、支配し、そしてまた、もろもろの善行のための恩恵と過ちのための赦しとが神ご自身から願い求められて、与えられた善きものにたいする感謝の行為が神にささげられるときである。

しかしながら、この正義がそれへと関連づけられ、それを得るために保持されるあの終局の平和においては、わたしたちの本性は不死性と不朽性とをもって癒されて、もはや悪徳をもつこともなく、わたしたちのだれも自分自身や他者に反抗してたたかうこともないであろうから、

理性が悪徳を支配する必要もないであろう。悪徳は存在せず、神が人間に命じられ、精神が身体に命令するであろう。この服従の状態における甘美さと幸福とは生きることと支配することとの幸福に相即していることであろう。ここでは、すべての者においても各人においてもこの状態は永遠となり、永遠性は確実なものとされるのである。したがって、この至福の平和とこの平和の至福とが最高の善となるであろう。

（一）「わたしたちは見えるものによらないで、信仰によって歩いている」（「コリント人への第二の手紙」五の七）。
（二）「マタイによる福音書」六の一二。
（三）「ガラテヤ人への手紙」五の六。
（四）「知恵の書」九の一五。
（五）「ヨブ記」七の一。本書第十九巻第八章参照。
（六）「ヤコブの手紙」四の六、「ペテロ第一の手紙」五の五。

第二十八章

不敬虔な者の終わりには何があるか

これに反して、この神の国に属さない者たちの悲惨は永遠につづくことであろう。これは

「第二の死（モルス・セクンダ）」(一)ともよばれるものである。それというのは、この状態にあって、魂は、神の生命から離れ去ったときには、生きているということはできず、身体も、永遠の苦しみに服しているときには、生きているということはできないからである。それゆえに、この「第二の死」は死によって終わりに至りえないがゆえに、いっそう耐えがたいものである。けれども、悲惨が浄福の反対であり、死が生の反対であるように、争闘は明らかに平和の反対であるから、そこで当然つぎのように問われるであろう。——善き者たちの終極の状態にはかの平和がほめたたえられ告げ知らされているのに対応して、逆に、悪しき者たちの終極にはどのような争闘があると解されるのであるか、と。

しかし、このように問う人は、争闘においては有害で破滅的なものがいったい何なのか、注意すべきであろう。それは、たがいのあいだの対立と衝突以外の何ものでもないことを知るであろう。したがって、意志が情動に対立し、情動が意志に対立して、そのために、それらのものの敵意が、いずれかの側の勝利によっても終結されないような争闘、——そして、苦痛の力が身体の本性そのものと争って、いずれの側も他方に屈服することのないような争闘、——このような争闘ほど深刻で苦しみに満ちたものが考えられるであろうか。

というのは、この世においては、そのような争いがおこるときには、苦しみが勝って死が感覚を消去するか、あるいは本性が苦しみを征服して健康がそれを消去するかである。しかし、かの世においては苦しみは持続して人を衰弱させ、本性は保ちつづけて感覚する。というのは、罰が果てることのないために、苦しみも感覚も尽き果てることはないからである。さて、これ

らが、もろもろの善と悪との究極である。わたしたちは善の究極を求めるべきであり、悪の究極を避けるべきである。善き者が前者へ、悪しき者が後者へ移っていくのは審判によってであるから、この審判について、神がゆるしてくださるかぎり、わたしはつづく巻において論じようとおもう。

（一） mors secunda. 本書第十三巻第八章、第二十巻第六章、第十四章、第二十一巻第八章参照。

第二十巻

第一章

神はつねに裁かれるのであるが、とくにこの巻の主題とされるべき最後の審判について

わたしたちは、神のゆるしを得て、神の最後の審きの日について語ろうとしている。そして、不敬虔な人びとや不信仰な人びとに相対してそれを擁護しようとするのである。したがって、わたしはまず、いわば建築物の基礎に当たるものとして、神から与えられた証言を置かなければならない。その証言を信じようとはしない人びとは、人間の考え出した虚偽と欺瞞の小賢しい理屈をもってそれに反対しようと努め、そのため、聖なる書から引用される証言が示しているところのことが何か別のことを意味しているのだと主張したり、あるいは、それらはすべて神の霊によって語られたものであることを否定しようとするのである。じっさい、わたしのおもうのに、それらの証言を、それが語られているとおりに理解して、それらが聖なる魂を媒介

としていと高く真実であられる神によって語られたと信じるときには、だれひとりとしてそれを承認したり同意したりしない者はいないからである。もちろん、それを認めて公言することもあろう。あるいは、何らかの失陥ゆえに認めることに当惑を感じたり、恐れたりすることもあろう。あるいはむしろ、狂気にも似た頑固さをもって虚偽であると知っていたり信じていたりするところのことを精一杯の議論を傾けて(真実であると知っていたり信じていたりしているところのことに反対して)擁護しようと骨折ることもあろう。

そこで、キリストが生ける者と死せる者とを審くために天から来られるであろうということは、真実の神のすべての教会によって告白され宣言されているのであって、これをわたしたちは、神の審きの最後の日、終わりの時とよんでいる。というのは、この審判がどれだけの日にわたるものであるか、確実でないからである。しかし、聖書を読む者ならだれでも、それがいかにぞんざいな仕方で読むのであっても、これらの書の習慣によって、「時」のかわりによく「日」が用いられるということを知らない者はない。

ところで、神の審判の日について語るとき、わたしたちは「最後の」とか「終わりの」ということばを付け加えるのであるが、そのわけは、神はいまも審いておられ、また、人類のはじめから、最初の人間たちを重大な罪を犯した者として楽園から追放し、生命の樹から去らせられたときから審いてこられたからである。そればかりか、それに先立って「罪を犯した天使たちをゆるしてはおかなかった(一)」ときも、神は疑いもなく審きを下されたのであった。その天使たちの頭はみずからを破滅へ追い込んで、妬みから人を害したのである。天空の大気中のダエ

モンらの生および地上の人間の生が、この上もなく悲惨で、誤謬と困窮に満ち満ちているのも、神の深く公正な審きによることである。(二)

しかしながら、たとえだれも罪を犯さなかったとしても、神がすべての理性的被造物を浄福のうちに保たれるのは、それらのものが自分の主として神に堅くよりすがるとき、ご自身の善にして正しい審きによってのみなされるのである。神はまた、ダエモンや人間の種属を全体的に審いて、その最初の罪にたいする報いとしてかれらを悲惨なものとされただけでなく、かれらの意志の決定力によっておこなわれるそれぞれの固有の行為も審かれるのである。

ダエモンらは、自分たちが苦しめられぬよう乞い求めるのであるが、(三)かれらがそれを免れるとしても、それぞれの行為の邪悪さにしたがって苦しめられるとしても、いずれにしても正義なくしてはなされることはない。人間も、その行為ゆえに、この世においてか死後においてか、ときには公然と、たいていはひそやかに罰を受けるのである。もっとも、いかなる人間も神の助力によって支えられなければ正しくおこなうことはなく、いかなるダエモンもいかなる人間も、神のまったき正義の審きによってゆるされぬかぎり、不正におこなうこともない。

すなわち、使徒が「神には不正はない」(四)と語っているとおりである。また、別のところでかれが「神のさばきはきわめがたく、その道は測りがたい」(五)といっているとおりである。したがって、わたしはこの書において、神がゆるしてくださるかぎり、審きについて論じようとおもう。その審きとは、あの最初の(ダエモンや人間の)審きのことでもなく、また、この中間の過程における審きのことでもない。キリストが生ける者と死せる者とを審くために天から来られ

るときの最後の審きのことである。この日は、本来の意味で「審きの日」とよばれているのである。その日には、なにゆえにその不正な者がしあわせで、この正しい者が不幸であるのか、と問うような無知な不平のための余地はないからである。じつに、このときには、ただすべての善き者たちの、そしてただ善き者たちだけの真実で充全なる幸福が現れ、ただすべての悪しき者たちの、そしてただ悪しき者たちだけの最大の不幸が現れるであろう。

(一) 「ペテロの第二の手紙」二の四。
(二) 本書第八巻第十四章参照。
(三) 「マタイによる福音書」八の二九参照。
(四) 「ローマ人への手紙」九の一四。
(五) 同上、一一の三三。

第二章

この世において人間はさまざまな条件のもとにあるけれども、神の測りがたい審きが欠けているわけではない

しかしながら、この世においてはわたしたちは、善き者でさえも耐えるもろもろの悪を平静な心で甘受することを、そして悪しき者でさえ手に入れるもろもろの善を重く見ないことを学

ぶのである。このことによって、神の正義が明らかでない事態にあっても、神から与えられる教えは健やかさのために有益となるのである。じっさい、わたしたちはつぎのような事態が神のどのような決定によるものであるか、知らないからである。――この善良な者が貧しくあるのに、あの邪まな者が富んでいるのはなぜか。その堕落した習慣が悲嘆によって当然苦しんでもよいとおもわれるようなこの者がよろこんでいて、その称賛に値する生が当然よろこんでいてもよいと確信するようなあの者が悲しむのはなぜか。潔白な者は罰せられないというだけでなく、裁判官の不当な押しつけを受けたり虚偽の証言によって圧迫されて法廷から立ち去るのに、それとは逆に、その反対側の犯罪者のほうが罰を受けないというだけでなく、自由にされて踊りまわるのはなぜか。

不敬虔な者がこの上もなく元気であるのに、敬虔な者が弱さにやつれるのはなぜか。若者が追剝をはたらいて元気いっぱいであるのに、ことばで人を傷つけることもできない幼児がさまざまな病気の恐ろしい力で悩まされるのはなぜか。人間的な用件に役立つ人が若死によってこの世から奪い去られ、生れるべきでなかったとおもわれるような人がふつう以上に長生きをするのはなぜか。悪事に満ちた者が高い栄誉にあげられ、非難されるところのない他の者が世に知られないままに隠されているのはなぜか。このような他の多くの例のすべてを、だれが列挙したり数えあげたりできるであろうか。

もしもかかる例が、まったく不合理ではあっても、一貫性をもっていて、この世の生においては（それについては聖なる詩集に「人は虚しいもののごとくになり、その日は過ぎゆく影に

ひとしい(一)」と語られている)、悪しき者だけがこの世的な善を所有し、この世的な禍悪を蒙るのはもっぱら善き者だけに限られているということであれば、いま述べたことは、神の正しい――というよりはむしろ恵み深い――審きへと帰せられうるであろう。

ひとを幸福にする永遠の浄福を得ることのできないであろう人びとは、その邪悪さの返報として一時的な利益によって惑わされるか、そうでなければ神のあわれみによってそれらのものから慰めを受けるであろう。他方、永遠の責め苦を蒙ることのないであろう人びとは、それがどんな罪過であれ、また、どのような程度のものであれ、犯したことの報いとしての一時的な不幸を蒙るか、そうでなければ、かれらの徳を完成へと導くため、それらによって鍛えられるであろう。

しかしながら、事実上、悪しき状況にある善き人びとと順境にある邪まな人びととが存在するのであって、このことは不当なこととおもわれるのであるが、しかし、多くのばあい、邪まな人びとは不幸となり、善き人びとは幸運を得ることもほんとうである。だから、神の審きはいよいよ窮めがたく、その道はいよいよ測りがたいのである(二)。このようなわけで、神のいかなる審きによってこれらのことがおこるのか、また、おこることが許容されるのか、わたしたちは知らないのである。というのは、神のもとには、最高のちから、最高の知恵、最高の正義があり、いかなる弱さも、いかなる無思慮も、いかなる不正義もないからである。とはいえ、わたしたちが見るように、善き人びとにも悪しき人びとにも共通のこれらのものを――それが善であっても悪であっても――重んじることをせず、そのかわりに、善き人びとに固有の善きも

のを求め、邪まな人びとに固有の悪しきものを極力避けることを学ぶのはわたしたちの健やかさにとって益あることである。

けれども、本来の意味で「審きの日」とよばれたり、ときには「主の日」とよばれる時点の、神のあの審きにわたしたちが到達したときには、神の審きがこの上もなく明らかとなるであろう。その日に下されるすべての審きのみならず、はじめの時から下されたすべての審きやそれ以後のかの審きの日に至るまでに下されるすべての審きも。そのときにはまた、神のどのような正しい審きによっていまはひじょうに多くの――じっさい、ほとんどすべての――神の正しい審きが死すべき人間の感覚や精神にとって隠されているというようなことがおこるのか、明白にされるであろう。しかし、すくなくともこの問題にかんしては、ひとつのことは敬虔な者の信仰にとって隠されているわけではないのである。それはすなわち、（神の審きによって）隠されているところのものが正しいということである。

（一）「詩篇」一四四の四。
（二）「ローマ人への手紙」一一の三三。

第三章

この世においては善き者にも悪しき者にも共通のことがらにかんするソロモンのことばについて

エルサレムにあって支配していたソロモンは、よく知られているように、イスラエルのもっとも賢明な王であった。『伝道の書』とよばれるかれの書は、ユダヤ人によって聖書の正典のうちに入れられているのであるが、つぎのようにはじめられている。「『空の空』と伝道者はいった。『空の空、いっさいは空である。人が日の下で労するすべての労働において、何の豊かさがあるか』(一)」。

かれはこのことばにつづけて、この世の生の労苦と誤りについて、到来しては消え去る時節の移りゆきについて、わたしたちに想いおこさせている。そこには何ものも堅固でなく、何ものも確実に保持されないのである。日の下でのそれらのものの空しさのなかで、かれはいくらかつぎのことも嘆くのである。光の豊かさが闇にまさるように、知恵の豊かさは愚かさにまさり、また、知者の眼はその者の頭にあるが、愚かな者は闇のなかをあちこち歩くのである(二)。にもかかわらず、日の下でいとなまれるこの世の生においては、同じ一つの運命がすべての者に等しく降りかかるのだ。――ソロモンは明らかに善き者にも悪しき者にも共通であると見られる不幸を示しているのである。

かれはまた、善き者たちが、あたかも悪しき者であるかのごとくにもろもろの不幸を蒙り、悪しき者たちが、あたかも善き者であるかのごとくにもろもろの善を得るといって、つぎのように語るのである。「地の上になされるものは空しさである。なぜなら、不敬虔な者にたいしてなされることがらが臨む正しい者があり、正しい者にたいしてなされることがらが臨む不敬虔な者があるからである。わたしはいう。これもまた空である、と」[三]。十分とおもわれるかぎりにおいてこのもっとも賢明な人物がこの書の全体を当てたこの空しさの状態において(そしてそれは、まちがいもなく、この太陽の下に空しさをもっている生を切望するためではなく、この太陽をつくられたかたの下での真理をもっている生を切望するためであった)、——それゆえに、この空しさの状態において、この同じ空しさにも似た人間がみずから消えていくのは、神の正しく公正な審きによるのではないであろうか。

しかしすくなくとも、人は自分の空しさの日々において、真理に抵抗するかそれに従うか、真の敬虔の分け前にあずかるのかどうか、ということはひじょうに重要な問題である。それが重要であるのは、この世の生のもろもろの善を得るためでもなければ、空虚のうちへと過ぎ去るもろもろの悪を避けるためでもないのであって、かえって、未来の審きのためなのである。その審きによって善き者には善が、悪しき者には悪が、終わりなく存続するであろうからである。最後にこの賢明な人(ソロモン)はつぎのようにいってこの書をしめくくっている。「神をおそれて、その命令をまもれ。これはすべての人のなすべきことである。この世でのすべての行為は、それが善であれ悪であれ、隠されていたことを審きへともたらされるからである」[四]。

これ以上に簡潔に、真実に、そして有益な仕方で何かいうことができるであろうか。かれはいう。「神をおそれて、その命令をまもれ。これはすべての人のなすべきことである」と。たしかに現実に存在をもつ者はだれでも、すなわち神の命令を守る者なのである。そのような者でないなら何ものでもないからである。それというのは、その人は空しさに似たものとしてとどまっていて、真理の似像につくり変えられることがないからである。「この世でのすべての行為は」——この世の生において人間によってなされるところのことは——「それが善であれ悪であれ、隠されていたことを神は審きへともたらされるからである」。すなわち、この世の生において軽視されるべきであると見られる者をも、したがって、まったく顧みられない者をもそのようになされるのである。神はかれをも見られて無視されない。審きを下されるとき、かれから目を逸らせられないのである。

(一)「伝道の書」一の二。
(二) 同上、二の一二以下参照。
(三) 同上、八の一四。
(四) 同上、一二の一三以下。

第四章

最後の審きにかんする新約聖書と旧約聖書の証言について

神の最後の審きについて、わたしが用いようと意図した聖なる書物からの証言は、まず新約の諸書から、次いで旧約の諸書から選ばれねばならない。というのは、旧約のほうが時間的にはより先ではあるけれども、重要性においては新約のほうが旧約よりも優位におかれねばならないからである。旧約は新約の先触れの役をもつのである。したがって、新約聖書が最初に引用され、それから旧約聖書がその証言を確かなものとするために用いられる。旧約には律法と預言とが含まれており、新約には福音の書と使徒の書が含まれている。――さて、使徒はいう。「律法をとおして罪の自覚が生じる。しかし、いまや神の義が、律法とは別に、しかも律法と預言者とによって明らかにされた。それは、イエス・キリストへの信仰による神の義であって、すべてを信じる人に与えられるものである(一)」。

神のこの義は新約に属しており、そしてそれは旧約の諸書から、すなわち律法と預言者とから証言を得ている。したがって、はじめにその事例そのものが引き出されねばならない。この順序が遵守されるべきことはキリスト・イエスご自身が示しておられるところであって、「神の王国のことを学んだ学者は、新しいものと古いものとをその宝庫から取り出す一家の主に似ている(二)」といっておられるのである。かれは「古いものと新しいもの」とはいわれなかったのであった。時間の順序よりも価値の順序のほうを遵守することを選ぶということをなさらなかったのなら、たしかにそのようにいわれたことであろう。

(一)「ローマ人への手紙」三の二〇以下。
(二)「マタイによる福音書」一三の五二。

第五章

この世の終わりにおける神の審きにかんする主のことば

そういうわけで、救い主ご自身が、その大いなる力の業(わざ)をはたらかれたのに、信じようとはしなかった国々をとがめられて、他の国々をその国々よりもすぐれたものとしていっておられる。「けれども、わたしはあなたがたにいう。審きの日には、ツロとシドンのほうがあなたがたよりもより容易に耐えるようにされるであろう」。そしてそのすこしあとのところで別の国々にむかっていっておられる。「まことにあなたがたにいう。審きの日には、ソドムの地のほうがあなたがたよりもより容易に耐えるようにされるであろう」(二)(ここで主は、審きの日が来ることをまったく明瞭に予告しておられるのである)。また、他の箇所でいわれる。「ニネベの人びとが、いまの代の人びとと共にさばきの場に立ち、その人びとを罪に定めるであろう。なぜなら、かれら(ニネベの人びと)はヨナの説教によって悔い改めたのだからである。そして見るがよい。ヨナにまさる者がここにいる。南の女王が、いまの代の人びとと共にさばきの場に立ち、その人びとを罪に定めるであろう。なぜなら、かの女はソロモンの知恵をきくために地の

果てからやって来たのだからである。そして見るがよい。ソロモンにまさる者がここにいる」[三]。この箇所から、わたしたちは二つのことがらを学ぶのである。すなわち、来たるべき審きがあるであろうということ、そして、それは死者の復活と共におこるであろうということ、である。主が、ニネベの人びとおよび南の女王のことについてそれを語られたとき、疑いもなく死者について語られたのであるが、しかし、すくなくとも死者たちは審きの日に「復活する」であろうと予告なさったのである。そして「その人びとを罪に定めるであろう」といわれたのは、かれら自身（ニネベの人びと）が審きを下すであろうという理由によるのではなく、この人びと（いまの代の人びと）がかれらと比較された結果、正当にも罪に定められるであろうという理由によるのである。

さらに、別なところで、善き人びとと悪しき人びととの現在における混在について、そしてそれらの人びとののちの分離――もちろん、それは審きの日におこるのであるが――について語られたとき、主は蒔かれた小麦とその上に蒔かれた毒麦についての譬を用いてご自身の弟子たちに説明されるのである。――「良い種を蒔く者は人の子である。畑は世界である。良い種というのは御国の子たちで、毒麦は悪しき者の子たちである。それを蒔いた敵は悪魔である。収穫は世の終わりであり、刈り手は御使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそれがおこるであろう。人の子はその御使たちをつかわし、躓きとなる石と悪しきことをおこなう者とをことごとく御国から取り集めて燃える炉に投げ入れるであろう。そこでは、泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。そのとき、義しい人たちは、かれら

の父の御国で太陽のように輝きわたるであろう。耳のある者はきくがよい」。(三)

ここでは、主はたしかに「審き」とか「審きの日」という用語を用いてはおられないけれども、それをことがら自体によっていっそう明瞭に表現されたのである。そして、それが世の終わりにおこるであろうことを予告されたのであった。

同じように主はその弟子たちにいわれる。「まことにあなたがたにいっておく。世が改まって人の子がその栄光の座につくときには、わたしに従ってきたあなたがたもまた、十二の座について イスラエルの十二の部族を審くであろう」。(四) このことばから、わたしたちは、イエスはその弟子たちと共に審かれるであろうということを学ぶのである。だからして、別なところでユダヤ人たちに向かって、「もしわたしがベルゼブルによって悪霊を追い出すとすれば、あなたがたに従う者たちはだれによって悪霊を追い出すのであろうか。だから、かれらがあなたがたを審く者となるだろう」(五) といわれたのである。弟子たちが十二の座につくであろうと主がいわれたからといって、わたしたちは、ただ十二人の者だけが主と共に審くであろうと考えてはならない。

じっさい、十二という数によって象徴されているのは、多数の審き人たちのいわばある種の全体である。「七」という数は多くのばあい全体をあらわすものであって、「三」と「四」という数は「七」という数の部分を成しているためである。そして、「三」と「四」とから「十二」が生れるのであって、「四」の三倍も「三」の四倍も「十二」となる。この「十二」という数についで同じような意義を示唆してくれる他の説明が、もしかしてあるのかもしれない。この

ように「七」という数が「全体」をあらわすものでないなら、マッテヤが裏切り者のユダの代りに使徒として指名されたということをわたしたちは読むのであるから(六)、そこには使徒パウロのための審きの座というものがないことになってしまうであろう。この人は「かれらのなかのだれよりも多く働いてきた(七)」のだからである。かれが「わたしたちは御使(みつかい)をさえ審く者であるということをあなたがたは知らないのか(八)」というとき、疑いもなく、かれは他の聖徒たちと共に審き人に属しているということを明らかにしているのである。

同様の事態は、審かれるべき者たち自身についても、この「十二」という数によって考えられるのである。すなわち、「イスラエルの十二の部族を審くであろう」といわれているのであるが、それは、第十三番目の部族であるレビ族はかれらによって審かれないからではないのである。あるいはまた、かの民(イスラエルの民)だけが審かれて、その他の民族は審かれないからでもないのである。キリストが「世が改まって(九)」といわれるとき、疑いもなくそのことばによって死者の復活が理解されるようのぞんでおられるのである。というのは、わたしたちの魂が信仰によって再生されたように、わたしたちの肉は朽ちないものとされることによって再生するであろうからである。

わたしは多くの章句を省略する。それらは「終わりの審き」についていわれていると見られるものではあるが、よく吟味考察するとき、曖昧であることがわかったり、むしろ何か他のことがらに関連するものであったりするのである。たとえば、救い主に関連するものである。かれはこの時代の全体にわたってご自身の教会に――すなわちご自身の肢体に――それぞれの部

分をとおして、そして徐々に到来される。教会全体はキリストのからだであるからである。あるいは、地上のエルサレムの滅亡に関連するものである。というのは、キリストがその滅亡について語られるときには、世の終わりのことおよび最後の、そして大きなあの審きの日のことを語られるかのように、しばしば語られるからである。そのため、この問題にかんしてマタイ、マルコ、ルカの三人の福音書記者のもとで同じように述べられている記事をたがいに比較してみなければ、これら二つの出来事はまったく識別されないことになる。

じっさい、ひとりの記者はある点をより曖昧に述べ、他の記者はより明瞭に述べているのであって、そのため、同じことがらに関連するものとして述べられているところのことが何を述べようとしているのか明らかになるため比較を必要とするのである。わたしはこのことをおこなおうとして、しあわせな想い出の人物であるサロナの町の司教ヘシキウス(一〇)にあてた手紙のなかで心を砕いたのであった。それは『世の終わりについて』という題をつけた手紙であった(一一)。

それゆえにわたしは、いまやここで、マタイによって記された福音書のなかで、キリストの審き——それはまったく現実のものであり、そして最後のものである——による善き者たちと悪しき者たちとの分離にかんして読まれるところのことを引用しようとおもうのである。

——「人の子が栄光のうちにすべての御使(みつかい)たちを従えてくるとき、かれはその栄光の座につくであろう。そして、すべての民がその前に集められ、羊飼いが羊と山羊とを分けるように民を分け、羊を右に、山羊を左に置くであろう。そのとき、王はその右手にいる人びとにいうで

あろう。『わたしの父の祝福を受けたあなたがたは、世のはじめからあなたがたのために備えられている御国（みくに）を受けつぐ。あなたがたはわたしが空腹のときにわたしに食を与え、渇いていたときに飲み物を与え、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着物を着せ、病気であったときに見舞い、獄にいたときにたずねてくれたからである』。そのとき、正しい人たちは答えていうであろう。『主よ、いつ、わたしたちはあなたが空腹であるのを見て食べるものをめぐみ、渇いているのを見て飲み物を与えましたか。いつ、旅人であるのを見て宿を貸し、裸であるのを見て着物を着せましたか。いつ、病気であったときに見舞い、獄にいたときにたずねましたか』。すると、王はかれらに答えていうであろう。『まことにあなたがたにいっておく。わたしの兄弟であるもっとも小さい者らのひとりにこれをなしたのは、すなわち、わたしになしたのである』。それから、左手にいる人びとにいうであろう。『呪われた者たち。わたしから去って、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火のなかに入るがよい[二]』。

次いでキリストは同じようにそれらの者（左手にいる人びと）がなさなかったことを数えあげ、右手にいる人びとがなしたところのことに言及されるのである。左手にいる人びとが同じように、キリストがこれらのことを必要としておられたのをいつ見たのであったかとたずねるのであるが、それにたいして、わたしの（兄弟である）もっとも小さい者たちのひとりになさなかったことは、すなわち、わたし自身にたいしてなさなかったのだ、と答えられる。そして、この説教をつぎのことばで結ばれるのである。「かれらは永遠の罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」。

ところで、福音書記者ヨハネは、キリストが審きは死者の復活のときにおこるであろうことを予告された、と、この上もなく明瞭に語っている。すなわち、「父はだれをも審かない。審きのことはすべて子にゆだねられたからである。それは、すべての人が父を敬うごとくに、子を敬うためである。子を敬わない者は、子をつかわされた父をも敬わない」と述べ、それに加えて、「よくよくあなたがたにいっておく。わたしのことばをきいて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の命を得、また、審かれることがなく、死から命に移っているのである」(三)といっている。

見るがよい。ここでは、キリストはその信仰のある者たちが審きに至ることはないことを語られたのである。――それでは、かれらはいかにして審きによって悪しき者らから分離されてキリストの右手に置かれることになるのであろうか。それは、この箇所では、「審き」ということが「罪の宣言」ということの代りに用いられているからではないであろうか。じつに、キリストのことばに耳を傾けて、かれをつかわされたかたを信ずる者たちは、このような「審き」に至ることがないのである。

(一)「マタイによる福音書」一一の二二―二四。
(二)同上、一二の四一以下。
(三)同上、一三の三七以下。
(四)同上、一九の二八。
(五)同上、一二の二七。ベルゼブルは悪霊の頭で、サタンの同義語である。

(六)「使徒行伝」一の二五以下参照。ユダが使徒の職務から落ちて自分の行くべきところへ行ったそのあとを継ぐ者を決めるため、ユストという名のヨセフとマッテヤとの二名が立てられたが、くじを引いた結果、マッテヤに当ったので、かれが十一人の使徒に加えられることになった。なお、数字の象徴する意義にかんしては、本書第十一巻第三十章以下、第十五巻第二十章、第十七巻第四章を参照。「七」という数が、預言されたことの「全体」を表わすというアウグスティヌスの解釈は、たとえば、石女であったハンナに七人の子どもが恵まれたこと、あるいは、使徒ヨハネが七つの教会に手紙を送ったこと、などに見られる。

(七)「コリント人への第一の手紙」一五の一〇。

(八)同上、六の三。

(九) in regeneratione.

(一〇) ヘシキウス(Hesychius)はダルマティア(アドリア海の東海岸の一地方)のサロナの町の司教である(四二六年死)。

(一一) アウグスティヌス『書簡』第一九九篇。

(一二)「マタイによる福音書」二五の三一―四一。

(一三)「ヨハネによる福音書」五の二二以下。

第六章

第一の復活と第二の復活について

さらにイエスはつづけていわれる。「よくよくあなたがたにいっておく。死んだ人たちが神の子の声をきくときがくる。いますでに来ている。そして、きく人は生きるであろう。父がご自身のうちに生命をお持ちになっているると同様に、子もまた、自分のうちに生命を持つことをゆるされたからである」(一)。かれは、第二の復活、すなわち世の終わりにくるであろうところの身体の復活を語っておられるのではなく、いまおこる第一の復活について語っておられるのである。じつに、「ときがくる。いますでに来ている」といっておられるのは、それらを区別するためである。しかし、この復活は身体の復活ではなく、魂のそれである。というのは、魂も不信仰や罪においてそれ自身の死をもつからである。かれらはそれらの死にしたがって死せる者であって、かれらについては、同じ主が「死人を葬ることは、死人に任せておくがよい」(二)といっておられるのである。これはすなわち、「身体において死んだ者を葬ることは、魂において死んだ者に任せておくがよい」ということである。

それゆえに主は、不信仰や不公正によって魂において死んでいる者たちのために、「死んだ人たちが神の子の声をきくときがくる。いますでに来ている。そして、きく人は生きるであろう」といわれているのである。「きく人」というのは「従い、そして信じ、終わりまで忍耐す

ない。というのは、神の声をきいて不信仰の死から敬虔の生へと移るようになることは、すべての人にとって善であるからである。

この死にかんして使徒パウロは、「それゆえ、すべての人が死んだのである。そして、かれがすべての人のために死んだのは、生きている者がもはや自分のために生きるのではなく、自分のために死んでよみがえったかたのために生きるためである」〔三〕といっている。

したがって、すべての者が、いかなる例外もまったくなく、罪において死んだのである。それが原罪によるものであるか、あるいは、それに加えられた意志による罪——正しいことについての無知によることもあれば、正しいことを知っていながらそれをおこなわないことによるばあいもある——によるものであるとしても。すべての人のために(真に)生きたひとりの人が、すなわち何の罪ももたない人が死んだのである。それは、罪の赦しを得て生きる者が、もはや自分のために生きるのではなく、わたしたちの罪のゆえにすべての者のために死んでわたしたちの義のためによみがえったかたのために生きるためである。〔四〕かくして、わたしたちは、不信仰な者を義となすところのかたを信じて不信仰から義とされた者へ——いわば死から生へ——もたらされて、〔五〕いまおこるところの第一の復活に属することができるようになるのである。

すなわち、この第一の復活には永遠に至福とされた者のほかには属さないが、それにたいして、すぐのちに語られるであろうところの第二の復活には至福な者も悲惨な者も属するという

ことを(主は)教えておられる。それゆえ、『詩篇』には、「わたしはあわれみと審きとについてあなたに向かってうたいます、主よ」(六)と記されているのである。

この審きについて主は付け加えてつぎのようにいわれる。「父はかれに審きをおこなう権能をお与えになった。なぜなら、かれは人の子だからである」(七)。ここで、かれは、人びとを肉において審くために来るであろうことを明らかにしておられるのである。かれが肉において審かれるために来られたからである。このために「かれは人の子だからである」といわれるのである。次いで、かれは、いまわたしたちが論じている問題に関連してつづけていわれる。「このことをおどろくにはおよばない。墓のなかにいる者たちすべてが神の子の声をきいて、墓から出るときがくる。善をなした人びとは生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人びとは審きを受けるためによみがえる」(八)。

ここでいわれている審きとは、すこしまえのところで、「わたしのことばをきいて、わたしをつかわされたかたを信じる者は、永遠の生命を得、また、審かれることがなく、死から生命に移っているのである」といわれて「罪の宣告」の意味で用いられたのと同じ意味のものである。これは、死から生命へと移されるところの第一の復活にあずかることによって罪の宣告——すなわち、主が「審き」という名称で表示しておられるところのものである——に至ることはないであろうということであって、主が「悪をおこなった人びとは審きのためによみがえる」といっておられるこの箇所においても同じである。それゆえに、第二の復活において罪の宣告を受けることをのぞまぬ者は、第一の復活においてよみがえらねばならない。

というのは、「死んだ人たちが神の子の声をきくときがくる。いますでに来ている。そして、きく人は生きるであろう」、すなわち、「第二の死」とよばれている罪の宣告には至らぬであろうからである。魂の復活のち、この死へ突き落されるであろう。「墓のなかにいる者たちすべてが神の子の声をきいて、墓から出るときがくる」からである(ここでは主は「いますでに来ている」とはいっておられない。なぜなら、それは世の終わりに、すなわち、神の最後の、そして最大の審きのときにおこるであろうことだからである)。主は、第一の復活におけるように「そして、きく人は生きるであろう」とはいわれなかったのであった。

じっさい、すべての者がかの生命――それのみが(真に)生命とよばれるに値するところの生命――をもって生きるわけではないからである。それは至福の生命だからである。たしかに、かれらはある種の生命をもつことなくしては声をきくこともできないし、また、からだの復活によって墓から出てくることもできないであろう。主は、それにつづく節において、なにゆえすべての者が生きるのではないか、語っておられる。「善をなした人びとは生命を受けるためによみがえり」。ここでいわれているのは、生きるべき人びとのことである。そして、「悪をおこなった人びとは審きを受けるためによみがえる」。ここでいわれているのは、第二の死によって死ぬゆえに生きることのない人びとのことである。じっさい、かれらが悪をなしたのは、かれらが邪悪な仕方で生きたからである。そして、かれらが邪悪な仕方で生きたのは、第一の復活――いまおこっているところの魂の復活――において新しい生によみがえることをしなか

ったからである。あるいは、新しい生によみがえったのではあるが、その生のうちに終わりまで留まることをしなかったからである。

このようなわけで、わたしがすでに語ったように、二つの再生が存する。ひとつは信仰にしたがっておこるものであり、いま、ここにおいて、洗礼をとおしておこるのである。いまひとつは、肉にしたがっておこるものであり、重大な、そして最後の審きの結果、その不滅と不死においておこるのである。――同じように二つの復活が存する。ひとつはいま、ここにおいておこり、そして魂の復活であるところの第一の復活である。これはわたしたちが第二の死へ至ることをゆるさない。いまひとつは第二の復活であって、いま、ここにおいておこるのではなく、世の終末におこるであろうところのものであり、魂の復活ではなく、身体の復活である。それは、最後の審きによって、ある者を第二の死へ引き渡し、他の者をもはや死を知らないかの生へ引き渡すのである。

(一)「ヨハネによる福音書」五の二五以下。
(二)「マタイによる福音書」八の二二。
(三)「コリント人への第二の手紙」五の一四以下。
(四)「ローマ人への手紙」四の二五参照。
(五)同上、四の五参照。
(六)「詩篇」一〇一の一。
(七)「ヨハネによる福音書」五の二七―二九。

（八）　同上、五の二四、二五。

第七章

ヨハネの『黙示録』に記されている二つの復活と至福千年について

これら二つの復活について、同じ福音書記者ヨハネは『黙示録』とよばれる書のなかでも述べている。けれども、それは、そのうち第一の復活のほうがある人びとによっては理解されずに、そしてその上、こっけいな作り話とされてしまったような仕方で語られたのであった。事実、言及したその書において使徒ヨハネはいっている。——「またわたしは、ひとりの御使が深淵の鍵と鎖とを手に持って天から降りてくるのを見た。かれは、竜、すなわち、悪魔ともサタンとも呼ばれるところの年を経た蛇を捕えて、千年のあいだ繋いでおき、そして深淵に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終わるまで諸国民をまどわすことのないようにしておいた。そののち、しばらくのあいだ解放されることになっていた。

また、わたしは数多くの座とそこにすわっている人びとを見た。かれらに審きの権が与えられていた。イエスを証したために、また、神のことばを伝えたために、殺された人びとの魂であり、獣とその像とを拝まず、その印を額や手に受けることをしなかった人びとである。かれらはキリストと共に千年のあいだ支配した。しかし、そのほかの死者たちは、千年の期間が終

わるまで生きかえらなかった。これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者は、至福な者とされ、聖なる者とされた。かれらにたいしては第二の死は力をもつことがない。かれらは神とキリストの祭司となり、キリストと共に千年のあいだ支配するであろう」[(一)]。

ところで、この書のこの箇所のことばゆえに、この第一の復活というのは身体の復活のことではないかと疑念を抱いた人びとは、他の理由のなかでもとくに千年という数によって刺激されたのであって、それは、聖徒たちにあって一種の安息日、すなわち聖なる休暇となるべきものなのである。人間が創造されて、かの重大な罪の報いとして、楽園の幸福からこの死すべき生の困窮のうちへと追放されたときから六千年の労苦を経て、そのあとの休暇なのである。聖書に、「主にあっては、一日は千年のようであり、千年は一日のようである」[(二)]と記されているので、この日の六日間としての六千年が満了してのち、最後の千年間がいわば安息日であるかのように第七日目がそれにつづくのであって、明らかにこの安息日を祝うために聖徒たちがよみがえるというわけである。

この見解は、その安息日において、主が現前しておられることによって聖徒たちに何らかのたのしみがそこにあるのなら、とにかく認められうるであろう。じっさい、わたしたちも一時期、この見解をもっていたのであった。けれども、かれらは、そのときによみがえった者たちがまったく慎みを欠いた饗宴にときを費す——そこではひじょうに多くの飲食物があって、いかなる節度もまもられないだけでなく、信じがたいほどの逸脱ぶりがあるのである——と主張するときには、この見解はただ肉的な人びとによってのみ信じられうるものとなるであろ

う。

ところで、霊的な人びとはこのような見解を信じる者を、ギリシア語で「キリアスタ」[三]とよんでいる。わたしたちはそれと同じ意味をもつことばに移して、「至福千年論者（ミリアリウス）」[四]とよぶことができよう。しかし、これについてこと細かく反論することはあまりに長たらしくなるので、いまは、この聖書の箇所がどのように受け取られねばならないか、明らかにすべきである。

主イエス・キリスト御自身がいっておられる。「だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、強い人の家に入ってその家財を奪い取ることはできない」[五]。主は、この「強い人」によって悪魔が理解されるよう意図しておられるのである。なぜなら、悪魔は人類を捕える力をもったからである。他方、奪い取られることになっているところの「家財」とは、キリストを信ずるであろう人びとのことであって、さまざまな罪や不敬虔において悪魔がその人びとを所有したのである。それゆえ、『黙示録』において使徒が幻視によって見た「御使が深淵の鍵と鎖とを手にもって天から降りてくる」のは、この「強い人」を縛りあげるためであった。そして、「御使は、竜、すなわち、悪魔ともサタンとも呼ばれるところの年を経た蛇を捕えて、千年のあいだ繋いでおいた」といっているが、これは、天使が、解放されるはずの人びとを惑わせたり所有したりする悪魔の力を阻み、抑制するということである。

ところで、「千年」は、わたしがおもい付くかぎり、二つの仕方で理解されうるであろう。この出来事は最後の千年に、いわば第六日目にあたる第六番目の千年におこるということである。そのあとに拡がる時がいま過ぎ去って、夜をもたない安息日、すなわち聖徒たちの終わり

のない休息がつづくのである。そのゆえに、ヨハネはこの千年の日々の最後の部分を——それは世の終わりのときまで残存する日であるが——全体をもって部分を表わすような語りかたによって、「千年」とよんだのである。

あるいは、ヨハネは、この世の年数の全体の代りに「千年」を用いたのである。それは、完全な数によって時の充満があらわされるためである。じっさい、千という数は十の立方体をつくるのだからである。たしかに十の倍は百となって正方形をつくるが、それは平面である。しかし、そのかたちに高さを与えて立体化するためには、百がさらに十倍され、その結果、千となるのである。さらに、百という数も、ときとして全体を表わすために用いられるとおもわれるのであって、たとえば、主は、自分の持ち物をすべてあとにして従う者に向かって、「この世において百倍も受けるであろう[六]」と約束されたのであった。また、使徒が、「何も持たないようであるが、すべての物を持っている[七]」というとき、ある意味でこのことを説明しているのであろう。なぜなら、ずっと以前にすでに「全世界は信仰ある者の富のなかに含まれる[八]」といわれているからである。まして、千という数は、十の平方が立方体であるとき、これが全体を表わすものとして用いられるであろう。だからして、『詩篇』において、「主はとこしえに、その契約を御心にとどめられる。これは千の代に命じられたみことばである[九]」と読まれるとき、この「千の代に」が「よろず代に」と解されてもよいであろう。

また、「(御使は)それを深淵に投げ込み」といっているが、これは明らかに天使が悪魔を深淵に投げ入れたことを意味している。そして、「深淵」によって象徴されているのは無数の不

敬虔な者たちの群れであって、かれらの心は、神の教会に反抗する悪意においてはきわめて深い海となっている。そして、「投げ込み」といわれているのは、かつて悪魔がそこにはいなかったからではなく、悪魔が信仰者から締め出されるとき、いよいよ不敬虔な者をつかまえようとしはじめるからである。じっさい、だれでも、神から遠ざかるだけでなく、神に仕える者たちにたいしていわれのない憎しみを抱く者は、より確実に悪魔の所有するところとなるのである。そして「入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終わるまで諸国民をまどわすことのないようにしておいた」といっている。「入口を閉じて」というのは、「天使は悪魔を差しとめて外へ出られぬようにした」ということであって、悪魔は禁止されたことに違反することを差しとめられたのである。

「その上に封印をした」と加えられているのは、神は、だれが悪魔の党派に属し、だれがそれに属さないか、秘めておくことを意図されたということを意味しているようにわたしにはおもわれるのである。たしかに、この世においては、このことはまったく知られずにいるからである。堅く立っていると見える人が倒れるかどうか、また、倒れていると見える人が立ちあがるかどうか、不確実だからである。悪魔はこの禁止の鎖によって閉じ込められたので、キリストに属しているもろもろの民を惑わすことを禁じられ、差しとめられることとなった。かつてはそれらの民を惑わし、その手中においていたのであるが。使徒のいうように、神はこれらの民を、「やみの力から救い出し、その愛の御子の国へ移すため」(一〇)、世界の創設の以前にお選びになったのである(一一)。

悪魔はいまも、もろもろの民を惑わし、自分自身と共に永劫の罰へ引きずり込もうとしているのであるが、永遠の生命に定められた人びとはそうではないということを、信仰ある者ならだれが知らないであろうか。悪魔は、すでにキリストにおいて再生して神の道を歩んでいる人びとをしばしば惑わすという事実に動揺させられてはならない。というのは、「主は、御自身に属する者たちを知っておられ」(二三)、悪魔は、そのうちのだれをも永劫の罰へ導くことはないからである。主がかれらを知られるのは、未来におこるべきものの何ものも隠されてはいない神として知られるのであって、人間として知られるのではないからである。というのは、人間が人間を見るばあい、その人を現在において見るのであるが(人間はその人の心を見ているわけではないのに、その人を見ているということができるとすれば)、しかし、その人がそののちの未来においてどのような者となるか、また、自分自身も未来においてどのような者となるか、見ることはないからである。

それゆえに、このために悪魔は深淵に閉ざされ、締め出されているのであって、それは、悪魔がもはや教会を形成しているもろもろの民を惑わすことのないためである。かれは、かつてはその民を惑わし、民が教会となる以前に捕えていたのであった。また、記者は、「かれがだれかを惑わすことのないように」とはいわずに、「諸国民を惑わすことのないように」といっているのであるが、これによって、疑いもなく教会のことが理解されるようのぞんだのであった。そして、「千年の期間が終わるまで」といわれているのは、第六日目——それは一千年から成り立っている——の残りのことであるか、それとも、つづいてこの世が通過されていくた

めに存する年のすべてのことであろう。

「千年の期間が終わるまで諸国民をまどわすことのないようにしておいた」といっているところのことについては、悪魔が、ただたんに予定された教会を構成するところのこれらの民――悪魔がかの鎖と檻によって惑わすことを遮られた民――をのちに惑わすのであるかのように受けとってはならない。ここのところは、ひとつは、聖書にしばしば見いだされる語りかたによっていわれていると解される。たとえば『詩篇』に「神がわたしをあわれまれるまで、わたしたちの目はわたしたちの主である神に注がれています」[(二)]といわれている。これは、神があわれみを示されるときには、僕（しもべ）たちの目はもはや神に注がれることを止めるであろう、ということを意味するわけではないのである。

いまひとつは、これらのことばの順序は、たしかに、「入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終わるまで」であって、「諸国民をまどわすことのないように」と挿入されているのは、この順序の連結からは解いて分離し、それがいわばあとで付け加えられたかのように理解されるべきであろう。このようにして、この文の全体はつぎのようになるであろう。「千年の期間が終わるまで、入口を閉じてその上に封印した。それはもはや諸国民をまどわすことができないためである」。すなわち、諸国民をまどわすことのないように、千年の期間が終わるまで閉じ込めたのである。

(一)「ヨハネの黙示録」二〇の一―六。
(二)「ペテロの第二の手紙」三の八。

(三) χιλιαστα.
(四) miliarius.
(五) 「マタイによる福音書」一二の二九。
(六) 同上、一九の二九。
(七) 「コリント人への第二の手紙」六の一〇。
(八) 「箴言」一七の六(七十人訳)。
(九) 「詩篇」一〇五の八。
(一〇) 「コロサイ人への手紙」一の一三。
(一一) 「エペソ人への手紙」一の四参照。
(一二) 「テモテへの第二の手紙」二の一九。
(一三) 「詩篇」一二三の二。

第八章

悪魔の拘禁と解放について

「(悪魔は)そののち、しばらくのあいだ解放されることになっていた」(一)といっている。もしも、拘禁され締め出されることが、悪魔にとって、教会を惑わすことができないということを意味しているのなら、この解放は、ふたたび惑わすことができるようになることであろうか。

断じてそうではない。世界が創設される以前に予定され、かつ選ばれたところの教会を、悪魔はもはや惑わすことはないであろう。その教会について、「主は、御自身に属する者たちを知っておられる」[三]といわれているのである。たしかに、悪魔が解放されるはずのその時期においても、教会は、世界の創設のときから存在してきたように、この地上に存在するであろう。いずれにしても、教会のなかには死んだ者たちのあとを新しく生れてあとを継ぐ者たちがつねにこの地上に存在するであろう。

事実、そのすこしあとのところで、ヨハネは、悪魔が解放されたときには、かれはこの世のあらゆるところで民を惑わし、教会に反抗する戦闘のなかへ民を引き入れ、そしてその敵対者らの数は海の砂のごとくであろうといっているのである。かれはいう。「そして敵対者らは地上の広いところへのぼって行って、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した。すると、火が天から下ってきて、かれらを焼き尽くした。そして、かれらを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには獣と偽預言者とがいる。そしてかれらは世々に日夜、苦しめられるのである」[四]。

けれども、これはすでに最後の審きに関連していることである。しかし、わたしはこのことをつぎのような理由でいま引用しておかねばならないと考えたのである。すなわち、悪魔が解放されるその短い期間にこの地上に教会が存在しなくなるであろう――かれが解放されたときにはこの世に教会を見いだすことはないであろうから、あるいは、あらゆる種類の迫害によって教会を絶滅するであろうから――とだれかが考えることのないためである。したがって、こ

の書(『黙示録』)が包括している全期間すなわちキリストの最初の到来からキリストの第二の到来であるこの世の終わりまでの期間をつうじて、悪魔は拘禁されているわけであるが、悪魔のこの拘禁は、千年という数で呼ばれているこの中間に介在する期間をつうじて教会を惑わすことがない——じっさい、悪魔は解放されたなら、たしかに教会を惑わすことがないであろうから——ということを意味するものではない。

なぜなら、悪魔にとって、その拘禁が、教会を惑わすことができないということであったり、惑わすことがゆるされないということであるのなら、その解放は、惑わすことができるということであったり、惑わすことがゆるされるということでなければ何であろうか。しかし、そのようなことがあってよいわけがない。かえって、悪魔の拘禁は、人びとを自分の側へ引き込むために激しい暴力や詐欺的な奸計を用いて、力と策略によってなしうるあらゆる誘惑をはたらくことがゆるされない、という意味なのである。もしも悪魔が、ひじょうに長い期間に、多くの人びとが無力な状態にあるときに惑わすことがゆるされているのなら、多くの人びとは信仰を失ったり、人びとをして信じないように妨害しようとするであろう。この人びとというのは、神がこのことを耐え忍ぶことをのぞんでおられないような人びとのことであるが——。悪魔が縛られているのは、このようなことを実行しないためなのである。

ところで、悪魔は短い期間解放されるであろう。なぜなら、かれは力の限りをつくして自分に味方する者らと共に三年と六箇月のあいだ、荒れ狂うであろうと読まれるからである。(五) 悪魔がたたかわねばならぬ相手となるのは、その狂暴な攻撃や奸計によって打ち負かされないよう

な人びとである。悪魔がけっして解放されないのなら、その有害な力が明らかにはならないことになるであろうし、聖なる国のまったき誠実な堅忍が、それほど証明されないことになるであろう。さらにまた、全能なるかたが悪魔の大きな悪をどれほど善用なさるかということも、それほど知られないことになるであろう。全能なるかたは、悪魔が聖徒たちを試ることをまったく差し止められたわけではなかったが、しかし、悪魔を内なる人びとの神への信仰の場の外側へ投げ出されたのである。(六) それは、聖徒たちがかれの外側の攻撃から何らかの益を得るためであった。

全能なるかたは、悪魔を、その側に立っている者たちのうちに固く結び付けられたのであるが、それは、悪魔がその邪悪さを撒き散らして力のおよぶかぎりそれをはたらかせ、無数の弱い人びとを敬虔な信仰から妨げたり破壊したりすることのないためである。教会はそのような人びとによって満たされ、また増やされるべきであるが、悪魔はそれらの人びとのうち、すでに信仰をもっているある人びとの信仰を、また、これから信じようとしている他の人びとの信仰を、妨げたり破壊したりするのである。最後には、神は悪魔を解かれるであろう。それは、神の国が、敵対者のいかに強い力に打ち勝ったかということを、その贖い主、助け主、救い主のはかりがたい栄光と共に、かえりみるためである。じつに、そのように未来に存するであろう聖徒たちや信仰者たちと比べるなら、わたしたちは何であるだろうか。

じっさい、わたしたちは拘禁されている悪魔とのたたかいにひじょうな危険を冒しているのであるが、かのときには、それらの人びとが確かめられるために、かくも大きな敵が解き放た

れるのである。とはいえ、中間に介在するこの期間をつうじて、きわめて賢明で勇気あるキリストの兵士らが存在したのであったし、また、いまも存在していることは疑うことはできない。もしもかれらが、悪魔が解かれるそのときにも、この可死的な条件のもとに生きているとすれば、かれらは悪魔の策略に対してはこの上もなく賢明に警戒をはらい、その攻撃に対してはこの上もなく堅固さをもって抵抗することであろう。

悪魔のこの拘禁は、教会がユダヤの地をこえて他の民のあいだに徐々に拡がりはじめたときにおこっただけでなく、いまもおこっているのである。そして、かれが解かれることになっている世の終わりに至るまでおこるであろう。それというのは、いまも人びとは不信仰――それゆえに悪魔(強い人)はその人びとを手中にしているのである――から信仰へと転回しているのだからである。人びとが世の終わりに至るまで転回していくであろうことは疑えない。この「強い人」(悪魔)は、その「家財」のごとくに各人が強い人から奪い去られていくとき(信仰へと転回していくとき)、そのおのおのの場合にもまったく拘禁されているのである。(七) 悪魔が閉じ込められている深淵は、かれが閉じ込められはじめたときに生きていた者たちが死者となったとき、その者たちと共に滅ぼされたわけではない。他の者が生れて死者たちのあとを継ぎ、この世の終わりがやってくるまで、かれらは先行する者たちにとって替わるのである。それらの者はキリスト教徒を憎む者たちである。そして、かれらの日々にあっては、悪魔は、いわば深淵のなかにあるごとくに、人びとの暗く深い心のうちに閉じ込められているのである。

しかしながら、つぎのことは多少問題となるであろう。あの最後の三年と六箇月のあいだ、

悪魔が解放されて全力をつくして荒れ狂うときに、かつて信仰をもたなかった者が信仰に接近するようになるのかどうか、ということである。すなわち、もしも(強い人の家財が)強い人が解き放たれたときにも奪い去られるのなら、「だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、強い人の家に入ってその家財を奪い取ることはできない(八)」といわれているところのことはいかにして成り立つのであるか。このゆえに、この文は、わたしたちをして強いてつぎのように信じ込ませようとするものであるかのようにおもわれるのである。——あの期間においては、短い期間ではあるけれども、だれもキリストの民に加えられないのであって、悪魔がたたかうのは、すでにキリスト教徒となっている者たちとである。そして、それらの者のうち、ある者は悪魔に打ち負かされて服従するとしても、かれらは(元来)神の子らの予定された数のうちには属しておらない者たちなのである、ということである。

それというのも、この『黙示録』を記した同じ使徒ヨハネは、ある人びとに宛てたその書簡のなかで、「かれらはわたしたちから出て行った。しかし、かれらはわたしたちに属する者ではなかった。もしもわたしたちに属する者であったなら、わたしたちと一緒にとどまっていたであろう(九)」といっているのは、まったく理由のないことではないからである。しかし、幼い子どもたちには何がおこるのであろうか。じっさい、その期間には、キリスト教徒たちの子どもで、すでに生れてはいるが、まだ洗礼を授けられていない幼児は、だれも悪魔に捕えられないであろうとか、その期間の日々においてはだれもまだ生れないであろうとか、あるいは、たとえ生れてはいても、かれらがその両親によって何らかの仕方で「再生の洗い(一〇)」へ連れて行かれ

る者はないであろう、などということはまったく信じられぬことだからである。

もしもこのようなことがおこるとすれば、悪魔が解き放たれるとき、いかにして「家財」が奪い去られるのであろうか。「だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、強い人の家に入ってその家財を奪い取ることはできない」のだからである。かえって、わたしたちはむしろ、その期間においても教会から離れ去る者と教会に近づく者との両方があるということを信じるべきである。たしかに、小さな者たちのために洗礼を求める両親たち、あるいは、その期間のあいだにはじめて信仰を得ようとする人びとによって、悪魔が拘禁されていなくとも、かれに対して雄々しく勝利を得ようとして示されるほどの大きな勇気というものが存することであろう。かつてなかったようなあらゆる種類の策略を用い、全力をあげて攻撃して迫ってくるときでさえ、これらの人びとは覚めた目でそれを悟り、忍耐づよく抵抗し、かれが拘禁されていなくとも、かれの手から「家財」を奪い取っていくことであろう。

それゆえ、「だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、強い人の家に入ってその家財を奪い取ることはできない」というあの福音書のことばは誤りではないであろう。というのも、このことばの真理にしたがって、ことがらの順序が保持されるのだからである。つまり、はじめに「強い人」を捕縛するということがあり、その「家財」の奪取ということがある。そして、広くすべての民のあいだに、強い者や弱い者たちから成る教会が増大されるのであって、それは、神の霊によって預言され満たされたもろもろのことがらの強力な確信そのものの成果としてである。教会は、悪魔が解き放たれたときでさえ、その「家財」を持ち去ることができるの

である。

「不法がはびこるので、多くの人びとの愛が冷える」(二二)ということ、また、「生命の書」に登録されていない人びとでいまは解き放たれている悪魔の異常な、そしてこの上もなく激しい迫害と欺瞞の前に譲歩する者が多く存在することを認めなければならない。同様に、そのときには信仰を見い出す善き者だけでなく、それまでは教会の外部にいたかなりの者も、そのときには神の恩恵の助けを得て、聖書について考察することをとおして(そこには他のもろもろのことがらと共に、すでにその到来を感じるようになっている終末そのものが予告されている)、かれらが以前には信じなかったところのことを、いっそう確固として信じるようになり、悪魔が解き放たれていても、かれに打ち勝つためのより強い力を得ると信じなければならない。このようなことがそのとおりおこるのであれば、悪魔が縛られているときも、解き放たれているときも、その所有物が略奪されるように、悪魔の拘禁が先行するといわねばならない。このことがらについて「だれでも、まず強い人を縛りあげなければ、強い人の家に入ってその家財を奪い取ることはできない」といわれているのだからである。

(一)「ヨハネの黙示録」二〇の三。
(二)「エペソ人への手紙」一の四参照。
(三)「テモテへの第二の手紙」二の一九。
(四)「ヨハネの黙示録」二〇の九以下。
(五)同上、一一の二、一二の一二、一三の五参照。

(六)「ローマ人への手紙」七の二二、「コリント人への第二の手紙」四の一六参照。
(七)「マタイによる福音書」一二の二九。
(八) 同上、一二の二九。
(九)「ヨハネの第一の手紙」二の一九。
(一〇)「テトスへの手紙」三の五。
(一一)「マタイによる福音書」二四の一二参照。

第九章

一千年間、キリストと共に聖徒たちが支配する王国について、また、それとは異なる永遠に存続する王国について

ところで、一千年間、悪魔が拘禁されているのであるが、そのしばらくのあいだ、聖徒たちはキリストと共にこの一千年間支配する。それは、同じ意味において、そして、同じ時——すなわちキリストの最初の到来によって現実にはじまった時——を示すものとして解されるべきである。たしかに、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、あなたがたのために用意されている御国を受け継ぎなさい」(一)といわれて世の終わりに語られるものとされているあの王国は除外して、それとは別の、そしてある意味でそれよりはるかに劣った王国ではあるけれども、

そこにおいて聖徒たちはいまもキリストと共に支配しているのであって、かれらについては、「見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいるのである」(三)といわれている聖徒たちのことである。そうでなければ、「教会」がいまもキリストの王国とよばれたり、天の王国とよばれたりすることはまったくありえないであろうからである。

じっさい、律法学者たちが王国について学ぶのは、明らかにこの期間においてである。かれらは、わたしたちが上に語ったように、「新しいものと古いものとをその倉から取り出す」(三)ところの者たちである。そして、刈り入れのときまで小麦と共に成長することを主がおゆるしになった毒麦を刈り手が刈り集めるのはその教会からなのである。主はそれについて説明しておられる。「収穫とは世の終わりのことである。そして、刈り手は天使たちである。だから、毒麦が集められて火で焼かれるように、世の終わりにもそれはそのとおりにおこるであろう。人の子はその天使たちをつかわし、かれらはその御国から躓きとなる者をことごとく取り集めるであろう」(四)。

これは、いかなる躓きもないあの別の王国のことであるはずがあろうか。だからして、かれの王国からそれらの者は取り集められるのであって、その王国とはこの世における教会のことである。さらに、キリストは、「これらのもっとも小さい戒めの一つでも破り、またそうするように人に教えたりする者は、天国でもっとも小さい者とよばれるであろう。しかし、これを守り、またそうするように人に教えたりする者は、天国で大いなる者とよばれるであろう」(五)といっておられる。主は、それら両方の者たちについて、天の王国にある者として語っておられ

るのである。かれが教えておられる戒めを守らない(これを「破る」ということは、「守らない」ことであり、「おこなわない」ことなのであるから)者についても、また、これをおこない、かつ他人にもそうするように教える者についても――。ただし、前者を「もっとも小さい者」、後者を「大いなる者」とよんでおられるのである。

そして、キリストはそのあとに直ちにつづけて、「わたしはいっておく。あなたがたの義が律法学者やパリサイ人、すなわち、自分たちの教えているところのことをみずから破っている者ら(これは、別のところで、律法学者やパリサイ人たちのことを『かれらはいうだけで実行しない』と語っておられるからであるが)(六)の義しさにまさっているのでなければ、――それゆえ、あなたがたの義しさがこれらの者にはるかにまさっているのでなければ、すなわち、あなたがたが教えているところのことを破るのでなく、むしろそれをおこなうのでなければ、あなたがたは天国に入ることはない」といっておられる。したがって、天の王国というのは、ある意味で、両方の者たち、すなわち、自分たちの教えているところのことを破る者とそれをおこなう者たちとが存するところと解されねばならない。ただし、前者は「もっとも小さい者」、後者は「大いなる者」である。しかし、他方、天の王国というのは、ある意味では、これをおこなう者でなければ、そこに入ることのないものと解されねばならない。

このゆえに、両方の種類が見いだされるところは、現在あるような教会である。しかし、戒めをおこなう者たちだけが見いだされるところは、悪しき者らがもはや含まれることのなくなるそのときに成るであろうような教会である。だからして、現在でさえ、教会はキリストの王

国なのであり、天の王国なのである。それゆえにまた、キリストの聖徒たちは、たしかにかのときに支配するのとはちがった仕方によるのではあるが、現在もかれらはキリストと共に支配しているのである。とはいえ、毒麦は、キリストと共に支配しているわけではないけれども、教会のなかで小麦と共に成長しているのである。

というのは、使徒が、「あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこでは、キリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを求めるべきであって、地上にあるものを求めるべきでない[七]」というとき、かれがいっているところのことをおこなう人びとは、キリストと共に支配しているのだからである。そして、そのような人びとについて、使徒は、「かれらの国籍は天にある」ともいっているのである[八]。要するに、自分たち自身がキリストの王国でもあるような仕方でその王国に生きる人びとが、かれと共に支配するのである。ところで、他のことについては語らぬとしても、この世の終わりに躓きの石となるものがすべて集められて取り除かれるまで人びとはそこにいるのではあるけれども、しかし、そこにいながら、自分たち自身のものを求め、イエス・キリストのものを求めていない者たちは、いったいどのようにしてキリストの王国であることができるのであろうか。

それゆえ、この書（『黙示録』）がこのように語っているのは、現在もなお敵との戦いを戦い、あるときは反抗する悪徳との戦いがおこなわれ、あるときは敵対者を屈服させて支配し、ついに敵対者を持たずして支配されることになる、あのもっとも平和な御国に到達するところの戦

える王国にかんしてであり、そして、現在すでに存在する「第一の復活」にかんしてである。それというのは、記者はまず、悪魔は千年間拘禁され、そのあと、短い期間解放されるといっているが、これに次いで、かれは、この千年間に教会が何をなし、教会において何がなされるかということについて要約して、「わたしは、もろもろの座があり、その上に人びとがすわっているのを見た。そしてかれらに審きの権能が与えられていた」(九)といっているからである。これはすなわち、最後の審判についていわれていると見なしてはならないのであって、もろもろの座とは、教会を現在治めている首長たちの座や首長たち自身のことと理解しなければならない。

ところで、「審きの権能が与えられた」というのは、「あなたが地上でつなぐことはすべて、天においてもつながれ、あなたが地上で解くことはすべて、天においても解かれるであろう」(一〇)といわれているところのことにかんしてであると解するのがもっともよいとおもわれる。だからして、使徒は、「わたしは外の人たちをさばくべきであろうか。あなたがたのさばくのは、内にいる人たちではないか」(一一)といっているのである。ヨハネは、「イエスの証のため、そして、神の言のため、殺された人びとの魂がある」(一二)といっているのであるが、これは、そのあとにいわれている「かれらはキリストと共に千年間支配した」といわれているところのことによって補われている。これは、すなわち、殉教者たちの魂のことであって、その身体はまだかれらにもどされていないのである。

というのは、敬虔な死者の魂は教会から分たれていないのであって、教会は現在においても

キリストの御国であるからである。そうでないなら、キリストのからだにあずかる際に、神の祭壇の前でかれらのことが記憶されることもないであろうし、洗礼を受けぬままにこの世の生を終えることのなきよう危険に際してキリストの洗礼へと急ぐことも、また、痛悔のため(一三)か、あるいは悪しき良心のためか、ひとがこのからだから分たれるというようなことがあるばあい、和解へと急ぐことも無益となるであろう。というのは、信仰深い者は、たとえ死んでいても、なおこのからだの部分であるからであって、そうでなければなにゆえこれらのことがおこなわれるのであろうか。したがって、かれらの魂は、自分自身の身体をもってではないけれども、この千年間が経過するあいだ、すでにキリストと共に支配するのである。

だからして、同じ書の他のところで、「主にあって死ぬ死人はさいわいである。いまからのち、かれらはその労苦を解かれて休む、と御霊もいっている。かれらの業(わざ)はかれらに伴っていくからである(一四)」と読まれるのである。したがって、教会は、はじめに、いまやキリストと共に生ける者と死せる者とにおいて支配するのである。というのは、使徒がいっているように、「キリストが死んだのは、生ける者と死せる者との主となられるためである(一五)」からである。けれども、死に至るまで真理のためにたたかった死者がとくに支配するがゆえに、ヨハネは殉教者の魂のみに触れたのである。しかし、わたしたちは、部分から全体を考えて、他の死者たちもキリストの王国たる教会に属する者であると理解するのである。

ところで、「また、獣をもその像をも拝まず、そのしるしを自分の額、あるいは手に受けなかった人びとがいた(一六)」とつづいているのであるが、これは、生ける者と死せる者との双方にか

んするものであると受けとるべきであろう。つぎに、この獣というのが何であるかということは、より注意深く探究する必要があるであろうが、わたしにはこれが、不敬虔な国そのもの、そして、信仰と神の国とに対立する不信実な人びとと解しても、真実の信仰に叛くことはないようにおもわれるのである。また、「その像」というのは、その「見せかけ」のことであるとおもわれる。すなわち、信仰を告白しながら、しかも不信実な生を生きる人びとに見られる見せかけである。

　というのは、それらの人びとは、自分たちがそうでないところのものをじっさいにそうであるかのように見せて、キリスト者の真の似姿によってではなく、その偽りの装いによってそのようによばれているのだからである。じつに、この獣に属するのは、キリストの御名とそのもっとも栄光ある王国とにあからさまに敵対する者たちだけでなく、キリストの王国すなわち教会から世の終わりに集められねばならぬ毒麦もまたそうなのである。「獣をもその像をも拝まない人びと」というのは、「不信者たちと軛(くびき)を共にしてはいけない(二七)」と使徒が指示しているところのことをおこなう者でなければだれであろうか。

　というのは「拝まない」というのは、「同意しない」「服従しない」ということだからである。そして、「しるしを受けない」というのは、すなわち、罪のしるしを受けないことだからであって、「その額に」というのはかれらの公言のゆえであり、「その手に」というのはかれらの業(わざ)のゆえである。したがって、これらの悪から免れている人びとは、いまだ死すべき身体のうちに生きているのであろうと、死んでいるのであろうと、千年間という年数によって表示される

この中間の時の全体を通じて、この時に適わしい何らかの仕方で、すでに現在もキリストと共に支配しているのである。

ヨハネは、「かれらのうちの残りの者らは生き返らなかった」(一八)といっている。というのは、「死んだ者たちが神の子の声をきくときがすでに来ていて、きく者たちは生きるであろう」(一九)からであって、それゆえに、残りの者ら(神の子の声をきかない者ら)は生きないのである。しかし、そのあとに「千年が終わるまで」と付け加えているのは、かれらが、死から生へと移されて生きるべきであったそのときに生きなかったことであると解されねばならない。したがって、身体の復活もまたおこるその日が来たときに、かれらは墓から出て生へと至るのではなく、審きへ、すなわち「第二の死」(二〇)とよばれる定罪へと至るわけである。

というのは、千年の期間が終わるまで生きることのなかった者、すなわち、第一の復活がおこるその全期間を通じて神の子の声をきかず死から生へと移されなかった者はだれでも、第二の復活——肉の復活——に際しては、たしかに、その肉もろとも第二の死へ移されるであろうからである。ヨハネはつづけて、「これが第一の復活である。この第一の復活にあずかる者はさいわいな者であり、また聖なる者である」(二一)と付け加えている。「あずかる」というのは、それを「分有する」ことである。「あずかる者」はただ罪の死からよみがえったというだけでなく、新しくよみがえったこの生にいつまでもとどまるところの者なのである。「これらの人たちにとっては第二の死は何の力もない」とヨハネはいっている。

それゆえ、「かれらのうちの残りの者らは千年が終わるまで生き返らなかった」といわれて

いる人たちにとっては、死が力をもつのである。というのは、ヨハネが「千年」とよんでいる中間の全期間にあって、かれらのうちのだれかが、どれほど長く身体において生きていても、その者は、その不敬虔がかれをとらえていた死からよみがえることはなかったからである。——そのようによみがえることによって、かれを第一の復活にあずかる者とされたであろうに。また、第二の死がかれのうちに力をもつことはなかったであろうに。

(一) 「マタイによる福音書」二五の三四。
(二) 同上、二八の二〇。
(三) 同上、一三の五二。
(四) 同上、一三の三九以下。
(五) 同上、五の一九以下。
(六) 同上、二三の三参照。
(七) 「コロサイ人への手紙」三の一以下。
(八) 「ピリピ人への手紙」三の二〇。
(九) 「ヨハネの黙示録」二〇の四。
(一〇) 「マタイによる福音書」一八の一八。
(一一) 「コリント人への第一の手紙」五の一二。
(一二) 「ヨハネの黙示録」二〇の四。
(一三) 破門などの宣告に関連していわれる痛悔のことであろう。
(一四) 「ヨハネの黙示録」一四の一三。

（一五）「ローマ人への手紙」一四の九。
（一六）「ヨハネの黙示録」二〇の四。
（一七）「コリント人への第二の手紙」六の一四。「黙示録」では皇帝の像について語られている。
（一八）「ヨハネの黙示録」二〇の五。
（一九）「ヨハネによる福音書」五の二五。
（二〇）「ヨハネの黙示録」二一の八参照。
（二一）同上、二〇の五以下。

第十章

復活はただ身体にかんしてのみおこり、魂にはおこらないと考える人びとに対してどのように答えるべきであるか

復活はただ身体にかんしてのみおこるのであって、（第二の復活だけでなく）この第一の復活も身体においておこるであろうと考える人びとがある。かれらのいうには、頽落のあるもののみ、よみがえりということがありうるのである。身体こそ、それが死滅することによって頽落するのであって、それが「死体（カダヴェル）」（一）とよばれるのも、「頽落すること（カデレ）」（二）によってであるからである。そのようなわけで、かれらは、魂の復活というものはありえず、ただ身体のそれのみがあ

りうる、というのである。しかし、魂の復活を言明する使徒(パウロ)に対して、かれらは何と答えるつもりであろうか。すなわち、かれが「あなたがたはキリストと共によみがえらされたのなら、上にある知恵を求めなさい[三]」というとき、かれは「内なる人」にしたがって復活した人びとに語っているのであって、「外なる人」にしたがってではけっしてないからである。

かれは同じ意味のことを、ちがった表現によってではあるが、他のところでつぎのようにいっている。「それは、キリストが御父の栄光によって、死人のなかからよみがえらされたように、わたしもまた、新しい生に歩むようになったのである[四]」。そしてまた、「眠っている者よ、起きなさい。死人のなかから立ち上がりなさい。そうすれば、キリストがあなたを照らすであろう[五]」といっているのもこのゆえである。ところで、人びとは、頽落しうるものでなければ復活することはできないと主張し、したがって、復活は、頽落するということは身体に属することがらであるがゆえに身体にかんしてのみおこるのだと見なすのであるが、その人びとはなにゆえ「倒れるといけないから、主から離れ去ってはならない[六]」、「かれが立つのも倒れるのもその主人によるのである[七]」、「立っているとおもう者は、倒れぬよう気を付けるがよい[八]」ということれらのことばに耳を傾けないのであるか。というのも、わたしが考えるのに、わたしたちが気を付けねばならない頽落とは魂の頽落であって、身体のそれではないからである。

したがって、もしも復活が倒れるものにかんしていわれるのなら、そして魂もまた倒れるのなら、魂こそ復活するのだと認めねばならぬことは確かである。

さらに、「これらの人たちにとっては第二の死は何の力もない」といったのち、それにつづ

けて、「かれらは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する」[九]といわれているが、これは明らかに、教会において現在、固有の意味で祭司とよばれている司教や長老たちだけを意味するものではなく、わたしたちがすべてのキリスト者たちを、その神秘的な塗油のゆえに「油注がれた者(キリスト)」とよぶように、かれらはただ一人の祭司(キリスト)の肢体であるがゆえに、そのすべての者たちを祭司とよぶのである。それらの者たちについて使徒ペテロは、「聖なる民、祭司の国」[一〇]といっているのである。

たしかに、短くそして事のついでに触れているのではあるが、ヨハネはこの箇所で、「神とキリストとの祭司」、すなわち、御父と御子との祭司について語るのであるが、そのときかれはキリストが神であるということをほのめかしているのである。もっとも、「僕(しもべ)のかたち」[一一]をとることによって人の子として「メルキゼデクにしたがってとこしえに祭司となった」[一二]のではあるが——。このことについては、わたしは本書において一度ならず述べたことであった[一三]。

(一) cadaver.
(二) cadere.
(三) 「コロサイ人への手紙」三の一。
(四) 「ローマ人への手紙」六の四。
(五) 「エペソ人への手紙」五の一四。
(六) 「集会の書」二の七。
(七) 「ローマ人への手紙」一四の四。

(八)「コリント人への第一の手紙」一〇の一二。
(九)「ヨハネの黙示録」二〇の六。
(一〇)「ペテロの第一の手紙」二の九。
(一一)「ピリピ人への手紙」二の七。
(一二)「詩篇」一一〇の四、「ヘブル人への手紙」七の一七参照。
(一三) 本書第十六巻第二十二章、第十七巻第十七章――第二十章。

第十一章

ゴグとマゴグについて、世の終わりが近づくと、サタンはかれらを引き入れて神の教会を迫害させようとするであろうということについて

「千年の期間が終わると」とヨハネはいう。「サタンはその獄から解放される。そして出て行き、地の四方にいる諸国民、すなわち、ゴグとマゴグを惑わし、かれらを戦いのために召集する。その数は海の砂のように多い(一)」。それゆえ、サタンはかれらをこの戦列に引き入れるために惑わすのである。じっさい、これ以前にも、サタンはできるかぎりさまざまな多くの悪を用いてかれらを惑わしていたのだからである。「出て行く」といわれているのは、「憎しみの隠れ場からあからさまな迫害へ飛び出す」ということである。

じつにこれこそ、最後の審判が差し迫っているときにおこなわれる最後の迫害であって、地上のすべてのところで聖なる教会が蒙るものである。すなわち、キリストの国全体が悪魔の国全体によって、いずれもこの地上にもっとも強力となるときに、この迫害を蒙るのである。ゴグとマゴグ(二)とよばれる民が、地上の特定の部分に定住する蛮人であるかのように解されてはならない。それが、この民の名前の頭文字からしてある人びとが推測したようにゲタ人(三)やマッサゲタ人(四)であろうと、あるいは、ローマの主権に属していない他のある異国の民であろうと。じっさい、「地の四方にいる諸国民」とはじめにいっておいて、これらはゴグとマゴグであるとつづけられているのであるから、それらの民は全世界に存在するということが表示されているのである。

わたしたちは、これらの名前が、ゴグは「屋根」を、マゴグは「屋根から」を意味するものであって(五)、いわば「家」と「家から出る者」として学んでいるのである。それゆえ、わたしたちがさきに理解したように(六)、それらは悪魔がそこに閉じ込められている諸国民であって、さながら深い淵のようなものであり、悪魔自身は何らかの仕方でそれから突進して出て来るのである。つまり、それらの民は「屋根」であり、悪魔はその「屋根から」出て来る者ということになる。しかしながら、これら両方の名前(ゴグとマゴグ)について、わたしたちがその一つを諸国民に、他の一つを悪魔に当てがうことをしないで、いずれをも諸国民に関連づけるなら、そのばあい、それら両方が「屋根」であることになるであろう。それというのは、古い敵はかれらのうちに現在も閉じ込められていて、ある意味で、覆われているのだからである。そして、それらの民

が、隠された憎悪から公然たる憎悪へと噴き出したとき、屋根から出るということになる。

しかしながら、「かれらは地上の広いところに上って来て、聖徒たちの陣営と愛されていた都とを包囲した」(七)といわれている。これは、どこか特定の場所に聖徒たちの陣営と愛されていた都とがあるかのように、かれらが一つの場所にやって来るとか、やって来るであろうというような意味ではないことは確かである。これらのものは、世界中に拡がっているキリストの教会以外のものではないからである。したがって、その時期に教会の存するところにはどこにでも、そして、「地上の広いところに」ということばによって表示されているように教会はすべての民のうちに存在するのであるが、そこには聖徒たちの陣営が存するであろうし、神によって愛された神の都が存するであろう。そして、そこでは、教会に敵対するすべての者たちによる残忍な迫害と包囲とがおこるであろう。かれらも教会と共にすべての民のうちに存在するのだからである。それゆえ、その都は苦難の窮境のうちへと押しやられ、激しく圧迫され、閉じ込められることであろう。しかしなお、そのたたかいを放棄することはないのであって、それが「陣営」ということばをもって表示されているのである。

(一)「ヨハネの黙示録」二〇の七以下。

(二) ゴグというのは旧約の「エゼキエル書」のなかで預言されている人物である。イスラエルを攻撃するが、けっきょく敗北するであろうといわれている。のちに神の国に反逆する力をあらわすものとして示されている。また、マゴグはヤペテの子孫であり(「創世記」一〇の二)、ゴグに率いられて神の国に敵対する勢力を象徴するが、最後には滅ぼされる。

(三) マケドニア北東部のトラキア人。
(四) 黒海の東北地域に住んでいたスキティア人。
(五) ゴグとマゴグにかんするアウグスティヌスのいうような解釈には確かな根拠はない。
(六) 本巻第七章。
(七) 「ヨハネの黙示録」二〇の九。

第十二章

天から火が下ってきてゴグとマゴグを焼きつくしたということ、および、その最後の審判との関連について

ところで、「すると、天から火が下ってきて、かれらを焼きつくした(一)」といわれている。これは、「呪われた者どもよ、わたしを離れて永遠の火に入ってしまえ(二)」といわれるときにおこるであろう最後の定罪のことであると考えられてはならない。というのは、そのときには、火が天からかれらの上に下ってくるのではなく、まさしくかれら自身が火のなかへ投げ込まれるのだからである。じっさい、「天からの火」というのは、聖徒たちの堅固さを意味するものと解するのが正当であろう。それは、反抗して荒れ狂う者らに屈服させられて敵対者の意のままになることから聖徒たちをまもるものなのである。すなわち、「天」とは「蒼穹（フィルマメントゥム）(三)」――確定

されたもの——のことであって、その「堅固さ（フィルミタス）」[四]によって、敵対者らは激しく燃える熱意をもって苦しめられることであろう。かれらはキリストの聖徒たちを反キリストの仲間へと引きずり込むことなどできないからである。この熱意こそはかれらを焼きつくす火となるであろう。しかもそれは「神から」のものであろう。それというのは、それは、聖徒たちをして屈服させられないものとなすところの神の賜物であるからである。だからして、それは敵対者らを苦しめるのである。

というのは、「熱心」は、良き意味で「あなたの家をおもう熱心がわたしを食いつくし」[五]と用いられているが、反対の意味で「どうか、あなたの、おのが民を救われる熱心をかれらに見せて大いに恥じさせ、いま、火をもってあなたの敵を焼き滅してください」[六]と用いられているからである。じつに、この「いま」に注目しなければならない。これは明らかに最後の審判のあの火にかんするものではないのである。

それとも、「天から下ってきて、かれらを焼きつくす」といわれている火は、教会を迫害する者らに加えられる打撃を意味するものかもしれない。すなわち、キリストが現に来られて、かれらが地上に生きているのを見いだし、その口の息をもって反キリスト者を滅ぼされるときの火のことである。[七]しかし、そうであるとしても、この打撃は不信仰な者たちに対する最後の罰ではないであろう。かの最後の罰は、身体の復活ののちに蒙ることになっているところのものである。

（一）「ヨハネの黙示録」二〇の九。

(二)「マタイによる福音書」二五の四一。
(三) firmamentum.
(四) firmitas.
(五)「詩篇」六九の九。
(六)「イザヤ書」二六の一一。
(七)「テサロニケ人への第二の手紙」二の八参照。

第十三章

反キリストのもとにおける迫害の期間は前述の千年のうちに数えるべきであるかどうか

反キリストによって加えられるであろうところのこの最後の迫害は、三年と六箇月にわたるであろう(このことをすでにわたしは述べたのであった。また、『黙示録』のさきの箇所にも、そして預言者ダニエルの書にも記されているのである)(一)。この期間は短いものではあるが、しかし、当然のことながら議論をよぶであろう。すなわち、それは、悪魔が拘禁されて聖徒たちがキリストと共に支配している千年のうちに含まれるのであるか、それとも、その千年の上にさらにこの短い期間が加えられてくるのであるか、ということである。というのは、もしもそ

の期間が千年間に属するといわれるのなら、聖徒たちがキリストと共に支配するのは悪魔の拘禁の期間と同じ期間ではなく、それよりも長いあいだつづくということがわかるからである。まちがいなく聖徒たちは、あの特別の迫害のときでさえ、はなはだしい災悪に打ち勝ってその王と共に支配することであろう。悪魔がもはやつながれてはおらずに、あらんかぎりの力でかれらを迫害することが可能となったときに——。

それでは、三年と六箇月をも含んで、悪魔の拘禁が聖徒たちのキリストと共に支配する千年間より先に終わるとするなら、聖書が悪魔の拘禁と聖徒たちの支配との両方が同じ千年間の期間に定めているのはどうしてであるか。しかし、もしもわたしたちが、この迫害の短い期間は千年のうちに数え入れられるべきではなく、むしろ千年が満ちてその上に加えられるのであるといわれるなら、そのばあいには、聖書のいっているところのことを字義どおりに解することができるであろう。すなわち、「かれらは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する」といっており、つづいて「千年の期間が終わると、サタンはその獄から解放される」[三]と加えられているのである。このような仕方によるなら、聖徒たちの支配と悪魔の拘禁とは同時に止むであろうということを意味しているわけである。そのため、かの迫害の時期は、聖徒たちの支配にも悪魔の拘禁にも属さないのであって(それらはいずれも千年間つづくのである)、その上に加算されるべきものであると考えられるであろう。そして、聖徒たちはかの迫害のときにはキリストと共に支配するのではないと認めざるをえないであろう。けれども、キリストの肢体である人びとが、いっそう堅く、いっそう強くキリストによりすがるとき、

また、戦いの打撃が強烈であればあるほどそれに屈しないという栄光がいよいよ大きくなり、しかも殉教者たちの栄冠がいよいよ稠密（ちゅうみつ）となるとき、その人びとがキリストと共に支配しないであろうなどとだれがあえていうであろうか。

それともまた、蒙らねばならないこの特別の迫害の苦難のために、その人びとは支配するはずがないといわれねばならないのなら、その千年のうちの過ぎ去ったさきの時期においても苦難を蒙った聖徒たちすべてが、現実に苦難を受けたそのときにキリストと共に支配したわけではなかったといわれることになるであろう。また、それゆえに、『黙示録』の記者が見たと記している魂をもつ人びと、すなわち、「イエスを証しするため、そして神の言のため、殺された人びと[三]」も、迫害を蒙っていたあいだはキリストと共に支配していなかったわけである。そして、キリストが特別にすぐれた意味で御自身のものであるとされたそれらの人びとは、キリストの御国ではなかったわけである。[四]——以上のようなことは、この上もなく不合理であって、まったく退けられねばならない。

けれども、光栄にみちた殉教者たちの勝ち誇った魂は、すくなくとも、あらゆる苦痛を克服し、労苦をこえて、その死すべき肢体を捨てたのち、キリストと共に支配したのであった。そして、千年が終わるまで現に支配しているのであって、したがって、もはや不死となった身体を受け取ったのちもなお、支配しつづけることであろう。

それゆえに、かの三年と半年のあいだ、キリストを証しするために殺された人びとの魂は、それが以前に身体を離れ出た魂であっても、あるいは、最後の迫害によって身体を離れること

になっている魂であっても、この可死的な世が終わってそこにはもはや死の存しないあの王国に移されるまで、キリストと共に支配することであろう。そのため、聖徒たちのキリストと共に支配する歳月は、悪魔が縛られ拘禁されている歳月よりも、より長いのである。それというのは、聖徒たちは、三年半のあいだ、悪魔がもはやつながれていなくなったときも、神の御子たるかれら自身の王と共に支配するであろうからである。

したがって、「かれらは神とキリストとの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。千年の期間が終わると、サタンはその獄から解放される」ということばをわたしたちが耳にするとき、つぎのように解されるということになるであろう。——すなわち、この聖徒たちの支配する千年間が終わるのではなく、悪魔がつながれ拘禁される千年間が終わるということであって、いずれも千年を、すなわち、みずからの全年数をもっているのであるが、それらはそれぞれ異なった固有の期間の長さをもつのであり、聖徒たちの支配のほうはより長く、悪魔の拘禁のほうはより短い、ということである。あるいは、そうでないとするなら、三年と六箇月というのはきわめて短い期間であるから、悪魔の拘禁がその分だけ短いように見えようと、また、聖徒たちの支配がより長いように見えようと、(記者は)それを勘定のうちに入れようとはしなかったのだとおもわれるのである。このようなことは本書の第十六巻において「四百年」について論じたのと同様であって、(五)それというのは、じっさいにはそれよりもいくらか多かったためであるが、にもかかわらず「四百」とよばれたからである。よく注意して見る人があるなら、こういうことは聖書にしばしば見いだされるのである。

（一）本巻第八章および「ダニエル書」一二の七参照。
（二）「ヨハネの黙示録」二〇の六以下。
（三）同上、六の九。
（四）本巻第九章参照。
（五）本書第十六巻第二十四章。この箇所では、イスラエルの民がエジプトにおいて奴隷の状態に置かれたことがらをめぐって、アブラハムに告げられた「四百年」という預言にかんする解釈が論ぜられた。

第十四章

悪魔とそれに追従する者たちに対する断罪、および、すべての死者の体のよみがえりと最後の審判の報いについて

さて、このように最後の迫害について言及されたのち、最後の審判の段になって悪魔と敵対する国とがその頭（かしら）と共に受けるであろうすべてのことを簡潔に要約しているのである。すなわち、「かれらを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには獣も偽預言者もいて、かれらは世々かぎりなく苦しめられるであろう」(一)。――獣というのは、さきにわたしが述べたように、不敬虔な国そのものと解してまちがいないであろう(二)。他方、その偽預言者というのは、反キリスト者か、あるいはその見せかけである像かであろう。それについては同じ箇所に

おいて述べたのであった。

これらののち、記者は、最後の審判そのものについて要約的に説明しているのである。それは、死者の第二の復活、すなわち身体のそれにおいておこなわれるものであって、それがいかなるものであるかをかれに啓示されたとおりに、「わたしは、大きな白い御座があり、そこに座しておられるかたを見た。天も地もその御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった」(三)と記している。かれは、「わたしは、大きな白い御座があり、そこに座しておられるかたを見た。天も地もその御顔の前から逃げ去った」とはいっておらないのである。このことはまだそのときに、つまり、生ける者と死せる者とに対して審きが下される以前に、おこらなかったからである。そうではなく、かれは、「わたしは、御座に座しておられるかたを見た。天も地もその御顔の前から逃げ去ったが、しかし、それのあとであった」といっているのである。

じっさい、審判が実行されたのち、新しい天と新しい地とが存在しはじめるとき、この天と地とは存在しなくなるのだからである(四)。それというのは、事物の変化というものは、この世界の完全な無化によるのではないからである。だからして、使徒は、「この世の有様(ありさま)は過ぎ去るからである。わたしは、あなたがたが思い煩わないようにしてほしいとおもう」(五)といっているのである。したがって、過ぎ去るのは外的な姿なのであって、自然本性なのではないのである。このようなわけで、ヨハネは、「わたしは御座に座しておられるかたを見た。天も地もその御顔の前から——このことはのちにおこったことであるが——逃げ去ったのを見た」といって、それにつづけていっている。「また、わたしは死者たちを、大いなる者も小さい者も共に見た。

そしてもろもろの書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれたのであった。それは各人にとっての生命(いのち)の書であった。死者たちはこの書物に記されているところにしたがってその行いに応じてさばかれた」(六)。

かれは、もろもろの書物が開かれもう一つの書物が開かれたといっているのであるが、この一つの書物がどのようなものであるかについて黙ってはいなかった。「それは各人にとっての生命の書であった」とかれはいっている。それゆえ、かれがさきにあげている「もろもろの書物」というのは、旧約と新約の聖なる書物と解されるのであって、それらは、神がご自身の掟として果たされるよう何をお命じになったかを示されるためであった。他方、各人にとっての生命の書であるところのその書においては、各人がこれらの掟の何を果たさなかったのか、あるいは果たしたのか、示されるのである。もしもこの書物が嵩(かさ)で考えられるとするなら、だれがその大きさや長さを測ることができるであろうか。すべての人のすべての生を包含する書物を読むことができるために、どれだけの時間がかかるであろうか。

あるいは、人びとの数と同じだけの天使たちが存在して(七)、各人にあてがわれた天使から自分の生について説明をきくのであろうか。そうであれば、すべての人に一つの書物があるのではなく、一人一人にとってそれぞれ一つの書物があることになるであろう。ところが、聖書のこの箇所は一つの書であると考えさせようとしている。「もう一つの書物が開かれた」といっているからである。したがって、これは一種の神的な力という意味に解されねばならない。それは、各人の業(わざ)が、善き業も悪しき業もことごとく、その記憶によびおこされて、おどろくべき

速さで精神の直観に現前し、それによって、それにかんする知が各人の良心を責めたりゆるしたりさせるのである(八)。そのようにして、すべての者がそれぞれ同時に審かれるわけである。

このような神的な力こそ、「書物」という名で受けとられているにちがいない。じっさい、それはすべての業を、それをおこなった者に想起させ、それらのことがすべて、ある意味で「読まれる」のだからである。ところで、審きを受けるべき死者たちが、大いなる者も小さい者も、それがだれであるかを明らかにするために、記者(ヨハネ)は、あたかも見すごした点に――というよりも後まわしにした点に――立ちかえるかのように要約的にいっている。「海はそのなかにいた死人たちを運び出し、死も黄泉(よみ)もそのなかにいた死人たちを返した」(九)。これは、死者の審きに先立っておこなわれるにちがいないが、それにもかかわらず、審判についてさきに語られたのであった。だからして、わたしは、記者はさきに語らずして通り過ぎた点に要約的に立ちかえっているといったのである。

けれども、いま、記者は出来事の順序をまもって、その順序を明らかにするためにそれが語られるべき場所でくり返すのであって、そこでは、さばかれるべき死者について、記者がすでに語ったところのことをいっそう適切な仕方で語っているわけである。すなわち、かれは「海はそのなかにいた死人たちを運び出し、死も黄泉もそのなかにいた死人たちを返した」といったのち、かれがすこし先に述べたこと、つまり、「おのおのその業(わざ)に応じてさばかれた」と付け加えているのである。これは、さきに「死者たちはその行いに応じてさばかれた」ということと同じである。

(一) 「ヨハネの黙示録」二〇の一〇。
(二) 本巻第九章。
(三) 「ヨハネの黙示録」二〇の一一。
(四) 同上、二一の一参照。
(五) 「コリント人への第一の手紙」七の三一以下。
(六) 「ヨハネの黙示録」二〇の一二。
(七) 守護天使のことであろう(「マタイによる福音書」一八の一〇参照)。
(八) 「ローマ人への手紙」二の一五参照。
(九) 「ヨハネの黙示録」二〇の一三。

第十五章

海と黄泉(よみ)とが審きのために引き渡す死者とはだれであるか

ところで、海のなかにあって海が運び出した死者とはだれであるか。というのは、海で死ぬ者たちが黄泉にいないわけではないからであり、かれらの身体が海のなかに保存されるわけでもなく、さらにいっそう不合理なことであるが、善き死者たちが海のなかに保たれ、悪しき死者が黄泉において保たれていたわけでもないからである。しかし、ある人びとはきわめて適切な想定をおこなったのであって、それは、ここのところで海というのはいまのこの時代を表示して

いる、というものである。それゆえに、記者が、キリストがこの世において身体の構造をもっているのを見いだされるところの者たちも、復活するであろう者たちと同時に審かれねばならないという事実を示そうとしているのなら、かれ(記者)は、身体をもつ者をも「死者」とよんだのだということである。つまりそれは、「あなたがたはすでに死んだ者であり、あなたがたの生命(いのち)はキリストと共に神のうちに隠されている」[一]といわれている善き者も、そして、「死人を葬ることは死人にまかせておくがよい」[二]といわれているところの悪しき者をも含めてそのようによんだということである。

かれらが死者とよばれるのはまた、かれらが可死的な身体をもつからでもある。だからして使徒は、「からだは罪のゆえに死んでいても、霊は義のゆえに生きているのである」[三]といっているのである。かれは、いまだ身体をもって生きている人間には、両者、すなわち死んだ身体と生命であるところの霊とが存することを示している。すくなくともかれは「可死的な身体」とはいっておらず、「死んだ身体」といっているのである。もっとも、そのすこしあとのところでは、その身体のことを一般にそうよばれているように「可死的な身体」とよんではいるのであるが——。

それゆえ、「海はそのなかにいた死人たちを運び出した」というのは、その海のなかに、すなわち、いまのこの時代のうちにいるところのすべての者を差し出したということになろう。なぜなら、かれらはまだ滅び去っていないからである。記者は、「死も黄泉もそのなかにいた死人たちを返した」といっている。「海が運び出した」というのは、死者たちはその見いださ

れたとおりの状況において審きの場にいたからであるが、それにたいして、「死も黄泉も返した」というのは、死者たちはすでにそこから離れ出ていたところの生によび返されたからである。

なおまた、「死」とか「黄泉」とかが語られるだけでは不十分であって、両方が共に用いられているのは理由のないことではないであろう。「死」といわれているのは、ただ死だけを蒙り、黄泉を蒙ることのなかった善き者に関連しているのであろう。他方、「黄泉」といわれているのは、黄泉において罰をも課せられた邪悪な者に関連しているのであろう。というのは、つぎのことを信じることが不合理ではないとおもわれるなら、——すなわち、来たるべきかたであるところのキリストへの信仰を保持していた昔の聖徒たちは、不敬虔な者たちの受ける苦しみからはるか遠くに離れていたのであるが、しかし、キリストの御血とキリストがその場所にまで下って来られてそこからかれらを救い出すまでは、かれらはやはり下界にいたのだということ、——このようなことを信じることが不合理でないとおもわれるなら、そのばあいには、かれらが身体を受けとり、報いとして与えられる善きものを受けるときまで、それら善き信仰者たちはキリストの血を代償として注がれて、贖（あがな）われて、かの黄泉を経験しないということは確かであるからである。

さて、「かれらはおのおのその業（わざ）に応じてさばかれた」といってのち、記者は、どのようにして審かれたかを短く付け加えて「そして、死も黄泉も火の池に投げ込まれた」（四）とつづけているのである。これらの用語によってかれは悪魔——悪魔は死と黄泉の罰の苦しみとの創作者で

あるがゆえに――および悪魔と共にダエモンらの社会全体を表わそうとしているのである。このことは、すでにあらかじめ先まわりしていっそう明瞭に、「かれらを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた」(五)といわれたのであった。

しかし、さきのところで、いくらか不明瞭に「そこには獣も偽預言者もいて」と加えて述べられたところのことは、ここではいっそう明瞭に、「この生命の書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた」(六)といわれているのである。この書は、神が忘却によって何かのまちがいをおこされることのないために神の記憶を新たにするようなものではない。それは、永遠の生命が与えられるであろうところの人びとの予定を象徴しているのである。というのは、神はそれらの人びとの存在を知っておられないためにこの書によってかれらを知るようになるわけではないからである。神の、かれらについてのけっして誤ることのない予知が生命の書にほかならないのであって、かれらはそこに記されている、すなわち、予知されているのである。

(一)「コロサイ人への手紙」三の三。
(二)「マタイによる福音書」八の二二。
(三)「ローマ人への手紙」八の一〇。
(四)「ヨハネの黙示録」二〇の一三、一四。
(五)同上、二〇の一〇。
(六)同上、二〇の一五。

第十六章

新しい天と新しい地について

さて、ヨハネは、悪しき者はやがて審かれねばならないと預言したその審判について述べ終わって、いまや善き人びとの審きについても語らねばならない。そこで、かれは、主によって簡潔に「かれらは永遠の刑罰を受けるであろう」といわれたことを説明してのち、次いで、それにつづく「正しい者は永遠の生命に入るであろう」(一)といわれているところのことを説明するのである。かれは、「わたしはまた、新しい天と新しい地とを見た。さきの天と地とは消え去り、海もなくなってしまった」(二)といっている。

このことは、それよりまえに先まわりして「わたしは御座に座しておられるかたを見た。天も地もその御顔の前から逃げ去った」といったその順序でおこるのであろう。(三)じっさい、生命の書にその名が記されていない者たちは審きを受け、永遠の火のなかへ投げ入れられたそのとき(この火がどういう種類のものであって、世界ないし万物のどの部分に位置するのかということは、神の霊がそれをだれかに示してくださるということでもないなら、おそらくだれも知らないであろうとわたしは考えるのであるが)、この世界の姿は世界中の火の燃焼によって消え失せることになるのであって、それは、かつて世界中の水の氾濫によって洪水がおこったのと同じである。

したがって、わたしが上に述べた世界中のその火の燃焼によって、わたしたちの朽ち果てる身体に適合していた可滅的な諸元素のもろもろの性質は燃えてまったく滅びるであろう。そしてまた、(もろもろの性質を担う)実体そのものは、おどろくべき変化によってわたしたちの不死なる身体に適した性質を得るであろう。それはすなわち、世界はいまや新しくされてよりすぐれたものとなって、新しくされてよりすぐれたものとなった人間に、肉においても、具合好く適合されるためなのである。ところで、「海もなくなってしまった」といっているのは、それが、ひじょうに激しい熱によって干上がってしまったことであるか、それとも海もよりすぐれたものに変えられたことであるか、簡単にはいえない。たしかに、わたしたちは、同じ書において「水晶に似た透明な海のようであった(四)」とあるのを見る以外に、新しい海についてどこかで何かを読んだ記憶がないのである。

しかし、その箇所では、この世の終わりについて語られたのでもなければ、また、字義どおりの意味によって表現しようとしたのでもなく、海らしきものを表現しようとしたとおもわれる。じっさい、預言的な語り方というものは本来の意味による言葉と比喩的な表現とを混ぜ合わせることを好むのであって、そのようにして、そこにいわれているところのことをある意味で包み隠すのであるが、ここでも、「海もなくなってしまった」というのは、さきに「海はそのなかにいた死人たちを運び出した」といった、その「海」にかんするものであるかもしれない。すなわち、まさにそのときから、死すべき者(人間)の生は、もはや、海ということばで象徴づけられているところの騒々しく荒れ狂うこの世であることを止めるのである。

(一) 「マタイによる福音書」二五の四六。
(二) 「ヨハネの黙示録」二一の一。
(三) 同上、二〇の一一、本巻第十四章参照。
(四) 同上、四の六。

第十七章

終末ののちの新しいエルサレムの栄光について

ヨハネはいう。「また、大いなる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意をととのえて、神のもとを出て、天から下ってくるのを見た。また、御座から大きな声が叫ぶのをきいた。『見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、そして神みずから人と共にいますであろう。神は人の目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。さきのものがすでに過ぎ去ったからである』。すると、御座に座しておられるかたがいわれた。『見よ、わたしはすべてのものを新たにする』(一)」。

この都(キウイタス)は天から下ってくるといわれる。というのは、神は恩恵によってそれをおつくりになったのであって、その恩恵は天上のものだからである。このことのゆえに、神はその都に向

かって、イザヤをとおして「あなたをつくったわたしは主である」[二]といわれるのである。たしかに、この都はそのはじめから天から下って来たのである。まさにそのときから神の恩恵は上より下り来たるのであって、その恩恵は、天から送られた聖霊における再生の洗いきよめをとおして、[三]その市民たちの数を増し加えていくのである。

けれども、神の審き――それは神の御子イエス・キリストによっておこなわれる最後の審きとなるであろう――をとおして、その都の光輝は神の贈り物によって現れ出る。それはあまりにも偉大で新しいものであるので、古き時代のいかなる痕跡もあとをとどめることがない。わたしたちの身体でさえ、その古い腐敗と可死性から不朽と不死性へと移るのであるから――[四]。

じっさい、このことを、(聖徒たちが)自分たちの王と共に千年間支配するその期間に関係することがらであると受けとるのは、あまりに厚かましいことであるようにわたしにはおもえるのである。記者はこのうえもなく明瞭に、「神は人の目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない」と語っているからである。しかし、この死すべき身の艱難のただなかにあって、聖なる民はいうまでもなく、聖徒たちのひとりひとりが、この世の涙も悲しみももたずしてこの生を生きるとか、生きるであろうとか、生きて来た、などと厚かましくも主張して頑固な議論を好むほど馬鹿げて、気狂いじみている者がだれかあろうか。むしろ、聖なる人であればあるほど、そして、いっそう聖なる者として完成しようという願望が深ければ深いほど、ひとは、祈るときに多くの涙を流すのである。

上なるエルサレムの民の声をきかないであろうか。――「わたしの涙は昼も夜もわたしの食

物であった（五）」、「夜ごとに涙をもってわたしの寝床をただよわせ、わたしのしとねを濡らした（六）」、「わたしの嘆きはあなたに隠れることはない（七）」、そして、「わたしの悲嘆はさらにひどくなった（八）」。

　これらの人びとは、重荷を負って苦しみもだえている神の子ではないであろうか。かれらは脱がされることを願うのではなく、その上に着せられることを願うのであって、それによって死すべきものが生命に呑み込まれてしまうためなのである（九）。

　また、かれらは、霊の最初の実をもっているが、心のうちでは呻きながら養子とされることを、すなわち自分の身体のあがなわれることを待ち望んでいる者ではないであろうか（一〇）。さらに、使徒パウロは上なるエルサレムの市民ではなかったであろうか。かれが、肉による自分の兄弟であるイスラエル人のために深い悲しみと絶えざる痛みとを感じたとき、なおさらその市民ではなかったであろうか（一一）。その都において「もはや死もない」のはいつであろうか。たしかにそれはただ、「死よ、おまえの勝利はどこにあるか。死よ、おまえのとげはどこにあるか。死のとげは罪である（一二）」といわれているときではなかろうか。

　疑いもなく、「どこにあるか」といわれるまさにそのときに、罪はもはや存在しなくなるであろう。しかしながら、わたしたちの現在の状態においては、かの都のだれか無力な市民のようであるのではなく、かえってこのヨハネ自身がその手紙のなかで「もしも罪がないというなら、わたしたちは自分を欺いているのであって、真理はわたしたちのうちにはない（一三）」のである。『黙示録』とよばれるこの書には、たしかに多くの不明瞭なことばがあって、それは読む者の

心を訓練するように意図されたものである。また、それが明瞭なためにいくらかの努力をすれば他のことも探知しうるに至るようなことばもある。これはこの記者が同じことがらをさまざまな仕方でくり返して語っているので、かれが異なったことがらについて語っているかのように見えるからであるが、じっさいには、よく吟味すれば、同じことがらを扱うのに際して異なったいいかたを用いていることがわかるのである。

しかしながら、「神は人の目から涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない」といっているこれらのことばには、このようなことはない。ここでは、来たるべき世および聖徒たちの不死性と永遠性とがきわめて明らかとされているのである(じっさい、これらの苦しみが存在しなくなるのは、そのとき、まさにそのときのみだからである)。したがって、もしもわたしたちがこのことばを曖昧なものであると考えるなら、わたしたちは聖なる書物のうちにいかなる明瞭なことがらも求めたり読んだりすることはできないであろう。

(一) 「ヨハネの黙示録」二一の二―五。
(二) 「イザヤ書」四五の八。
(三) 「テトスへの手紙」三の五参照。
(四) 「コリント人への第一の手紙」一五の五三参照。
(五) 「詩篇」四二の三。
(六) 同上、六の六。

（七）同上、三八の九。
（八）同上、三九の二。
（九）「コリント人への第二の手紙」五の二以下参照。
（一〇）「ローマ人への手紙」八の二三参照。
（一一）同上、九の二参照。
（一二）「コリント人への第一の手紙」一五の五五以下。
（一三）「ヨハネの第一の手紙」一の八。

第十八章

最後の審きについてのペテロの預言

さて、いまやわたしたちは使徒ペテロがこの審きについて何を書いているかを見ることにしよう。「最後の日に」とかれはいう。「あざける者らがあざけりながら出て来て、自分の欲情のままに生活し、『主の来臨の約束はどうなったか。われわれの父祖たちが眠りについてから、すべてのものは創造のはじめからそのままであって変わってはいない』というであろう。かれらはことさらにつぎのことを認めようとはしないのである。すなわち、古い昔に天と地とが存在し、神の御言（みことば）によって水から出、水によってつくられたのであるが、その時の世界は御言に

よってその水で覆われて滅んでしまったのである。しかし、いま存在している諸天と地とは神の同じ御言によって保存され、審きの日、不信仰な者が滅ぼされる日まで、火で焼かれるためにそのまま保たれているのである。

けれども、愛する者たちよ、このひとつのことを忘れてはならない。主にあっては、一日は千年のごとくであり、千年は一日のごとくであるということを。ある人びとは主が遅いとおもっているが、主はその約束の実行を遅らせておられるのではない。主はあなたがたのために長く忍耐しておられるのである。というのは、主はだれかが滅びることをのぞんではおられず、すべての者が悔い改めに至ることをのぞんでおられるからである。しかし、主の日は盗人のように来るであろう。そしてその日、天は大きな音と共に過ぎ去り、天体は焼け崩れ、地とその上に造られたすべてのものは焼きつくされるであろう。

このように、これらはみな崩れ去っていくものであるから、あなたたちは自分がどのような者であったらよいか、よく考えねばならない。主の日の到来を熱心に待ち望むあなたがたは、生活と敬虔とをきよく保たねばならない。その日には天は焼え崩れ、すべての天体は焼け失せてしまうであろう。しかし、わたしたちは、神の約束にしたがって、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいるのである」[一]。——ここでは、かれは死者の復活については何も語らなかったが、この世界の壊滅については十分に語っている。さらにまた、洪水の前におこった(創造の)出来事に言及するとき、ある意味でこの世の終わりにやってくるであろう滅亡がどれほどのものであるとわたしたちが信じるべきであるかについて注意を促しているようにおもわ

れる。

じっさい、かれは、そのときにはそれまで存在していた世界は、地の圏域のみならず天も滅びたといっているのである。疑いもなく、わたしたちはこの天を大気と解するのであって、その場所と広がりとを水が増大して覆いつくしたのであった。それゆえに、それは風の多い大気の全体ないしはほとんど全体であって（かれはそれを「天」、あるいはむしろ「諸天」といっているのであるが、たしかに低い部分のことを指しており、太陽や月、またもろもろの星が位置を占めているもっとも高い部分のことではない）、それは湿気のある性質へと転換されて、地と共に滅びたのであった。まちがいなく、以前の相貌は洪水によって取り去られたのである。

かれは、「しかし、いま存在している諸天と地とは神の同じ御言によって保存され、審きの日、不信仰な者が滅ぼされる日まで、火で焼かれるためにそのまま保たれているのである」といっている。

したがって、天と地、すなわち洪水によって滅ぼされた世界の代りとして置かれた世界は、かの水からは取って置かれて、審きの日、不信仰な者が滅ぼされる日まで、最後の火で焼かれるために保存されているのである。かれは、人間もある種の大きな変化によって滅亡するであろうが、しかし、その本性は永久の罰の苦しみのうちにではあるが存続する、と迷うことなく言明するのである。

おそらく、だれかがこのように尋ねるかもしれない。審判がなされたあと、新しい天と地が取って替るまでこの世界が燃えるのなら、聖徒たちは身体をもっており、それゆえに何らかの

物体的な場所におらねばならないのであるから、いったいかれらはまさにこの大火のときどこにいるのであろうか。――わたしたちは、かれらは高い領域にいるであろうと答えることができる。洪水の波がそこまで達しなかったのと同じように、そこまではかの大火の炎は上昇しないのである。じつにかれらは、自分の欲するところにいることができるような性質の身体をもつのである。しかし、かれらは不死となり腐朽を免れているのであって、かの大火の火を恐れることもないであろう。三人の人物の朽ち果てるべき可死的な身体も、燃え上がる炉のなかで生き残り損傷を受けることがなかったのであった(二)。

(一)「ペテロの第二の手紙」三の三―一三。

(二)「ダニエル書」三の一三以下参照。三人のユダヤ人、すなわちシャデラク、メシャク、およびアベデネゴは、偶像崇拝を強要したバビロニアのネブカデネザル王に捕えられて燃える炉のなかに投げ込まれたが、三人は何の害も受けることなく火のなかから出て来たとされている。

第十九章

反キリストの出現について使徒パウロはテサロニケ人あてにどのようにうったえたのであるか

この巻があまりに長いものになってしまわぬよう、神のこの最後の審判についての福音書や

使徒の多くの見解を見過さねばならなかったことをわたしは承知している。けれども、使徒パウロがテサロニケ人あてに書いた手紙について触れないで通り過ぎるわけにはいかない。――「さて、兄弟たちよ、わたしたちの主イエス・キリストの来臨とわたしたちがみもとに集められることについて、あなたがたにお願いすることがある。霊やことばやわたしたちから出たという手紙によって主の日がすでに迫っているという者があっても、心を動かされたり脅えたりしてはいけない。だれがどんなことをしても、それに惑わされてはならない。まず背教がおこり、罪の人、滅びの子が反逆者として現れるまでその日は来ない。かれは、すべて神とよばれたり拝まれたりするものの上に自分を立て、みずから神の宮に座して自分を神であるかのように示すのである。

わたしがまだあなたたちのところにいたとき、これを告げたのをあなたがたは憶えていないのか。あなたがたが知っているとおり、かれが自分に定められたときになってから現れ出るよう、いまかれを引き留めているところのものがある。不義の秘密の力はすでにはたらいているのである。ただそれは、いま引き留めているものが取り除かれるときまでである。そのとき、不義なる者が現れるのである。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、ご自身の来臨の輝きによって滅ぼされるであろう。不義なる者が来るのはサタンのはたらきによるものであって、あらゆる偽りの力やしるし、不思議、そしてあらゆる不義の惑わしとを、滅びに至る者たちにたいしておこなうであろう。かれらは、救いに至る真理への愛を受けいれなかったからである。神はかれらのうちに惑わしの力をおよぼされるが、それは、かれらが偽りを信じるためである。

真理を信じないで不義に協同していたすべての者が審かれるためである」[一]。

パウロがここで反キリストについて述べていること、そして、審きの日(かれはそれを「主の日」とよんでいる)の到来は、かれが背教者――いうまでもなく、主なる神からの背教者のことであるが――とよぶところのかの者がまずはじめにやって来るのでなければおこらないということについて語っていることはだれも疑うことはできないであろう。もしもこのような呼称がすべての不敬虔なる者にも当てられるのが正当であるのなら、ましてや、反キリストにつ いてはこれが当てられるであろう。しかしながら、反キリストが座すことになっている「宮」についてはここでは不確実である。それがソロモン王によって建設された神殿の廃墟であるのか、それともじっさいに教会であるのか――。というのは、使徒は、もしも何らかの偶像やダエモンの神殿のことを意味したのなら、「神の宮」とはいわないであろうからである。

そのようなわけで、ある人びとはここのところで反キリストというのは、その頭自身のことではなく、かれの体の全体、すなわち、自分たちの頭であるかれ自身と共にかれに属する多数の者たちのことであると解しようとするのである。かれらはまた、ラテン語で「神の宮に」というのでなく、ギリシア語の元来の意味におけるように「神の宮として座す」[二]というのがより正しいと見なしているのであって、かれ自身(反キリスト自身)が、まるで「教会」たる「神の宮」であるかのごとくにいるというわけである。それはちょうど、わたしたちが「かれはまるで友人のようにすわっている」[三]というのを「かれは友人としてすわっている」[四]といったり、一般にこのようなかたちで語るのに似ているということである。しかし、「あなたがたが知って

いるとおり、いまかれを引き留めているところのものがある」ということについては、「かれが自分に定められたときになってから現れ出るよう」かれを引き留めているものが何であるか、何がかれの遅滞の原因であるか、かれらは知っているのであって、かれらがそれを知っているがゆえに、パウロはあからさまに語ろうとはしなかった。だからして、人びとが知っていたところのことを知らないわたしたちは、使徒が何を考えているのか、努力を傾けてそれを知りたいとおもうが、知ることができない。とりわけ、これに加えて語っている文言はいっそう不明瞭だからである。「不義の秘密の力はすでにはたらいているのである。ただそれは、いま引き留めているものが取り除かれるときまでである。そのとき、不義なる者が現れるのである」というのはどのような意味なのであろうか。わたし自身は、パウロがどのような意味のことをいったのかよくわからないということを認めよう。しかし、わたしが読んだりきいたりすることのできた人びとの推測については黙さないでおこうとおもう。

ある人びとは、これらのことがローマ帝国にかんしていわれたものであると考える。(五) そして、使徒パウロが明白に書くことを渋ったのは、ローマ帝国が永久に存続することを願っているのに、その帝国に害悪のおこることを望んでいるのだ、という中傷を招くことのないためであったと考えるのである。つまり、「不義の秘密の力はすでにはたらいている」といったのはネロに関連づけて理解されることを欲したのだということになるのである。ネロのもろもろの行為は、すでに反キリストのそれであるようにおもわれていたからである。(六) そこからして、いくらかの人びとは、ネロは復活して反キリストになるであろうと推測する。一方、他の人びとは、

ネロは殺されたのではなく、むしろ殺されたのだとおもわれるよう、引きさらわれたと考えている。(七) そして、その死が想定されたその時期にかれはまだ生きており、力をおよぼしていたその時代の活力のうちに潜伏しているのだと考えるのである。それは、かれにとって都合のよい時に現れ出て、その王国において復位されるまでつづくのである。

しかし、わたし自身にとっては、このようなことを考える人びとのこれほどの推測は、ひじょうなおどろきである。とはいえ、使徒が「ただそれは、いま引き留めているものが取り除かれるときまでである」というとき、これが、ほかならぬローマ帝国に関連するものと想定されるのは不適当ではない。つまり、いわば「いま支配しているものが取り除かれるときまでである」、――すなわち、取り除かれて奪い去られるときまでであるというような意味においてである。「そのとき、不義なる者が現れるのである」というのは、これが反キリストを表示していることを疑う者はだれもないであろう。

しかしながら、また他の人びとは、「あなたがたが知っているとおり、いまかれを引き留めているところのものがある」といっていること、および「不義の秘密の力」というのは、ただ邪悪な人びとと教会のうちにいる偽善者たちとにのみ関連していると考えるのである。これらの者たちは反キリストにとって大きな民を形成するほど数が増大するときまで存在する。それは隠されているとおもわれるがゆえに「不義の秘密の力」であるというのである。ただし、そのように考える人びとは、信仰者たちが保持している信仰を堅く保つよう使徒が勧告しているのだと考えているのである。そこで、「ただそれは、いま引き留めているものが取り除かれる

ときまでである」と使徒がいっているのは、「いまは隠されている不義の秘密の力が教会から離れ去るまで」という意味になるであろう。

この人びとは、福音書記者ヨハネがその手紙のなかでつぎのようにいっているところのことが、この「秘密の力」に関連していると見ているのである。「子どもたちよ。いまは最後のときである。あなたがたがかねて反キリストが来るときいていたように、いまや多くの反キリストが現れてきた。それによって最後のときが来たことをわたしたちは知るのである。かれらはわたしたちのうちから出て行ったけれども、かれらはわたしたちに属する者ではなかった。もしもわたしたちに属していたのなら、かれらはわたしたちと共に留まっていたであろう(八)」。――それゆえに、ヨハネが「最後のとき」とよんでいるそのとき、そのときの終わる前に多くの異端者たちが教会から出て行ったのであって、かれはそれを多くの反キリストといったのであった。同様に、まさにそのとき、かの最後の反キリストに属するすべての者が教会から出て行くのであろう。反キリストが現れるのはそのときであろう。

このようなわけで、使徒の不明瞭なことばについて、いろいろな人たちが異なった推測をおこなっている。にもかかわらず、すくなくともかれが述べたことに疑うことのできない点がある。それは、魂において死んだ者たちを誘うためにまずキリストの反逆者である反キリストがやって来るのでなければ、キリストは生ける者と死せる者とを審くために来られないであろうということである。もっとも、かれらが反キリストによって誘われるのは、いまは隠されている神の審きによるものではあるが。じつに、使徒がいうとおり、「不義なる者が来るのはサタ

ンのはたらきによるものであって、あらゆる偽りの力やしるし、不思議、そしてあらゆる不義の惑わしとを、滅びに至る者たちにたいしておこなうであろう」。

　すなわち、そのときには悪魔は解き放たれて、かの反キリストをとおして力の限りをつくして不思議なことをはたらくであろう。しかし、それは虚偽をはたらくのである。ただし、「偽りの力やしるし、不思議」といわれていることについてつぎのことがよく疑問となる。つまり、これは、悪魔が幻影とか、じっさいにはたらいてはいないことをはたらいているかのようにおもわせて、死すべき人間の感覚を欺こうとするからであるか、それとも、じっさいに不思議なしるしがあるとしても、悪魔の能力について無知であるため、それらがただ神の力によってのみ成し遂げられうるのだと信じる者たちを欺瞞へと引きずり込むからであるか、ということである。そして、とくに悪魔がそれまではけっして持っていなかったような権能をそのときに受けとったときにそうである。

　じっさい、天から火が下って来て、聖なるヨブのあのような大きな家族とあのような多くの家畜とを一挙にして打ち払い、また渦巻く風がかれの家を吹きとばし転倒させ、その子どもたちをも殺したのであるが、それらのことは幻影ではなかった。[九] すくなくともそれは悪魔の業であった。神がかれにこの力をお与えになったのであった。それゆえ、これらの「偽りの力やしるし、不思議」といわれているのは何のためであるかは、むしろ、そのときになれば明らかとなるであろう。けれども、それが何のためであるとしても、そのしるしや不思議によって惑わされる者は、惑わされて然るべき者であるのであって、それというのも、「かれらは救いに至

る真理への愛を受けいれなかったから」である。さらに使徒は躊躇することなくそれにつづけて言明する。

――「神はかれらのうちに惑わしの力をおよぼされるが、それは、かれらが偽りを信じるためである」。すなわち、神が「惑わしの力をおよぼされる」のは神ご自身の正しい決定によるものであって、悪魔のほうはそれらのことを不義と邪悪とに満ちた意図から果たすのであるけれども、神は悪魔にそのような所業を許容されるのである。そこで、「真理を信じないで不義に協同していたすべての者が審かれるためである」とパウロはいうのである。それゆえに、これらの者たちは審かれて誘われ、誘われて審かれるであろう。しかし、審かれて誘われるのは、あの隠されてはいるが公正な、そして公正であるが隠されている神の審きによるのであって、その審きは理性的被造物の罪のはじめから審くことをけっして止められなかったところのものである。他方、誘われて審かれるのは、もっとも公正に審かれるであろうキリスト・イエスをとおしておこなわれる最後の、そして明白な審きによるであろう。このかたは、もっとも不公正な仕方で審きを受けられたのであるけれども。

(一)「テサロニケ人への第二の手紙」二の一―一二。
(二) in templum Dei sedeat. εἰς τὸν ναὸν…καθίσαι.
(三) sedet velut amicus.
(四) sedet in amicum.
(五) ヒエロニュムス『書簡』一二一の一一参照。

(六) ネロを反キリストと同一視することは、初代教会教父たちのあいだで共通の見解であったと考えられる(ヒエロニュムス『ダニエル書注解』一一参照)。

(七) 一世紀の歴史家タキトゥスは、ネロにかんするこのようなことがらは、東方においてひろく人びとに信じられていたと述べている(『歴史』二の八)。また、同じ時代の歴史家スエトニウスは、ネロにかんして、かれはまもなくローマに帰って政敵に復讐するであろうと公言する者がいたと伝えている(『皇帝伝』ネロの項五七参照)。

(八) 「ヨハネの第一の手紙」二の一八以下。

(九) 「ヨブ記」一の一六以下参照。

第二十章

使徒はテサロニケ人あての第一の手紙のなかで死者の復活についてどのように述べているか

しかし、ここでは使徒は死者の復活については何も語っていない。他方、同じテサロニケ人あての第一の手紙のなかで、かれはつぎのように記しているのである。――「兄弟たちよ。眠っている人びとについて無知でいてもらいたくない。希望をもたないほかの人びとのようにあなたがたが悲しむことのないためである。わたしたちは、イエスが死んで復活されたことを信

じている。そうであれば、神はイエスにあって眠っている人びとをもイエスと共に導き出してくださるであろう。わたしたちは主のことばによってあなたがたにこのことをいわねばならない。すなわち、主の来臨のときまで生きながらえて残るわたしたちが、眠った人びとよりも先になるようなことはけっしてないであろうということである。主ご自身が大天使の声と神のラッパのひびきのうちに号令のことばで天から下ってこられるのである。そして、キリストにあって死んだ人びとがまず最初によみがえり、それから、生き残っているわたしたちがかれらと共に雲に包まれて空中でキリストと会うのである。このようにして、わたしたちはいつも主と共にいるであろう」(二)。使徒のこれらのことばは、キリストが来られるときに死者の復活があるであろうことをまったく明らかに示しており、キリストはたしかに生ける者と死せる者とを審くために来られるのである。

ところで、よく問題となるのはつぎのことである。キリストがこの世において見いだされる人びと、つまり、使徒が自分自身およびかれと同時代に生きた人びとになぞらえていっているところの人びとは、けっして死ぬことがないのであるか、それとも、キリストに出会うために、復活した人びとと共に雲のなかに包まれたまさにその時点に、かれらはおどろくべき速さで死を通過して不死へ移るのであるか、ということである。かれらが大気中を通って高く運ばれていくあいだに死んでふたたびよみがえるということが起こりえないとはいえないからである。

わたしたちは「このようにしていつも主と共にいるであろう」といっているところのことを、あたかも大気中に主と共にいつまでも留まっている、とでもいったかのごとくに解してはなら

ない。なぜなら、たしかに主ご自身がそこに留まっておられるわけではないからであって、主は、来られるときにそこを通過なさるであろうからである。じっさい、迎えに出て出会うというのは、やってくる人にたいしてであって、そこにいつまでも残っている人にたいしてではないのである。しかしながら、「このようにして、わたしたちは主と共にいるであろう」というのは、主と共にいるであろうところがどこであっても、わたしたちが不死なる身体を得た者としてであろう。使徒自身が、主がこの世において見いだされる人びとはこの短い時間のあいだに死を蒙り不死性を受けとるのだという意味に考えるようわたしたちに求めており、「キリストにおいてすべての者が生かされるであろう(二)」と語るとき、このような意味を強調しているとおもわれるのである。他の箇所では、まさに身体の復活について「あなたのまくものは、まず死ななければ生かされることはない(三)」といっているのであるが。

そのようなわけであるから、キリストがこの世において見いだされる人びとは、まず死ぬのでなければいかにして不死性を得て生かされるのであろうか。わたしたちは、「あなたのまくものは、まず死ななければ生かされない」ということばはこの点にかんしていわれていると見るからには、そうである。それとも、人間の身体について、死ぬことにおいて、ある仕方でじっさいに土に帰されるというのでなければ「まかれる」ということも正しくないとするなら(人類の父祖たる者が罪を犯して「あなたは塵であるから塵に帰る」という神のあの宣告をもったように(四))、わたしたちはつぎのことを認めねばならなくなるであろう。すなわち、キリストが来られるときに見いだされる人びとがまだ身体から離れ出ていないばあい、使徒のことば

も『創世記』のことばもかれらに当てはまらない、ということである。かれらが高く雲のなかへ連れ去られているなら、そのときにはたしかにまかれないのだからである。かれらがまったく死を経験しないにせよ、あるいは短いときの間に空中で死ぬにせよ、かれらが土のなかに入ったりすることもなければ、土に帰ることもないからである。

しかし、さらに同じ使徒のいったところのことが心に浮かぶのであって、それは、かれが身体の復活についてコリントの人びとに語ったものである。かれは「わたしたちすべては復活するであろう(五)」といっている。あるいはまたこれは他の写本によれば「わたしたちすべては眠るであろう」となっている。それゆえ、死が先におこるのでなければ復活はおこりえないのであって、この箇所では眠りは死と理解するほかないのであるから、もしもキリストによって身体のうちにあるのを見いだされる多くの者が、眠りもしなければ復活もしないというのであれば、どうして「すべての者」が眠ったり復活したりするのであるか。

したがって、わたしたちが、キリストが来られるときに生きているのを見いだされ、かつキリストを迎えに出て出会うためにとらえられて運ばれるところの聖徒たちは、とらえられて運ばれるそのときに、自分たちの身体から離れ去って、すぐに不死なる身体にもどるのだ、と信じるなら、すくなくとも使徒のいずれのことばにも——「あなたのまくものは、まず死ななければ生かされることはない」というときも、あるいは「わたしたちすべては復活するであろう」ないしは「わたしたちすべては眠るであろう」というときも——わたしたちは困難に出くわすことはないであろう。それというのも、かれらもまた、それがどれほどわずかな間においても

てであっても、すくなくともまず死ぬのでなければ生かされることはないであろうからである。それゆえに、かれらは復活に無関係のものとされているわけではなく、まったく短い眠りではあるが、まず眠りが先行するのである。それは短いものであるけれども、やはり眠りなのである。

それではなにゆえにこれら多くの身体がある仕方で空中においてまかれて、そこにおいてすぐに不死と不滅のものとされて再生するということが信じられないもののようにわたしたちにおもわれるのであろうか。復活は「またたく間に」おこり、(六)また、はるか以前の死体の塵がかくも容易に、そして測ることもできないほどの速さで、終わりのない生を生きる肢体にもどるであろうという使徒の明白な言明をわたしたちは信じるのではないのか。また、わたしたちは、聖徒たちが、「あなたは塵であるから塵に帰る」という人間にたいする(神の)宣告を免れているとはおもわないのである。その身体が、かれらの死において土に帰るのではなく、ちょうどかれらがとらえられて運ばれるそのあいだに死ぬように、かれらが大気のうちへと連れて行かれるあいだに復活するのなら——。

たしかに、「あなたは塵に帰る」というのは、「あなたは生命を失って、生命を受ける以前にあなたがあった状態へ帰る」ということ、すなわち、「魂(生命の息)があなたを去ったとき、その魂を受ける以前にあなたがあった状態になる」ということであろう(じっさい、神が人間を生きた魂としておつくりになったとき、生命の息を地の面に吹き込まれたからである)。(七)これはあたかも、「あなたは以前はそうではなかったが、生命づけられた土である。そして、あ

なたは以前はそうであったが、いまは生命のない土となるであろう」というにひとしい。これは、死者のすべての身体の腐敗しはじめる前の状態である。また、あの聖徒たちも、かれらが死ぬとすれば、どこで死ぬとしても、その状態はかれらの身体の条件でもある。しかし、かれらのばあいには、生命を失うときにそれをただちに受けるであろう。このようにして、かれらは「土に帰る」のである。かれらは生きた人間から土になるからであって、これは、灰となっているものが「灰に帰る」とか、老いぼれているものが「老朽化する」とか、粘土から壺となっているものが「壺になる」とか、無数のこれに似た語りかたと同じである。しかしながら、いかにしてこのようなことがおこるのか、いまはわたしたちの乏しい理性では漠然と推察することができるのみである。むしろ、そのことがおこるまさにそのときに、わたしたちは知りうるのであろう。じっさい、わたしたちがキリスト教徒であろうと欲するなら、キリストが生ける者と死せる者とを審くために来られるとき、死者の肉における復活がおこるということを信じなければならぬからである。これがどのようにしておこるのか完全に把握することができないからといって、このことにかんしてわたしたちの信仰が空しくなるわけではないのである。

しかしながら、いまやわたしたちは、さきに約束したとおり、(八) 神のこの最後の審きについて旧約の預言の書が何を告げ知らせたか、十分とおもわれるかぎりで示さねばならない。わたしのおもうのに、わたしたちがこれまでに述べたところのことを読者が助けとして用いるよう骨折ってくださるなら、これについて論じたり説明したりするのにそれほど時間を必要とはしないであろう。

（一）「テサロニケ人への第一の手紙」四の一三以下。
（二）「コリント人への第一の手紙」一五の二二。
（三）同上、一五の三六。
（四）「創世記」三の一九参照。
（五）この句についてはアウグスティヌスのいうように、いくつかの読みかたがあったようであるが、現行の訳では、「わたしたちすべては眠りつづけるのではない」となっている。
（六）「コリント人への第一の手紙」一五の五二参照。
（七）「創世記」二の七参照。
（八）本巻第四章。

第二十一章

預言者イザヤは死者の復活についてどのように語ったか

預言者イザヤはいう。「死者たちは生きかえり、墓のなかにいた者たちはよみがえるであろう。地にいるすべての者はよろこぶ。あなたの露はかれらにとって健やかさであるからである。しかし、不敬虔な者の地は落ちるであろう」(一)。この句のはじめの部分は全体として祝福された者の復活に関連するものである。しかし、「不敬虔な者の地は落ちるであろう」というのは、定罪が下されて没落し、不敬虔な者の身体をも巻き込んで行かれることを意味するものと解さ

れるのがよいであろう。さらに、もしもわたしたちが、善き人びとの復活について何がいわれているのかをより注意深くより厳密に見ようとするなら、「死者たちは生きかえり」といわれているのは第一の復活に関連づけられ、それにつづく「墓のなかにいた者たちはよみがえるであろう」といわれているのは第二の復活に関連づけられるべきである。

ところでさらに、わたしたちが、主がこの世で見いだされるはずの聖徒たちについて尋ねるなら、それにつづけられていることがかれらにふさわしく当てがわれよう。「地にいるすべての者はよろこぶ。あなたの露はかれらにとって健やかさであるからである」。ここのところでいわれる健やかさとは不死性のことであると解するのがもっとも正しい。じっさい、もっとも完全な健やかさというのは、食べ物をいわば日毎の医薬としてそれによって回復されるのではないところのものだからである。

同じように、審きについてまず善き者に希望を与えて、次いでこの預言者は悪しき者に恐れを加えてつぎのように語っている。「主はこういわれる。見よ、わたしは川のようにかれらに向けて平和を流し、みなぎる小川のようにもろもろの国に栄光を与えるであろう。その子どもたちは腕に抱かれて連れて行かれ、膝の上であやされる。

母が子を慰めるように、わたしもあなたがたを慰める。そしてあなたがたはエルサレムで慰めを得る。あなたがたの心はこれを見てよろこび、あなたがたの骨は若草のように勢いづく。主の御手は主を崇める者たちによって知られ、その威嚇は頑なな者に下る。見よ、主は火のように現れて来られる。その車は嵐のようであって、激しい怒りをもってその憤りを注ぎ、火の

焰で破壊される。主の火によって全地は審かれ、そのつるぎによってすべての肉は審かれる。主によって傷つけられる者の数はおびただしい」[二]。

善き者たちにたいする約束においては、わたしたちは、疑もなく「平和の川」というのは主の平和の溢れるような豊かさのことと解すべきであろう。それよりも大きな平和はありえない。いずれにしてもわたしたちは終わりのときにこの平和の水を注がれるのである。このことについてはさきの巻において十分に語ったことであった[三]。この川は至福が約束された人びとに向かって流れるとかれはいっているが、それはじつに豊かなものであって、かの幸福の領域――それは天の領域である――において、すべてのものがこの川によって満たされるのであると解するのである。しかし、その領域から不朽と不死との平和が地上の身体にも流れ入るがゆえに、かれは、この川がある意味で高いところからより低次のところへと流れ入って人間を天使と等しい位置におくため、かれらに「向かう」と述べたのである。また、エルサレムというのは、その子どもと一緒に奴隷となった(母たる)エルサレムのことではなく、それは使徒パウロにしたがって天における永遠なるわたしたちの母(上なるエルサレム)のことと解するのである[四]。

そこでは、この死すべき人間の不安や心配の労苦のあと、小さな子どものようにかの女の肩や膝の上に運ばれて慰められるであろう。わたしたちの経験をこえた至福がわたしたちを抱きあげ、このうえもなく優しい助けの手をもってわたしたちを支えるであろう。そこでは、「わたしたちの心はこれを見てよろこぶ」であろう。預言者は、わたしたちが何を見るのか明らかにしてはいないが、しかしそれは神以外の何であろうか。このようにして福音書の約束がわた

したちにおいて成就されるのである。「心の清い人たちはさいわいである。かれらは神を見るであろうから」[五]。わたしたちは、いまは見ていないが信じる者として、人間の乏しい能力のおよぶところにしたがってじっさいのものよりはるかに劣って比較にならないものであるけれども、それらすべてのものについておもいめぐらすのである。預言者はいう、「あなたがたの心はこれを見てよろこぶ」。——あなたがたはここでは信じ、かしこでは見るであろう。

しかしながら、「あなたがたの心はよろこぶ」といったからといって、かのエルサレムの善きものが霊にのみ属するとわたしたちがおもうことのないように、「あなたがたの骨は若草のように勢いづく」とつづけていっているのである。ここでは、いい落したことを補おうとするのでもあるかのごとくに身体の復活に触れている。なぜかといえば、この復活は、わたしたちが見たときにおこるのではなく、それがじっさいにおこったときに見るであろうからである。事実、かれは、世の終わりに聖徒たちに約束されているところのものをくり返して多様なかたちで述べるあいだに、新しい天と新しい地についてもそれに先立ってすでに述べているのである。

「新しい天と新しい地とがあるであろう。かれらはさきの天と地とについて憶えておらず、それらの記憶が心におもいおこされることもない。しかし、かれらは新しい創造によろこびと歓呼とを見いだす。見よ、わたしはエルサレムをつくってよろこびとし、わたしの民をたのしみとする。わたしはエルサレムをよろこび、わたしの民をたのしもう。かれらのあいだではもはや泣き叫ぶ声はきこえることはない」[六]。そのほか、ある人びとがこの千年のあいだの肉的な

あの生に関連づけようとこころみていることなどである。というのは、預言的な流儀というものは比喩的な表現と字義どおりの表現とが混じりあっているため、ある種の冷静な注意力は有益で健全な努力を傾けることによって霊的な意味に達するのであるが、それにたいして、無学で未熟な精神の持ち主は、肉体的な怠惰や愚鈍さゆえに表面的で文字どおりの意味に満足してしまい、いっそう内的な意味が求められるべきであるとは考えないからである。

当面している箇所に先立って記されている預言のことばについては、これで十分に述べたことであった。わたしたちが横道にそれたこの箇所にもどることにしよう。さて、預言者が「あなたがたの骨は若草のように勢いづく」といったとき、たしかに肉の復活のことを述べようとしているのであるが、しかし、いま想起しているのは善き人びとの復活についてであることを示そうとして、「主の御手は主を崇める者たちによって知られ」と付け加えるのである。この手は、主を崇める者たちを主を軽んじる者たちから区別するかたの手でなければ何であろうか。そこで預言者は主を軽んじる者たちについてことばをつづけて、「その威嚇は頑なな者に下る」というのである。また、他の翻訳者は「不信仰な者に(下る)」といっている。かのとき、主はそれらの者を威嚇されるのではなく、いま威嚇されると語られているところのことが、かのときにじっさいに実現されるのである。

預言者はいう。「見よ、主は火のように現れて来られる。その車は嵐のようであって、激しい怒りをもってその憤りを注ぎ、火の焔で破壊される。主の火によって全地は審かれ、そのつるぎによってすべての人は審かれる。主によって打たれる者の数はおびただしい[七]」。「火」や

「嵐」、また「つるぎ」によって象徴されているのは罰である。じっさい、預言者が、主ご自身は火のように現れて来られるというとき、いうまでもなくそれはその来臨によって罰をもたらされるであろう者たちにたいしていわれている。しかし、「車」(このことばは複数形となっている)は天使たちの奉仕を表わすものと受けとってさしつかえないであろう。

預言者が、全地とすべての肉は主の火とつるぎとによって審かれるといっているが、これはここでは霊的で聖なる人びとのこととしてではなく、地上的な、そして肉的な人びとのこととして理解しなければならない。これらの者たちについては、「かれらのおもいは地上のことである」[八]、「肉のおもいは死である」[九]といわれている。主が「わたしの霊はながくこれらの人びとのうちにはとどまらないであろう。かれらは肉にすぎないからである」[一〇]といわれるとき、このような人びとは主によって一般に「肉」とよばれているのである。しかし、ここで「主によって傷つけられる者の数はおびただしい」とつづけられていることにかんしては、この「傷」によって第二の死がおこるということである。もっとも、「火」とか「つるぎ」とか「傷」は、良い意味に受けとることもできる。

じっさい、主は、自分が地に火を送ることを欲する、といわれたのであった[一一]。また、聖霊が下ったとき舌のようなものが分かれて、かれらには火の焔のように見えたのであった[一二]。さらに、「わたしは地上に平和をもたらすために来たのではなく、つるぎを投げ込むために来たのである」[一三]といわれたのも主であった。聖書は、神のことばはもろ刃のつるぎであるともいっているが、それは二つの契約という二重の刃をもつゆえである[一四]。『雅歌』においても、聖なる教会は

あたかも愛の矢によって射られたかのごとく、愛（カリタス）によって傷つけられた、といっている(一五)。けれども、いま、わたしたちが主は報復なさるべきかたとしていますということを読んだりきいたりするとき、これらのことばがどのように理解されるべきであるかということは瞭然である。

次いで、預言者は、この審きによって滅ぼされる者について――そこでは、これら罪人や不敬虔な者たちについては、旧い律法によって禁じられていた食べ物を象徴としてそれを差し控えなかった者として表示されている(一六)――簡潔に述べたあと、さらに、救い主の最初の到来からわたしたちがいま論じている最後の審判に至るまで導き、新約の恩恵について要約的な説明をほどこして、その話を終えるのである。預言者は、主はご自分がすべての国民（くにたみ）を集めに来たのであり、その国民はやって来てご自分の栄光を見るであろうといわれる、と語るのである。じっさい、使徒がいうように、「すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっている(一七)」からである。

主は、ご自分がかれらの上にしるしを残す、といっておられるのであるが(一八)、これは、かれらがそのしるしにおどろき、主を信じるためであることは確かである。また、救われた多くの者たちを、ご自分の名をきかずその栄光を見たこともないさまざまな民やはるか遠くの島々へ派遣する、といっておられる。その人びとは、もろもろの国民のあいだに主の栄光を告げ知らせ、預言者が語りかけたところの兄弟たち――すなわち、選ばれたイスラエル人の兄弟たち――を父なる神への信仰に導かれるのである。兄弟たちは主にたいするささげ物としてすべての民族から連れ出されて、駄獣や車に乗って（「駄獣」および「車」は神の二種の奉仕者――すなわち

天使あるいは人間――をとおしておこなわれる神のあらゆる種類の助けのことと解されてよいであろう）聖なる都エルサレムへと導かれるのである。この都は、いま、信仰深い聖徒たちにおいて全地にひろく撒かれている。

人びとが神の助けを受けるとき、それは人びとが信じるときである。そして、人びとが信じるとき、それは人びとがやってくるときなのである。主はこれらの人びとを主の家で聖なる歌と共に犠牲をささげるイスラエルの子らにたとえられたのであった。このことはいま至るところ教会がおこなっていることである。主はまた、かれらのなかから人を選んで祭司とレビびととするであろうと約束されたのであった。[一九] しかし、わたしたちはそのことが成就されているのを見ている。というのは、わたしたちは、祭司やレビびとたちが肉と血とによる一族から選ばれていないのを見るからである。それはかつてアロンから出た子孫にしたがっておこなわれていたことであった。しかし、新しい契約のもとに、そしてそこでは「メルキゼデクの位にしたがって」[二〇] 大祭司はキリストであられるのであって、各人が神の恩恵によって賦与される功徳にしたがって選ばれるのである。祭司やレビびとは、しばしばそれに値しない者も獲得するこれらの名称によって評価判定されるのではない。善き者にも悪しき者にも共通することのないあるもの、すなわち、聖性によって評価判定されるのである。

神の見まがうことのないこの上もなくよく知られたこのような憐れみ――それは、現在、教会にも贈与されている――について語られたあと、主は、最後の審判による善き者と悪しき者との分離によっておこるであろう終わりについて約束を下されるのである。主が預言者をとお

して語られて、あるいは預言者が主に代わって伝える者として語るような仕方で、つぎのようにいわれる。——「新しい天と新しい地とがわたしの前でいつまでもながく留まるように、と主は告げられる。あなたの子孫とあなたの名とはながく留まる。月ごとに、安息日ごとに存続することであろう。すべての人がエルサレムでわたしの前に来て礼拝するであろう、と主はおおせられる。そして出て行って、私に叛いた人間たちのしかばねを見る。その蛆（うじ）は死なず、その火は消えることがない。かれらはすべての人の見ものとなるであろう」(二一)。

さて、世が終わりに至るところで預言者はこの書を閉じているのである。じっさい、ある人びとは「人間たちの肢体(二二)」と訳すかわりに、身体の明らかな罰を意味して「人間たち（男たち）のしかばね(二三)」と訳したのであった。「しかばね」は死んだ肉についてのみ用いられるのがつねであるが、しかし、これらの身体は生きたものであることであろう。そうでなければ、それは何の苦痛も感じることができないからである。これらの身体は、死せる者すなわち第二の死のなかに落ちた人間たちの身体であるがゆえに「しかばね」とよばれても不合理ではないであろう。

だからして、わたしはすでにさきのところで同じ預言者からの「不敬虔な者の地は落ちるであろう」ということばを引用したのであった。「しかばね（カダヴェル）」が「頽落すること（カデレ）」からそのようによばれるのがわからぬ者があるであろうか(二四)。同時に、あの翻訳者たちが「男たちの(二五)」ということばを「人間たちの(二六)」という意味で用いたことは明らかである。じっさい、罪を犯した女たちが、かの罰を招かないなどと主張しようとする者はだれもいないであろう。両方の性は、よ

り主要な性のほうから受けとられるのであって、ことに、女性がつくられたのはその主要な性からであった。(二七)

しかしながら、とくに重要な問題としてここで関連してくるのは、「すべての肉は来るであろう」ということばが善き者においていわれているということである。かの民(神の民)はあらゆる種族の人びとから成るであろうからである(もっとも、多くの者が罰を受けるのであるから、すべての人がそこにいるというわけではないが)。――けれども、わたしが述べはじめたように、善き者においては「肉」ということばが用いられ、悪しき者においては「肢体」もしくは「しかばね」ということばが用いられるのである。そこで、善き者と悪しき者とがそれぞれに定められた終極の状態に分かつところのあの審きは、たしかに肉の復活のあとであることが明らかにされるわけであって、この復活への信仰は、これらのことがらを示すことばを用いることにより、まったく強固なものとされるのである。

(一)「イザヤ書」二六の一九(七十人訳)。
(二)同上、六六の一二以下。
(三)本書第十九巻第二十七章。
(四)「ガラテヤ人への手紙」四の二六参照。
(五)「マタイによる福音書」五の八。
(六)「イザヤ書」六五の一七以下。
(七)同上、六六の一五、一六。

（八）「ピリピ人への手紙」三の一九。
（九）「ローマ人への手紙」八の六。
（一〇）「創世記」六の三。
（一一）「ルカによる福音書」一二の四九参照。
（一二）「使徒行伝」二の三参照。
（一三）「マタイによる福音書」一〇の三四。
（一四）「ヘブル人への手紙」四の一二参照。
（一五）「雅歌」二の五参照。
（一六）「イザヤ書」六六の一七、一八参照。
（一七）「ローマ人への手紙」三の二三。
（一八）「イザヤ書」六六の一九、二〇。
（一九）同上、六六の二一。
（二〇）「詩篇」一一〇の四。
（二一）「イザヤ書」六六の二二以下。
（二二）membra hominum.
（二三）cadavera virorum.
（二四）このことについては本巻第十章においても取り扱われた。
（二五）virorum.
（二六）hominum.
（二七）「創世記」二の二一 参照。

第二十二章

聖徒たちが悪しき者の罰を見るために出て行くといわれているのはいかなる意味においてであるか

しかし、善き者が悪しき者の受ける罰を見るために「出て行く」というのはいかにしてであろうか。(一)かれらはその至福な住まいを身体の動きによって離れて罰の場所へ赴き、そのようにしてその場所に身体をもって居合わせて悪しき者の苦しみを見るのであろうか。けっしてそうではない。かれらが「出て行く」のは知によるのである。このことばによって示されるのは、苦しめられる者たちが外にいるということである。だからして、主はその場所を「外の暗闇」とよばれるのであって、(二)それとは対照的なのは、忠実な僕(しもべ)が「あなたの主のよろこびのうちへ入りなさい(三)」といわれるときの「入場」である。これは、知られるために悪しき者がそこへ入るというのではなく、善き者が悪しき者たちを知るゆえんとなる知によって悪しき者たちのところへいわば「出て行く」のだと考えられるためである。なぜなら、外側にあるところのものが知られるようになるからである。

罰のうちにある者たちは、内部で、主のよろこびのなかではどのようなことがおこるのか知らないのであるが、このよろこびのなかにいる者たちは、外部で、「外の暗闇」のなかでおこ

ることを知るのである。それゆえにかれらが「出て行く」といわれるのであって、それというのも、善き者たちには、かれらから離れて外側にいる者たちが隠されていないからである。というのは、それがどれほど小さな程度であっても、神が死すべき人間の心のうちに現前されるということによって預言者たちがこれらのことをそれがじっさいにおこるまでに知ることができるのなら、いかにして聖徒たちにおいて「神がすべての者にあってすべてとなられる(四)」とき、すでにおこったところのことをその不死なる聖徒たちが知りえないなどということがありえようか。

　このようなわけで「種子」(子孫)と「名」とは聖徒たちのあの至福の状態のうちにしっかりと根づくであろう。この「種子」というのは、ヨハネによって「神の種子がその人のうちに留まっている(五)」といわれているものであり、「名」というのは、同じイザヤによって、「わたしはかれらにとこしえの名を与える(六)」といわれているものである。それが「月ごとに、安息日ごとに存続するであろう」といわれているのは、いわば月から月へ、休息から休息へというのであって、それら二つのものが、時間の古い影から新しい永遠の光のうちへ移って行くとき、善き者はそのいずれをももつであろう。ところで、悪しき者の罰において、消えることのない火と死ぬことのない蛆というのは、人によってそれぞれちがったふうに説明されている。

　じっさい、ある人びとは、これら両方のものを身体に帰したのであった。また他の人びとはこれら両方のものを魂に帰したのである。別の人びとは火を字義どおりに身体に関係づけ蛆を比喩的に魂に関係づけるのであって、このほうがより信じられうるものとおもわれる。しかし、

いまはこの相違について議論する時ではない。というのは、わたしたちはこの巻においては善き者と悪しき者とを分かつ最後の審判を取り扱うことを企図したのだからである。その報酬と罰にかんしては他の機会により詳しく論じられねばならない。(七)

(一)「そして出て行って、私に叛いた人間たちのしかばねを見る……」という前章で引用されたイザヤ書(六六の二二以下)の預言のことばに関連している。
(二)「マタイによる福音書」二五の三〇参照。
(三)同上、二五の二一。
(四)「コリント人への第一の手紙」一五の二八。
(五)「ヨハネの第一の手紙」三の九。
(六)「イザヤ書」五六の五。
(七)罰については本書第二十一巻第十七章において、報酬については第二十二巻第三十章において論じられる。

第二十三章

反キリストによる迫害、神の審き、そして聖徒たちの王国についてのダニエルの預言

この最後の審判について、ダニエルもまた、最初に反キリストがやって来ることを予告し、

そして、聖徒たちの永遠の王国にまでその話を導くという仕方で預言している。かれはその預言を四つの王国を象徴する四つの獣の幻視をもってはじめており、そのうち四つ目のものは反キリストと認められるある王によって征服されるのである。このあと、キリストであると解される人の子の永遠の王国がこの幻視につづくのであるが、そのときダニエルはいうのである。「わたしダニエル、わたしのうちなる霊はうろたえ、わたしの頭の幻はわたしを悩ました。そこでわたしは、そこに立っている者のひとりに近づいてこれらすべてのことの真意を尋ねた。かれはわたしにこの真意を告げ知らせた(二)」。

次いでダニエルは、これらすべてのことについて尋ねたその人からきいたところのことを、あたかもその人がダニエル自身に説明を与えるかのごとくに語っている。「これら四つの獣は地に起らんとする四つの王国である。それらは取り去られるであろう。そして、いと高き者の聖徒たちが国を受け、永遠に、世々かぎりなくその国を保ちつづけるであろう」。

「そこでわたしは四番目の獣について念入りに尋ねた」といってかれはつづける。「この獣はほかの獣とはちがってはなはだ恐ろしく――鉄の歯と青銅のつめをもち、食らい、かつ噛み砕いて、その残りを足で踏みつけた――、わたしは、その頭にある十の角について、また、そのほかに生え出てそのためにさきの三つのつのが抜け落ちることになった別の角についても尋ねた。この角には目があり、また大きなことを語る口があって、それはほかの角よりも大きく見えた。わたしが見ていると、この角は聖徒たちとたたかって、かれらに勝ったが、しかし、それは、ついに日の老いたる者がやって来て、いと高き者の聖徒たちに王国を与えるまでのこ

とであった。そしてそのときが来て、聖徒たちはその王国を受けた」。

これが自分の尋ねた問いであるとダニエルはいっている。次いでかれは、自分がきいた答えが何であったか、つづけている。「かれはいった(かれというのは、すなわち問われて答えを与え、語った者のことである)。第四番目の獣は地上に立つ第四の王国である。それはすべての王国を打ち負かし、全世界をむさぼり食い、これを踏みつけ、かつ打ち砕く。十の角はこの国から起こる十人の王である。そののちにもうひとりの王が起こる。かれはその邪悪さにおいては先の王たちのすべてにまさり、三人の王たちを倒す。そして、いと高き者に敵対してことばを出し、いと高き者の聖徒たちを悩ますであろう。かれはまた、時と律法とを変えようとのぞむ。ひと時(とき)といくつかの時(とき)と半時(とき)のあいだ、力はかれの手にゆだねられる。

しかし、法廷が席につき、かれの主権は奪われて永久に滅び絶やされる。王国と主権と全天下の王の権勢とはいと高き者の聖徒たちに与えられる。その王国は永遠の王国であって、すべての国はみなかれらに仕え従う」。「ここまででこの話は終わった」とダニエルはいう。「わたしダニエルはわたしのおもいによってひじょうに悩まされ、わたしの顔色も変わった。しかし、わたしはこれらのことばを心に留めた」。

ある人はこれら四つの王国を、アッシリア、ペルシア、マケドニア、ローマのこととして説明したのであった。このような解釈がどのように適切であるかを知りたい人は、きわめて博学にしてしかも精緻に書きあげられた司祭ヒエロニュムスによる『ダニエル書注解』を読むべきであろう。しかし、すくなくともダニエルのこの箇所を読む者は、たとえまどろみのうちに読

むのであっても、反キリストの王国が教会に反抗して残忍さをもって、ごく短い時の間であっても存続するということを疑うことはできないであろう。それは、神の最後の審判によって聖徒たちがその永遠の王国を受けとるまで存続するのである。じっさい、「ひと時といくつかの時と半時」というのは、「一年、二年、そして半年」――それゆえに三年半のことであるということはあとの箇所の日の数からしてまったく明らかである。[二]聖書ではときには月の数によっても示されることがある。

すなわち、「いくつかの時」というのは、ラテン語では不明確ないいかたであるが、これはラテン語では見いだされなかった二つの数によって表現されているのであって、ギリシア語ではこれをもっており、またヘブライ語もこれをもっているといわれる。だからして、「いくつかの時」は、ここではいわば「二つの時」のこととしていわれているのである。わたしは告白するが、反キリストが十人の人間として見いだすであろうところの十人の王にかんして、もしかしてわたしたちが誤解させられているのではないかということをおそれるのである。ローマ世界にこれだけの数の王たちは存在していないので、反キリストが突然やって来るのではないかということである。じっさい、千とか百とか七とか、その他いくつかの数をもって――ここでそれらの数をすべて挙げる必要もないことであるが――しばしば全体が表示されるのであるから、[三]それと同じように、もしもこの十という数が、反キリストのやって来るまでの王の全体の数を表示しているということであれば、どういうことになるであろうか。

他の箇所で同じダニエルはつぎのようにいっている。「地上に人類がはじめて出てからその

ときに至るまで、かつてなかったほどの苦難のときがあるであろう。そのとき、あの書に記されているのが知られるあなたの民はみな救われるであろう。地の築山のなかに眠っている多くの者が起きあがるであろう。そのある者たちは永遠の生命に、ある者たちは恥と永遠の恥辱に。悟る者は大空の輝きのように輝き、義しい多くの者は星のように永遠にきらめくであろう(四)」。

この箇所は、すくなくとも死者の身体の復活にかんして、さきに引用した福音書の文言にきわめてよく似ている。(五)なぜかといえば、福音書において「墓のなかに」いるといわれている者が、ここにおいては「地の築山のなかに眠っている者」となっており、あるいは他の人は「地の塵のなかに眠っている者」と訳しているからである。また、福音書では「出てくるであろう」といわれているが、同じようにここでは「起きあがる」といわれており、そして、福音書において「善をなした人びとは生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人びとは審きを受けるためによみがえって」とあるが、同じようにここでは「ある者たちは永遠の生命に、ある者たちは恥と永遠の恥辱に」となっているからである。

ところで、福音書においては「墓のなかにいる者たちすべてが」といっているのに、預言者が「すべての」とはいわないで「地の築山のなかに眠っている多くの者」といっているのは食い違いと見なされるべきではない。聖書はときとして「すべての」というかわりに「多くの」というからである。それゆえに、アブラハムにたいして「わたしはあなたを多くの民の父とした」といわれているが、しかし他のところにおいては「すべての民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう(六)」といっているのである。このような復活については、そのすこしあとのと

ころで預言者ダニエル自身も告知を受けている。「あなたも来て休むがよい。完全に成し遂げられるのにはまだ日がある。あなたは休み、そして、日々の終わりにあなたの分を受けとるためにあなたは起きあがるであろう(七)」。

(一)「ダニエル書」七の一五以下。
(二)同上、一二の一一参照。千二百九十日と数えられている。
(三)本巻第五章、第七章、第十巻第三十一章、第十五巻第二十章、第十七巻第四章参照。
(四)「ダニエル書」一二の一―三。
(五)「ヨハネによる福音書」五の二八以下。本巻第六章において引用された。
(六)「創世記」一七の五、一二の一八。
(七)「ダニエル書」一二の一三。

第二十四章

詩篇ではこの世の終わりと神の最後の審きとについてどのように預言されているか

『詩篇』においては最後の審判について多く語られているが、それらのほとんどは、ことのついでに触れるだけというものである。しかしながら、わたしは、そこにおいてこの世の終わりについてこの上もなく明瞭に語られていることばをかえりみることなく通りすぎること

はけっしてしないであろう。「主よ、あなたははじめに地の基をすえられた。天もまたあなたの御手の業である。これらは滅びるであろう。しかし、あなたは長らえられる。それらはすべて衣のように古びるであろう。あなたがこれらを上衣のように変えられるとこれらは変わる。しかし、あなたはつねに同じままであられて、あなたの齢は終わることがない（二）」。ポルフュリオスは、偉大にして真実の、そしてもろもろの神霊にとってさえ恐れられる神を礼拝するヘブライ人たちの敬虔を称賛しているのに、キリスト教徒たちを、かれらがこの世界は滅びに定められていると主張しているとしてまったく愚かであると非難するのはどういうわけであるか（三）。かれは自分の神々の託宣をも用いてその非難をささえているのである。

見るがよい。ヘブライ人たちの信心の書物においては、神霊たち自身でさえおそれをもって見る、とかくも偉大な哲学者によって告白されているところのその神に向かって語りかけられているのである。「天もまたあなたの御手の業である。これらは滅びるであろう」と。天が滅びるのに、世界が滅びないなどと考えることができるであろうか。というのも、もろもろの天はこの世界のより高い、より安定した部分だからである。もしもこのことばが、この哲学者がその神託をもっていっそう重い権威としてキリスト教徒たちの軽信を責める根拠としているユピテルの不興を買うのなら、なにゆえかれはヘブライ人たちの知恵をも同じように愚かなものとして責めないのであるか。このことばが見いだされるのは、まさしくかれらのもっとも信仰深い書物においてなのである。

さらに、もしもポルフュリオスがこの知恵をひじょうに気に入ってみずからの神々の声をも

ってまでこの知恵を公言し、そして、その知恵のうちに、天は滅びるであろうと読まれるのなら、この虚偽はあまりにも虚しいものであって、キリスト教徒たちの信仰において世界は滅びるであろうと信じられているところのこのことを、他の信仰と一緒に、あるいは他の信仰に先んじて呪うのはなにゆえであるか。世界が滅びるのでないのなら、天は滅びることはありえないのは確かだからである。じっさい、わたしたちには固有のものであってヘブライ人たちとは共有しておらない聖なる書、すなわち福音書と使徒の諸書において、つぎのように読まれるのである。「この世の有様（ありさま）は移りゆく」(三)、「世は過ぎ去る」(四)、「天と地は過ぎ去るであろう」(五)。

しかし、わたしがおもうのに、「移りゆく」とか「過ぎ去る」とか「過ぎ去るであろう」とかいうのは、「滅びる」よりはいくらか穏やかな表現である。使徒ペテロの手紙においても、そのとき存在していた世界は水の氾濫のもとに滅びた、といわれているが(六)、世界のいかなる部分が全体によって表示されているのであるか、どの範囲まで滅びたといわれているのであるか、そして、審きおよび不信仰な者たちの滅亡の日まで火のためにそのまま保たれておかれて更新される天とは何であるか、まったく明らかである。かれはそのすこしあとのところで、「主の日は盗人のように襲ってくる。その日には天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けてくずれ、地と地の上に造り出されたものも焼きつくされるであろう」といっており、さらにそれに加えていう。「これらはみな滅びるものであるからには、あなたがたはどのようであらねばならないか」(七)。

滅びへと定められているこれらの天というのは、ペテロにしたがって、火のためにそのまま

保たれておかれて更新される天のことと解されるであろう。そして、焼けてくずれる天体とは、この世界のもっとも低いところにおいて荒れ狂う騒々しい部分として存在しており、それにおいて同じこれらの天が更新されるとかれはいっているのである。その円天井にもろもろの星が配置されているようなより高い天は、その損われることのない条件のもとに残り、安全だからである。じっさい、「星は天から落ちるであろう」(八)と聖書に記されているところのことは、他のよりもっともらしい意味において受けとられることもあるかもしれないが、それは別として、もしもじっさいにそこから星が落ちるのなら、かの天はむしろ残るものであることを示している。より信頼に足ることであるがこのような表現は比喩的であるか、あるいは、現在おこっているよりももっとおどろくべき仕方でこのもっとも低い天においておこるであろうところのことであるかであるが——。

ウェルギリウスの、

高き天より大きな光を引いて落ちる
たいまつをもって(九)

イダの森に隠れたかの星もそこからのものである。しかし、わたしが『詩篇』から引用したところのものは、滅びるであろうといわなかったようないかなる天も見のがしてはいないとおもわれる。というのは、『詩篇』では、「天もまたあなたの御手の業(わざ)である。これらは滅びるであろう」といわれているからである。いかなる天も神の業の外にあるのでないように、いかなる天も滅びの外にあるわけではないのである。

哲学者たちは、かれらが激しく憎む使徒ペテロの表現によって、かれらの神々の託宣によって承認されたヘブライ人たちの敬虔を支持しようとはしないであろう。かれらは、すくなくとも滅びるのは世界の全体であると考えることを避けようとするであろう。そして、『詩篇』の「これらは滅びるであろう」ということばにおいては、滅びるのは最低の天のみであろうから、全体によって部分が表示されていると受けとられることであろう。そのように、世界は洪水によって滅びたといっている使徒の手紙においても、全体によって部分が受けとられるであろう。その天の領域と共に滅びるのはただその最低の部分のみであるけれども。

しかし、わたしが述べたように、かれらは、使徒ペテロの考えを承認しようとはせず、また、最後の大火にたいしてはわたしたちが洪水に認めただけのものを帰せしめるゆえに、この世界全体の滅亡は認められないのであって、かれらは水も火も全人類を消滅することはできないと主張するのである。つまり、かれらの神々がヘブライ人たちの知恵を称賛したのは、その神々がこの『詩篇』を読まなかったゆえである、ということになるであろう。

『詩篇』第四十九においても神の最後の審判にかんしていわれているとわたしたちは解するのである。「神、わたしたちの神は明らかに出て来られて、沈黙することはない。み前には焼きつくす火があり、そのまわりにははげしい嵐があるであろう。神は民を区別するために上方に天と地とを招かれる。いけにえをもって契約を結んだ正しい者たちを集めよ」[一〇]。わたしたちはこれを、生ける者と死せる者とを審くために天からのその到来をわたしたちが待望する主イエス・キリストのことであると理解する。かれは義しい者と不義なる者とを正しく審くために

来られるのであって、このかたは、不義なる者によって不正な仕方で審きを受けるために最初にはひそかに来られたのであった。

わたしはくり返していうが、かれは「明らかに出て来られて、沈黙することはない」。すなわち、裁判官の声によって明らかに知られるのである。かつてひそかに来られたときは、わたしたちがイザヤの預言によって読み、(二一)福音書において成就したのを見るように、(二二)ほふり場にひかれて行く羊のように、また、毛を切る者の前にいる小羊のように口をきかなかったのであって、法廷の前で沈黙されたのであった。しかし、火と嵐とにかんしては、イザヤの預言においてこのようなことがらについて論じたとき、これらのものがどのように理解されるべきであるか、すでに述べたのであった。「上方に天を招かれる」といわれていることにかんしては、聖徒たちや義しい者たちが正当に「天」とよばれるのであるから、これは疑いもなく、使徒が「わたしたちはかれらと共に雲に包まれて空中でキリストと出会うであろう(二三)」といっているところのことである。

じっさい、もしもわたしたちが文字どおりにとるなら、天があたかも「上方」以外のどこかにありうるかのごとくに「上方に招く」ということがいかにしてあるであろうか。それにつづいていわれている「神は民を区別するために地も」ということばにかんしては、もしもわたしたちがただ「招かれる」をすなわち「地をも招かれる」を補いさえすれば、そして「上方に」を補わないならば、健全な信仰に即した意味をもつとおもわれるのであって、かの「天」はキリストと共に審くであろう者たちを意味するのにたいして、「地」は審かれるべき者たちを意

味しているのである。したがって、「神は上方に天を招かれる」というのは、ここでは、神が「空中へと引き上げられる」と解するのではなく、裁判の座に高められることであると解するのである。

また、わたしたちは「神は上方に天を招かれる」というのは、神は天使たちを高くそびえた領域に招かれてかれらと共に審きをおこなうために下ってこられるという意味に受けとることができるであろう。そして、神は「地」を招かれるのは、すなわち、地上の人間たちをまちがいもなく審きに従わせるためである。しかし、もしもわたしたちが「地を」ということにかんして「招かれる」および「上方に」というこの両方を補うべきであるなら、「神は上方に天を招かれる。そして上方に地を招かれる」という意味になるであろう。そのばあいには、それはキリストと出会うために空中へ引き上げられる者たちすべてについて述べているのであるが、「天」はその魂にかんして、「地」はその身体にかんしていわれていると解するのがもっともよいとわたしは考える。

さらに、「その民を区別する」というのは、羊を山羊から区別するごとく、神はその審きによって善き者を悪しき者から分けられるというのでなければ何であろうか。次いで、神は天使のほうに向かって「正しい者たちを集めよ」ということばを発せられる。このような重要なことは天使たちの奉仕によって成し遂げられるべきだからである。ところで、もしもわたしたちが、天使たちによって神に集められるべき正しい者とはだれであるか、と問うならば、「いけにえをもって契約を結んだ者たち」と答えられるであろう。いけにえをもって神と契約を結ぶ

ということ、これは正しい者たちの全生涯である。

「いけにえをもって」というのは、憐れみの業、すなわち、「いけにえよりも憐れみを欲する」[一四]という神のことばにしたがって、いけにえよりも優位におかれるべきものであるか、あるいは、「いけにえをもって」といわれているのが、ちょうど地においておこるところのことが地の上でおこるといわれるような仕方で、「いけにえにおいて」という意味で理解されるなら、疑いもなく神によろこばれるいけにえとは憐れみの業そのものであって、これについてはわたしは想いおこすのであるがこの書の第十巻において論述したとおりである。[一五] 正しい者は憐れみの業において神と契約を結ぶのであって、それというのは、かれらは神の新しい契約のうちに含まれている約束のゆえに、これをおこなうのだからである。

だからして、最後の審きにおいて、その正しい者たちが集められ右手に配置されたとき、キリストはまちがいもなくいわれるであろう。「わたしの父に祝福された者たちよ、さあ来て、世のはじめからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のとき食べさせてくれたからである」[一六]。そしてそこでは、善き者の善き業について、また、裁くかたの最後の判決によって下されるであろう永遠の報いについて、告知がおこなわれるであろう。

（一）「詩篇」一〇二の二五以下。

（二）ポルフュリオスについては本書第七巻第二十五章参照。ユダヤ人たちの神の偉大さをかれがどのように考えたかということについては、本書第十九巻第二十三章において触れられた。

(三)「コリント人への第一の手紙」七の三一。
(四)「ヨハネの第一の手紙」二の一七。
(五)「マタイによる福音書」二四の三五。
(六)「ペテロの第二の手紙」三の六以下参照。
(七)同上、三の一〇以下。
(八)「マタイによる福音書」二四の二九。
(九)ウェルギリウス『アエネイス』二の六九四。
(一〇)「詩篇」五〇(七十人訳では四九)の三―五。
(一一)「イザヤ書」五三の七。
(一二)「マタイによる福音書」二六の六二以下、二七の一二、「ヨハネによる福音書」一九の九参照。
(一三)「テサロニケ人への第一の手紙」四の一七、本巻第二十章参照。
(一四)「ホセア書」六の六。
(一五)本書第十巻第六章。
(一六)「マタイによる福音書」二五の三四、三五。

第二十五章

最後の審判と浄めの罰とにかんするマラキエルの預言

預言者マラキエルないしはマラキは天使ともよばれるが、ある人びとによって祭司エズラであるとも考えられていて（ヒエロニュムスは、これはヘブライ人たちの見解であるといっている）、かれの他の書は正典に受けいれられている。(二) かれは最後の審判についてつぎのように預言して述べている。「見よ、かれはやってくる、と全能の主はいわれる。かれの到来の日にはだれがもちこたえるであろうか。かれを見ることにだれが耐えうるであろうか。なぜなら、かれは鋳物師の火のように、また、布を洗い張る者の灰汁（あく）のようにやってきて、金や銀を精錬して清める者のように座してレビの子孫たちを清め、かれらを金や銀のように溶かすからである。そして、かれらは義をもって主にささげ物をささげる。ユダとエルサレムとのささげ物は昔の日のように、また先の年のように主によろこばれるであろう。

そしてわたしは審きのときにあなたがたに近づいて、魔術師や姦淫をおこなう者に向かって、また、わたしの名において偽りの誓いをなす者たち、雇人の賃銀をかすめとり、やもめをしいたげ、みなしごを虐待し、他国人にたいして裁判を誤用する者やわたしを恐れない者たちに向かって、すみやかに証人となろう、と全能の主はいわれる。主なるわたしはあなたたちの神であって、わたしは変わることがないからである」(三)。

これらのことばから、かの審きにおいては、ある者たちのある種の罰が浄罪となることがきわめて明らかとされているとおもわれる。じっさい、「かれの到来の日にはだれがもちこたえるであろうか。かれを見ることにだれが耐えうるであろうか。なぜなら、かれは鋳物師の火のように、また、布を洗い張る者の灰汁のようにやってきて、金や銀を精錬して清める者のよう

に座してレビの子孫たちを清め、かれらを金や銀のように溶かすからである」といわれている箇所を、それ以外のどのような意味に理解することができるであろうか。

イザヤもそのようなことを述べている。「主はシオンの息子らや娘らの汚れを洗い、審きの息と燃焼の息とをもって、かれらのなかから血を清めるであろう(三)」。悪しき者たちが罰の審きによってかれらから分離されるとき、かれらはある意味で汚れから清められきれいにされるということができるとすれば、悪しき者の分離と定罪とは、かれらの浄化となるであろう。それというのは、これからはかれらはかかる者たちによる汚染から解放されて生きて行くであろうからである。

けれども、マラキが、「かれはレビの子孫たちを清め、かれらを金や銀のように溶かすであろう。そして、かれらは義をもって主にささげ物をささげるであろう」というとき、かれは明らかに、清められる者たちがそのささげ物は主によろこばれるであろう。ユダとエルサレムとの義のささげ物において主によろこばれ、そして、かれら自身が主によろこばれなかった不義から清められることを示している。さらに、清められてのち、その十分にして完全な義しさにおいてかれら自身がささげ物となるであろう。じっさい、そのような人びとは、自分自身をささげる以上に何を神に受けとられるものとしてささげるであろうか。しかしながら、浄化の罰についてのこの問題は、より詳細に取り扱われるために他の時期に延ばさねばならない。

「レビの子孫」、そして「ユダ」と「エルサレム」については、わたしたちはこれを、ヘブライ人たちからだけではなく、他の民からも集められた神の教会そのものと解すべきである。

「もしもわたしたちは罪がないというなら、それは自分自身を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない」(四)のであるから、現在あるような教会のことではなく、もみがらを吹き分ける脱穀の場のごとき最後の審きによって浄化されるそのときにあるであろうような教会のことである。そのような浄化を必要とする者たちは火によって清められるのであって、そのようにしてそこにはもはや自分の罪のために犠牲をささげねばならない者はまったくだれもいなくなるであろう。じっさい、そのようなささげ物をささげる者たちはすべて、たしかに罪のうちにあるのであり、そのようなささげ物をささげるのは罪のゆるしのためであるからである。かれらがささげ物をささげて神に受けいれられるものとなったとき、かれらの罪はゆるされるのである。

(一) 預言者マラキについては詳しく知られていないが、エズラはアロンの家系に属する祭司であり、エズラ記およびネヘミヤ記の中心人物となっている。エズラはバビロン捕囚から帰還するユダヤ人たちをエルサレムに導いた指導者であった。
(二) 「マラキ書」三の一―六。
(三) 「イザヤ書」四の四。
(四) 「ヨハネの第一の手紙」一の八。

第二十六章

聖徒たちによって神にささげられる犠牲について

ところで、レビの子孫たちが義をもってささげ物をささげるであろうといわれたのは、ご自身の国が、かのときにはこのようなならわしを持つのではないであろうということを示そうとされたからである。つまり、かれらは、罪において、したがって罪のためにそうするのではないということである。だからして、それにつづけて、「ユダとエルサレムとのささげ物は昔の日のように、また先の年のように主によろこばれるであろう」といわれていることばにおいては、ユダヤ人たちが旧約の律法にしたがって自分たちの犠牲についての過ぎ去った時代を約束することはむなしい、と理解されうる。というのは、当時かれらが犠牲をささげたのは義においてではなく、罪においてであったからである。かれらは、主として、そして第一に、罪のために犠牲をささげたのであって、祭司自身でさえ——わたしたちは祭司がたしかに他の人びとよりもより正しい者であったと考えるべきである——神の掟にしたがって、まず自分の罪のために、次いで人びとの罪のために犠牲をささげるのをつねとしていたのであった。(二)

それゆえに、わたしたちは「昔の日のように、また先の年のように」といわれているところのことがいかなる意味に受けとられるべきであるか、説明しなければならない。じっさい、これはおそらく最初の人間たちが楽園にいたあのときを想起させるであろう。というのは、その

ときにはかれらは清らかであって、罪のいかなる汚れや腐敗によっても損われてはおらず、自分自身をまったく清らかなささげ物としてささげたのだからである。しかし、罪を犯したという理由でそこから追放され、また、人間の本性はかれらにおいて断罪されたのであって、それからは、一人の仲保者と再生の水を受けたあとまだ間もない幼児を除いて、聖書に記されているように、「だれも汚れから清くない。地上に一日生きた幼児でさえもそうである」。(二)

もしも信仰においてささげ物をささげる者は義においてささげるのであると正当にいわれうると答えられるなら(じっさい、義人は信仰によって生きるからである。(三) しかし、かれが、もしも自分には罪がないというなら、それは自分自身を欺いているのであるが、(四) かれは信仰によって生きているがゆえにそのようなことはいわない)、信仰のこのときが、義をもってささげ物をささげる者たちが最後の審きの火によって清められるかの終わりのときと同等なものとすべきであるとだれが主張するであろうか。

それゆえ、わたしたちは、そのような清めのあとには正しい者はいかなる罪ももたないと信じなければならないのであるから、罪をもたないということにかんするかぎり、たしかに、かのときは、最初の人間たちが罪を犯す前にまったく潔白な幸福のうちに楽園に生きたそのときとのみ比較されるべきものである。したがって、「昔の日のように、また先の年のように」といわれるとき、このことが意味されていると解されるのが正しいのである。

じっさい、イザヤによっても新しい天と新しい地とにかんする約束が与えられてのち、(五) 聖徒たちの至福について比喩的で謎めいた記述がなされているのである。わたしはあまりに冗長と

なることを避けるため、それらについての適切な説明を差し控えることにするが、それらのなかで、「わたしの民の日々は命の木の日々のようになるであろう(六)」といわれているのである。多少とも聖書に接した者なら、神がどこに生命の木を植えられたか、だれが知らないであろうか。最初の人間たちはその不正ゆえに楽園から追い出されたとき、その木の実から離され、その木のまわりには火の恐ろしい見張りが置かれたのであった(七)。

しかし、だれかが、預言者イザヤが言及している「命の木の日々」というのは、キリストの教会の現在の日々のことであって、キリストご自身が預言的に生命の木とよばれている、と主張するかもしれない。それというのは、キリストは神の知恵であり、それについてソロモンが「知恵はそれをとらえる者にとって命の木である(八)」といっているからである。さらにまた、最初の人間たちはかの楽園において何年かをすごしたのではなく、かれらは、そこでひとりの子どもも設けなかったほどはやくに楽園から追放されたのであって、したがって、そのときにかんして「昔の日のように、また先の年のように」ということばによっては理解することはできない、と主張するかもしれない。――議論がそこまで進むなら、わたしはこれらの問題をいまは見すごすことにしよう。これらの問題のうち、あるものを明白な真理として確立するためにすべてのことを論じなければならなくなって、あまりに冗長になってしまわざるをえなくなるのを避けるためである。

じっさい、わたしは、肉的な犠牲がささげられた昔の日や先の年が、大いなる贈り物として預言者によって約束されたのだとわたしたちが信じることのないよう、別の意味を見るのであ

る。すなわち、古い律法によって要求された犠牲の供え物は、それぞれ汚れのない、そしていかなる欠陥もまったくない獣であって、それらはいかなる罪もまったく持たない聖なる人びとを象徴していたのであった。そのような人はただ一人見いだされるのであって、それはキリストであるが。

それゆえ、審きにおいては、このような浄化にふさわしい者たちが火によって清められるのであり、そのあとには、すべての聖徒たちのうちに罪はまったく見いだされないであろう。また、そのようにして、かれらは自分自身を義においてささげるのであって、そのような犠牲のささげ物は、いかなる意味においても汚れのないものであり、いかなる欠陥も持たないものであることであろう。このような未来のことがらの予兆としてもっとも清い犠牲がささげられたとき、たしかに昔の日のように、また先の年のようにあるであろう。じっさい、それらの犠牲の体において予示されたところのこの清らかさは、そのとき、聖徒たちの不死なる肉と精神とに存するであろう。

次いで、浄化ではなく定罪に値する者たちのゆえに預言者は「そしてわたしは審きのときにあなたがたに近づいて、魔術師や姦淫をおこなう者に向かって、すみやかに証人となろう[九]」といっている。断罪されるべきもろもろの罪過をあげてのち、「主なるわたしはあなたたちの神であって、わたしは変わることがないからである」とつづけられている。それはあたかも、「あなたたちはその罪ゆえにいっそう悪しく変わり、わたしの恩恵によっていっそう善く変わるが、わたしは変わらない」というかのようである。主は証人となるであろうといっているの

であるが、それは、その審きにおいては他の証人を必要としないからである。また、「すみやかな」証人となるのであるが、それは、主は突然にやって来られて、ひじょうに遅くやって来るかのように見られたその審きは、思いがけないその到来によってまったくすみやかであるからであるか、あるいは、主は長々しい話などしないで人びとの良心をとがめられるからである。

聖書に記されているように、「悪しき者たちの考えは調べられるであろう(一〇)」。そして、使徒は、「わたしの福音によれば、神がキリスト・イエスによって人びとの隠れたことがらを審かれる日に、かれらの考えは非難したり弁明したりするであろう(一一)」といっている。それゆえ、主がすみやかな証人となるということはそのようにも理解しなければならない。主は猶予なく、人の良心をとがめ罰する理由となるところのものを人の記憶によびもどされるであろうからである。

(一)「レビ記」九の七、一六の六、「ヘブル人への手紙」七の二七参照。
(二)「ヨブ記」一四の四。
(三)「ローマ人への手紙」一の一七。
(四)「ヨハネの第一の手紙」一の八。
(五)「イザヤ書」六五の一七参照。
(六)同上、六五の二二。
(七)「創世記」三の二四参照。
(八)「箴言」三の一八。
(九)「マラキ書」三の五、六。
(一〇)「知恵の書」一の九。

（二一）「ローマ人への手紙」二の一五、一六。

第二十七章

善き者と悪しき者との分離について

第十八巻において他のことをとり扱った際にこの預言者から引用したところのことも、最後の審判に関連している。(一) そこではつぎのようにいっている。――「全能の主はいわれる。わたしがそなえている日に、かれらはわたしのものとなるであろう。わたしは、人が自分に仕える子を選ぶようにかれらを選ぶ。わたしは振り返る。そしてあなたがたは、義しい者と不義なる者、神に仕える者と神に仕えない者とのちがいを見るであろう。見よ、その日は来る。かまどのように燃える日が来る。それはかれらを焼き尽くして、すべての異国人と不正をおこなう者とはわらのようになる。来たるべき日がかれらを燃やし尽くす、と全能の主はいわれる。かれらには根も枝も残らない。

しかし、わたしの名をおそれるあなたがたには義の太陽がのぼり、そのつばさには救いがある。あなたがたはおりから放たれた仔牛のように跳び出してよろこびはねまわるであろう。あなたがたは邪悪な者を踏みつける。かれらはあなたがたの足の下で灰のようになるであろう。全能の主はこのようにいわれる(二)」。義しい者たちを不義なる者たちから分かつところの報酬と

罰とのあいだにある隔たりは、空しいこの世の生のこの太陽のもとでは識別されないが、かの生が明らかとなるかの義の太陽のもとに示されるときには、それまでけっしてなかったような審きが疑いもなく存することとであろう。

(一) 本書第十八巻第三十五章。
(二) 「マラキ書」三の一七―四の三。

第二十八章

モーセの律法は霊的に理解されるべきことについて

同じ預言者のそれにつづく「わたしのしもべ、モーセの律法を思い出せ。わたしはホレブでそれを全イスラエルのためにかれに命じた(一)」ということばは、律法をまもる者とそれを軽んじる者とのあいだにおこるであろう大きな相違を明らかにしてのち、適切にも掟と審きとを想いおこさせるのである。同時にそれはまた、律法を霊的に理解することを学び、その律法のうちにキリストを見いだすためであって、それというのは、キリストの審きによって善き者と悪しき者とのあいだの区別がなされるべきだからである。じっさい、同じ主がユダヤ人たちに「もしもあなたがモーセを信じたならばわたしをも信じたであろう。モーセはわたしについて書いたからである(二)」といっておられるのも無意味ではないのである。

かれらは律法を肉的に受けとり、その地上的なことがらの象徴であることを悟らず、不平をつぶやいて、あえていうのである。「神に仕える者は愚かである。わたしたちがその命令をまもり、全能の主のみ前に嘆願して歩いたからといって何の益があるか。いま、わたしたちは神に疎遠な者たちを祝福された者とよぶ。不正をおこなう者たちはみな栄えている(三)」。

かれらのこのことばによって、預言者は最後の審判についてある意味で預言を与えねばならなかったのであって、その審判においては、悪しき者は架空の幸福を享受することがないだけでなく、まぎれもない悲惨のうちに現れ、他方、善き者はいかなる悲惨も一時的な不幸によっても労することなく、明るい永遠の至福を享受するであろう。じっさい、預言者はそれに先立つところでこれらの人びとと同じようなことばを述べたのであった。「すべて悪をおこなう者は主の目には良く見え、そのような人びとがかれによろこばれる(四)」。

わたしはいうが、かれらはモーセの律法を肉的な意味に受けとることによって神に対してそのような不平をつぶやくようになったのである。だからして『詩篇』第七十二篇の記者も、自分の足はほとんどつまずき、その足取りはふらつき、じっさいよろめくほどになったといっている(五)。かれは罪人たちが平和であるのを見てねたんだゆえにたしかに転落し、そのためにかれは他のことがらのなかでいうのである。「神がどうして知りえようか。いと高き者に知識があろうか」。またつぎのようにもいっている。「わたしの心を正しく保ち、潔白な者たちのあいだでわたしの手を洗ったのも無意味なのか(六)」。

しかし、善き者が悲惨であり悪しき者が幸福であるように見えるときに生じるこのもっとも困難な問題に解決を見いだすために、かれはいう。「これはわたしにとって困難なことだった。わたしが神の聖所にはいってかれらの最後を悟るまでは(七)」。最後の審判によって、たしかにこのような状態ではなく、不義なる者たちの明らかな悲惨と義しき者たちの明らかな幸福とによって、現在とはまったく異なった状態が現れるであろう。

(一)「マラキ書」四の四。
(二)「ヨハネによる福音書」五の四六。
(三)「マラキ書」三の一四以下。
(四)同上、二の一七。
(五)「詩篇」七三(七十人訳では七二)の二。
(六)同上、七三の一一、一三。
(七)同上、七三の一六、一七。

第二十九章

ユダヤ人の回心のため、審きの前にエリヤが再来することについて

マラキはモーセの律法を想い起こすようその民に警告するのであるが(というのは、かれは、

かれらが律法を霊的に理解すべきであるのに、長い期間、そうしないであろうことを予見したからであった)、さらにつづけていう。「見よ、わたしは主の大いなる輝かしい日が来る前にテシベのエリヤをあなたがたにつかわす。かれは父の心を子どもに向けさせ、人の心をその隣人に向けさせるが、それは、わたしが来て、この地を徹底して撃つことのないためである」(二)。審きの前の最後の時期に、この偉大な、そしておどろくべき預言者エリヤによってユダヤ人にたいして律法の説明がなされ、ユダヤ人たちが真のキリストを、すなわち、わたしたちのキリストを信じるようになるであろうということ、このことは信仰者たちの会話においてしばしば語られ、その心にしばしば抱かれるところである。

審きのために救い主が来られる前にエリヤが来るであろうと期待されるのは、たしかに不当なことではないのであって、それというのは、かれはいまも生きていると信じるのに正当な理由があるからである。すなわち、聖なる書がこの上もなく明瞭に証言していることであるが、かれは火の車によって人びとの世界から運び出されたのである(三)。それゆえ、かれが来るとき、ユダヤ人たちがいまは肉的に理解している律法を霊的に説明し、そうすることによって「父の心を子どもに向ける」、すなわち、父親たちの心を子どもたちに向けるであろう。

じっさい、七十人訳は、複数のかわりに単数を用いたからである。この意味するところは、子どもたち、すなわちユダヤ人たちは、自分の父親たち、すなわち預言者たち――そのなかにはモーセ自身も含まれる――が理解したように律法を理解するであろうということである。父親たちの理解が子どもたちの理解へもたらされるとき、父親たちの心は子どもたちに向けられ

るであろう。そして、「子どもたちの心をその父親たちに向けさせる」というのは、子どもたちが自分たちの父親たちの考えるところに同意するときである。七十人訳はここのところを「人の心をその隣人に」といっている。

というのは、父親たちと子どもたちとはたがいにもっとも親密な隣人だからである。しかしながら、預言的に訳されている七十人訳のことばにおいては、別のよりすぐれた意味が見いだされうるのであって、(三)エリヤは御父なる神の心を御子のほうへ向けるのであると解される。これはもちろん御父が御子を愛するようにすることによってではなく、御父が御子を愛するということを教えることによってである。そして、ユダヤ人もまた、さきに憎んだところのわたしたちのキリストであるその御子を愛するようになるためである。じっさい、ユダヤ人たちにとっては、神はご自身の心をいまわたしたちのキリストから離反させておられるのである。というのは、かれらはこのように考えているからである。それゆえ、かれら自身が回心して、御父の御子における愛を学ぶとき、神の心は御子へ向けられるであろう。

しかし、それにつづく「人の心をその隣人に」、すなわち、エリヤはまた人の心を隣人に向けるといわれているところのことは、人の心を人間キリストに向けるという意味に解する以上によりよい理解があるであろうか。キリストは神のかたちにおいてはわたしたちの神であられるが、僕（しもべ）のかたちをとることによってわたしたちの隣人ともなられるにふさわしいかたである。(四)それゆえ、エリヤはこのことをなすであろう。「それは、わたしが来て、この地を徹底して撃つことのないためである」という。地上的なものを味わう者たちは、今までの肉的なユダヤ人

たちのごとく地なのであって、この欠陥からして、「悪しき者は神によろこばれるゆえに」とか「神に仕える者は愚かである」(五)というあの不平が出てくるのである。

(一)「マラキ書」四の五、六。
(二)「列王紀下」二の一一。
(三)七十人訳の預言的性格については本書第十八巻第四十三章において論じられている。
(四)「ピリピ人への手紙」二の七参照。
(五)「マラキ書」二の一七、三の一四。

第三十章

最後の審判はキリストによっておこなわれるであろうことについて

神の最後の審判にかんしては他にも多くの聖書の証言があって、もしもそれらすべてを集めるとすれば、あまりにも長いものになってしまうであろう。それゆえ、その審きが、旧約聖書と新約聖書の両方によって予告されていることをわたしたちが承認したことで十分としなければならない。けれども、旧約聖書においては、この審きがキリストによっておこなわれること、すなわち、キリストが審くかたとして天から来られるであろうことは、新約聖書ほど明らかに表現されてはいない。それというのも、旧約聖書において、主なる神がみずからやってくるで

あろうといったり、また、主なる神がやってくるであろうといわれたりするとき、ただちにキリストが理解されるわけではないからである。

じっさい、御父も御子も聖霊も主なる神だからである。すくなくともわたしたちはこれを証明しないままに残してはならない。したがって、第一につぎのことが示されねばならない。すなわち、預言の諸書においてどのようにイエス・キリストが主なる神として語っておられるかということであり、しかもそれがイエス・キリストであるということがまったく明らかであるということである。そうすれば、そのように明らかではなく、しかもかの最後の審判のために主なる神がこられるであろうといわれるときにも、イエス・キリストが理解されうるであろう。預言者イザヤには、わたしがいっているところのことを明瞭に示す箇所がある。

神は預言者をとおしていう。「ヤコブよ、わたしの召し出したイスラエルよ、わたしに聞け。わたしは初めであり、永遠にある者である。わたしの手は地の基（もとい）をすえ、わたしの右の手は天を固めた。わたしはかれらをよび、かれらはもろともに立つであろう。かれらはみな集まってきくであろう。だれがかれにこれらのことを告げたか。わたしがあなたを愛し、あなたの意志をバビロンにおこなったのであって、それはカルデヤ人たちの子孫をとり除くためである。わたしは語り、わたしはかれを召し出した。わたしはかれをこさせた。そしてかれの道を栄えさせた。あなたがたはわたしに近寄って、これを聞け。わたしは初めからひそかに語らなかった。これらのことが成ったとき、わたしはそこにいたのだ。いま主なる神は、わたしとその霊とをつかわされた（一）」。

主なる神として語っているのは、たしかに神ご自身である。しかしながら、「いま主なる神は、わたしとその霊とをつかわされた」と付け加えなかったなら、イエス・キリストであるとは理解されなかったであろう。というのは、神は、未来の出来事を描くのに過去の時称を用いて、しもべのかたちにしたがってこのことをいわれたからである。同じ預言者のもとに、同じように「かれは小羊のようにほふり場にひかれた(三)」と読まれるのである。かれは、「ひかれるであろう」とはいわず、未来におこる出来事をあらわすのに過去の時称を用いている。預言はいつもこのように語るのである。

ゼカリヤのもとに、明らかに全能者が全能者をつかわすことを示す他の箇所がある。御父なる神が御子なる神をつかわすのでなければだれがだれをつかわすのであろうか。じっさい、そこにはつぎのように記されている。「全能の主はいわれる。栄光ののち、かれはあなたがたから略奪した国々の民にわたしをつかわす。あなたがたに触れた者は、いわばかれの目のひとみに触れたのであるから。見よ、わたしはかれらの上に手を差し出し、かれらはかれらに仕えた者たちのとりことなるであろう。そしてあなたがたは、全能の主がわたしをつかわされたことを知る(三)」。

見よ、全能の主が全能の主によってつかわされたといっている。だれがここで、イスラエルの家の失われた羊に語るキリスト以外の何ものかをあらわしているなどとあえて解するであろうか。じっさい、かれは福音書において、「わたしはイスラエルの家の失われた羊にのみつかわされている(四)」といっておられるからである。ここでは、かれらにたいする神のこの上もなく

すぐれた愛情のゆえに、かれらを神の目のひとみにたとえたのである。使徒たち自身もまた、この種の羊から出たのであった。

しかし、復活の栄光ののち(それ以前には福音書記者がいうように、「イエスはまだ栄光を受けておられなかった(五)」)、たしかにかれはご自身の使徒たちにおいて諸国の民につかわされたのであって、このようにして『詩篇』に読まれることが成就したのであった。「あなたは民の争いからわたしを救い、わたしをもろもろの国民(くにたみ)のかしらとされた(六)」。その結果、イスラエル人たちが諸国の民に服従したとき、イスラエル人たちから略奪し、イスラエル人たちを仕えさせた者たちは、反対に同じ仕方で略奪されるのではなく、かれら自身がイスラエル人たちの略奪品となるのである(じっさい、このことはキリストが弟子たちに「わたしはあなたがたを人間をすなどる者にしよう(七)」といわれ、また、そのうちのひとりに「いまからあなたは人間をすなどる者となるであろう(八)」といわれて約束されたのであった)。それゆえに、かれらはとりことなるであろう。しかし、それは善においてであって、それはいわば、かの強い人から家財が奪いとられるのは、より強い人によって縛られているばあいのごとくである(九)。

同様に、主は同じ預言者をとおして語り、そしていわれる。「その日には、わたしはエルサレムに向かってくるすべての国民を滅ぼそうとするであろう。わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に恵みとあわれみの霊を注ぐであろう。かれらはわたしを嘲弄していたゆえにわたしを見つめ、あたかももっとも愛した者のためのごとくにかれのために嘆き、また、ひとり子のために悲しむごとくに悲しむ(一〇)」。

聖なる都エルサレムに敵対するすべての国民──それは「エルサレムに向かってくる」すなわちエルサレムに相対するところのものであり、また他の人びとが「エルサレムに攻めてくる」と訳した、すなわちエルサレムを自分たちに服属せしめようとするところのものである──を滅ぼすということ、そして、ダビデの家およびこの都の住民に恵みとあわれみの霊を注ぐということは、神のなされるところでなければだれがなしうるであろうか。疑いもなくこのことは神のなされることであり、預言者をとおして神というかたにおいて語られているのである。しかし、キリストは「かれらはわたしを嘲弄していたゆえにわたしを見つめ、あたかももっとも愛した者(あるいは親愛な者)のためのごとくにかれのために嘆き、また、ひとり子のために悲しむごとくに悲しむ」と付け加え、語られることによって、ご自身がかくも偉大な、そしてかくも神的な業を成し遂げられる神であることを示されるのである。

じっさい、かの日にはユダヤ人たち──恵みとあわれみを受けることになっているユダヤ人たちでさえ、キリストをその受難において嘲弄したことを後悔するであろう。かれらはキリストが威厳のうちに到来されるのを見、そのかたが、さきに自分たちの祖先においてその卑しさを嘲笑したところのかたであることを認めるからである。そして、かくも大きな不敬虔をつくり出したかれらの祖先たち自身も復活してキリストを見るであろう。しかし、それはいまや罰のためであって矯正のためではない。したがって、「わたしはダビデの家およびエルサレムの住民に恵みとあわれみの霊を注ぐであろう。かれらはわたしを嘲弄していたゆえにわたしを見つめるであろう」といわれるとき、ここでは祖先たち自身が解されるべきではなく、その系統

から出る者たちであって、エリヤのはたらきをとおしてかのときに信じるであろうところの者たちが解されるべきである。

しかし、わたしたちはユダヤ人たちに「あなたがたはキリストを殺した」というように――このことをなしたのはかれらの祖先であるが――、かれらは、自分たちがそこから出て来たその系統によってじっさいになされたところのことをある意味で自分たち自身もなしたことを悲しむであろう。それゆえ、かれらは恵みとあわれみの霊を受けてすでに信仰者となっており、その不敬虔な祖先たちと共に断罪されることはないけれども、しかし、自分たちの祖先によってなされたところのことを、あたかも自分たち自身がなしたかのように悲しむであろう。したがって、かれらは罪過ゆえに悲しむのではなく、敬虔の感情ゆえに悲しむであろう。たしかに七十人訳では「かれらはわたしを嘲弄していたゆえにわたしを見つめるであろう」と訳されているところは、ヘブライ語原典からは「かれらはその刺したわたしを見るであろう」と訳されており、このことばによって、十字架につけられたキリストがより明らかに示されている。

しかし、七十人訳がむしろ好んで用いた「嘲弄する」ということばは、キリストの受難全体を表わしている。じっさい、キリストが捕えられたときも、縛られたときも、判決を下されたときも、侮辱のために不名誉な衣服を着せられたときも、いばらの冠をかぶせられたときも、葦で頭を打たれたときも、嘲笑してひざをかがめて敬意を受けとったときも、自分の十字架を運ぶときも、そして最後に木にかけられたときも、かれらはキリストを嘲弄したのであった。それゆえ、ひとつの訳だけにしたがうのではなく、「嘲弄していた」および「刺した」の両方

を結び付けて読むとき、わたしたちは主の受難の現実をいっそう精確に認識するであろう。

このようなわけで、預言の諸書において、神が最後の審きをおこなうために来られるであろうと読むとき、たとえ他の区別はなされてはいなくとも、ただそれが審きであるがゆえにキリストが意味されているのだと解されねばならない。なぜなら、御父が審くとしても、それは人の子の到来をとおして審きをおこなわれるであろうからである。じっさい、御父ご自身は、その明白な現存において、「だれをも審かない。審きのことはすべて子にゆだねられたからである」[二二]。御子は、かれが審かれたのは人間としてであったごとく、その審きをおこなうのは人間としてであることが明らかにされるであろう。

さらに、神がイザヤをとおして、キリストがその子孫から身体を受けとられたところのヤコブとイスラエルの名のもとに語られるとき、キリスト以外のだれが意味されているであろうか。これはつぎのように記されているところのことである。「ヤコブはわたしのしもべである。わたしはかれを支えよう。イスラエルはわたしが選んだ者である。わたしの霊はかれをとりあげた。わたしはわたしの霊をかれに与えた。かれはもろもろの国民(くにたみ)に審きを告げ知らせるであろう。かれは叫ぶことなく、語ることを止めないであろう。かれの声は外できかれないであろう。かれは傷ついた葦を折ることなく、けぶる灯心を消さず、審きを真実をもって告げ知らせるであろう。かれは地上に審きを確立するまで輝やき、砕かれないであろう。もろもろの国民はかれの名に希望をおくであろう[二三]」。

ヘブライ語原典には「ヤコブ」と「イスラエル」という名は見いだされないが、しかし、そ

こでは「わたしのしもべ」と読まれるのである。疑いもなく七十人訳はこのことばに与えられるべき充全な意味を読者に想いおこさせようとし、いと高きかたがまったく卑しい者としてみずからを現されたそのしもべのかたちに関連して、[一三] キリストがその系列からしもべのかたちをとられたところの人間の名を置いてキリストを表示しようとしたのであった。

キリストに聖霊が与えられたのであるが、福音書の証言によればそれは鳩の形姿によって示された。[一四] かれはもろもろの国民(くにたみ)に審きを告げ知らせたのであって、それというのは、かれはもろもろの国民に隠されていたところのことがくるであろうことを予告されたからである。かれはその柔和によって叫ぶことはなかったが、真理を公言されることにおいて語ることを止めなかった。しかし、かれの声は外できかれなかったし、いまもきかれない。なぜなら、外にいてキリストのからだから切り離されている者らによっては、かれは従われないからである。キリストは、完全性を失っているがゆえに傷ついた葦に、そして光を失っているがゆえにけぶる灯心にたとえられる迫害者であるユダヤ人たちを、折ったり消したりされなかった。かれはまだ審くために来られたわけではなく、かれらによって審かれるために来られたのであるから、かれらをゆるしておかれたのである。

キリストはたしかに審きを予告されることによって真実をもって審きを告げ知らせられた。それは、もしもかれらがその悪意のうちにいつまでも存続するなら罰せられるべきときなのである。かれの顔は山上で輝き、その名声は世界に輝いた。かれは砕かれもせず、押しつぶされもしない。なぜなら、かれはご自身においても、またその教会においても、迫害者たちに屈服

されないがゆえに、かれらは存在することを止めるようになるからである。したがって、かれに敵対する者たちが、「いつかれは死に、その名がほろびるであろうか」(一五)といったり、また、いまそのようにいっていることは、「地上に審きを確立するまで」おこらないし、おこることはないであろう。

見よ、わたしたちが求めていた隠されたものが明らかにされた。すなわち、これは、かれご自身が天からやって来られるとき地上に確立されるであろう最後の審判である。それについてはわたしたちは、「もろもろの国民はかれの名に希望をおくであろう」という預言の最後のことばが成就されているのを知っている。すくなくともこのことを否定することはできないということによって、恥知らずにも否定されるところのことが信じられるのである。じっさい、なおもキリストを信じようとはしない者たちもわたしたちと共に知って、それを否定しえないがゆえに歯ぎしりして衰弱するような出来事を、だれが希望するであろうか。

わたしはいうが、捕えられ、縛られ、むち打たれ、嘲笑され、十字架にかけられたときに、そして、弟子たちでさえすでに持ちはじめていた希望を失ったときに、もろもろの国民がキリストの名に希望をおくことを、だれが希望するであろうか。しかし、十字架上の一人の盗賊によってかろうじて抱かれた希望が、いまでは広範囲に撒かれたもろもろの国民によって抱かれているのであって、かれらは、永遠に死ぬことのないように、ほかならぬ十字架――キリストはその上で死なれたのであるが――をもってしるしづけられているのである。

したがって、これらの聖なる書に予告されているように最後の審判がキリストによっておこ

なわれるであろうことを、だれも否定したり疑ったりしないであろう。もっとも、どのような信じがたいほどの悪意や盲目によってであるかは知らないが、すでに全世界にその真理が証明されているこの聖なる書を信じない者は別であるが。それゆえに、かの審きにおいて、あるいは、かの審きとの関連において、わたしたちはこれらのことがおこるであろうことを学んだのである。すなわち、テシベ人エリヤが来るであろうこと、ユダヤ人たちが信仰を受けいれるであろうこと、反キリストが迫害するであろうこと、キリストによる審きがあるであろうこと、死者が復活するであろうこと、善き者と悪しき者とは分離されるであろうこと、世界は火によって滅ぼされ、再興されるであろうこと、である。これらのことはすべておこるであろうことをわたしたちは信じなければならない。しかし、どのような仕方で、どのような順序でおこるのかということは、そのときのじっさいの経験が、人間の理解力によって完全に得ることができる以上にわたしたちに教えてくれることであろう。しかしながら、わたしは、これらの出来事がわたしのあげた順序でおこるであろうと考えている。

主の助けのもとに約束を達成するために、この書に関係する二つの巻がわたしたちに残されている。そのうちのひとつは悪しき者たちの罰にかんするものであり、他のひとつは義しい者たちの幸福にかんするものである。これらの巻において、神がゆるしてくださるかぎりとくに反駁されねばならないのは、神的な預言や約束を非難して自分自身の知恵を誇ってみずからを悲惨なものとするようにおもわれ、また、信仰の健全な栄養を、偽りの笑うべきもののように軽蔑するところの人間的な議論である。他方、神にしたがって賢明な者たちは、人びとにとっ

ては信じがたくおもわれても、しかし、その真理がすでに多くの仕方で確証されている聖なる書に含まれているすべてのことを、全能の神のとくに真実なる議論として保持するのである。そのような人びとは、神がけっしてかれらに偽りを語ることはできなかったということ、そして、不信仰な者にとっては不可能であるところのことをなしうるということを確信しているのである。

(一)「イザヤ書」四八の一二―一六。
(二) 同上、五三の七。
(三)「ゼカリヤ書」二の八以下。
(四)「マタイによる福音書」一五の二四。
(五)「ヨハネによる福音書」七の三九。
(六)「詩篇」一八の四三。
(七)「マタイによる福音書」四の一九。
(八)「ルカによる福音書」五の一〇。
(九)「マタイによる福音書」一二の二九、および本巻第七章参照。
(一〇)「ゼカリヤ書」一二の九以下。
(一一)「ヨハネによる福音書」五の二二。
(一二)「イザヤ書」四二の一―四。
(一三)「ピリピ人への手紙」二の七。
(一四)「マタイによる福音書」三の一六。

（一五）「詩篇」四一の五。

第二十一巻

第一章

聖徒たちの至福より先に悪しき者たちの罰がとり扱われるべきことについて

さて、生ける者と死せる者とを審くわたしたちの主キリストによって、二つの国——そのひとつは神の国であり、他は悪魔の国である——が、それぞれに課せられた終極に達したとき、悪魔と悪魔に属するすべての者たちにどのような罰がおこるのか、神の助けを得てわたしはこの巻においてできるかぎりより注意深く議論を進めねばならない。このような順序を選んで聖徒たちの至福についてはあとでとり扱うことにしたのは、どちらも身体と共にあり、そして、身体がいかなる苦痛もなくして永遠の浄福のうちに存続するよりは、むしろ永遠の責め苦のうちに存続するということのほうが、いっそう信じがたくおもわれるからである。それゆえ、この永遠の罰が信じがたいものであってはならないことを明らかに示したなら、あらゆる悩みを免れた身体の不死性が聖徒たちに与えられるであろうことがより容易に信じられるものとなっ

て、わたしにとって大きな助けとなるであろう。

この順序は神的な予告と矛盾するものではない。そこでは、「善をおこなった人びとは、生命を受けるためによみがえり、悪をおこなった人びとは、さばきを受けるためによみがえる」[一]といわれているように、ときにはたしかに聖徒たちの至福が先におかれているばあいがあるが、ときにはそれがつぎのようにあとにおかれているばあいがある。「人の子はその使いたちをつかわし、つまずきとなるものをことごとく御国からとり集めて、燃える炉の火に投げ入れさせるであろう。そこでは泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。そのとき、義人たちはかれらの父の御国で太陽のように輝きわたるであろう」[二]。また、「そしてかれらは永遠の罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう」[三]。預言者においても、よく見れば、あるときは前者の順序が、あるときは後者の順序が見いだされる。それらの例をあげることは長たらしくなるであろう。しかし、わたしは、わたしが選んだ順序にたいしてすでに理由を述べたのであった。

(一) 「ヨハネによる福音書」五の二九。
(二) 「マタイによる福音書」一三の四一。
(三) 同上、二五の四六。

第 二 章

身体は燃える火のなかで永続することができるのであるか

わたしはどのような根拠を示して、不信仰な者たちに、魂と生命とをもった人間の身体が死によって崩壊することがないというだけでなく、永遠の火の苦しみのなかでも存続するということを確信させることができるであろうか。というのは、かれらは、このことをわたしたちが全能者の権能に帰せしめるのをのぞまず、何らかの例を示すことによって自分たちを説得するよう要求しているからである。わたしたちは、可死的であるがゆえに疑いもなく腐朽するのであるが、それにもかかわらず火のなかで生きている生物のあることや、あまりにも熱いためにだれも無事に触れることができないような熱湯の噴き出る温泉のなかに見いだされるある種の虫のあることを示して答えることができるであろう。

それらの虫は何の損傷もなくそのなかに生きているというだけでなく、それ以外のところでは存在しえないのである。かれらは、もしもわたしたちがその例を示すことができないなら、信じようとはしないし、また、かれらの目の前に具体的なものを示したり適当な証人をとおして十分に教えてやることができたとしても、それは問題となっていることがらの例としては不十分であるとして、同じ疑い深さをもって主張するのである。なぜなら、これらの生物はいつまでも生きているわけでもなければ、また、あの熱のなかで苦痛を感じることなく生きているからである。じつに、それらの生物は、その本性に適合した元素のなかで活気づけられ、苦しむことがない、とかれらはいう。そのようなものによって苦しめられるというよりは、活気づ

けられるということのほうがいっそう信頼できるかのようである。何らかの生物が火のなかで苦しんでいて、しかも生きているというのはおどろくべきことであるが、しかし、苦しむことなくして火のなかで生きているというのは、いっそうおどろくべきことである。もしも後者が信じられるのなら、なにゆえ前者も信じられないであろうか。

第三章

身体の苦痛は必然的に肉の滅亡を伴うのであるか

しかし、苦痛を感じることはできるが、同時に死ぬことのできないような身体は存在しない、とかれらはいう。わたしたちはこれをどこから知るのであるか。かれらはダエモンたちが大きな苦痛によって打ち砕かれるのを認めているのであるが、ダエモンたちが苦痛を感じるのは身体においてであるかどうか、だれが確言しえようか。もしも、地上的な身体すなわち固体で可視的な身体は存在しない、一言でいえば肉——苦痛を感じることはできるが死ぬことのできないような——は存在しない、と答えられるなら、これはたんに人間が身体の感覚や経験から推測して主張しているにすぎないのではないか。

じっさい、人びとは可死的な肉以外の肉を知らないのであって、経験されないものはけっして存在しえないと考えるのである。これがかれらの理論のすべてなのである。苦痛はむしろ生

きていることの証拠であるのに、それを死の論拠にするというのは何という論理であろうか。というのは、つねに生きることができるのかどうかは問題であるとしても、すくなくとも苦痛を感じるものはすべて生きており、また、いかなる苦痛も生きているもののうち以外にはありえないことは確かだからである。

したがって、苦痛を感じるものが生きていることは必然であるが、苦痛がそのものを滅ぼすことは必然ではない。なぜなら、苦痛というものがあらゆるばあいに可死的で疑いもなく死ぬであろう身体を滅ぼすわけではないからである。何らかの苦痛が死を惹きおこすことがありうるのは、魂が、ひじょうな苦痛の力のもとに圧倒されて身体から離れ去るというような仕方でこの身体に結び付けられているからである。じっさい、肢体や諸器官のつながりは弱いので、相当の、あるいは極度の苦痛におそわれたばあい、もちこたえることはできない。しかし、かのときには、魂と身体とは、それらを結び付けている絆はどれほどの長い時間によっても解かれないような仕方で、かたく結合されているように、いかなる苦痛によっても破壊されないのである。

それゆえに、いまは苦痛の感覚をたえることができても死には耐えられないような肉でないとしても、かのときには肉はいまあるようなものではなく、死もまたいまあるようなものではない。魂は神をもつことなくして生きることはできず、死によって身体の苦痛を免れることもできないので、死は存在しないのではなく、かえって永遠に存在するのである。第一の死は、魂をその意に反して身体から追いはらい、第二の死は、魂をその意に反して身体のうちにとどめ

る。どちらの死にも共通していることは、魂は欲しないことを身体から蒙るということである。（一）

わたしたちの反対者たちは、苦痛を蒙ることはできるが死ぬことはできない肉がいまは存在しないことに注目するのであるが、身体よりも重要であるようなものが存在することに注目しない。それは魂である。魂が現前することによって、身体は生き、かつ支配されるのであるが、この魂自身は苦痛を蒙ることはできるが死ぬことはできないのである。見よ、苦痛の感覚をもっていながら死ぬことのないものが見いだされたのである。したがって、わたしたちが知っているように、いまはすべての人の魂に存在するところのものが、かのときには断罪された者たちの身体のうちにも存在するであろう。もしもわたしたちがいっそう注意深く考察するなら、身体と結び付いているといわれる苦痛は、じっさいには魂に属しているのである。

というのは、身体が傷つけられたその場所で苦痛を感じるとき、苦痛の原因が身体からくるばあいでさえ、苦しむのは魂であって身体ではないからである。それゆえに、感覚や生命を身体に与えるのは魂であるのに、わたしたちは身体が感覚するとか身体が生きていると語るように、苦痛が身体に存するのは魂による以外にありえないのに身体が苦痛を感じるというのである。したがって、魂は、何かが苦痛を感じさせた身体のその部分において、身体と共に苦痛を感じるのである。何らかの原因によって、それが不可視的な原因によってであっても、悲しみが生じるばあい、身体そのものは無傷ではあるけれども、魂のみが身体のうちにありながら苦しみを感じるのである。魂は身体のうちにないときにも苦痛を感じる。じっさい、かの富める者が、「わたしはこの火炎のなかで苦しんでいます」（二）といったとき、たしかにかれは地獄で苦

痛を感じたのである。

しかし、身体は魂から分離されているときに苦痛を感じることもなければ、また、魂と結び付けられているときにも魂によらずに苦痛を感じることもない。それゆえ、苦痛がおこりえたのだから死はおこりうるというように苦痛を死のための論拠として取りあげるのが正しいとするなら、苦痛が魂に属するかぎりにおいて死はむしろ魂に属するのである。しかしながら、苦痛を感じることのできる魂は死ぬことができないので、断罪された者の身体は苦痛のうちにあるから死ぬであろうと信じなければならない理由にどれほどの根拠があるのであろうか。

じっさい、プラトン主義者たちは、恐れたり、欲したり、苦痛を感じたり、喜んだりすることが魂におこるのは、地上的な身体と死すべき肢体とからであるといったのであった。だからして、ウェルギリウスは、「ここからして(すなわち、地上的身体と死すべき肢体とから)、恐れ、欲求し、苦痛を感じ、喜ぶ」(三)といっている。しかし、わたしたちはこの書の第十二巻において(四)、かれら自身の示すところにしたがって、魂はあらゆる身体の汚れからきよめられたとき、ふたたびその身体に還ることを欲しはじめるという恐るべき熱望をもつことを確証したのであった(五)。しかし、欲望の存在しうるところには、たしかに苦痛も存在しうるのである。じっさい、それへと向かっていたところのものに達成できなかったり、達成したところのものを失ったりした虚しい欲望は苦痛に変わるのである。

そのために、もしもそれのみが苦痛を感じる、あるいはもっとも多く苦痛を感じるところの魂が、すくなくともその在りかたにふさわしい何らかのそれ自身の不死性をもっているなら、

断罪された者のあの身体が苦痛を感じるがゆえに死ぬことができるということにはならないのである。けっきょく、もしも身体が魂に苦痛を感じさせるようにするのであれば、なにゆえに魂に苦痛を課することができて死を課することができないのであるか。苦痛を生ずるところのものが死をも生ずるということにはならないからではないか。それゆえ、身体そのものが魂を苦しませて、にもかかわらずそれによって魂を死なせることがないように、火がこれらの身体に苦痛を与えるが死を与えないということがなにゆえ信じられないのであろうか。したがって、苦痛が未来の死の必然的な証拠ではないのである。

（一）本書第十三巻第二章、第二十一巻第十一章参照。
（二）「ルカによる福音書」一六の二四。
（三）ウェルギリウス『アエネイス』六の七三三。
（四）本書第十四巻第三章、第五章参照。アウグスティヌスは本文で第十二巻と述べているが、これは明らかにかれの記憶違いで、第十四巻である。
（五）ウェルギリウス『アエネイス』六の七二六。

第四章

身体が苦痛の状態のもとにあっても生きつづけることを示す自然の例

そのゆえに、動物の自然本性を注意深く探求した人が、火とかげが火のなかで生きていると記しているように、（一）また、よく知られたシチリアのある山が（二）太古から今に至るまでのかくも長い期間にわたって、そしてこれからも火を噴き出していながら無傷のままに残っているとするなら、わたしたちは、燃えるものがすべて滅びるわけではないことの十分適切な証拠をもつのである。また、魂は、苦痛を感じることのできるすべてのものが死ぬこともできるわけではないことを知らせてくれる。永遠の罰によって罰せられた人間の身体が火のなかで魂を失わず、損傷なくして燃え、存在を止めることなくして苦痛を感じるということは信じられないことではないとわたしたちが教える例を、なにゆえさらに要求するのであるか。

　というのは、かのときには、わたしたちの肉の実体は、ひじょうに多くのものに、それらがあまりに多いゆえにわたしたちはおどろくこともなく見ているような不思議で多様な性質を与えられたかたによって与えられた性質をもつからである。じっさい、万物の創造者であられる神でなくてだれが、くじゃくに、それが死んでのち腐敗しないような力を与えたのであるか。わたしはこれをきいたとき信じられないことのようにおもえたが、あるときカルタゴで焙ったこの鳥の肉が出されたことがあって、その胸肉から十分とおもわれるだけの量を切りとって保存するよう命じたのであった。他のどんな種類の焙り肉も腐敗するだけ十分な日数の間隔を経てのち、この肉は持ち出され差し出されたが、それは何らいやな臭いもしなかった。

　それはさらにもとにもどされたのであるが、三十日以上ののちにも同じ状態であるのが見いだされた。さらに一年経っても、その肉はいくらか乾いて縮んだほかは変わりがなかった。だれ

がもみがらに、それでもって覆われた雪が保存されるような冷やす力や、熟していない果実が熟するような熱くする力を与えたのであるか。

そして火そのものであるが、(三)だれがその不思議なことを説明するであろうか。それ自身は輝いているが、そのなかで燃えたものをすべて黒くする。その色はもっとも美しいが、それがとり囲んでなめつくすほとんどすべてのものの色を失わせる。燃えて輝く石炭からまったく汚らわしい炭を残すのである。それを、いわば法則的に規定することはできない。じっさい、反対の過程をとって、輝く火に焼かれた石はそれ自身白く輝き、火はむしろ赤いのに、石は白くなるからである。しかし、黒いということが闇に対応するように、白いということは光に対応する。このように、石を焼くために火が木のなかで燃えるとき、反対物ではないのに反対の結果をもたらせるのである。石と木とは異なったものであるとしても、すくなくとも白と黒のように反対物ではない。しかし、火は石のほうには白さをもたらし、木のほうには黒さをもたらすのである。火は輝いており、石に輝きを与えるが、木を暗くする。火は木のなかで生きるのでなければ、石の上では効力をもたないのに。

また、炭はきわめてもろく、ちょっとした軽い一撃で砕かれ、まったく容易につぶされて粉々になってしまう。しかしそれはひじょうな安定性をもっていて、湿気によって崩壊されず、年月によっても破壊されないというのはおどろくべきことではないか。それで、境界を立てるとき、ずっとのちになって地に固定した境界の石が存在しないと主張するような訴訟に反駁するため、その下に炭を置くならわしである。(四)木材が腐敗するような湿った土のなかに埋められ

たとき、かくも長いあいだ炭が腐朽しないでいることができるようにしたのは、すべてのものを滅ぼすあの火でなくて何であるか。

石灰のおどろくべきことについても考えてみよう。他のものを汚くする火のはたらきによって白く輝くということ――そのことについてはすでにわたしは十分に述べたのであった――のほかに、それはまた、きわめて不思議な仕方で火から火をそのうちにとり入れ、触れると冷い塊となったとき、火を保存するのである。それはひそかにおこなわれるので、わたしたちの感覚にはまったく現れないが、経験によって火が確認されるのであって、現れていないときにもその塊のなかで眠っていることが知られるのである。それゆえに、そのなかに隠されている火が、あたかも目に見られる身体の不可視的な魂であるかのように生石灰とよぶのである。しかし、消えるときに燃え立つというのは何という不思議であろうか。というのは、隠されている火を除くためにそれに水を注いだり水のなかにひたすと、以前には冷たかったのに熱くなるからである。そしてそれも他の熱いものすべてを冷たくする水によってである。

それゆえ、石灰の塊がいわば息を引きとるとき、隠れていた火が離れて現れ、そののち石灰はあたかも死んだかのように冷たくなって、大量の水が加えられても燃えあがらなくなり、わたしたちは生石灰とよんでいたのをいまや消石灰とよぶようになる。この不思議にさらに何かおどろくべきことが付け加えられうるとおもわれるであろうか。しかし、付け加えられるのである。もしも水ではなく油を用いるなら、油はむしろ火の燃料であるのに、石灰が油にひたされても、油が石灰に注がれても、熱くならないのである。

もしもあるインドの石についてこの不思議を読んだり聞いたりして、しかもわたしたちが経験できなければ、わたしたちは虚偽であると考えるか、そうでなければ大いにおどろかされることであろう。けれども、わたしたちの目の前にあるもので毎日の実例となっているものは、それらがおどろくべきことでないからではなく、よくおこることであるがゆえに、何でもないことになってしまうのである。したがって、わたしたちから遠く離れた世界の部分であるインドからわたしたちのもとにおどろくべきものがもち込まれても、わたしたちはそれほどおどろかなくなってしまうのである。

ダイヤモンドはわたしたちのあいだでは多くの人びとが、とくに金細工師たちや宝石細工人たちがもっている。この石は、山羊の血のほか、鉄も火も他のどんな力も勝つことのできない石であるといわれている。(五) しかし、この石をもっており、それに精通している人たちは、この力がはじめて示された人びとのようにおどろかされるであろうか。この力が示されなければおそらく信じないであろう。信じても、未経験のこととしておどろくであろう。たまたま経験することになっても、さしあたり慣れていないこととしておどろくであろうが、常時経験してくると、徐々におどろきの刺激を失っていくのである。

わたしたちは磁石が鉄をひきつける不思議な石であることを知っている。(六) これを最初に見たとき、わたしは大いにおどろいた。たしかに、鉄の指輪がひきつけられて、石によって持ちあげられるのを見たのであった。それから、ひきつけた鉄にあたかも自分自身の力を与えたかのように、同じことをさせたのである。すなわち、この指輪が他の指輪に近づけられるとそれを

持ちあげたのである。第二の指輪は、ちょうど第一の指輪が石にくっついたように、第一の指輪にくっついた。同じようにして第三の指輪が加えられ、第四の指輪も加えられた。やがて、たがいに内側で結び付いたものではなく、外側で結び付いた輪ができて、一種の指輪の鎖のようなものがつりさがったのである。

たんにその内部にもっているだけでなく、そこからつりさげられた多くのものにも移って行って見えざる結合力によってそれらを結び付けたこの石の力にだれがおどろかないであろうか。しかし、これよりもさらにおどろくべきことを、わたしの兄弟であり同僚司教であるミレウィスのセウェルス(七)からこの石にかんしてきいたのであった。かれはわたしにじっさいに自分が見たことであると語ったのであるが、この司教が、かつてアフリカの高官であったバタナリウスのもとに招かれたとき、バタナリウスはその石を持ち出して銀皿の下にあて、皿の上にひとつの鉄をおいたのであった。それから、石をもった手を皿の下で動かすと、その動きにしたがって上にある鉄が動かされたのであるが、その間にある皿は何の影響も受けず、石は下側で人間によってひじょうに速い速度で前後に動かされると、上で鉄は石によってひきつけられたのである。

わたしは自分自身が見たことを述べてきた。また、あたかもわたし自身が見たかのように信じている人からきいたところのことを述べてきた。この磁石についても、わたしが読んだことを述べよう。ダイヤモンドがそのそばにおかれるとき、その石は鉄をひきつけることがなく、もしもすでに鉄をひきつけていたときには、ダイヤモンドをそれに近づけるやいなや離してし

まうのである。(八) これらの石はインドから送られてきたのであるが、すでにわたしたちがこれらの石を知っていておどろくことを止めたとすれば、ましてこの石をわたしたちに送った人たちにとって、これらの石がまったく容易にもたれるのなら、わたしたちが石灰をおどろかないように、それらの石をおどろかないことであろう。石灰は、ふつうなら火を消すはずの水によって熱くなり、ふつうなら火を点ずるはずの油によっては熱くならないのであるが、わたしたちには日常のことことなっているがゆえにおどろかないのである。

(一) 本書第十二巻第四章参照。古代には火とかげは火を消すものといわれていた(プリニウス『自然誌』一〇の六七参照)。

(二) ウェスウィウス山やエトナ山のこととおもわれる。エトナ山の永遠の火については、プリニウス『自然誌』二の一〇六―二三六参照。

(三) プリニウス『自然誌』二の一〇六、一〇七、二三六―二四一参照。

(四) ディオゲネス・ラエルティオスによれば、テオドロスという人物がエペソスの神殿の地構えに炭をおくように勧めたとされる。その場所はたいへん湿気があったので、木の性質を失った炭は水分を通さないという固さをもつからという理由による(『哲学者列伝』二の一〇三)。なお、プリニウス『自然誌』三六の一四参照。

(五) プリニウス『自然誌』二〇の一、二、二八の九、一四八、三七の四、五九参照。

(六) 同上、二の一参照。

(七) セウェルスはアウグスティヌスの終生の友人であった。

(八) プリニウス『自然誌』三七の四、六一。

第五章

合理的な説明はできないけれども疑いもなく真実であるような多くのことがあるということについて

それにもかかわらず、不信仰な人びとは、わたしたちがかれらの経験に示すことのできないような過去や未来の神の不思議な業を語るとき、それらについて理由をわたしたちにしつこく要求するのである。わたしたちがこれらのことがらについて説明を与えることができないので（というのは、人間の精神の力をこえているからである）、かれらは、わたしたちのいうところは虚偽であると考える。かれら自身が、わたしたちが見ることのできる、あるいは見ているかくも多くのおどろくべき現象について理由を与えるべきなのである。このことが人間によってはなされえないということがよくわかったなら、じっさい、現在においても同じように説明できないところのことはあるので、説明することができないがゆえにあることがおこらなかったとか、未来においておこることはないであろうということにはならないということを認めるべきである。

したがって、わたしは、文書に記されているもので、おこったことや過ぎ去ったことがらではなく、いまもなおいろいろなところに存続している多くのことをつづけて挙げることはしない。だれでもその場所へ行く意志と機会とがあれば、それらのことが真実であるかどうか見い

だすであろうからである。けれども、わずかなものについて言及しておくことにする。シチリアのアグリゲントゥムの塩は、(一)火のなかにおかれると、あたかも水のなかにおかれるごとくに溶けるが、水のなかにおかれると、あたかも火のなかにおかれるごとくに音をたてるといわれている。ガラマンテス人たちのところには、昼間は飲めないほど冷く、夜には触れられないほど熱くなる泉がある。(二)エピルスには別の泉がある。他の泉のように火のついたたいまつをそのなかに入れると消えるのであるが、他の泉とはちがって消えたたいまつにふたたび点火するのである。(三)

アルカディアの石綿は、ひとたび火がつくと消えることがないということからアスベストスとよばれる。(四)エジプトのあるいちじくの木は、他の木のように水に浮かないで沈むのである。さらにおどろくべきことには、水の底に一定の期間あって、水につかって水分の重さによって重くなるはずであるが、ふたたび水面に浮いてくるのである。(五)ソドムの地のりんごは、たしかに成長して熟した姿に至るのであるが、噛んだり圧したりすると皮が裂けて煙や灰になって消えてしまうのである。(六)

ペルシアの黄鉄鉱は、つよく圧されるとそれをもつ手を焦がすのである。そのために火からその名を受けとっているのである。(七)ペルシアにはまた別の石があって、それは内部の白い部分が月と共に満ち欠けする。(八)カッパドキアにおいては雌馬は風によって子をはらむが、その馬の子はせいぜい三年間生きることができるのみである。(九)インドの島テュロスは、そこに生えるどんな木も、その葉の覆いをはがれることはないということにより他の地域にまさった点をもっ

ている。(一〇)

これらの、そして他の無数のおどろくべきことがらは、過ぎ去ったりすんでしまったりしたこととしてでなく、現在の諸地域にあることとして記録に見いだされるのである。なすべき他の仕事をもっているわたしにとって、それらを追求することはあまりにも長たらしくなるであろう。聖なる書を信じようとはしない不信仰な人びとは、もしもできるなら、説明を与えるがよい。かれらが聖書を信じないのは、いまわたしたちが従事しているようなことがらと同じように信じがたいことがらがそこに記されているからでないなら、どうしてであるか。かれらの主張するところによれば、理性は、肉が燃えても消滅しないとか、苦痛を感じても死ぬことはない、ということを認めないからである。おどろくべきことであると確定しているこれらすべてのことについて説明を与えることができるとは、かれらはたしかに偉大な理性の持ち主である。

それゆえ、わたしがあげたこれらわずかな例について理由づけるがよい。もしもかれらが、これらのことが存在することを知らなかったり、わたしたちが将来存在することとして述べたのなら、疑いもなく、かれらはそれらのことを、わたしたちがいつかおこるであろうといま語っているのにわたしたちを信じようとはしないことよりもいっそう信じることがないであろう。じっさい、人間の生きた身体はつねに燃え、苦しみを感じながら、それにもかかわらずいつか死ぬことはないと語るように、来たるべき世においては、火が塩をあたかも水のなかにあるかのごとくに溶かしたり、あたかも火のなかにあるかのごとくに水のなかで音を立てたり、ある

いは、泉はその水が夜の冷たさのなかで触れられないほど熱くなるとか、昼の暑さのなかでは飲めないほど冷たくなるとか、あるいはまた、その熱によってそれを握った者の手を焦がす石があるであろうとか、点火すればけっして消えることのない石があるであろうとか、無数の他のおどろくべきことを省略してわたしがいま例としてあげるべきであると考えたその他のことを語ったとしたら、かれらのうちのだれがわたしたちを信じるであろうか。

それゆえ、もしもわたしたちがこれらの不思議なことは来たるべきかの世においておこるであろうといったとすれば、そして、疑い深い人びとがわたしたちに「もしもこれらのことを信じてもらいたいのなら、それぞれの事例について合理的な説明を与えよ」と答えるなら、わたしたちはそうすることはできないと認めるであろう。死すべき者たちの弱い理性的な力は、これらの、また同じような神の不思議な業によって打破されるからである。しかし、わたしたちの理性は、全能者は、人間の弱い精神が合理的な説明を与えることができないばあいにも、理由なくしておこなわないということについてゆるがない。また、たしかに多くのことがらにおいて神が何を欲しておられるのか、わたしたちには不確かであるが、しかし、神が欲しられる何ごとも神にとって不可能ではないということはまったく確実である。わたしたちは、神が預言されることを信じるが、神が無能力であるとか嘘つきであるとかいうことを信じることはできない。

それにもかかわらず、かれらはわたしたちの信仰のあら捜しをおこない、合理的な説明を要求するのであるが、かれらは、人間の理性が説明することはできないが、しかし、たしかに存

在し、自然の合理的な秩序に反するように見えるこれらのことがらに面してどのような答えをもっているのであろうか。もしもそれらのことが将来おこるであろうとわたしたちがいったとしたならば、わたしたちが将来おこるであろうと主張している出来事と同じように、不信仰な人びとによって合理的な説明がわたしたちに求められたことであろう。したがって、神のこのような業については人間の心やことばの理性的な力はくじかれるのであるからには、どちらについても人間によって合理的な説明が与えられないからといって、前者が存在しないわけではないのと同じように、後者も存在しないであろうというわけではない。

(一) プリニウス『自然誌』三一の七参照。
(二) 同上、五の五参照。
(三) 同上、二の一〇三参照。
(四) 同上、三七の一〇参照。
(五) 同上、一三の七参照。
(六) タキトゥス『歴史』五の七、ヨセフス『ユダヤ戦記』四の八参照。
(七) プリニウス『自然誌』三七の一一参照。黄鉄鉱はピュリテス(pyrites)であるが、ギリシア語の「火」(πῦρ)からその名がとられている。
(八) 同上、三七の一〇参照。
(九) 同上、八の四二参照。
(一〇) 同上、六の二八、一二の一〇、一六の四一参照。

第六章

すべての不思議が自然的なのではなく、多くが人間やダエモンらの考案によるものである

ここで、かれらはおそらくこう答えるかもしれない。「もちろん、このようなことは現実ではない。わたしたちはそれらのことばを信じない。それらについて語られたり記されたりしたものはすべて偽りである」。そしてかれらはさらに議論をすすめていうであろう。「もしもそれらのことが信じられるべきものであるなら、あなたがたも同じ書に記されている話を信じるべきである。ウェヌスの神殿がかつてあり、[一] いまもあるが、そこには燭台があって、その燭台には空の下で燃えている灯火があり、どんな嵐も、どんな雨も、それを消すことはない。そこからして、あの石のようにリュクノス・アスベストス、[二] すなわち消えることのない灯火とよばれる」。このようにいってわたしたちを返答に困らせて窮地に立たせるかもしれない。なぜなら、もしもこの話を信じるべきではないとわたしたちがいえば、もろもろの不思議なことを記した文書の権威を弱めることになり、それにたいして、信じるべきであると認めるならば、わたしたちは異教徒たちの神々の力を支持することになるからである。

けれども、わたしがすでにこの書の第十八巻で述べたように、[三] わたしたちは異教徒たちの歴史的な記録のなかに含まれているすべてのことを信じなければならないわけではない。ウァル

ロもいっているように、歴史家たちは明らかに意図しているかのごとくに多くの点で骨折ってたがいに意見を異にしているからである。しかし、もしもわたしたちが欲するなら、わたしたちが信じるべきであると疑わない書物に矛盾しない記録を信じることにする。ところで、これらの不思議なことがらにかんしては、来たるべきこととして不信仰な人びとに説得しようとしているところのことにたいして、わたしたちは、わたしたちも経験することができ、適当な証言を見いだすのに困難でないあのことだけで十分こと足りる。

ところで、ウェヌスの神殿やその消えることのない灯火にかんしては、わたしたちは窮地に追い込まれることがないだけでなく、わたしたちにとって広い野がひらかれる。というのは、あの消えることのない灯火には、人間的な、そして魔術的な他の多くの不思議を付け加えることができるからである。すなわち、ダエモンが人間をとおしてはたらいたり、ダエモン自身によっておこなわれる不思議である。もしもわたしたちがそれらの事実を否定しようとすれば、わたしたちが信じている聖なる書の真理そのものと矛盾することになる。したがって、あの灯火にアスベストの石によって人間の術が何らかの仕組みをほどこしたか、それとも、人間たちがあの神殿でおどろくように魔術によって仕組まれたか、あるいは、あるダエモンがウェヌスの名のもとにその不思議な予兆がそこで人間たちにあらわれて長いあいだつづくような効果をもってみずからを示したかである。

ダエモンらは、かれらによってつくられたのではなく神によってつくられた被造物によって住まいをとるように誘われるのである。かれらはそれぞれの相違に応じて異なったえさによっ

て引きよせられるが、動物のように食物によるのではなく、霊のようにしるしによって誘われる。それらはかれらの好みに合ったようにさまざまな石や植物、木や動物、呪文や儀式である。ダエモンらは人間たちによって誘われるために、まずまったく精妙な狡猾によって人間たちの心にひそかな毒を吹き込んだり、友人のふりをして現れたりして欺き、そのごくわずかな者を自分たち自身の弟子にして他の多くの者たちの教師にするのである。というのは、ダエモン自身からあらかじめ教示されなければ、そのなかのだれが何を欲し、何を嫌い、またどのような名でよび出されたり、何によって人間の意志をなすよう強いられたりするのか、人間には知られないからである。ここからして魔術とその従業者たちとが出てくる。

しかし、かれらが光の天使に変身したとき(四)、死すべき者たちの心をことにとらえるのであり、かれらがとくに誇りとするのはこれらの者を所有することにおいてである。それゆえ、かれらのなすことは数多く、それらの不思議をわたしたちが認めれば認めるほど、それを避けるために注意深くあらねばならない。しかし、それらのことも、わたしたちの当面している仕事を果たすのにわたしたちにとって有益である。というのも、もしもこの汚れたダエモンらがこのような力をもっているのなら、聖なる天使はさらに力のある者であるであろうし、天使たちにこのような不思議をはたらかせられた神は、これらすべてのものよりもどれほど偉大な力があることであろうか。

このようなわけで、神の被造物が人間の技術の使用によって、かれらがメカネマタ(五)(仕組み)とよんでいるかくも多くの不思議を生じるのであるが、知らない人びとはそれらを神自身のは

たらきによるものであるとおもうであろう(だからして、ある神殿において、大きさのつり合った二つの磁石を、その一つを床に、他の一つを屋根においてその中間に鉄の像を空中につりさげれば、上と下とにあるものが何であるか知らない人びとにとっては、神的な力によってつりさがっているかのようにおもわれるのである。また、かのウェヌスの灯火のばあいも、アスベストスを用いて何かこの種のことが技術者によってほどこされていることがありうるということはすでに述べた)。ダエモンらは、わたしたちの書が魔法使いとか魔術師とよんでいる魔術を使う者たちのはたらきによって、かの有名な詩人がその種の術に秀でたある女性について つぎのようにいうとき、自分が人間の感覚に合致しているとおもわれるようにさせうるのである。(六)

かの女が約束するには、
自分の欲する人間の心を解放し、
他の者たちには苛酷な苦しみを課し、
川の流れをとどめ、星の進行を反対のほうに向け、
夜には死者の霊をよび出す。
あなたは足もとで地がうなり声を発するのをきき、
とねりこの木が山からくだるのを見るであろう(七)。

もしもこれらのことがすべて真実であるのなら、神は、不信仰な人びとにとっては信じがたいが、ご自身の権能にとっては容易であることを成し遂げられるのにどれほど大きい力をもっ

ておられることであろうか。じっさい、石やその他のものに力を与え、人間にこれらのものをおどろくべき仕方で用いる才能を与え、天使たちに地上のすべての生きものにまさる力ある本性を与えられたのは神だからである。神はすべてのおどろくべきことにまさるおどろくべき力をもって、はたらいたり、命じたり、許したりする知恵によって、創造と同じほどのおどろくべき仕方で、すべての被造物を用いられるのである。

(一) プリニウス『自然誌』二の九六参照。
(二) λύχνος ἄσβεστος.
(三) 第十八巻第十八章。
(四) 「コリント人への第二の手紙」一一の一四。
(五) μηχανήματα.
(六) プリニウス『自然誌』三四の一四参照。
(七) ウェルギリウス『アエネイス』四の四八七—四九一。

第七章

神の全能が奇跡を信じることの根拠である

そのようなわけであるから、なにゆえ神が死者の身体を復活させ、断罪された者の身体を永

遠の火によって苦しませる力をもっておられないわけがあろうか。神は世界を、天においても地においても、大気のなかでも水のなかでも数えられない奇跡で満たされる。世界そのものが、疑いもなく、それを満たしているあらゆるものよりも偉大ですぐれた奇跡であるけれども。

けれども、わたしたちが共に、あるいは反対して議論に従事しているこれらの人びとは、世界をつくられた神の存在を信じており、また、それをとおして神が世界を支配されるところの神によってつくられた神々の存在も信じており、また、自発的にであるか、何らかの祭礼や儀式によって得られるのであるか、あるいは魔術によって成し遂げられるのであるか、いずれにせよ、この世界に奇跡を生みだす力が存在することを否定しないばかりか、公言さえしているのであるが、それにもかかわらず、わたしたちがそのごくわずかな例をあげたような、理性的被造物でもなく何らかの理性を与えられた霊でもない他のもののおどろくべき力を差し出すと、つねにつぎのように答えるのである。

「これは自然本性の力であり、それらの自然本性がそのような状態になっているのだ。これらのことは自然本性の固有のはたらきなのである」。したがって、これが完全な説明なのだ。なにゆえにアグリメントゥムの塩が火のなかで溶け、水のなかで音をたてるのかということは、それが自然本性であるがゆえなのである。しかし、これはむしろ自然本性に反しているとおもわれる。というのは、自然は火ではなく水に溶かされるという固有性を塩に与え、水にではなく火に焦がさせるからである。けれども、かれらは、このように自然に反する結果を見せるの

がこの塩の自然本性の特質なのだ、というのである。

そしてこの説明がガラマンテスの泉のばあいにも与えられる。すなわち、そこでは同じ水脈が昼には冷たく、夜には熱くなって、いずれのばあいも触れる者を困らせるのである。それはあのもうひとつの泉についても適用される。すなわち、触れると冷たく、他の泉のように燃えているたいまつを消すが、それでいて他の泉とはちがって不思議な仕方で消えたたいまつをふたたび燃えあがらせるという泉である。それ自身が火をもっているわけではないが、他のものから火を受けとると消えることがないというアスベストスの石についても同様である。くり返すことはうんざりするような他のことがらについても同様である。それらは、類例がなく、自然に反する特質が内在しているようにおもわれるのに、それがそれらのものの自然本性なのだ、という以外に他の説明が与えられないのである。

わたしは認めるが、たしかにそれは簡潔な説明である。じっさい、十分な答えである。しかし、神は全自然の創造者であられるのであるから、なにゆえにかれらは、より強力な説明をわたしたちが与えることを欲しないのであろうか。かれらはあることをそれが不可能なことであるとして信じようとはせずに、わたしたちから説明を求めるが、わたしたちは、それは全能なる神の意志であると答える。神はたしかに全能者とよばれるのであるが、それは、神は欲せられるところのすべてのことをなす力をもっておられるからにほかならない。神は、わたしたちに示されるのでなければ、あるいは、今日もなお信頼できる証人によって報告されるのでなければ明らかに不可能であると見なされるような多くのものをつくる力をもっておられる。そし

てこのことは、わたしたちにまったく知られていないものについてだけでなく、わたしが示したような、きわめてよく知られた例についてもそうである。わたしたちの読む書物の著者以外に証言がなかったり、神的な霊感によって教示されたのではなく、したがっておそらく人間的な誤ちをおかしやすい著書によって書かれているようなことがらにかんしては、それらに信頼をおかなくてもよい。また、だれもそうすることによって正当に非難されない。

じっさい、わたしとしても、わたしが引用したすべての例を無造作に信じてもらいたいわけではない。なぜなら、わたし自身、わたしが経験したり、だれにでも容易に経験されるつぎのようなことがらを除いては、わたしの心のなかにまったく何の疑いももたないかのようにすべてを信じたりはしないからである。すなわち、石灰についていえば、それは水のなかで熱くなり、油のなかでは冷たい。磁石についていえば、何であるかわたしは知らないが、感覚できない吸引力により、麦わらを動かさないが鉄を引きつける。肉についていえば、プラトンの身体は腐敗したのにくじゃくの肉は腐らない。もみがらについていえば、それは雪を溶かさないで保つという意味で冷たく、果実を熟させるという意味で温かい。輝く火についていえば、それは石を焼くとその輝きによって白く光らせるが、ほとんどのものをその輝きに反して焦がして黒くする。輝く油から黒いしみがひろがったり、同様に、光る銀によって黒い線が刻まれたりするのは、この種のことがらである。炭についていえば、燃える火がそのものを反対の性質に変えるのであって、美しい木から見ぐるしいものに、恒久性のあるものからもろいものに、腐りやすいものから腐りにくいものになる。これらの事実はわたし自身が知っているものである

が、それらのうちあるものは多くの人に知られ、あるものはすべての人に知られている。他に、この書に書き入れると長たらしくなるような多くの事例が存するのである。

しかしながら、わたしが経験したのではなく読んだこととして引用した例については、燃えたたいまつを消し、消えたものを燃やすという泉や、外側はあたかも熟しているかのように見えているが、内側では煙が満ちているというソドムの地のりんごのばあいを除いて、これらの話が本当かどうかきけるような適当な証人を見いだすことはできなかった。じっさい、あの泉については、わたしはエピルスでそれを見たという人は見いださなかったが、グラティアノポリスから遠くないガリアにおいて同じような泉を知っているという人に会ったのであった。他方、ソドムのりんごについては、信頼に値する書が報じているばかりでなく、多くの人がみずからそれを経験したと語っており、わたしはそれを疑うことはできない。

それ以外のことについては、わたしは否定も肯定もできない状態であるが、わたしはわたしたちの敵対者の歴史記述者のもとでそれを読んだので、引用したのである。それは、かれらの多くが、自分たちの著述家の書に記されているどれほど多くのことを、何ら合理的な説明なくして信じているかを示すためであった。ところがかれらは、わたしたちがかれらの経験や感覚をこえていることが全能の神によってなされるであろうというときには、わたしたちが合理的な説明なしに信じているとして軽蔑するのである。じっさい、そのようなことがらについては、すでにおこったことが証明されている他の多くのことを予告した書において預言したところのことを、全能者はおこなうことができるし、また、おこなうであろうという以上によりよく、

より確かな説明が与えられるであろうか。神はたしかに不可能とおもわれることもなされるであろう。なぜなら、神はそれをなすであろうと預言されたからであり、信じがたいことが不信仰な人びとによって信じられるようになることを約束されたからであって、その約束は実現されたのである。

（二）現在のグルノーブル。

第八章

本性が知られているものにおいて、知られているところとは異なった何かがおこるとしても自然に反しない

しかしながら、かれらはつぎのように答えるかもしれない。人間の身体がいつまでも燃えながら死なないというわたしたちの主張は、人間の身体の本性はまったく異なったように構成されているのであるから信じられない。だからして、あの自然のおどろくべきことがらにかんして、「これは自然の力であり、これがそのものの本性である」ということができたあの説明は、ここでは提供できない。というのも、わたしたちは、人間の肉の本性がこのようなものでないことを知っているからだ。――もしもこのように答えたなら、わたしたちは聖なる書に基礎づけられた答えをもっている。すなわち、この人間の肉は罪を犯す以前には、いまとは異なって

いたということである。つまり、けっして死を蒙ることがないということが可能であった。しかし、罪ののち異なったのであって、人間の肉は可死性のこの苦しみにおいて知られるように、永続する生命を保持することができなくなったのである。それゆえ、死者の復活においては、いまわたしたちに知られているのとは異なったように定められているのである。

しかし、かれらはわたしたちの書物、すなわちそこには人間が楽園においてどのように生活していたか、そしていかに死の必然性から無縁であったか、読まれるのであるが、その書物を信じないので(もしもかれらが信じたならば、もちろん、断罪された者の罰について骨の折れる議論に従事していないであろう)、わたしたちはある事物について、その本性の固有の特質としてさきに知られていたのとは異なった状態になりうるということを示すために、かれら自身のあいだでもっとも学識ある人の書物から証言を引用しなければならないのである。

マルクス・ウァルロの『ローマ人の種族について』と題する書物に、(一)つぎのような一節があるが、わたしはそれを著者自身のことばで引用しようとおもう。「天におどろくべき前兆が現れた。プラウトゥスによってウェスペルゴとよばれ、(二)ホメロスによってもっとも美しいといわれてヘスペロスとよばれたところのよく知られたウェヌスの星に(三)おどろくべき前兆が現れた、とカストル(四)は記している。その星は、色や大きさ、かたちや進路を変えるのである。これは、これまでにけっしてなく、これからもけっしてないであろう。このことは、キュジクスの有名な数学者アドラストスとネアポリスのディオンによれば、オギュゴス王(五)の治世におこったといわれている」。

たしかに、もしもそれが本性に反しているようにおもわれなかったら、ウァルロほどの著述家がこの現象を前兆とよんだりはしなかったであろう。じっさい、わたしたちは当然のこととして、すべての前兆は本性に反しているという。しかし、そうではないのである。というのも、かくも偉大な創造者の意志がすべてのつくられたものの本性であるからには、神の意志によっておこるとき、いかにして自然本性に反しうるであろうか。それゆえ、前兆は本性に反しておこるのではなく、本性として知られているところのものに反しておこるのである。しかし、異教徒の歴史に包含されている多くの前兆をだれが数えることができるであろうか。

けれども、いまは、わたしたちが論じていることがらに関係しているところのものにのみ注意を向けねばならない。この上もなく規則正しい星の運行のように天地の創作者によって定められているものが何かあるであろうか。これほど不変の法則によって確実に立てられたものが何かあるであろうか。にもかかわらず、最高の主権と権能とによって被造物を支配するかたがのぞまれるばあいには、大きさや輝きにおいて他のすべての星にまさってもっともよく知られた星の色やかたち、（そしてこれはさらにおどろくべきことであるが）その運行の秩序や法則を変えたのである。このばあいには、たしかにこの星は天文学者たちの規則を――そのような規則がそのときまでに存在していたとして――くつがえしたのである。天文学者たちは誤ることがないと考えられた計算によって星の過去および未来の運動について計算する規則を記録し、この規則にしたがって、あけの明星についておこったところのことはこれまでけっしてなかったし、これからもないであろうとあえて主張するのである。

他方、わたしたちが聖なる書において読んだところによれば、聖なる人、ヌンの子ヨシュアが主なる神に恩恵を乞い求めたとき、はじまっていた戦闘が勝利に終わるまで、太陽でさえもとどまり、[六] それからもとにもどったのであって、それは、ヒゼキヤ王の生涯に十五年間という期間が増し加えられるという神の約束に、この前兆もまた付け加えられたことを示すためであった。[七] けれども、異教徒たちは、聖徒たちの功績にたいして与えられたこのような奇跡も、その事実は信じながら、それを魔術に帰せしめるのである。

だからして、わたしはさきにウェルギリウスが語ったこととして一節を引用したのである。

川の流れをとどめ、星の進行を反対のほうに向ける。[八]

じっさい、わたしたちが聖なる書において読むところによれば、上に述べたヌンの子ヨシュアに導かれて神の民が渡ろうとしたとき、川の流れはとどまり、その水は上流と下流に向かって流れたのであり、[九] 同じことは預言者エリヤが渡ったときも、そしてそののち、その弟子エリシャがそれにしたがったときもおこったのである。[一〇] ヒゼキヤの治世に最大の星が逆のほうに向かったことは、いま述べたばかりである。しかし、あけの明星についてウァルロが記しているところのことは、それがだれか人間の嘆願にこたえておこされたとはいっていない。

それゆえ、不信仰な人たちは、ある事物において、その自然本性のうちに人間の経験によって認識する以外のことが神の力によってあたかも生じることができないかのように自然の知識について目をくらまされてはならない。たとえ人間は稀なもの以外の不思議におどろくようになっているとしても、事物の本性においてすべての人に知られたことでさえ、すくなからず不

思議であるし、それを観察するすべての人にとっておどろきとなっているであろう。たとえば、理性的な考察によって、人間の数がかぞえきれないほど多いにもかかわらず、また、人びとのあいだに共通している本性のこれほどの類似性にもかかわらず、それぞれがそれぞれの顔をもっていることがいかにおどろくべきことであるか、だれが知らないであろうか。たがいのあいだにこの類似性がなければ他の動物から異なった種として識別されないであろうし、他方、たがいのあいだに相違がなければある人間が他の人間から識別されないであろう。

したがって、わたしたちは、人間が似ているのを認め、また似ていないのを見いだすのである。しかし、わたしたちのおどろきをひきおこすのは不類似を見ることによってである。というのは、わたしたちの共通の本性は類似性を要求するのがいっそう正当なものとおもわれるからである。にもかかわらず、おどろきをひきおこすのは稀であるものであるがゆえに、識別するのに、いつも、あるいはしばしば、まちがえるほどに似た二人の人間を見いだすときに、わたしたちはいっそうおどろくのである。

しかし、かれらは、わたしがウァルロの記述から述べたようなことは、たとえかれがかれらの歴史家であり、またもっとも学識のある人であるとしても、ほんとうにおこったとは信じないかもしれない。あるいは、星はそれほど長いあいだその行路からそれたままであるわけでなく、通常の行路にもどるがゆえに、この例におどろかされることがすくないかもしれない。それゆえ、現在も明らかにされうるものであり、また、かれらに十分であるとおもわれる別の例がある。それによって、かれらは、自然の何らかの構成に注意を向けてそれが自分たち自身に

よく知られるようになったとき、その結果として、そのものがかれらに知られたのとはまったく異なったものに転じたり変えたりすることができないかのように神に限界をおくべきではないということが警告されるであろう。

　ソドムの地は、かつては、わたしたちが知っているようにいまとはまったくちがっていた。それは他の土地と同じような姿をしていて、同じくらいか、あるいはもっと豊かで肥えていた。じっさい、それは聖書のなかで神の楽園に比せられているのである。(二)しかし、それが天から打たれたのちは、それは異教徒たちの歴史によっても確認され、(三)いまもその場所を訪れた人たちによって見られるように、おそろしく異様なところとなって残り、煤となったのであった。その果実は表面においては熟した姿を見せて欺きながら、内部には灰しかはいっていない。見るがよい、その地はこのようではなかったのであるが、いまはこのようになっているのである。見るがよい、自然の創造者によって、その自然本性がおどろくべき変化によってそれまでとは異なってはなはだしく醜い状態へと変えられたのである。そして、このことはひじょうに長い時間ののちにおこり、ひじょうに長い時間つづいているのである。

　そのようなわけで、神にとっては、その意志にしたがって本性を定めることが不可能でないように、定められた本性をその欲するところのものへと変えることは不可能ではないのである。だからして、「しるし」とか「目じるし」とか「前兆」とか「予示」とよばれている多くの奇跡が生じるのである。もしもわたしがそれらを想いおこして言及しようとするなら、この書はいつ終えることになるであろうか。「しるし」といわれるのは、示すことから、すなわち象徴

することによって何かを示すことから、「目じるし」は指示することから、「前兆」は予告することから、すなわち前もって示すことから、そして「予示」はあらかじめいう、すなわち未来を予言することからそうよばれているといわれる。

しかし、かれらの占い師たちは、それらのものにもとづきながらいかにまちがえるか、あるいは、真実を予測することがあっても、それは、その種の罰にふさわしい人間たちの心を有害な好奇心の網にかけることをねらっている霊の影響のもとにあるのだということを、あるいは、多くのことを語ることによってときどきは何らかの真理に行き当たるのだということを、考えてみるべきである。

しかしながら、わたしたちにとっては、いわば自然に反して生じたり、自然に反して生じるといわれたり(使徒も人びとのいいかたにしたがって、野生のオリーブがオリーブに接木されてオリーブの豊かさにあずかることを「自然に反して」といっている)[二三]、また、しるしとか目じるしとか前兆とか予示とかよばれているものは、神が死者の身体についてなすであろうと予告されたところのことを、いかなる困難によっても妨げられず、いかなる自然の法則によっても禁じられることなくなされるであろうということを、わたしたちに示したり指示したり予告したり予言したりすべきものなのである。神がこのことをどのように予告されたかということについては、わたしは、旧新約聖書から、この問題に関係するすべての箇所ではないが、本書の目的にとって十分と判断されるところのものを抜き出して、前巻において十分示したと考える。

(一) ウァルロのこの書は第十八巻においても引用されている(第二章)。
(二) プラウトゥス『アンピトルオ』一の一の一二二。
(三) ホメロス『イリアス』二二の三一八。
(四) カストルは紀元前一世紀の文法家で、年代記作者。エウセビオスによってしばしば引用されている。
(五) オギュゴス王については本書第十八巻第八章においても触れられている。
(六) 「ヨシュア記」一〇の一三参照。
(七) 「イザヤ書」三八の八。
(八) ウェルギリウス『アエネイス』四の四八九。
(九) 「ヨシュア記」三の一六参照。
(一〇) 「列王紀下」二の八、一四参照。
(一一) 「創世記」一三の一〇参照。
(一二) タキトゥス『歴史』五の七。
(一三) 「ローマ人への手紙」一一の一七、二四参照。

第九章

地獄と永遠の罰の性質について

このようなわけで、神が預言者をとおして断罪された者の永遠の罰について語られたところ

のことはおこるであろう。「その虫は死なず、その火は消えることがない」[22]ということはたしかにおこるであろう。主イエスも、人をつまずかせる肢体について、それらが、人が自分の右手のように愛している人びとをあらわすものとして、このことをいっそうつよくいわれたのであった。かれはそれらを切り捨てるよう命じていわれる。「両手がそろったまま地獄の消えることのない火のなかに入るよりは、かたわになって生命に入るほうがあなたがたにとってよいことである。地獄では、その虫は死なず、火も消えることがない」。

同様に足についてもいわれる。「両足がそろったままで地獄の消えることのない火のなかへ引き渡されるよりは、片足で永遠の生命に入るほうがあなたがたにとってよいことである。地獄では、その虫は死なず、火も消えることがない」。目についても同じようにいわれる。「両眼がそろったままで地獄の火のなかへ引き渡されるよりは、片目になって神の国に入るほうがあなたがたにとってよいことである。地獄では、その虫は死なず、火も消えることがない[23]」。かれは同じ箇所で三回も同じことばを語ることを面倒とはおもわれなかったのである。このくり返しと神の口から発せられたかの罰にたいするつよい忠告とに、だれがおそれないでいられようか。

ところで、この両方、すなわち火と虫とを身体の苦痛にではなく魂の苦痛に関係させようとする人びとがあるのであって、かれらは、悔い改めが遅すぎて無益となり、かくして神の国から離されてしまった者たちが魂の悲嘆と苦痛の火のうちに燃えあがるのだ、という。したがって、かれらは、「火」がその燃えあがる苦痛を表示するために用いられたのは不適切ではない

と主張するのである。使徒が、「だれかがつまずいているのに、わたしが燃えないでおれようか」(三)といっているのもそのためである。「虫」も同じ仕方で受けとられるべきものであるとかれらは考えている。すなわち、「しみが衣を食い、虫が木を食うように、悲しみが人の心を苦しめる」(四)と書かれているのである。

他方、かの罰においては、魂と身体の両方の苦痛があるのだと確信している人びとは、身体は火によって燃えあがるのにたいして、魂のほうはある意味で悲しみの虫によってむしばまれるのだと主張する。かの状態において魂か身体のどちらかが苦痛を免れるであろうと考えるのは明らかに不合理であるから、このように主張するほうがより信頼されうるのであるが、しかし、わたしとしては、両方をどちらか一方に関係づけるよりも、身体に関係づけるほうがより容易である。聖書のことばにおいて魂の苦痛について語られていないのは、たとえ語られていなくても、身体がこのように苦しむときに魂もまた無益な悔い改めによって苦しめられるということになると解されるからである。

じっさい、旧約聖書において、「不敬虔な者たちの肉の罰は火と虫である」(五)と読まれるのである。これはもっと簡潔に「不敬虔な者たちの罰」ということもできたであろう。それでは、なにゆえに「不敬虔な者たちの肉の」といったのであろうか。それは、どちらも、すなわち火も虫も肉の罰だからである。あるいは、もしも肉にしたがって生きることが人間において罰せられるゆえに肉の罰ということを欲したのならば(このために第二の死に至るのであって、それを使徒は「もしも肉にしたがって生きるなら、あなたがたは死ぬであろう」(六)といって表示し

たのであった)、火を身体に割り当て、虫を魂に割り当てて、前者を本来的な意味で、後者を比喩的な意味でそうするか、あるいはどちらも本来的な意味で身体に割り当てるか、どちらか気に入るほうを選ぶがよいであろう。

いずれにしてもわたしは生物が火のなかでも生き、消滅することなくして燃え、死を蒙ることなくして苦痛を感じることがありうるということは十分に論じた。このことは全能の創造者の奇跡によることなのである。このことが創造者にとって不可能であるという者は、全自然のなかに見いだされる不思議がだれに負うものであるか、知っていないのである。じっさい、この世界のすべての不思議なもの、わたしがあげた大小の奇跡やわたしがあげなかった比較にならないような多くの奇跡をなしたのは神ご自身なのである。そして神はそれらすべてを、かの唯一の、そしてあらゆる奇跡のなかでも最大の奇跡であるこの世界そのもののうちに包含したのである。

そこで、二つのうちから一つを選ぶがよいであろう。すなわち、虫も本来的な意味で身体に関係づけるか、それとも、ことばを物体的なものから非物体的なものへ移して魂の罰に関係づけるか、である。これらのいずれが真実であるか、じっさいにおこるときによりすみやかに示されるであろう。聖徒たちの知識は、かの罰を認識するのに経験を必要とするというようなものではなく、これを知るためにも、かのときに十分で完全なものとなる知恵だけで十分なのである(じっさい、完全なものに至るまでは、いまは、わたしたちの知るところは一部分であるからである)(七)。すくなくともわたしたちは、あの身体が火によっていかなる苦痛も感じないよ

うになるということはけっして信じるべきではない。

(一)「イザヤ書」六六の二四。
(二)「マルコによる福音書」九の四三以下。
(三)「コリント人への第二の手紙」一一の二九。
(四)「箴言」二五の二〇。
(五)「集会の書」七の一七。
(六)「ローマ人への手紙」八の一三。
(七)「コリント人への第一の手紙」一三の九参照。

第十章

地獄の火は、もしもそれが物体的なものであるのなら、接触によって非物体的な悪霊すなわちダエモンを焼くことができるのであるか

ここでわたしたちは別の問題に直面させられる。もしもこの火が魂の苦痛のように非物体的なものではなく、接触によって苦痛が与えられる物体的なものであって、身体はそれによって苦しめられるのであるとすれば、悪霊はそのなかでいかにして罰せられるのであるか。ダエモンと人間の罰に用いられるのはたしかに同じ火なのである。というのは、キリストは「のろわ

れた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使いたちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ」(一)といっておられるからである。おそらくダエモンには、学者たちが考えたように、風が吹くときにわたしたちがその圧力を感じるような、濃密で湿った空気から成り立っている一種の身体があるのかもしれない。

もしもこの種の元素が火によって影響されえないのなら、それが浴室で熱せられるとき、わたしたちを熱くしないであろう。というのも、それが熱するためにはまず熱せられて、それがはたらきを受けたときにはたらくのだからである。しかしながら、ある人が主張するように、ダエモンらはいかなる身体ももたないとするなら、このようなことがらについて骨の折れる探求に苦労する必要もなければ、また、議論好きな討論で争う必要もない。じっさい、疑いもなく非物体的なものである人間の霊が、いまは物体的な肢体のなかに入れられ、審きのときその身体の絆によって解きがたく結び付けられていることがありうるとすれば、たとえおどろくべきことであっても、非物体的な霊も現実に物体的な火の罰によって苦しめられるとどうしていってはならぬのであるか。

それゆえ、たとえかれらが身体をもたないとしても、ダエモンの霊、というよりはむしろ霊であるところのダエモンは、非物体的ではあるけれども、苦しみのための物体的な火と接触するであろう。これは、かれらが接触する火が、この接触のために霊を受けとり、身体と霊とから成る生き物になるという意味ではない。わたしがいったように、この接触はいい表わしえない不思議な仕方でおこなわれるであろう。そして霊は火に生命を与えるのではなく、火から罰

を受けるであろう。なぜなら、霊が身体と接触して生き物を生じる別の接触が存するからであり、この結合はまったく不思議で人間の理解力をこえている。わたしは人間自身のことをいっているのである。

わたしはたしかに、あの金持が「わたしはこの火炎のなかで苦しみもだえています[二]」といったとき、かれが地獄で燃えているように霊は物体的な身体をもたなくても燃えるといったかもしれない。これは、わたしが適切な答えに気付かなかったら、わたしがいったかもしれないところのことである。つまり、あの火炎は、金持が上にあげてラザロを見たところの目や、わずかな水が注がれることを願ったところの舌や、そのことが自分に成るように求めたところのラザロの指と同じようなものであるということである。しかも、そこでは魂は身体なしに存在したのである。それゆえ、かれを焼いた火炎やかれが求めた水のしずくは非物体的なもので、夢を見る人たちや、あるいは脱我状態で非物体的でありながら物体との類似性を見せているものを知覚する人たちが見る現象と同じようなものである。

じっさい、その人自身もそのような現象のなかで、身体においてではなく霊において現れるのであるが、しかし、そのときには、まったく区別がつかないほど自分の身体に似た自分自身を見るのである。しかし、火と硫黄の池[三]ともよばれているかの地獄は物体的な火であって、断罪された者たちの身体を苦しめるであろう。それが人間とダエモンの身体であるか――人間の身体は固体的でありダエモンの身体は気体的である――、あるいは、霊と共なる人間の身体だけであって、ダエモンのばあいは身体のない霊であり、物体的な火に固着するのはそれから罰

を受けるのであるがそれに生命を与えるのでないような仕方であるか、いずれにしても――。たしかに真理が語っているように、(四)両者にとって火は同一なのである。

（一）「マタイによる福音書」二五の四一。
（二）「ルカによる福音書」一六の二四。
（三）「ヨハネの黙示録」二〇の一〇。
（四）「マタイによる福音書」二五の四一。

第十一章

罪の期間と罰の期間との関係について

ところで、わたしたちが神の国を擁護している相手のうちのある人びとは、それがいかに重大なものであるにしても短い期間に犯された罪にたいしてだれもが永遠の罰に定められるというのは不公正であると考えている。あたかも法の正義というものは、だれであれ罪を犯した者の罰の期間が罪を犯した期間の長さに等しくなるように注意を向けているかのようである。キケロは、法には定められた八種類の罰があると記している。(一)すなわち、罰金、投獄、笞打ち、同害報復、名誉剝奪、追放、死、苦役である。

これらのうちで、罪が認められる期間の長さだけ罰せられるように、その罪の速さに応じて

短い時間の間隔に制限されるものが何かあるであろうか。おそらく同害報復だけであろう。というのも、それは、ひとが加えたのと同じものを受けるようにするからである。だからして律法に「目には目を、歯には歯を」[三]と記されているのである。じっさい、ひとがその不正な罪によって他人の目を奪ったのと同じ短い期間で、復讐の厳格さによって自分の目を失うことはおこりうるのである。しかし、他人の妻に接吻したことにたいして笞打ちによって罰するのが適当と考えられたなら、そのばあいには一瞬の行為が笞打ちによって罰せられるのであって、その長さは比べものにならない。短い快楽の甘さが持続する苦痛によって罰せられるのではなかろうか。

さらに投獄についてはどうであろうか。ひとが拘禁されるのに値した罪を犯したのと同じ期間だけ投獄されるべきだと考えられるであろうか。じっさい、奴隷が一言で主人を怒らせたり一撃を加えたりしたとき、何年も足かせをかけられて罰を受けるのは正当なことである。罰金や名誉剝奪、追放や苦役についても、これらは一般に恩赦によって軽減される見込みもなく課せられており、この死すべき生になぞらえれば永遠の罰に似ていないであろうか。

たしかに、これらの罰を受ける生そのものは永遠につづくわけではないゆえに、それらは永遠ではありえない。しかし、きわめて長い期間の罰を課せられる罪は、まったく短い時間のうちに犯される。また、時間の長さによってではなくその邪悪さや不敬虔の大きさによって測られるべき殺人や姦淫、瀆神その他の罪について、それを犯した者の苦しみはそれを果たすためにとられた時間に限定されるべきだと考える人はだれもいない。

しかし、ある重罪のために死刑によって罰せられる者にかんしては、法は、その罰を、かれを殺すのにかかるひじょうに短い時間にしたがって評価して、かれを生けるものの社会から永久にとり除くという事実を無視しているのであろうか。したがって、第一の死の罰によって人間をこの可死的な国からとり去るということは、第二の死の罰によってあの不死の国からとり去るということに対応している。というのは、この国の法が殺された者をその社会によびもどすことができないように、ひとが第二の死に定められたとき、かの国の法はかれを永遠の生命へよびもどすことはできないからである。

そうするとかれらはいう。もしも一時的な罪が永遠の苦痛によって罰せられるのなら、「あなたがたの量(はか)るその量りで、自分にも量りかえされるであろう」[三]というあなたがたのキリストのことばはどうして真実なのか、と。しかし、かれらは同じ量りが時間の間隔の等しさに関連してではなく、悪の応報に関連していわれたのであること、すなわち悪をなした者は悪を蒙るということに気付いていないのである。もちろん、このことばは、主がこれをいわれたときに語られたこと、すなわち審きと断罪とに本来的に関連するものと受けとられることもできるであろう。そのばあい、もしも不正に審き不正に断罪した者は正しく審かれ断罪されるとするならば、かれが受けとるものは自分が与えたものではないにもかかわらず、同じ量りで受けとるのである。というのは、たとえ断罪によって不正をなし、断罪によって正しいものを受けとるとしても、かれは審きによってなし、審きによって受けるのだからである。

(一)『法律』および他の書物に見当らない。

（二）「出エジプト記」二一の二四、「マタイによる福音書」五の三八、三九。
（三）「ルカによる福音書」六の三八。

第十二章

最初の罪の大きさについて

しかし、永遠の罰が人間の感覚にとって苛酷で不公正であると見られるのは、この死すべき感覚の弱さにおいては、あの最初の不従順の行為においていかに大きな罪が犯されたかということを感じとることのできる最高のそしてもっとも清らかな知恵の感覚が欠けているためである。人間が神を享受すればするほど、神を捨てる不敬虔は大きくなる。永遠でありうるような善を自分自身のうちで破壊することによって、かれは永遠の悪にふさわしい者となったのであった。

ここから人類全体が断罪された塊りとなったのである。というのは、この最初の罪を犯した者は、かれに根基をもつその子孫と共に罰せられたからである。こうして、憐れみにみちた無償の恩恵による以外には、この正しく然るべき罰からだれも解放されず、人類は憐れみにみちた恩恵の力が示される者たちと正しい応報が示される者たちとに分けられたのである。これらのどちらもがすべての人に示されることはない。というのは、もしもすべての者が正しい断罪

によって課せられた罰にとどまるとしたら、神の憐れみにみちた恩恵はだれのうちにもあらわれないからであり、他方、すべての者が闇から光へ移されるとしたら、神の報復の厳格さは明らかにされないからである.
恩恵によって解放される者たちよりも応報によって罰せられる者たちのほうがより多いのであって、それは、そのようにしてすべての人に当然課せられたものが何であるかが示されるためである。もしも罰がすべての人に報われるとしても、正しく罰するかたの正義をだれも非難することはないであろう。しかし、かくも多くの人がそれから解放されているがゆえに、解放者の無償の賜物にたいして心からの感謝がささげられるのである。

第十三章

罪人たちに死後に課せられる罰が浄罪であると考える人びとの見解に対して

ところで、プラトン主義者たちは、(一)いかなる罪も罰せられないままでいることをのぞまないが、しかし、人間の法によって課せられるものであれ、神の法によって課せられるものであれ、また、この世において蒙るのであれ、死後において蒙るのであれ、もしもだれかがこの世において免除されるか、あるいは罰せられてもこの世で矯正されないとすれば、すべての罰は浄化に当てられると考えている。この考えはウェルギリウスのあの一節にも表現されている。かれ

はそこにおいて、地上的な身体と可死的な肢体について語ってから、魂について
ここからして、恐れと欲望、
喜びと悲しみが生じるのだ。
かれらはまったく天を仰ぎ見もせず、
暗黒に閉ざされ、
牢獄の盲目のやみに縛られる、
といったのであった。そしてすぐにつづけてつぎのように加えていうのである。
それればかりか、最後の日に生命が離れるとき、
(すなわち、この生命がその最後の日に身体を去るとき)、
そのときでさえ、すべての悪や
身体の災いがまったく消え去るのではない。
多くの悪が長いあいだに内側深くに
不思議な仕方で堅く根ざさざるをえない。
それゆえ、罰を受け、
昔の悪の刑罰を支払う。
ある者は虚しく宙に吊り下げられて風にさらされ、
他の者は巨大な渦巻く深淵のもとで染められた罪から洗われ、
火で燃やされたりする。(三)

このように考える人びとは、死後の罰がただ浄化のためにのみあるということをのぞんでいるのである。そして、水、空気、火は地よりもすぐれた元素であるので、魂は、地との接触によって負った感染から、これらのものの一つから成る罪を償う罰によって清められるのである。空気は「宙に吊り下げられて風に」というところに、水は「巨大な渦巻く深淵のもとで」というところに意味されているが、それにたいして火は「火で燃やされる」といわれて明確に名指されている。

わたしたちとしては、この可死的生においてさえもある浄化の罰があることを認める。しかし、その生がそれによってよくならなかったり、むしろそれによってより悪くなったりする人びとには課せられない。罰が浄化の意味をもつのは、ただそれによって抑制され矯正される人びとにとってのみである。他のすべての罰は、それが一時的なものであれ、永遠のものであれ、それぞれの人が神の摂理によってとりあつかわれるところにしたがって課せられるのである。それは、過去の罪のためであっても、あるいはそのように罰せられる人がまだ生きているばあいの罪のためであっても罪にたいする応報のために課せられるものである。あるいは、それは、人間や天使たち——善き天使であれ、悪しき天使であれ——によって実行され明らかにされる徳のためであったりする。

じっさい、たとえひとが他人の邪悪や誤まちによって何らかの悪を蒙るとしても、無知や悪意によってだれかに悪をなすことによって罪を犯すのである。けれども、たとえ隠されていても正しい審きによってこの悪がおこるのをゆるされた神は罪を犯してはいないのである。一時

的な罰にかんしては、ある人びとはこの世の生においてのみ、ある人びとは死後、ある人びとは現在もかのときにも受けるが、しかし、これらすべては、かの最後の、そしてこの上もなく厳格な審きの前に受けるのである。しかしながら、死後に一時的な罰を受けるすべての人がかの審きののちにくる永遠の罰にはいるわけではない。じっさい、ある人びとは、この世でゆるされなかったところのことにたいして来たるべき世においてゆるしを受けるであろう。すなわち、来たるべき世の永遠の罰によって罰せられないであろう。これはすでにさきに述べたとおりである。(三)

(一) 新プラトン主義者たち。たとえばプロティノス『エネアデス』三の二の四一参照。
(二) ウェルギリウス『アエネイス』六の七三三―四二。
(三) 第二十巻第二十五章。

第十四章

この世の生における時間的な苦痛について

しかし、この世においていかなる罰も受けず、死後にのみそれを受けるというひとはひじょうに少ない。たしかに老齢に達するまでに熱も出さず静安な生をおくった人のいることを、わたし自身知っているし聞いたこともある。にもかかわらず、人間の生の全体は苦痛であって、

それというのも聖書が公言しているように、そのすべては試練だからである。そこでは、「地上における人間の生は試みではないか」(一)と記されている。愚かさと無知そのものが小さからざる罰である。それを避けるために、子どもたちが苦痛にみちた罰によって技能や学問を学ぶことは当然であると考えられているほどである。それに付随する罰は苦痛にみちたものであるので、かれらにとっては、しばしば学ぶことよりも、むしろ学ぶことをかれらに強制するところの罰を甘受したいとおもうほどである。

もしも死を耐え忍ぶか、ふたたび幼児になるか、という選択に直面するなら、身震いして恐れ、死を選ばない者がだれかいるであろうか。じっさい、幼児は笑いと共にではなく涙と共にこの世の生をはじめるのであって、このことはある意味で、どんな悪に出会わねばならないかを無意識のうちに予告しているのである。ゾロアスターは生れたときに笑っていた唯一の者であるといわれているが(二)、その異常な笑いもかれに何らかの善ももたらさなかった。かれは魔術の発明者であったといわれるが(三)、かれに敵対する者に対してこの世の空虚な幸福をまもることにさえ役に立たなかったのである。というのは、かれはバクトリアの王であったが、アッシリア人の王ニヌスとの戦いにおいて打ち負かされてしまったからである。

また、「重いくびきがアダムの子孫にかかっている、母の胎を出たときから、すべてのものの母に葬られる日まで(四)」と記されているのもまったくそのとおりである。このことばは成就されざるをえないのであって、再生の洗いによって(五)、それによってのみとらえられているところの原罪のくびきから解放された幼児でさえ、多くの悪を受け、そのある者たちはときとして邪

悪な霊の攻撃を受けるほどである。いずれにしても、そのような苦難が重くなって魂を身体から分離して、かれらがその年齢でこの世の生を終えるとしても、その苦難がじっさいに害を与えるには至らないのである。

(一)「ヨブ記」七の一。
(二) プリニウス『自然誌』七の一六。
(三) 同上、三〇の二参照。
(四)「集会の書」四〇の一。
(五)「テトスへの手紙」三の五。

第十五章

神のすべての恩恵の業は、すべてのものが更新される来たるべき世にかかわりをもつことについて

しかし、それにもかかわらず、アダムの子孫に、その母の胎を出たときから、すべてのものの母に葬られる日まで置かれている重いくびきにおいては、悪でさえもわたしたちを冷静にして、わたしたちがつぎのことを理解させる不思議な効果をもっていることが見いだされるのである。すなわち、楽園で犯されたあのはなはだしく非道な罪のゆえに、この生はわたしたた

ちにとって罰の生とされたこと、そして、新しい契約によって備えられているところのことは、ただ新しい世の相続にのみかかわるということである。この世においてはその相続の担保を受けとり、そのときがくればその担保によって保証されているものを得るが、しかし、いまは、わたしたちは希望のうちに歩み、日々霊によって肉のおこないを殺すべきである。じっさい、「主はご自身に属する者たちを知っておられ(一)」、「すべて神の御霊に導かれている者は、すなわち、神の子である(二)」。けれども、それは恩恵によるのであって、自然本性によるのではない。

本性による神のひとり子は、憐れみによってわたしたちのために人の子となられたが、それは、本性によって人の子であるわたしたちが恩恵によって神の子となるためである。じっさい、かれは不変のままでありながら、わたしたちが負っているわたしたちの本性をわたしたちからご自身に受けとり、ご自身の神性をかたく保持しながら、わたしたちの弱さを共有する者となられたのであった。それは、わたしたちがよりよきものに変えられ、かれの不死性と正しさとにあずかることによって、わたしたちの罪深く可死的条件から解かれ、かれがわたしたちの本性のうちに善としてつくられたものを、かれの本性における最高善によって完成されたものとしてわたしたちが保持するためである。すなわち、罪を犯したひとりの人をとおしてわたしたちがかくも重いこの悪に陥ったように(三)、わたしたちを義とするひとりの人――かれはまた神である――をとおしてかの最高の善に至るのである。

だれも、いかなる試練もないところに到達するまでは、――肉が霊に逆って欲し霊が肉に逆

って欲するこの争いの、多くのさまざまなる闘争において求めているところのかの平和に到達するまでは、自分がこの状態からかの状態へ移ったのだと確信すべきではない。この争いは、もしも人間の本性が自由意志によってそれがつくられたかの正しい状態に留まっていたなら、けっしておこらなかったであろう。(四)

しかしながら、いまや人間の本性は幸福のうちに神と共に平和を保つことを欲しなかったのであって、その結果、不幸のうちに自分自身との争いのうちにあるのである。これは悲惨な悪であるが、すくなくともこの生の以前の状態よりはよい。というのも、悪徳とたたかうことは、悪徳の支配のもとにあって闘争を免れているよりはよりよいからである。わたしはいいたいのであるが、永遠の平和の希望を伴ったたたかいは、いかなる解放も考えられない隷従よりはよいのである。たしかにわたしたちはこのたたかいを免れることを欲している。そして、神の愛の火によって、わたしたちが、そこではけっして揺らぐことのない堅固さのうちに低次のものがより高次のものに従わしめられるような、かのもっとも秩序ある平和を得ようとして燃やされるのである。しかし、もしもこのような大きな善を得る希望が存しないとすれば(そのようなことのなからんことを!)、わたしたちは、抵抗することをやめてわたしたちを悪徳の支配にゆだねることをゆるすよりは、その労苦にもかかわらずこの争闘の状態に留まりつづけるほうを選ぶべきである。

(一)「テモテへの第二の手紙」二の一九。

(二)「ローマ人への手紙」八の一四。

(三)　同上、五の一二参照。
(四)　「ガラテヤ人への手紙」五の一七参照。

第十六章

再生した者の生涯のすべての段階を支配する恩恵の法について

しかしながら、栄光にあずからせるためにあらかじめ用意された憐れみの器(一)にたいする神の憐れみはかくも大きいのである。人間の最初の時期すなわち幼年期は、何らの抵抗もなく肉に服している。そして、少年期とよばれる第二の時期は、理性はまだこのたたかいを企てず、ほとんどあらゆる悪のよろこびのもとに服している。それというのも、すでに語ることができ、したがって幼年期を過ぎてしまったように見えても、そこではまだ精神は弱く、訓戒にたいして無力だからである。しかし、仲保者の秘跡を受けたなら、たとえこの時期にこの生を終えたとしても、闇の力からキリストの王国へと移されて(二)、永遠の罰に定められることがないだけでなく、死後も浄罪の苦しみを受けることがないであろう。

というのは、霊的な再生のみが、肉的な出生によって死と共にもたらされた悪が死後に妨げとならぬようにするに十分だからである。しかし、訓戒を理解し法の命令に従うことができる年齢に達したときは、破滅をもたらすような罪に陥らぬよう、悪に対するたたかいを企て、鋭

くたたかわねばならない。もしも悪徳がまだ強くなってはおらず、その勝利が不断のものとなっていないなら、それはより容易に打ち負かされ、屈服するであろう。しかし、つねに勝利をおさめ支配しているならば、それを征服するのはまったく困難である。そのことは、真の正義をよろこぶことによってのみ真実に、そして心からおこるのであって、これはすなわちキリストへの信仰においてである。

じっさい、命令する法が存在し、助ける霊が存在しないなら、罪の禁止は罪への切望を増大して、その切望が勝利をおさめるとき、違反の罪過が加わるのである。ときには、まったく明白な悪徳が他の隠れた悪徳によって打ち負かされることがあるのであって、それは徳であるように見なされながら、それらのうちには高慢と自分をよろこばせようとする破滅をもたらす尊大さとが支配するところのものである。したがって、これらの悪徳は神への愛によって打ち負かされたときこそ征服されたと見なされねばならない。この愛はただ神ご自身のみがお与えになるものであり、また、神と人との仲保者、人なるキリスト・イエス[三]をとおしてのみお与えになるものであって、このかたはわたしたちをご自身の神性にあずからせるためにわたしたちの可死性を共有されたのである。

ところで、青年時代に入ってのち、恥ずべき行為や悪行や不敬で不信仰な誤ちによって破滅に値するような何らかの罪を犯すことがなく、かえって肉的な快楽によってかれらを支配しうるようなすべてのものを偉大な霊の豊かな助けによって抑制するような人はごくまれである。多くの人は法の掟を受けいれたとき、まず圧倒的な悪徳に打ち負かされて法の違反者となるの

であり、それから恩恵の助けに逃れるのである。この恩恵によって、いっそう苦い悔改めといっそう激しいたたかいとによってはじめて神に従う者とされ、このようにして肉にたいして精神が優位を占めることによって勝利者とされるのである。
したがって、永遠の罰を免れたいと願う者はだれでも、洗礼を受けるだけではなく、キリストにおいて義とされるべきである。そのようにして真に悪魔からキリストへと移るのである。しかし、かの最後のおそるべき審きに先んじるのでなければ、いかなる浄罪の罰もないと考えるべきである。しかしながら、永遠の火そのものも、各人の受けるべき罰に応じてその力と熱が変わるにせよ、あるいは火そのものは等しく熱するが、等しい苦痛を感じないにせよ、功罪の相違に応じて悪しき者たちのある者にはより軽く、ある者にはより重いであろうということは、けっして否定すべきではない。

(一)「ローマ人への手紙」九の二三参照。
(二)「コロサイ人への手紙」一の一三参照。
(三)「テモテへの第一の手紙」二の五参照。

第十七章

罰は永遠につづくことがないという見解について

さて、いまやわたしはつぎのように考える憐れみ深いキリスト教徒と穏やかに議論すべきであるようにおもう。すなわち、もっとも正しい審き人が地獄の刑罰に値すると判定をくだしたこれらすべての人にとって、あるいはそのうちのある人にとって、罰は永遠なものであると信じようとはしないで、それぞれの罪の大きさに応じて長かったり短かったりする一定の期間ののち、そこから解放されると考えるキリスト教徒である。この問題にかんしてたしかにオリゲネスはもっとも憐れみ深かったのであって、(二)かれは、悪魔もその使いたちもその功罪に応じた重く長い刑罰ののちにその苦しみから解放されて聖なる天使たちの社会に加えられると信じていたのである。

このような見解や他のいくつかの見解のために、とくに、幸福と悲惨とが間断なく交替して、定められた時代の間隔をおいて前者から後者へ、また後者から前者へと終わりなく動かされるという見解のために、教会がかれを非難したのは不当なことではなかった。(三)じっさい、憐れみ深く見えたこの見解も、罰を支払う悲惨を真実なものとなし、真実で確かな、すなわち恐れなしに確かである至福を偽りのものとなすことによって、聖徒たちに永遠の善のよろこびをもてないようにしたからである。

しかし、かの審きによって断罪された人間の悲惨は一時的であるが、はやかれおそかれ解放されるすべての人間の幸福は永遠であると考える人びとの憐れみはきわめて異なるものであって、人間的な情愛によってまちがっているのである。もしもそのような見解が、憐れみ深いものであるがゆえに善であり真であるとすれば、それが憐れみ深ければ深いほど、それだけ善で

あり真であることになるであろう。したがって、憐れみのこの泉は、断罪された天使たちを、すくなくとも多くのそして考えられうるかぎり長い時代ののちに解放しなければならないほど広げられ深くされることになる。

なにゆえこの泉は全人類にまで流れながら、それが天使たちのところに達するやいなや乾上がることがあろうか。しかし、それ以上に憐れみを広げて悪魔自身の解放にまで至る人はいない。もしもそのようなことをあえてする人がいるなら、明らかにかれらにまさることになる。しかしながら、自分がより寛大であると見えれば見えるほど、それだけ神の正しいことばに反して恥ずべき誤りを犯していることがわかるであろう。

（一）オリゲネス『原理論』一の六の三および三の六の五参照。オリゲネスは一八五年頃から二五四年頃、初期キリスト教会のギリシア教父・神学者。プラトン主義の哲学を学びアレクサンドリアで教えてのち、聖書の文献的研究をおこなう。カエサレアに学校をつくり、また各地を旅行して説教をおこなう。デキウスの迫害で捕えられて、のちに死亡。

（二）四〇〇年、オリゲネスの見解はアレクサンドリアの会議で教皇アナスタシウスによって異端的であるとして非難された。

第十八章

最後の審きにおいてすべての人間が聖徒たちのとりなしによって断罪を免れるという見解について

わたし自身が会って話をして知ったのであるが、聖書にたいする尊敬の念をもっているように見えながら非難すべき生活をおくり、自分たちを弁護するために、いま述べた人びとよりもいっそう大きな人類にたいする憐れみを神に帰そうとするような人びとも存在する。じっさい、かれらは、邪悪で不信仰な人間にかんして、かれらが永遠の罰に値すると神によって予告されていることは真実であるが、審きのときには憐れみがまさるであろうといっているのである。すなわち、憐れみ深い神は、聖徒たちの祈りととりなしによってかれらをゆるすであろうとかれらはいうのである。

というのは、もしも聖徒たちがかれらの敵意を耐えたときにかれらのために祈ったとしたら、まして謙虚な懇願をもってひれふすのを見たときにはなおさらであろうからである。聖徒たちがもっとも豊かで完全な聖性に達したときに憐れみの心を失うであろうということは信じられない、とかれらは主張する。すなわち、かれら自身も罪をもたないではいなかったときにその敵のために祈ったのに、いかなる罪ももたなくなりはじめたときに、その懇願者のために祈らないということは信じられないというのである。あるいは、かれらの聖性において祈りの妨げ

となるものは何も見いだせないときに、神がかくも多くのご自身の子らに耳を傾けないことがあろうか。

たしかに、不信仰で不敬虔な人間たちが長い期間苦しみを受けたのちにあらゆる悪から解放されると認める人びとによって引用される『詩篇』の証言が存在する。しかし、この人びとは、むしろそれは自分たちのためであるといっている。そこでは「神は憐れむことを忘れ、その憐れみを怒りのうちに閉じ込められるであろうか」（二）と読まれる。かれらはいう。神の怒りとは永遠の至福に値しないすべての者が神の審きによって永遠の刑罰を受けて罰せられることである、と。しかし、もしも神が長い罰を、あるいは何らかの期間の罰を認めるとすれば、このようなことがおこりうるためには、明らかに、神はその憐れみを怒りのうちに閉じ込めるであろうが、『詩篇』は神がこのようなことをしないであろうといっている。というのは、「神はその憐れみを長いあいだ怒りのうちに閉じ込められるであろうか」とはいわずに、まったく閉じ込められないであろうということを示しているからである。

こうして、これらの人びとは、神の審きの脅かしは、だれも断罪されないけれども、嘘ではないと主張する。それはちょうど、神がニネベの町を滅ぼすといったとき、その脅かしが嘘であるといえないのと同様である。神は、何らの条件もなしに預言したところのことを実現しなかったのだ、とかれらはいう。神は、「もしも悔い改めて正しく生きないなら、ニネベは滅ぼされるであろう」とはいわなかった。このような条件を付け加えることなく、その町の滅びがおこるであろうことを予告したのであった。（三）

かれらは、この脅かしは神がこれをしようとはしなかったけれどもニネベの人びとが真に受けるに値することを預言したゆえに真実である、と考える。かれらは、神は悔い改めた者たちをゆるしたが、かれらがたしかに悔い改めるであろうということを知らなかったわけではない、という。にもかかわらず、無条件的に、そして明確に、かれらの滅びがおこるであろうということを預言したのである。それゆえ、これは神の厳格さの真理において真実であった、とかれらはいう。なぜなら、かれらはそれに値したのだからである。しかし、憐れみを考慮するならそうではない。神は、頑なな者たちを脅かした罰から懇願する者らをゆるすために、憐れみを怒りのうちに閉じ込めなかったのである。それゆえ、とかれらはいう。神が、ゆるすことによって聖なる預言者を悲しませたときにニネベの人びとをゆるしたのなら、(三)まして、すべての聖徒たちが人びとがゆるされるように祈っているときにはいっそう哀れむべき懇願者らをゆるすであろう。

これがかれらの抱いている推測である。そして、この点について聖書が黙しているのは、多くの人びとが、長い、あるいは永遠の罰のおそれから自分を正し、そのようにして自分を正さなかった人びとのために祈ることができるようになるためであると考えている。とはいえ、聖なることばがこの点についてまったく黙しているのだとも考えない。じっさい、「主よ、あなたをおそれる者のために隠しておられたあなたの好意はいかに大いなるものでしょう」(四)と記されているのは、人びとをおそれさせるためにかくも大きくひそかな神の憐れみの好意が隠されていたのだということをわたしたちに理解させるのでなければ何を目ざしているのだろうか、

とかれらはいうのである。また、かれらは、使徒が「神はすべての人を憐れむために、すべての人を不従順のなかに閉じ込めたのである」[五]といったのは、だれも神によって断罪されないであろうということを表示するためであったと付け加える。

しかしながら、このような考えをもつ人びとも、悪魔とその使いが解放されるとか断罪されないというところまで自分たちの見解を広げてはいない。じっさい、かれらは、ただ人間にたいしてのみかかわる人間的な憐れみによって動かされ、とくに、自分たちのために弁護しているのであって、自分たちのいかがわしい生活のために、人類に向かう神の一般的な憐れみによって罰を受けないで済むかのような虚偽の約束をしているのである。それゆえ、この罰せられないことをダエモンの君主やその従者たちにまで約束する人びとは、神の憐れみを伝えることにおいてかれらにまさっていることになろう。

(一)「詩篇」七七の九。
(二)「ヨナ書」三の四参照。
(三)同上、四の一参照。
(四)「詩篇」三二の一九。
(五)「ローマ人への手紙」一一の三二。

第十九章

異端でさえキリストの身体にあずかることによって罰を免れるという見解

同様に、永遠の刑罰からの解放を、すくなくともすべての人間にたいしてではなく、ただキリストの洗礼によって洗われた人びとにたいしてのみ約束する他の人たちがいる。その生活がどのようなものであったにしろ、また、どのような異端や不信仰のうちにいたにしろ、キリストのからだにあずかる者となっているからである。イエスがつぎのようにいっているのもそのためである。「これは天から下ってきたパンである。このパンを食べる者は死ぬことがない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。このパンを食べる者は永遠に生きるであろう(一)」。それゆえ、かれらがいうには、このような人びとが永遠の死から救い出されて、はやかれおそかれ永遠の生命に導かれるにちがいない。

(一)「ヨハネによる福音書」六の五〇、五一。

第二十章

ゆるしは、のちに罪や誤りに陥ってもカトリック教徒だけに与えられると約束する

人びとについて

さらに、この免除を、キリストの洗礼とそのからだの秘跡を受けるすべての者にたいしてではなく、悪しき生活をしていてもただカトリック教徒だけにたいして約束する他の人たちがいる。なぜなら、ただ秘跡によってだけでなく、現実にキリストのからだのうちに加えられてキリストのからだを食べたからであって、それについて使徒はつぎのようにいっている。

「わたしたちは多くいても、一つのパンであり、一つのからだなのである」(一)。したがって、のちに何らかの異端や異教徒の偶像崇拝にさえ陥ることがあっても、ただキリストのからだにおいて、すなわちカトリック教会においてキリストの洗礼を受け、キリストのからだを食べたゆえに、かれらは永遠に死ぬことはなく、いつかは永遠の生命を得るであろう。また、かれらのすべての不信仰は、それがどんなに大きくても、その罰を永遠なものにすることができず、罰の長さと大きさとを増すことができるだけである。

(一)「コリント人への第一の手紙」一〇の一七。

第二十一章

カトリックの信仰に留まる者は、たとえ邪悪な生活をしていても救われると約束する人びとについて

ところで、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」(一)と記されているために、カトリック教会のうちに踏み留まる者にたいしてのみ、悪しき生活をしていても、土台のおかげで火によって救われると約束する人たちがいる。すなわち、その土台については使徒がつぎのようにいっているのである。「すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。この土台はキリスト・イエスである。

この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日が明らかにするであろう。かの日は火のなかに現れて、その火はそれぞれの仕事がどんなものであるかをためすであろう。もしもある人の建てた仕事がそのまま残れば、その人は報酬を受けるであろう。その仕事が焼けてしまえば損失を蒙るであろう。しかし、かれ自身は、火のなかをくぐってきた者のようにではあるが、救われるであろう(二)」。

それゆえ、カトリックのキリスト教徒は、その生活がどのようなものであれ、キリストを土台としてもつのであって、いかなる異端もその土台をキリストのからだから切り離してもつこ

とはできない。したがって、そのために、カトリックのキリスト教徒は、たとえ悪しき生活をおくったとしても、木、草、わらを用いて建てる者のように火によって救われると考えているのである。最後の審きにおいて邪悪な者にたいする罰として用いられるあの火の苦痛ののちに解放されるであろう。

(一)「マタイによる福音書」二四の一三。
(二)「コリント人への第一の手紙」三の一一―一五。

第二十二章

施しのわざのなかで犯された罪は審かれることはないと考える人びとについて

わたしはまた、ある人びとが、自分の罪に応じてそれにふさわしい施しをおこなうことを怠った者だけが、かの永遠の刑罰で焼かれるであろうと考えていることを知った。かれらはこの考えを、使徒ヤコブの「憐れみをおこなわなかった者に対しては、仮借のない審きが下される(一)」ということばに基礎づけているのである。それゆえ、かれらのいうのには、憐れみをおこなった者は、たとえその品行をよりよいものに変えることがなく、その施しのうちにあって不敬で悪質な生活をしていても、いかなる断罪によっても罰せられぬよう、あるいは、短期間であれ長期間であれ、ある期間ののちにその断罪から解放されるよう、審きのときに憐れみ深い

とり扱いがなされるであろう。

したがって、かれらは、生ける者と死せる者とを審くかたは、永遠の生命を与える右にいる者たちにたいして、また、永遠の刑罰によって断罪する左にいる者たちにたいして語りかけるとき(三)、自分は、かれらが施しをしたかしなかったかということのほか、何ごともいわないということをおもいおこさせようとしたのだ、と考えている。かれらはまた、主の祈りにある「わたしたちに負い目ある者をわたしたちがゆるしたように、わたしたちの負い目をゆるしてください(三)」という日々の祈願もこれに関係しているといっている。

というのは、自分に対して罪を犯した他の者をゆるす人はだれでも、罪をゆるすことによって疑いもなく施しをおこなっているのだからである。主ご自身も、「もしもあなたがたが人びとの罪をゆるすならば、あなたがたの父もあなたがたの罪をゆるしてくださるであろう。もしも人をゆるさないならば、天の父もあなたがたをゆるさないであろう(四)」といって、そのようにおこなうことをすすめておられる。それゆえ、使徒ヤコブが、憐れみをおこなわなかった者には仮借のない審きがおこるであろうといっているのも、この種の施しに関係しているのである。

かれらのいうのには、主は大きな罪とか小さな罪とかいわれないで、「もしもあなたがたが人びとをゆるすならば、あなたがたの父はあなたがたの罪をゆるしてくださるであろう」といわれたのである。このゆえにかれらは、この世の生の最後の日まで破廉恥な生活をしていた人も、かれに対して罪を犯して何らかの害を与えた者がかれからゆるしを乞うたとき、心からゆるすようにというこのことだけをまもっているならば、その祈りそのものが日ごとくり返され

るごとくに、この祈りをとおして、どのような罪であっても、またどれほどの罪であっても、すべての罪は日ごとにゆるされるのだ、と考えている。神の助けによってこれらすべての見解に答えたときにこの巻は閉じられねばならない。

(一)「ヤコブの手紙」二の一三。
(二)「マタイによる福音書」二五の三四―三六参照。
(三) 同上、六の一二。
(四) 同上、六の一四、一五。

第二十三章

悪魔の罰および邪悪な者の罰は永遠に持続することはないであろうという人びとの見解に対して

まず、悪魔にさえ、ひじょうに苛酷な、そして長い罰ののち、浄化や免罪を約束する人びとの議論を、なにゆえ教会は受けいれることができなかったかを探求し、認識しなければならない。じっさい、旧新約聖書に教えられたかくも多くの聖徒たちが、天使たちに――それがどのような種類の、またどれほど多くの天使たちであれ――ある種の、そしてある期間の刑罰ののちに、浄めや天の王国の至福を惜しんだのではなく、むしろ、主がみずから、審きにおいてつ

ぎのように公言されるであろうといわれた神の判決は、無にされることも弱められることもできないとおもわれたのである。

「のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使いたちとのために用意された永遠の火にはいってしまえ」(一)(明らかに、悪魔とその使いが永遠の火によって焼かれることを、このように示したのである)。このことは『黙示録』にも記されている。「かれらを惑わした悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには獣もにせ預言者もいて、かれらは世々限りなく日夜、苦しめられるのである」(二)。さきには「永遠」といわれたことは、ここでは「世々限りなく」といわれている。これらのことばによって、聖書は、時間の終わりをもたないことを慣用的に表示しているのにほかならない。

そういうわけで、もっとも真実な信仰によって、なにゆえ悪魔とその使いは聖徒たちの義と生命にけっしてもどることはないと堅く不動の確信が保たれているかということは、つぎの理由以外に、より正当でより明白な理由はまったく見いだされない。すなわち、だれをも欺くことのない聖書が、神はかれらをゆるさないこと、そして、かれらを地獄の闇の牢獄に投げ入れ(三)、そこに留めて、最後の審きにおいて、世々限りなくかれらが苦しめられるであろうような火がかれらを受けいれるとき罰するようにあらかじめかれらを断罪したということを語っているのである。もしもそうであるとすれば、いかにして、すべての人びと、ないしある人びとは、ある期間ののちにこの罰の永遠性から免除され、しかもダエモンの刑罰は永遠であると信じている信仰はただちに弱められないということが可能であろうか。

じっさい、もしも「のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使いたちとのために用意された永遠の火にはいってしまえ」といわれた者たちのすべてが、あるいはそのうちのある者たちが、いつもそこにいるのでないなら、なにゆえ悪魔とその使いたちがいつもそこにいると信じるのか、その理由は何であろうか。それとも、もしかして悪しき天使たちと悪しき人間に公言された神の判決は、天使たちのばあいには真実であるが、人間のばあいには虚偽なのであろうか。もしも神が語られたところのことでなく、人間が推測したところのことのほうがより有効であるというのならば、明らかにそういうことになるであろう。しかし、このようなことはおこりえないのであるから、永遠の刑罰を免れたいと願う人びとは神に反して議論することを止めて、まだ時間があるうちに神の掟に従うべきである。

さらに、永遠の刑罰は長い期間つづく火のことであると考え、そして永遠の生命には終わりがないと信じるとはどういうことであろうか。というのは、キリストは同じ箇所で一つの文章のうちに両者を結び付けて、「かれらは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命にはいるであろう」(四)といわれたからである。もしもどちらも永遠であるなら、たしかにどちらも長くつづくが終わりがあると解するか、あるいは、どちらも終わりなくして永続すると解すべきである。永遠の刑罰と永遠の生命とは平行して語られている。同じ意味において「永遠の生命には終わりがなく、永遠の刑罰には終わりがある」というのは、まったく不合理である。だからして、聖徒たちの生命には終わりがないのであるから、疑いもなく、かれらに定められた永遠の刑罰にも終わりがないであろう。

(一)「マタイによる福音書」二五の四一。
(二)「ヨハネの黙示録」二〇の一〇。
(三)「ペテロの第二の手紙」二の四参照。
(四)「マタイによる福音書」二五の四六。

第二十四章

聖徒たちのとりなしによってすべて罪ある者がゆるされるという見解に対して

ところで、この考察は、いわばより大きな憐れみということにかこつけて自分のために弁護し、神のことばは、人間が受けるであろうと神がいわれたところのことを人間がじっさいに受けるからでなく、人間が受けるに値するがゆえにあきらかに真実であるといって神のことばに逆らおうとする人びとを反駁するのに十分である。かれらがいうのには、神は、聖であればあるほどいっそう熱心にその敵のために祈る聖徒たちの祈りにかれらを与え、聖徒たちの祈りはすでにいかなる罪もないので、いっそう効果があり、神にききとどけられるによりふさわしいものになるであろう。それでは、なにゆえにかれらは完全な聖性のうちにありながら、すべてのものを成し遂げるのに力あるもっとも清らかで憐れみにみちた祈りによって、永遠の火が用意されている天使たちのために、神がその判決を柔らげ、かれらをよりよいものに変えるかの

火によって別なものにするよう祈らないのであろうか。

あるいは、もしかして、聖なる人間たち――かれらはそのときには神の天使たちに等しい者となっている――と共に聖なる天使たちも、断罪されるべき天使や人間のために、真理によって受けるに値するところのものを憐れみによって受けることがないように祈る、と主張する者がだれかいるであろうか。健全な信仰をもつ者はだれも、そのようなことをいわなかったし、またいわないであろう。そうでなければ、なにゆえに教師であられる神がその敵のために祈ることを命じられた教会が、いまも悪魔とその使いたちとのために祈らないか、理由がないことになるであろう。

したがって、教会がその敵であることを知っている悪しき天使たちのためにいま祈らないことの理由は、たとえ聖性において完全であっても、かの審きのときに永遠の火によって苦しめられるべき人びとのために祈らない理由と同じである。というのも、いまは悔い改めの実を結ぶときがあるゆえに人類のなかの敵のために祈るのである。じっさい、使徒がいっているように、「神は、かれらに悔い改めの心を与えて、一度は悪魔に捕えられてその欲するままになっていても、そのわなからのがれさせてくださる(二)」というのでなければ、いったいどうしてかれらのために祈るであろうか。要するに、もしもある人びとについて、まだこの世の生のうちにあるけれども、しかし悪魔と共に永遠の火にはいることがあらかじめ定められているのが確実にわかったなら、教会は、悪魔のために祈らないのと同じように、かれらのためにも祈らないであろう。

しかし、これはだれについても確実ではないがゆえに、教会は、すべての、すくなくともこの身体の状態にあるあいだ敵の人間のために祈るのである。けれども、その祈りはすべての人のためにきかれるわけではない。じっさい、教会に敵対していても、教会の祈りがその人のためにきかれて教会の子とされるようあらかじめ定められている人たちのためにだけきかれるのである。しかし、もしもかれらのうちのだれかが死に至るまで悔い改めの心をもたず、敵から子へと回心しないなら、教会は、かれらのために、すなわちそのような死んだ者の霊のために祈るであろうか。身体のうちに生きているときにキリストへ移されることのなかった者はすでに悪魔の仲間に数えられているからでなかったら、どうしてであるか。

したがって、かの審きのとき、永遠の火によって罰せられるべき人間のためになにゆえ祈らないかということの理由は、いまも、そしてかのときも、悪しき天使のために祈らない理由と同じである。同様に、人間のために祈るけれども、しかし、いまでも、不信仰で不敬虔な死者のために祈らない理由と同じである。じっさい、ある死者のために教会自身の、あるいはある敬虔な者の祈りがきかれるが、しかしそれは、キリストにおいて再生し、身体における生が、そのような憐れみに値しないと判断されるほどには悪くはなかったが、そのような憐れみを必要としないほどにはよくもなかった人たちのためである。同様に、死者の霊が受ける罰ののち、永遠の火のなかへ送られないように憐れみが与えられる死者の復活においてもそれはおこるであろう。

というのは、たとえこの世においてはゆるされなくとも、来たるべき世においてゆるされる

ような人がいなければ、ある人びとについて、この世においても来たるべき世においてもゆるされないということは真実ではないからである。しかし、生ける者と死せる者とを審かれるかたによって、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい(三)」といわれ、また他の人びとにたいしては反対に、「のろわれた者どもよ、わたしから離れて、悪魔とその使いたちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ(四)」、そして、「かれらは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命にはいるであろう(五)」といわれているときに、神が永遠の刑罰を受けるであろうといわれた者たちのうちのある者にとって刑罰は永遠でないといったり、このような無遠慮な見解によって、永遠の生命そのものについて絶望させたり疑わせたりすることは、はなはだ僭越である。

それゆえ、「神は憐れむことを忘れ、その憐れみを怒りのうちに閉じこめられるのであろうか(六)」とうたっている『詩篇』のことばを、だれも、神の判決は、善き人間については真であるが、悪しき人間については偽りであるとか、あるいは、善き人間と悪しき天使については真であるが、悪しき人間については偽りであるとか考えるように解すべきではない。じっさい、『詩篇』がいっているところのことは、憐れみの器と約束の子らに関係しているのであり(七)、預言者自身もそれらのうちの一人なのである。かれは、「神は憐れむことを忘れ、その憐れみを怒りのうちに閉じこめられるのであろうか(八)」といったとき、つづけて、「そのときわたしはいった。いまわたしは始めた。これはいと高き者の右の手が変わったのである(九)」と付け加えている。これは明らかに、なぜ「その憐れみを怒りのうちに閉じこめられるであろうか」といったる。

かを説明しているのである。

すなわち、神の怒りとはこの可死的生であって、そこでは人間は無に似た者とされ、その日は影のごとくに過ぎ去るのである。(一〇) しかし、神はその怒りのうちに憐れむことを忘れたのではなく、善人の上にも悪人の上にもその太陽を昇らせ、正しい者の上にも不正な者の上にも雨を降らせ、(一一) このようにしてその憐れみを怒りのうちに閉じこめることをしないのである。とくにこれは、この『詩篇』が、「いまわたしは始めた。これはいと高き者の右の手が変わったのである」といっているところでは真実である。それというのも、神の怒りであるこのまったく辛苦にみちた生において、憐れみの器は、たとえ神の怒りがその悲惨な腐朽のうちにとどまるとしても、よりよいものに変わるからである。それは、神がその憐れみを怒りのうちに閉じこめないからである。

それゆえ、この神的な歌の真理は、このような仕方で満たされるので、神の国に属さない者は永遠の刑罰によって罰せられるというところに関連づけて解される必要はない。しかし、この文章を、かの不敬虔な者たちの苦しみにまで広げたいという人は、すくなくとも、永遠の刑罰において予告された神の怒りはかれらのうちにとどまるが、神はこの怒りのうちに憐れみを閉じこめることはせず、かれらが受けるに値する罰のきびしさによって苦しめられるのがより少ないというように解すべきである。それは、かれらがその罰をけっして受けないとか、その罰がいつか終わるというのではなく、かれらがそれに値するよりもよりゆるやかでより軽い罰を受けるということである。神の怒りはこのようにしてつづくが、神はその憐れみをその怒り

のうちに閉じこめることをしない。しかし、このような考えを、わたしは反対しないからといって、わたしが支持していると考えられてはならない。

「のろわれた者どもよ、わたしから離れて永遠の火にはいってしまえ」[一二]とか、「かれらは永遠の刑罰を受けるであろう」[一三]とか、「かれらは世々限りなく苦しめられるであろう」[一四]とか、「かれらの虫は死なず、その火は消えることがない」[一五]とか、その他このような仕方で語られていることばは、字義どおりに真実であるというよりは、むしろ威嚇的な仕方で語られていると考える人たちについては、わたしだけでなく、神の書そのものがきわめて明白に、また十分に反駁し、しりぞけてくれる。たしかにニネベの人びとはこの生において悔い改め、それゆえにその悔い改めは実を結ぶものであったが、[一六]かれらはいわば、のちによろこびをもって刈り取るように涙をもって種をまくことを神が欲せられた畑に種をまいたのである。[一七]にもかかわらず、神の預言がかれらにおいて成就したことをだれが否定するであろうか。いかに神が怒りによってだけでなく憐れみによっても罪人を滅ぼすかによく注意を向けるならば。

　というのは、罪人は二つの仕方で滅ぼされるからである。すなわち、ソドムの人びとのように、その罪のために人間そのものが罰せられるか、あるいは、ニネベの人びとのように、人間の罪そのものが悔い改めによって滅ぼされるかである。それゆえに、神が預言されたことがおこるのであって、それまで悪しきものであったニネベが滅ぼされて、いままで存在しなかったよいニネベが建てられたのである。じっさい、城壁や家はなお残っていても、堕落した生活をしていた町は滅ぼされたのである。こうして、預言者は、かれがそれがおこると預言してニネ

べの人びとがおそれたことがおこらなかったので失望したけれども、[一八]神がその予知において預言されたことはおこったのである。預言した神は、どのようにしてそれがよりよい仕方で実現されるべきであるか、知っておられたからである。

しかしながら、誤まった憐れみをもつ人びとは、「主よ、あなたをおそれる者たちのために隠しておかれたあなたの甘美の豊かさは、いかに大いなるものでしょう」[一九]と記されているのはどういう関連においてであるかを知るために、つづいて「あなたはあなたに望みをおく者たちのために満たされた」と記されているのを読むがよい。「おそれる者たちのために隠しておられ」、「望みをおく者たちのために満たされた」というのはどういう意味であろうか。罰へのおそれによって律法にもとづいて自分の義を立てようとする人びとにとって、かれらは神の義を知らないので神の義が甘くないということでなければ何であろうか。かれらはそれを味わわなかった。かれらは自分自身に望みをおき、神に望みをおかなかった。それゆえに神の甘美の豊かさがかれらに隠されたのである。なぜなら、たしかにかれらは神をおそれたが、それは愛のうちに見いだされない奴隷的なおそれによってだからである。完全な愛はおそれをとり除くのである。[二〇]

したがって、神は、神に望みをおく者にたいして、その愛をかれらに吹き込んで甘美を満たしたのであって、清らかなおそれ――それは愛によってとり除かれるおそれではなく、世々かぎりなくつづくおそれである――によって、かれらが誇るときには主において誇るためである。じっさい、神の義とはキリストである。使徒が語っているように、「キリストは神によってわ

たしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。それは、『誇る者は主において誇るべきである』と書いてあるとおりである(二二)。自分の義を立てようとして、そのためにキリストである神の義に従わなかった人びとは、神が功績なしに恩恵によって与えた神のこの義を知らないのである(二三)。その義において神の甘美の豊かさは大きく、そのために『詩篇』において「主がいかに甘美であるかを味わい知れ(二三)」といわれている。

じっさい、わたしたちの巡礼の旅においてこの甘美を味わっているのであるが、十分に食するに至らず、のちに、神をあるがままに見て(二四)、「あなたの栄光が明らかにされるとき、わたしは満ち足りるでしょう(二五)」と記されているところのことが成就されるとき満ち足りるように、わたしたちはむしろ飢え渇いてそれを求めているのである。このようにしてキリストは、かれに望みをおく者たちにたいして、豊かな甘美を満たすのである。

さらに、かれらが考えているように、不敬虔な者たちを断罪するためでなく、人びとがこのことに無知で断罪をおそれて正しい生活をし、そのようにして正しく生きていない人びとのために祈ることのできる者となるために神は神をおそれる者たちにその甘美を隠すのだとすれば、いかにして神は神に望みをおく者たちに甘美を満たすのであろうか。神は神に望みをおかない者たちを、かれらが夢見ているように、この甘美によって断罪しないときに——。したがって、神を軽んじ冒瀆する者たちにたいして満たすとは考えられないで、むしろ神に望みをおく者たちにたいして満たす甘美を求めるべきである。それゆえ、人間は、この身体においてあるときに自分自身のために用意することを怠ったところのものを、この身体を離れたあとで求めても

無意味である。

また、「神はすべての人を憐れむために、すべての人を不信仰のなかに閉じこめたのである」[二六]という使徒のことばも、神はだれも断罪しないという意味でいわれたのでなく、このことばの意味は上に述べられたことから明らかであろう。じっさい、使徒は、のちに信じるようになるユダヤ人たちについて異邦人たちに語ったとき、かれはすでに信仰者である異邦人たちに手紙を書いたのであって、つぎのようにいっている。「あなたがたが、かつては神を信じなかったが、いまはかれらの不信仰によって憐れみを受けたように、かれらもいまはあなたがたの受けた憐れみを信じないが、それはかれらも憐れみを受けるためである」[二七]。

それからかれは付け加えて、かれらはこのことばを誤解して自己満足しているのであるが、いっている。「すなわち、神はすべての人を憐れむために、すべての人を不信仰のなかに閉じこめたのである」。すべての人というのは、かれが「あなたがたもかれらも」と語っている者たちについてでなければだれであろうか。それゆえ、神は、異邦人もユダヤ人も、神があらかじめ知っていて、御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めておいた[二八]すべての人を不信仰のうちに閉じこめたのであるが、それは、かれらが悔い改めによってその不信仰の苦さから混乱させられ、そして信仰によって神の憐れみの甘美へと向かい、『詩篇』にいわれているあのことばを叫ぶためである。

「主よ、あなたをおそれる者のために隠しておかれ」、自分にではなく「あなたに望みをおく者のために満たされたあなたの甘美の豊かさは何と大きいことでしょう」。したがって、神

はすべての憐れみの器を憐れむのである。しかし、「すべての」というのはどういう意味であろうか。それはすなわち、神は異邦人のなかからもユダヤ人のなかからもあらかじめ定めて呼び出し、義となして、栄光を与えたすべての者たちのことである。(二九) 神はすべての人間を断罪しないのではなく、すべてこのような者だけをだれも断罪しないのである。

(一)「テモテへの第二の手紙」二の二五、二六。
(二)「マタイによる福音書」一二の三二。
(三)同上、三五の三四。
(四)同上、三五の四一。
(五)同上、三五の四六。
(六)「詩篇」七七の九。
(七)「ローマ人への手紙」九の二三。
(八)「ガラテヤ人への手紙」四の二八。
(九)「詩篇」七七の一〇。
(一〇)同上、一四四の四。
(一一)「マタイによる福音書」五の四五。
(一二)同上、二五の四一。
(一三)同上、二五の四六。
(一四)「ヨハネの黙示録」二〇の一〇。
(一五)「イザヤ書」六六の二四。

（一六）「ヨナ書」三の五―一〇参照。
（一七）「詩篇」一二六の五。
（一八）「ヨナ書」四の一―三参照。
（一九）「詩篇」三一の一九。
（二〇）「ヨハネの第一の手紙」四の一八。
（二一）「コリント人への第一の手紙」一の三〇、三一。
（二二）「ローマ人への手紙」一〇の三。
（二三）「詩篇」三四の八。
（二四）「ヨハネの第一の手紙」三の二。
（二五）「詩篇」一七の一五。
（二六）「ローマ人への手紙」一一の三二。
（二七）同上、一一の三〇―三二。
（二八）同上、八の二九。
（二九）同上、八の三〇。

第二十五章

洗礼を受けたのち異端や分派に移った者、あるいは悪しき生をつづけた者は、秘跡

の特別な恵みによって永遠の刑罰を免れうるのであるか

さて、いまやわたしたちは、かれらにたいしてのようではなく、悪魔とその使いだけでなくすべての人間にさえも永遠の火からの解放を約束せず、ただ、たとえどのように生きていようと、どのような異端や不信仰のうちにあろうと、キリストの洗礼によって洗われそのからだと血に与かるようになった者にのみそれを約束する人たちにたいしても答えねばならない。ところで、使徒がつぎのようにいうとき、かれらに反駁しているのである。「肉の働きは明白である。すなわち不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、異端、ねたみ、泥酔、宴楽、およびそのたぐいである。わたしは以前もいったように、いまも前もっていっておく。このようなことをおこなう者は、神の国をつぐことはない(一)」。

もしもそのような者が、ある期間ののち解放されて神の国をつぐとすれば、使徒のこの宣告はたしかに偽りである。しかし、それは偽りではないので、かれらはたしかに神の国をつぐことはないであろう。そして、もしも神の国をけっしてつぐことがないならば、永遠の刑罰のうちにとどめおかれるであろう。というのも、かの神の国のうちに立てられない者が刑罰のうちにないような中間の場所は存在しないからである。

したがって、主イエスが「これは天から下ってきたパンであり、それを食べる人は死ぬことがない。わたしは天から下ってきた生きたパンである。このパンを食べる人は永遠に生きる(二)」といわれたところのことがどのように受けとられるべきであるか、探求しなければならない。

そして、わたしたちが次に答えねばならないあの人たちは、わたしたちがいま答えている人たちからこの解釈をとりあげてきたのである。かれらは、この解放を、洗礼とキリストのからだの秘跡に与るすべての人にではなく、たとえ悪しき生をおくっていてもただカトリック教徒にのみ約束する。それというのは、かれらのいうには、カトリック教徒は秘跡によるだけでなく、じっさいにキリストのからだを食べた、すなわち、かれのからだそのもののうちに立てられたからである。そのからだについて、使徒は「わたしたちは多くいても、一つのパンであり、一つのからだである」(三)といっている。

それゆえ、キリストのからだの一性のうちに、すなわち、キリストの肢体であるキリスト教徒の結合体のうちにいる者は、そのからだの秘跡を信仰者は祭壇において分かちあうならわしであるが、——そのような者は、真にキリストのからだを食べ、キリストの血を飲むといわねばならない。したがって、このからだの一性から離れた異端や分派は、同じ秘跡を受けることはできても、かれらの益にはならない。それればかりか、かえって害になる。解放がおくれるというよりも、より重い審きを招くのである。じっさい、かれらは、この秘跡によって表現されているあの平和のきずなのうちにいないのである。(四)

しかしまた、キリストのからだのうちにいない者はキリストのからだを食べるとはいえないということを正しく理解している人びとも、あのからだの一性から異端やあるいは異教徒の迷信のなかにまで落ち込んだ者たちにたいして、永遠の刑罰の火からいつか解放されることを約束する点で正しくない。というのは、まず第一に、カトリック教会から離れて不敬虔な異端を

立てて異端を唱える人となった多くの、あるいはほとんどすべての者は、もしもカトリック教会で洗礼を受け、キリストの真のからだにおいてキリストのからだの秘跡をはじめに受けたということがこの異端を唱える人たちを永遠の刑罰から解放させるなら、カトリック教徒にならずにかれらのわなに陥った者たちよりもよりよい立場にあるというような考えが、いかに許容できず、健全な教えからかけ離れているか、かれらは注意しなければならないからである。信仰の棄教者となり、そして棄教者から背教者になったときには、それまでけっしてもっていなかったものを棄てなかった者よりもたしかに悪い。次に、使徒がこの者たちにも反論して、同じことばを差し出して、あの肉のはたらきをあげたのちに、同じ真実さによって「このようなことをおこなう者は神の国をつぐことがない」[五]と予告しているからである。

だからして、「最後まで耐え忍ぶ者は救われる」[六]といわれていることに眼を向けてその生涯の終わりに至るまでカトリック教会の交わりのうちにとどまった者も、もしも堕落して忌むべき生活のうちにあるなら安全ではない。かれらは、姦淫によるにせよ、使徒がいおうとはしなかった他の破廉恥な行為の汚れによるにせよ、放縦の腐敗にみずからをゆだねるにせよ、あるいは「このようなことをおこなう者は神の国をつぐことがない」といっているうちの他の何ごとかをおこなうにせよ、生活の不義によって、かれらにとってキリストであるところの生活の義を棄てたのである。このゆえに、このようなことをおこなう者はだれでも、神の国にはいることはできないがゆえに永遠の刑罰にはいるほかかない。

これらのことにおいてこの世の生の終わりまで耐え忍んでも、キリストにおいて終わりまで

耐え忍んだとはいえない。なぜなら、キリストにおいて耐え忍ぶということは、キリストの信仰において耐え忍ぶということだからである。この信仰は、同じ使徒が明確にしているように、「愛によってはたらき」[七]、この愛は、使徒が他の箇所でいっているように、「悪をおこなわない」[八]のである。それゆえ、これらの人びとはキリストの肢体のうちに数えられないので、キリストのからだを食べるということはできない。じっさい、他のことについては語らないとしても、キリストの肢体であると同時に遊女の肢体であることはできないからである[九]。

そこでキリストご自身もいっておられる。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしのうちに留まり、わたしもまたその人のうちに留まる」[一〇]。このようにしてかれは、秘跡的な意味によってだけでなく、じっさいにキリストのからだを食べその血を飲むということがどういうことであるかを示されたのである。すなわち、それはキリストもまた信ずる人のうちに留まるように、キリストのうちに留まることである。あたかも、「わたしのうちに留まらず、わたしもその人のうちに留まっていない者は、自分がわたしのからだを食べ、わたしの血を飲んでいるといったり考えたりしてはならない」といっているかのようにこのことをいわれたのである。したがって、キリストの肢体でない者は、キリストのうちに留まっているのではない。みずからを遊女の肢体にする者は、悔い改めによってその悪を捨て、和解によってこの善へもどるのでなければ、キリストの肢体ではない。

（一）「ガラテヤ人への手紙」五の一九―二一。
（二）「ヨハネによる福音書」六の五〇、五一。

（三）「コリント人への第一の手紙」一〇の一七。
（四）「エペソ人への手紙」四の三参照。
（五）「ガラテヤ人への手紙」五の二一。
（六）「マタイによる福音書」一〇の二二。
（七）「ガラテヤ人への手紙」五の六。
（八）「ローマ人への手紙」一三の一〇。
（九）「コリント人への第一の手紙」六の一五。
（一〇）「ヨハネによる福音書」六の五六。

第二十六章

キリストを土台にするということ、および火の中をくぐってきた者のようにして救われるということの意味について

しかし、かれらのいうには、カトリックのキリスト教徒はキリストを土台としてもっており、どのような悪しき生活をして、いわば木や草やわらでこの土台の上に立てたとしても、（一）キリストとの結合から離れることはない。したがって、キリストを土台としている正しい信仰は、その上に建てられたものが焼けてしまうゆえに損失を伴うけれども、しかし、かの永遠の火から

はいつかかれらを救い出すことができるであろう。

使徒ヤコブは簡潔にかれらに答えて、「ある人が自分には信仰があると称していても、もしおこないがなかったら、その信仰はかれを救うことができるか[二]」といっている。するとかれらは、使徒パウロが、「しかしかれ自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、救われるであろう[三]」といっているのはだれのことであるか、という。それがだれのことであるか、わたしたちも一緒に探求しよう。しかしながら、ひとつのことはまったく確かである。すなわち、もしも一方が「たとえだれかが悪しきわざをおこなったとしても、信仰は火の中をくぐってきた者のように救うであろう」といい、他方が「もしおこないがなかったら、その信仰はかれを救うことができるか」といったのだとすれば、それはかれらが語っているような人間ではないということである。そうでなかったら、わたしたちは二人の使徒のことばを争いのなかに投げ入れることになるであろう。

それゆえ、キリストを土台とするということがどういうことであるかがはじめにわかれば、火の中をくぐってきた者のように救われうるのはだれであるかがわかるであろう。できるだけはやく意味を理解するためには、このたとえそのものに注目すべきであろう。いかなる建築も土台が先におかれる。したがって、許されたもの、認められたものであっても地上的なものや時間的なものをキリストよりも優先させないようにキリストを心のうちにもっている人はだれでも、キリストを土台としてもっている。しかし、それらのものをキリストよりも優先させるならば、キリストの信仰をもっているように見えても、キリストはその人のうちに土台として

あるのではない。キリストよりもそれらのものを優先させたからである。もしも救いをもたらす戒めを軽んじて許されていないことをおこなったら、キリストの命令と許可に反して破廉恥な行為によって情欲をみたすことを選んだのであるから、命令や許可を与えるキリストを第一とせず後においたとしていっそう非難される。

したがって、もしもだれかキリスト教徒が遊女を愛し、かの女に結び付いて一体となったら、(四)もはやかれはキリストをその土台としてもっているのではない。けれども、だれかがキリストにしたがってその妻を愛するとしても、(五)かれにとってキリストが土台であるということをだれが疑うであろうか。また、神を知らない異邦人のように、(六)この世に従って欲望の病によって肉的に愛しても、使徒は思いやりをもって、あるいはむしろキリストも使徒を通じて、それを認めている。

それゆえ、そのような者もキリストを土台としてもつことができるのである。というのも、そのような情愛や快楽をキリストよりも優先させなければ、たとえ木や草やわらでその上に建てても、キリストが土台であり、(七)そのために火をくぐってきた者のように救われるからである。この種のよろこびや地上的な愛は、結婚の絆ゆえに断罪されるべきものではないが、しかし、苦難の火によって燃やされるであろう。近親に先だたれるとか、このようなよろこびを取り去る他の何らかの災難とかはすべてこの火に属している。このゆえに、建てた者にとって、上に建てたものがなくなり、また、たのしみよろこんでいたものを失うことによって苦しめられるがゆえに、この建築が損失をもたらすこととなる。けれども、その土台のおかげで、かれはこ

の火を通じて救われるのである。それというのは、そのよろこびを所有することとキリストを所有することと、どちらを選ぶか迫害者によって迫られても、キリストよりもそれを優先させることはしないからである。使徒のことばに、土台の上に金や銀や宝石で建てた人のことを見なさい、とある。「妻をもたない人は、どのようにして神をよろこばせようかと、神のことを考える(八)」。

木や草やわらで建てた他の人のことを見なさい、とある。「結婚している人は、どうかして妻をよろこばせようとして、この世のことを考える(九)」。「それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日(苦難の日)が明らかにするであろう。なぜなら、それは火の中に現れるからである(一〇)」といっている。他の箇所で、「陶工の器は炉でためされ、苦難の試練は正しい人間をためす(一一)」と読まれるように、かれはこの苦難を火とよんでいる。「そして、その火は、それぞれの仕事がどんなものであるかをためすであろう」。

「もしある人の建てた仕事がそのまま残れば(残るというのは、どのようにして神をよろこばせようかと神のことを考えることである)、報酬を受けるであろう(すなわち、かれが考えたところのものからこれを受ける)。しかし、その仕事が焼けてしまえば、損失を蒙るであろう(愛していたものがなくなるからである)。しかし、かれ自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが(かれが所有していたときかれを有頂天にさせていたところのものを燃えるような苦痛をもって失うからである)、救われるであろう(なぜなら、いかなる苦難もその土台の安定性からかれを取り去ることはないからである(一二))」。そこで、わたしに見られたかぎりにおい

て、それらのどちらをも断罪するのではないが、一方を豊富にし他方を害して両者をためす火が見いだされたことになる。

他方、もしもこの箇所で、主が左にいる人びとにむかって「のろわれた者どもよ、わたしから離れて永遠の火にはいってしまえ」[二三]といわれたあの火のことと受けとろうとして、土台の上に木や草やわらで建てた者たちもかれらのうちにはいっており、悪の報いに応じて分配された一定期間ののちに、よき土台の功績がかれらをあの火から解放するというように信じられるとしたら、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、あなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」[二四]といわれた右にいる人びとは、土台の上に金や銀や宝石で建てた人たち以外に何を考えるべきであろうか。しかし、「火の中をくぐってきた者のように」といわれているあの火においてこのような仕方で理解されるべきであるとしたら、どちらも、すなわち右にいる人たちも左にいる人たちもその火に引き渡されるべきである。

じっさい、「日が明らかにするであろう。なぜなら、それは火の中に現れるからである。そして、その火は、それぞれの仕事がどんなものであるかをためすであろう」といわれているあの火によってどちらもためされるからである。それゆえ、その仕事が永続すれば、すなわち、上に建てられたものが火によって滅ぼされなければ報酬を受け、それに反してその仕事が焼けてしまえば損失を蒙る、というように、もしも火がどちらをもためすとしたら、明らかにそれはあの永遠の火ではない。

というのは、左にいる人たちだけが最後のそして永続する罰によってあの火に送られるので

あるが、この火は右にいる人たちをためすからである。しかし、かれらのうちのある者たちは、土台であるキリストの上に建てられた建築物が焼けて滅びないような仕方でためす。他方、ある者たちはそれとはちがった仕方で、すなわち、上に建てたものが燃え、それによって損失を蒙るような仕方でためすが、キリストをかたく据えた土台として、他の何にもまさる愛をもって保持しているゆえにかれらは救われるのである。

さらに、もしも救われるならば、明らかに右に立って他の人たちと共に、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、あなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい」ということばをきくのであって、救われずに、そしてそれゆえに「のろわれた者どもよ、わたしから離れて永遠の火にはいってしまえ」ということばをきく人たちのいる左に立っているのではない。じっさい、だれもあの火からは救われないであろう。なぜなら、左にいるかれらはすべて、その虫も死なず、火も消えることがなく[二五]、世々限りなく日夜苦しめられる[二六]永遠の刑罰にはいるからである。

この身体の死後、身体の復活ののちにくる断罪と応報の最後の日に至るまでのあいだ、死者の霊はこの種の火を蒙るといわれる。それによると、この身体の生においてその木や草やわらが滅ぼされるような生活や愛しかたをしなかった人はそれを感じることはないが、自分と共にその種の建築物を運んでいた人はそれを感じ、断罪をゆるされていても、かの世においてだけにせよ、あるいはこの世とかの世においてにせよ、あるいはかの世ではなくこの世においてにせよ、一時的な苦難の火によって燃やされるのを見るであろう。わたしはそのような考えに反

験しない。なぜなら、ことによるとほんとうかもしれないからである。

じっさい、最初の罪の実行によってはいってきたこの肉の死そのものが、それにつづく期間がそれぞれの建築物にしたがってそれぞれに感じられるように、その苦難に属するということはありうるのである。殉教者が栄誉を受け、すべてのキリスト教徒が受ける迫害もまた、火のごとくに両方の建築物をためすのである。ある者は、もしもそのなかにキリストが土台として見いだされなければ建築者自身と共にそれを滅ぼし、ある者は、もしも見いだされるなら建築者を除いて滅ぼす。なぜなら、かれ自身は損失を受けても救われるからである。しかし、ある者は永遠に残るような性質のものが見いだされるがゆえに滅ぼされない。

反キリストの時代であるこの世の終わりにも苦難があるであろう。そしてそれは、以前にはなかったようなものであることであろう。かの火は両方の建物をためし、ある者たちにはよろこびを、ある者たちには損失をもたらすが、これらの建築物を見いだすいずれをも滅ぼさないのは堅固な土台のためである。しかし、キリストよりも優先させて何らかの対象を愛する者はキリストをかれの土台としているのではない。わたしはその肉的な交わりを肉的な快楽に用いでも、かれらを人間的な習わしによって肉的に愛することによってキリストよりも優先させる妻のことはいわないとして、そのようなたのしみとは無関係な情愛をはらうべき家族のばある者はだれでも、キリストを土台としているのではなく、それゆえに火によって救われることはない。救い主と共にいることはできないがゆえに救われないのであって、救い主はこのことについてこの上もなく明らかに語ってつぎのようにいっておられる。「わたしよりも父または

母を愛する者は、わたしにふさわしくない。わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしくない」(一七)。

他方、これらの近親者を肉的な仕方で愛しながらも、すくなくともかれらを主キリストよりも優先させないようにし、もしもこの試練のときにもち込まれたならキリストを失うよりはむしろかれらを失うことを選ぶ人は、火によって救われる。それというのも、愛が固着しているかぎり、それだけこれらの愛する者を失うことによって苦痛が燃えあがるのは必然だからである。さらに、父や母、息子や娘を、かれらがキリストの御国を受けつぎキリストに寄りすがるように配慮するようにしてキリストにしたがって愛する人は、あるいは、かれらがキリストの肢体であるという事実のために愛する人は、そのような愛が木や草やわらのように滅ぼされるべきだと考えられることなく、かえって、金や銀や宝石で建てられたと見なされるのである。じっさい、キリストのために他者を愛しているのなら、かれらをキリストよりも愛するということがいかにしてありうるであろうか。

(一)「コリント人への第一の手紙」三の一二参照。
(二)「ヤコブの手紙」二の一四。
(三)「コリント人への第一の手紙」三の一五。
(四)同上、六の一六参照。
(五)「エペソ人への手紙」五の二五参照。
(六)「テサロニケ人への第一の手紙」四の五参照。

(七)「コリント人への第一の手紙」三の一一参照。
(八) 同上、七の三二。
(九) 同上、七の三三。
(一〇) 同上、三の一三。
(一一)「集会の書」二七の五。
(一二)「コリント人への第一の手紙」三の一三—一五。
(一三)「マタイによる福音書」二五の四一。
(一四) 同上、二五の三四。
(一五)「マルコによる福音書」九の四六、「イザヤ書」六六の二四。
(一六)「ヨハネの黙示録」二〇の一〇参照。
(一七)「マタイによる福音書」一〇の三七。

第二十七章

憐れみのわざがあれば罪のうちにとどまっていても罰せられないという主張に対して

さて、「憐れみをおこなわなかった者に対しては、仮借のない審きがくだされる」(一)という使徒ヤコブのことばにもとづいて、自分の罪に応じたふさわしい施しをおこなうことを怠った者

だけが永遠の火によって焼かれると主張する人に答えることが残っている。かれらのいうには、それゆえ、憐れみをおこなった者には、堕落した生活を改めず施しをしながら忌むべき卑劣な仕方で生きても、まったく断罪されないか、あるいはある期間ののちに最後の断罪から解放されるように、憐れみ深い審きがくだされるであろう。キリストは、右にいる人びとと左にいる人びととのあいだに、ただ施しをおこなったか、それとも怠っていたかということだけで区別し、一方を御国に、他方を永遠の刑罰に送る、とかれらは考えているのである。

どのような性質のものであれ、また、どれほど大きいものであれ、たえず犯している日々の罪も施しによってゆるされることができると考えるために、主ご自身が教えた祈りを、自分たちを支持するものとして引き入れ、証拠にしている。かれらのいうのには、キリスト教徒によってこの祈りがとなえられない日はないように、わたしたちが「わたしたちの負い目をゆるしたまえ」というとき、もしも「わたしたちに負い目ある者をわたしたちがゆるしたように(三)」とつづけられていることに注意してそれを実行するなら、その祈りによって日々のどんな罪もゆるされないものはないのである。というのは、主は「もしもあなたがたが人びとの罪をゆるすならば、あなたがたの父はあなたがたの日々の小さな罪をゆるしてくださる」とはいわれないで、「あなたがたの罪をゆるしてくださる(三)」といっておられるからである。それゆえ、どのような種類の、あるいはどれほど大きな罪を日々犯していても、また、たとえ生活をよりよいものに変えることによって罪から遠ざかることがなくても、これらの罪は、他人にゆるしを拒まないという施しによってゆるされることができる、とかれらは推測しているのである。

しかし、これらの人びとが、罪に応じたふさわしい施しをなすべきであると促しているのは正しい。というのは、もしもかれらが、どのような施しも、日々の大きな罪やまた悪徳の習慣にたいして、日々ゆるしがそれに伴うように神の憐れみを得ることができるといったとしたら、自分たちが何か不合理でこっけいなことをいっているのがわかるからである。じっさい、きわめて富裕な人は、毎日施しに小銭を費すことによって、殺人や姦淫やどんな悪行もつぐなわれるということになるのを、かれらも認めざるをえなくなるであろう。

もしもそのようにいうことが、この上もなく不合理で狂気じみたことであるならば、そしてキリストの前駆者も「悔改めにふさわしい実を結べ」(四)といった罪に応じたふさわしい施しがいかなるものであるかを尋ねたら、疑いもなく、死に至るまで日々罪を犯すことによって自分の生を傷つけている人は、そのような施しをおこなっていないことがわかるであろう。何よりも、そのような人びとは、はるかに多くのものを他人から奪いながら、そのなかからひじょうに少ないものを貧しい人びとに与えることによって、悪行の許可をキリストから買った、あるいはむしろ毎日買っていると信じて、安心して断罪されるべきことができるよう、自分がキリストを養っていると見なしているからである。

一つの罪のために、困っているキリストの肢体に自分のすべてを分かち与えたとしても、悪をおこなわない愛をもつことによってそのような行為から離れるのでなければ、かれらにとって何の益にもならない。(五)それゆえ、自分の罪に応じたふさわしい施しをおこなう人は、まず自分自身からそれをおこないはじめるべきである。神が、「あなたの隣人をあなた自身のように

ているのをきいているのに、それを隣人においておこないながら、自分自身においておこなわないのはまちがっている。

この施しを、すなわち神をよろこばせることを自分の魂におこなわないで、いかにして自分の罪に応じたふさわしい施しをおこなっているといえるであろうか。そのために「自分自身に悪い者が、だれに善であろうか(八)」と記されているのである。たしかに施しは祈りを助ける。「子らよ、あなたがたは罪を犯した。もう二度とするな。そして以前犯した罪がゆるされるように祈れ(九)」と読まれることにも注意すべきである。それゆえ、わたしたちが過去の罪にかんして祈るとき、それがきかれるように施しをなすべきであって、罪のうちにとどまりながらわたしたちが悪をおこなう許可を施しによって得ると信じてはならない。

したがって、主が、右にいる人たちにたいしては、かれらによってなされた施しを評価し、左にいる人たちにはそれがなされなかったことで評価しないであろうと預言されたのは、施しが、罰なしにつねに罪を犯すことにたいしてでなく、以前の罪を抹消することにたいして、いかに力があるかということを明らかにするためであった。しかし、習慣によって罪の生をよりよい生へ変えることを欲しない人は、そのような施しをしているというべきではない。なぜなら、「わたしの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである(一〇)」といわれているところのことにおいて、自分がしたとおもっているときでも、それをしていないということを示しているからである。じっさい、飢えているキリスト教徒に、いわば

キリスト教徒としてパンを与えたら、たしかにそれはキリストご自身である義のパンを自分自身に拒まないことになる。神は、だれに与えたかということでなく、どのような心で与えたかということに注意されるからである。

　キリスト教徒においてキリストを愛する人は、キリストに近づこうとする意図をもってそのキリスト教徒に施しをなすのであって、罰を受けずにキリストから離れようという意図からそれをなすのではない。というのは、人は、キリストが非難するところのものを愛すれば愛するほど、いっそうキリストを捨てることになるからである。じっさい、義とされるのでなければ、洗礼を受けることがだれかにとって何か益のあることであろうか。「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない(二一)」といわれたかたは、「あなたがたの義が律法学者やパリサイ人の義にまさっていなければ、けっして天国にはいることはできない(二二)」といわれたのではなかったか。

　なにゆえにさきのことばをおそれて多くの人びとは洗礼に走りながら、あとのことばをおそれて義とされることを考慮しないのか。それゆえ、自分の兄弟に向かって「愚か者」といわないように(二三)、そして、このことをいうときには兄弟であることにたいしていっているのではなく、兄弟の罪にたいする敵意によっていうのであるが(そうでなければ、かれは地獄の火の負い目あるものとなるであろう)、そのように、逆に、キリスト教徒に施しをなす人は、かれにおいてキリストを愛するのでなければキリスト教徒にそれを与えない。キリストにおいて義とされることを拒絶する人は、キリストを愛していないのである。

もしもだれかが自分の兄弟に向かって「愚か者」といって、すなわち、兄弟の罪を除くことを欲してではなく不当にののしって、この罪にとらわれたら、その箇所でつづけて語られている和解のいやしを付け加えるのでなければ、かれにとって施しをなすことは、それをつぐなうのには足りない（すなわち、その箇所ではつぎのようにつづけられている。「だから、祭壇に供え物をささげようとするばあい、兄弟が自分に対して何かうらみをいだいていることを、そこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に残しておき、まず行ってその兄弟と和解し、それから帰ってきて、供え物をささげることにしなさい」）。そのように、罪の習慣にとどまりながら、何かの悪行のためにどんなに大きな施しをしても、それでは足りないのである。

イエスご自身が教え、そこからして主の祈りとよばれている日々の祈りは、「わたしたちの負い目をゆるしてください」と日々祈り、またそれにつづく「わたしたちもわたしたちに負い目ある者をゆるしましたように」[一四]ということを、ただ唱えるだけではなく、実行したときには、たしかに日々の罪をとり除く。しかし、それは罪が生じたがゆえに祈るのであって、祈ったから生じないというのではない。じっさい、この祈りによって救い主が示そうとされたことは、わたしたちが暗闇と弱さのこの世においてはどんなに正しく生きても、わたしたちの罪がなくなるのではなく、わたしたちはその罪のゆるしのために祈り、また、わたしたちもゆるしてもらうようにわたしたちにたいして罪を犯す者をゆるさなければならないということである。

したがって、主が、「もしもあなたがたが人びとの罪をゆるすならば、あなたがたの父も、あなたがたの罪をゆるしてくださるであろう」[一五]といわれたのは、この祈りによって確信を得て、

力によって人間の法をおそれなかったり、狡猾さをもって人を欺いたりして、安心して日々の悪行をなすためではなく、もろもろの咎を免れてはいても、わたしたちが罪なくしてあるなどと考えることのないように、この祈りによって学ぶためである。それはちょうど、神が古い律法の祭司たちにも、まず自分の罪のために、それから民の罪のためにささげることを命じた犠牲についてこのことを忠告したのと同じである。(二六)

わたしたちのかくも偉大な師である主のことばそのものも注意深く考察されねばならない。主は、「もしもあなたがたが人びとの罪をゆるすならば、あなたがたの父も、あなたがたのどんな罪もゆるしてくださるであろう」といわれたのではなく、「あなたがたの罪を」といっておられる。じっさい、主は日々の祈りを教え、そして、たしかに義とされている弟子たちに語られたのである。それゆえ、「あなたがたの罪」とは「義とされ聖とされているあなたがたでさえ免れていない罪」でなければ何であろうか。そこで、この祈りによって、日々罪をなす機会を求める人びとは、主は「あなたがたの小さい罪をゆるしてくださるであろう」とはいわれずに、「あなたがたの罪を」といわれたので、大きな罪のことも意味していたと主張する。他方、わたしたちは、主がどのような人たちにたいして語られたかを考えて、「あなたがたの罪」と語られたのは、小さな罪以外のことを考えるべきではないと理解している。そのような人びとにはもはや大きな罪はないからである。

しかしながら、よりよい生活へまったく変わることによって遠ざかる重大な罪そのものは、その箇所で「わたしたちもわたしたちに負い目ある者をゆるしたように」といわれているとこ

ろのことがおこらなければ、祈っている人から除かれないのである。というのは、義人の生活でさえもおこるきわめて小さな罪が、それよりほかの仕方でゆるされないとするならば、多くの大きな罪過にまきこまれている人は、たとえそれをしなくなっても、もしもだれかがかれらに対して犯した罪をゆるすのに非寛容であれば、なおさらゆるしを得ることがないであろうからであって、主は「もしもあなたがたが人びとの罪をゆるすならば、あなたがたの父もあなたがたをゆるしてくださるであろう」といっておられるからである。

　使徒ヤコブが、憐れみをおこなわなかった者には仮借ない審きが来るであろうといったのも同じ趣旨である。じっさい、一万タラントの負債を主人にゆるしてもらいながら、自分に百デナリの負債のある仲間のしもべにたいしては憐れみを示さなかったために、のちに払い戻しを要求されたあのしもべのことを心におもいおこすべきである(一七)。それゆえ、約束の子であり憐れみの器(一八)である者たちにおいて同じ使徒がつづけて「憐れみは審きにうち勝つ(一九)」といっていることが有効である。なぜなら、不正の富の友人となった他の人びとをも永遠の住まいに受けいれ(二〇)るほどきよらかな生をおくった正しい人も、そのようになったのは債務によるのではなく恩恵によって報酬を与えて不信仰な者を義とするかたによって憐れみのうちに解放されたからである。じっさい、「わたしは信実な者であるように憐れみを受けた(二一)」といった使徒もその数のうちにはいっている。

　しかし、そのような人たちによって永遠のすまいに受けいれられる人びとは、自分たちの生活が聖徒たちのとりなしがなくても十分に自分たちを解放させることができ、それゆえに自分

たちにおいてはいっそう憐れみが審きに打ち勝つというような性格を与えられていないことを認めるべきである。しかし、それだからといって、よい生活や耐えうる程度の生活に変えることをしないまったく邪悪な者が永遠のすまいに受けいれられるのは、不正の富すなわち悪しき仕方で獲得した、あるいはよい仕方で獲得したとしても真実でなく、他の人たちをも永遠のすまいに受けいれる人たちに豊かにあふれる真実の富を知らないがゆえに、不正が富であると見なしているにすぎないような金や富で聖徒たちに従ったからであると考えるべきではない。

したがって、義人たちの欠乏を支えて永遠のすまいに受けいれてくれる友人をつくるよう豊かな施しをしても、天国をとらえるのに何の役にもたたないほど悪くはないが、また、友人にした人たちの功績によって憐れみを受けなくても、それだけでかくも大きな至福を得るのに十分であるほど善くはない、といった生があるのである。(ウェルギリウスのもとにおいてさえ、主がいわれた「永遠のすまいに受けいれてもらえるように、不正の富を用いてでも、自分のために友だちをつくるがよい」(二二)とか、また、それに似た「預言者の名のゆえに預言者を受けいれる者は、預言者の報いを受け、義人の名のゆえに義人を受けいれる者は、義人の報いを受けるであろう」(二三)といったことばと同じものを見いだして、わたしはいつもおどろくのである。

じっさい、この詩人は、幸福な者たちの魂が住むと考えられているエリュシウムの野を描くとき、自分自身の功績によってその座につくことができた人びとをそこにおいただけでなく、また付け加えて、

功績によって他の人たちに自分のことを憶えさせた人びと(二四)

分のことを憶えさせたのである。じっさい、かれらは、キリスト教徒の口にしばしばのぼるところのことを語っているかのようである。だれでも謙遜な人は聖徒たちのだれかに自分のことを推せんして、「わたしのことを憶えてください」といい、また、それに値するように自分が尽くすからである）。

しかし、そのような生とはどのようなものか答えるのはまことに困難である。また、神の国へ至るのを妨げはするが聖なる友人たちの功績によってゆるしを得られるような罪とはどんなものであるかを確定するのはきわめて危険である。わたし自身、このときに至るまでそれについて難儀し、結論に達していない。おそらく、あらゆる罪を避けようとして進歩する努力を怠らないよう答えが隠されているのかもしれない。

というのは、もしもそれがまだつづいていてよりよい生活のために捨てられていないで、義人たちのとりなしが求められ期待されねばならない罪とは何であるか、またどのようなものであるかということがわかったなら、人間はその怠惰によって安心して隠れ、何らかの徳の努力によってそのような困難から解放されるよう心を配らず、不正の富によって豊かな施しをして自分の友人とした人たちの功績によって解放されることだけを求めるようになるからである。しかし、いまは、たとえつづいていても、ゆるされるような不義がどのようなものであるかわからないのであるから、明らかに祈りと努力によってよりよい生活へと進歩する熱心さをいっそう注意深くはたらかせて、不正の富によって聖徒たちを友人にする配慮をおろそかにすべき

ではない。

しかしながら、自分自身の祈りや聖徒たちのとりなしによって得られるこの解放は、人が永遠の火に送られないようにするが、そこに送られたのちにある期間を経てそこから掘り出されるようにはしない。じっさい、あるものは三十倍、あるものは六十倍、あるものは百倍の豊かな実を結ぶよき地について記されているところのことは(二五)、聖徒たちがそのさまざまな功績に応じて、ある者は三十人、ある者は六十人、ある者は百人の人間を解放するというように理解されるべきであると考える人たちでさえ、これが審きの日におこることであって審きのあとではないと憶測しているのがつねである。

この見解についていえば、すべての人がこのような仕方で解放にあずかることができるように見えるがゆえに、人びとが免罪をまったく転倒した仕方で自分自身に約束しているのを見た人が、まったく抜けめのない答えをしたといわれる。すなわち、他人の解放のためにとりなす人びとのなかに加えられるため、よい生活をすべきである。それは、とりなす人がひじょうにすくなくなって、三十人、六十人、百人といった自分の数にすぐに達して、聖徒たちのとりなしによって罰から救われることのできない人が多く残って、他人の果実の望みを軽率に、またまったく空しく自分自身に約束するような人びとのうちにはいらないためである。わたしたちが共通してもっている聖書の権威を軽蔑しないが、にもかかわらず悪しき仕方で解釈して、聖書が語るとおりではなく、むしろ自分たちが欲するとおりになるべきであると考える人びとに対しては、わたしはこれで十分答えたことになる。したがって、約束したように(二六)、この答えを

返すことによってこの巻を終えることにしよう。

(一) 「ヤコブの手紙」二の一三。
(二) 「マタイによる福音書」六の一二。
(三) 同上、六の一四。
(四) 同上、三の八。
(五) 「コリント人への第一の手紙」一三の三参照。
(六) 「マタイによる福音書」二二の三九、「レビ記」一九の一八。
(七) 「集会の書」三〇の二四。
(八) 同上、一四の五。
(九) 同上、二一の一。
(一〇) 「マタイによる福音書」二五の四五。
(一一) 「ヨハネによる福音書」三の五。
(一二) 「マタイによる福音書」五の二二。
(一三) 同上、五の二二参照。
(一四) 同上、六の一二。
(一五) 同上、六の一四。
(一六) 「レビ記」一六の七、「ヘブル人への手紙」五の三参照。
(一七) 「マタイによる福音書」一八の二三以下参照。
(一八) 「ガラテヤ人への手紙」四の二八、「ローマ人への手紙」九の二三参照。
(一九) 「ヤコブの手紙」二の一三。

（二〇）「ルカによる福音書」一六の九参照。
（二一）「コリント人への第一の手紙」七の二五。
（二二）「ルカによる福音書」一六の九。
（二三）「マタイによる福音書」一〇の四一。
（二四）ウェルギリウス『アエネイス』六の六六四。
（二五）「マタイによる福音書」一三の八参照。
（二六）本巻第二十二章参照。

第二十二巻

第一章

天使と人間の創造について

先の巻においてわたしが約束したとおり、(一)この書の全体の最後のこの巻は、神の国の永遠の至福についての議論をその内容とするであろう。この国が永遠とよばれるのは、それが多くの世々にわたってつづくがいつかは終わりに至るという意味ではなく、むしろ福音書に記されているように、「神の国には終わりはないであろう」(二)という意味においてである。また、ある人びとが死んで滅びると他の人びとが生れてそれをつぐという仕方で、ちょうど季節を通じて緑の葉に覆われた木が、葉が枯れるとすぐにほかの葉が生えて緑色を保ち、変わることのない新鮮さを保ちつづけるが、そのような仕方で永続性の姿がそのなかに現れるというのでもない。むしろ、この国においてはすべての市民が不死なのであって、それというのは、人間は、聖なる天使たちがけっして失うことのなかったところのものを受けつぐのだからである。この国の

創造者であるもっとも全能な神によってこのことはなされるであろう。神はそれを約束し、欺くことができないからである。そして、神は約束した多くのことを、また約束しなかった多くのことをおこない、その約束を確証されたのである。

はじめに世界をつくり、可視的なものであれ、可知的なものであれ、すべての善きものでもって満たしたのは神である。世界において神が立てられたもののうち、霊的なものより善いものはない。神はかれらに知性を与えて、かれらを、神を観照する才能と能力のあるものとし、かれらを一つの社会のうちに結び付けられた。わたしたちはその社会を聖なる上なる国とよぶ。そこにおいては神ご自身がかれらにとって生と至福の源であり、いわばかれらの共通の生命、食物である。

神はこの知性的本性に自由意志を与えられたが、そのため、かれらがもしも選ぶなら、神を、すなわち自分の至福を捨てて、ただちに悲惨がつづくということがありえたのである。神は、天使たちのある者がその高慢によって自分の力だけで至福の生を欲し、大いなる善を捨てるであろうことを予知されたが、それにもかかわらず、かれらからこの能力を奪い取ることをされなかった。神は悪の存在を閉め出すよりも悪しきものからさえ善きものをつくることのほうが、より強力でより善いことだと判断されたからである。

可変的な本性は、善であり、あらゆる善きものを創造した最高の、そして不変なる善き神によって立てられたのであるが、それみずからが罪を犯し、みずからのために悪を産み出したのでなければ、どんな悪も生じなかったであろう。この罪はそれ自身、その自然本性が善きもの

背くことが、かれらの悪となることはたしかにありえないからである。

としてつくられたということを確証してもいるのである。というのは、それは創造者と等しくあるわけではないけれども、それ自身が大いなる善でなければ、いわば自分の光である神から

　たとえば、盲目は目の欠陥である。それゆえに、この欠陥自体が、目は身体の他の部分にまさって光を見る能力をもっていることを指示している。そしてそれは、目は光を見るためにつくられたことを指示している(すなわち、光を欠くことが目の欠陥であるからである)。それと同じように、神を享受していた自然本性は、いまは神を享受せず、そのために悲惨となっているが、その欠陥自体、それが最上の善きものとして立てられたことを証明している。神は、天使たちの意志による堕落にたいしては永遠の不幸というもっとも正しい罰を負わせたが、他の、最高の善にとどまっている天使たちにたいしては、終わりなくとどまりつづけることを確かなものとし、かれらがとどまることのいわば報酬としたのである。

　神は人間自身をも同じように自由意志をもつ正しいものとしてつくられた。人間はたしかに地上の動物ではあるが、自分の創造者に固着するならば天にふさわしいものとなり、もしも創造者を捨てるならば、その本性に合致する悲惨が天使のばあいと同様、伴うのである。神は、人間が神の法に違反して神を捨て罪を犯すであろうことを予知しておられたが、天使のばあいと同様、人間から自由意志の力を奪いとることはされなかった。神はそれを予知すると同時に、神がその悪からも何らかの善をつくるであろうことを予見されたからである。神はその恩恵によって正当に罰せられた死すべき子孫からもひじょうに多くの市民を集め、堕ちた天使たちの

数をかれらによって補充し満たされたのである。このようにして、かの親愛な上なる国はその市民の十分な数を奪いとられず、おそらく、より豊かな市民によってよろこぶであろう。(三)

(一)　本書第二十一巻第一章。
(二)　「ルカによる福音書」一の三三。
(三)　アウグスティヌス『エンキリディオン』四の一二参照。

第二章

神の永遠、不可変の意志について

悪しき者たちによって神の意志に反して多くのことがなされるが、神の知恵と力は偉大であり、そのため、神の意志に反すると見られるどのようなことも、ご自身が善として、また正しいとして予知された結果ないしは終極へ向かうのである。それゆえに、神が意志を変えるといわれるばあい、たとえば、神が寛大であった人びとに怒りを向けるようになったばあい、変化するのは神ではなく、むしろその人びとであって、かれらは自分の経験によって、ある意味で神が変わったというように感じるのである。これはちょうど太陽が、傷つけられた目にとって柔かいものからきびしいものとなり、快いものからいらだたしいものになったとしても、太陽自身は以前あったと同じ状態を保っているようなものである。

また、神の掟に従う人びとの心のうちに神がはたらくことが「神の意志」とよばれる。使徒はそれについて、「あなたがたのうちにはたらきかけて欲することをさせるのは神である」(一)といっている。これは、「神の義」が、それによって神ご自身が義であるのみでなく、神によって義とされた人のうちに神がはたらくものをさしていうのと同じである。律法についても、それは人間のものであるが、神から与えられたものとして「神の律法」とよばれる。じっさい、イエスがたしかに「それはあなたがたの律法に書かれている」(二)といわれたとき、人間をさしていわれたのであるが、別の箇所でわたしたちは「神の律法がかれの心のうちにある」(三)と読むのである。

神が人間のうちにはたらくこの意志にしたがって「神が欲する」といわれるとき、これは神ご自身が欲するというよりは、むしろ、神が人間をして欲するようにさせるという意味である。同じように、「神が知る」ということも、人びとに知られていなかったことを知られるようにするという意味である。たとえば、使徒が、「しかし、あなたがたは今では神を知っている、いな、むしろ神に知られている」(四)というとき、わたしたちはこれを、神は世界をつくる前から知っていた者たちを、そのときに知るようになったというように考えてはならない(五)。このような語りかたについては先の諸巻で論じたことが想起される(六)。それゆえ、わたしたちが「神が欲する」というのは、神がその意志にしたがって、未来のことを知らない人びとに欲することをおこさせることであり、神は多くのことを欲するが、それをもたらすのではない。

神の聖徒たちは神によって吹き込まれた聖なる意志をもって多くのことがなされるよう欲す

るが、それらはなされない。たとえば、かれらが、きよく敬虔な気持で他の人びとのために祈るとき、神ご自身は聖霊によってこの祈りの意志をおいたのであるが、神はかれらが祈るところのことをなされない。それゆえ、聖徒たちが各人の救いを神にしたがって欲し、祈るとき、わたしたちはあの語りかたによって「神はそれを欲するが、それをなされない」ということができるのである。すなわち、神が欲するとは、神がかれらに欲するようにさせるという意味である。

神は、その予知と共に永遠であるその意志にしたがって、天においても地においても欲せられたすべてのものを、過去や現在のもののみならず未来のものをもすでにつくられた。しかしながら、神がすべての時間に先だって予知し計画されたところのものが、生ずべきであると欲したそのときがくるまでは、「神が欲するときに成るであろう」とわたしたちはいうのである。しかし、それがおこるときを知らないだけでなく、おこるかどうかも知らないばあい、「神が欲するならば成るであろう」とわたしたちはいう。これは、さきにもっていなかった新しい意志をそのときもつであろうということではなく、神の不変の意志のうちに永遠から用意されていたことがそのとき成るであろうということである。

(一)「ピリピ人への手紙」二の一三。
(二)「ヨハネによる福音書」八の一七。
(三)「詩篇」三七の三一。
(四)「ガラテヤ人への手紙」四の九。

(五)「ペテロの第一の手紙」一の二〇参照。
(六) 本書第十一巻第八章、第十四巻第十一章、第十五巻第二十五章、第十六巻第六章参照。

第三章

聖徒にたいする永遠の至福と不信仰な者にたいする終わりなき罰の約束について

したがって、他の多くの箇所は省略するとしても、わたしたちは「すべての国民はあなたの子孫によって祝福を得るであろう[一]」というアブラハムへの約束が、いまキリストにおいて成就されたことを見るのである。同じように、神が預言者をとおして「墓にいる者はよみがえるであろう[二]」といわれたところにおいて、同じ子孫へ約束されたところのことが成就されるであろう。また、つぎのことばもそうである。「新しい天と地が成るであろう。さきのことはおぼえられることなく、かれらの心におもいおこすことはない。かれらはそれを見て楽しみ、よろこぶであろう。見よ、わたしはエルサレムをつくってよろこびとし、その民を楽しみとする。わたしはエルサレムをよろこび、わが民を楽しむ。そこにはもはや泣く声も叫ぶ声もきかれることはない[三]」。神は同じ預言者にあらかじめ告げたことを他の預言者をとおしていわれる。「かのとき、あなたの民、すなわちその書に記されてそこに見いだされる者はすべて救われるでしょう。地のちり(または他の人びとの解釈によれば築山)のなかに眠っている多くの者は目をさま

すでしょう。そのうち永遠の生命に至る者もあり、永遠の恥辱と混乱に至る者もあるでしょう(四)」。

他の箇所でも同じ預言者をとおしていわれる。「いと高き者の聖徒たちが国を受け、永遠にその国を保って世々かぎりなくつづく(五)」。またそのすこしあとのところで、「かれの国は永遠の国である(六)」といわれている。わたしは第二十巻でこれにかんする他の箇所を引用したが(七)、ほかにも聖書に見いだされてわたしが引用しなかったものがある。それらもまた、不信仰な者がけっしておこらないであろうとおもったことがおこったように、おこるであろう。じっさい、それらはいずれも同じ神が約束され、それがおこるであろうことを予告されたからである。異教の神霊らがこの神の前でおそれにおののくとは、異教の哲学者のうちでもっとも名高いポルフュリオス(八)によっても証明されている。

(一)「創世記」二二の一八。
(二)「イザヤ書」二六の一九。
(三) 同上、六五の一七―一九。
(四)「ダニエル書」一二の一―二。
(五) 同上、七の一八。
(六) 同上、七の二七。
(七) 本書第二十巻第二十一章。
(八) 本書第十九巻第二十三章参照。

第四章

地上の身体は天に移されることはできないと考えるこの世の賢者に対して

しかし、かくも昔から預言して、あらゆる種類の人間を、これを信じかつ望むべきものへと転回させるこの偉大な権威の力を、学者とか賢者とよばれる者たちは拒むのである。かれらは身体の復活を否認する鋭利な議論をおこない、キケロの『国家』第三巻から引用して得意になっている。ヘルクレスとロムルスは人間から神々になったと主張してキケロはいっている。「かれらの身体が天にあげられたのではない。じっさい、自然は、地から出たところのものが地以外のどこかに住むことをゆるさないであろう(一)」。

このようなことこそ「主はかれらの思いのむなしいことを知られる(二)」といわれた賢者たちの理屈なのである。わたしたちがもしもたんに魂だけであったと想定してみよう。すなわち、身体のない霊として天に住み、地上の被造物のことについては何も知らず、そして地上の身体に魂を吹き込むためには、ある不思議なひもでもってそれに結び付けられねばならないといわれたとする。わたしたちはそれを信じることを拒絶するのであるから、かれらにまさるより強力な論証をおこない、非物体的なものが物体的なひもでつながれるということを自然がゆるさない、といわないであろうか。しかしながら、地は魂で満ちており、それがこれらの地上の肢体を活気づけ、不思議な仕方でこれと結合し、包んでいるのである。

そうだとすれば、もしも魂が、どんな身体よりも、天上の身体よりもすぐれたものでありながら地上の身体に結び付けられているのなら、なにゆえこの生き物をつくった同じ神の意志が、地上の身体を天上の身体に引きあげることができないであろうか。それとも、地上の身体のごく小さな部分が、それ自身のうちに、何か天上の身体にまさるものを、すなわち、その部分に感覚と生命を与えるものをもつことができたとしても、天の意志はみずからをさげすんでそのような感覚と生命をもつ部分を受けとることを好まなかったり、あるいは、その部分が感覚と生命とを天のどんな身体にもまさる実体に負うけれども、その受けとったものを保持できないというべきであろうか。このことがいまおこっていないのは、かれらによって信じられないことよりもはるかに不思議なこと――それはすでに見られることによって軽んぜられているのであるが――をなしとげたかたが、それが成るよう欲するときがまだ来ていないゆえである。

じっさい、わたしたちは、地上の身体が天上的であるにもかかわらず物体的な住居に引きあげられるということよりも、天上の身体にまさる非物体的な魂が地上の身体に結び付けられていることを、なにゆえはるかにおどろくべきこととしないのであろうか。それはただ、後者は見慣れていることであり、そしてわたしたち自身がそうであるが、それにたいして前者はわたしたちが現実にその状態にあるのではなく、かつて見たことがないからである。しかし、冷静な理性的考察によって、物体的なものと非物体的な結合は、物体と物体との結合、それが一方は天的なもの、他方は地上的なものというように異なるものの結合であっても、それ以上に不

思議な神の業である。

(一)　キケロ『国家』三の二八。

(二)　「詩篇」九四の一一。

第五章

世界は信じているにもかかわらず、ある人びとは信じない肉の復活について

しかし、この信じがたいことも、いつかは成るであろう。見よ、世界はすでにキリストの地上の身体が天に引きあげられたことを信じている。学のある者も無学の者も肉の復活と上なる住居にあげられることをすでに信じており、学のある者と無学の者のうちのごく少数のみがまだ信じないで茫然としている。もしもかれらの信じたことが信じうることであったなら、信じなかった者がいかに愚かであるかは明らかである。しかし、信じがたいことが信じられたのなら、この信じがたいことが信じられたということはまったく信じがたいことである。したがって、わたしたちの身体が永遠に復活するということと、この信じがたいことを世界が信じるというこれら二つの信じがたいことは、同じ神によってそのいずれがおこるよりも先に予告されたのである。

これら二つの信じがたいことの一つがすでにおこったことをわたしたちは知っている。世界

は信じがたいことであったところのことを信じたということである。それなら、なにゆえに残る一つのことに絶望し、世界は信じがたいことを信じたということも疑うのであろうか。このことは、世界がかくも信じがたいことを信じたというのと同じように、信じがたいことではないであろうか。わたしたちはそれらのうちの一つをすでに見ており、他の一つを信じているのであるが、この二つの信じがたいことは、同じ聖書において預言され、それによって世界は信じているのである。そして、世界がこれを信じるようになったその仕方は、もしもよく考えるなら、いっそう信じがたいことがわかるのである。

自由学芸にかんしては無学の、そして異教の哲学にかんしては汚されておらず、文法術には無知で、弁証法の備えがなく、修辞学によって高慢でないごく少数の人びとがいた。キリストは、かれらを信仰の網をもつ漁夫としてこの世の海につかわし、このようにしてあらゆる種類の魚をとらえさせたのであった。そのなかには、稀なことであるゆえにいっそう不思議であるが、いくらかの哲学者自身も含まれていた。したがって、もしもよければ、というよりむしろよろこぶべきであるが、わたしたちは、あの二つの信じがたいことに第三の信じがたいことを加えることにしよう。

それゆえ、三つの信じがたいことがあるわけであって、それらはすでにおこったのである。すなわち、キリストが肉においてよみがえり肉と共に天に昇られたことが信じがたいことである。また、これほど信じがたいことを世界が信じたことが信じがたいことである。そして、無名の、地位もなく学識もないごく少数の者が、学識ある人びとを含んだ世界にたいして、かく

も信じがたいことをかくも力づよく説得したことが信じがたいことである。これら三つの信じがたいことの第一のものをわたしたちの論駁相手であるあの者らは信じるのを拒んだ。第二のものをよく見るよう強いられたが、第三のものを信じないならば、どうしてそれがおこったかをかれらは見いださないのである。

とにかく、キリストの復活と、その復活された肉と共なる昇天とが、いまや全世界に告げられ信じられたのである。もしも信じられうるものでなかったなら、いかにして地の全世界がすでに信じたことがありえたであろうか。もしも多くの高貴な人びと、高位の人びと、学識ある人びとがそれを見たといい、自分たちが見たところのことをひろく伝えるのに心を配っていたなら、世界がかれらを信じたことは不思議ではなく、かえってわたしたちの敵対者らがなおも信じようとしないのは愚かなことである。しかし、もしも少数の、名も知られず地位もなく学識もない者がそれを見たと語り記しているのを世界が信じたことが事実であるならば、世界がすでに信じたそのことを、少数の人びとがなおも信じないでこの上もなく頑迷な者として残っているのはなにゆえであるか。世界はごくわずかの無名の者、下層の者、無学の者によってこのことを信じたのであるが、それは、神の力そのものが、かくもとるに足らない証人たちによってはるかに不思議な仕方ではたらいて説得したからである。

じっさい、かれらが説得しようとして語った陳述は、たんなることばによるのではなく、奇跡の事実によったのであった。というのは、キリストの肉におけるよみがえりと、肉と共に昇天されたことを見なかった人びとも、ただそれを見たと語る者のはなしをきくだけでなく、も

ろもろの不思議なしるしがなされるのを見て信じたからであった。事実、一つ、あるいはせいぜい二つの言語しか知らなかった人びとが、突然、不思議にもあらゆる民の言語によって語られるのをきいたこと、[一] 母親の胎を出て以来足なえだった人が、四十年ののちキリストの名によって語られることばをきいて健全な人のように立ち上がったこと、[二] 使徒たちの脱いだ衣が病んでいる人をいやしたこと、[三] さまざまの病気で苦しむ無数の人が弟子たちの通る道に沿ってすわり、その通った影のなかにはいるといやされたことがあり、[四] また、多くの他のわざがキリストの名において弟子たちによってなされたのを人びとは見たのであるが、最後に死人がよみがえることをも人びとは見たのであった。[五]

もしもこれらのことが読まれるとおりにおこったのであると人びとが認めるなら、わたしたちはこのように多くの信じがたいことをかの三つの信じがたいことに加えよう。そして、肉の復活と昇天について語られた第一の信じがたいことが信じられるように、わたしたちは多くの信じがたいことについての証言を集めよう。しかし、それでもなお、わたしたちはかれらを、おそるべく頑迷な不信から信仰へと向きを変えることはできないのである。にもかかわらず、かれらが、これらの不思議のわざがキリストの使徒たちによってなされたことを信じることとなく、また、キリストの復活と昇天にかんする使徒たちの言明を信じないとしても、この一つの大いなる奇跡はわたしたちにとって十分であり、他の奇跡がなくても地の全世界はそれを信じるようになったのである。

(一) 「使徒行伝」二の五—一一参照。

(二) 同上、三の二―八参照。
(三) 同上、一九の一二参照。
(四) 同上、五の一五参照。
(五) 同上、九の三六―四〇、二〇の九―一二参照。

第六章

ローマ人はロムルスを愛するゆえにかれを神となしたが、教会はキリストを神であると信ずるがゆえにかれを愛した

ここで、わたしたちはロムルスが神になったと信じられていることについてキケロが驚嘆している箇所をおもいおこそうとおもう。わたしはそこに記されていることばをそのまま引用しよう。「ロムルスのばあいにおいて驚嘆すべきことは、他の者が人間から神々になったといわれても、それは人類の無知の時代であったから、理性はつくり話に傾き、無学な人びとは容易に信じるようにさせられていた。しかし、ロムルスの時代は六百年たらず前のことで、文芸と教育はすでに確立しており、原初の時代の人びとの誤謬はまったくとり除かれていたと認められる(一)」。

そしてそのすこしあとのところで、同じくロムルスについて同じ意味のことを語っている。

「ここからして、ホメロスのほうがロムルスよりもずっと以前に生きていたと解される。人びとは教育を受け、ロムルスの時代には開かれていたので、つくり話を語る機会はほとんどなかった。原初の時代はつくり話を受けいれ、ときどき拙劣な仕方でつくり出すこともあったが、他方、この時代にはすでに文明の装飾がほどこされて、とくに、ありえないすべての話を嘲笑し、それらは投げ捨てられていたのである」。

このマルクス・トゥリウス・キケロは、すべての人間のうちでもっとも学識のある者のひとりであり、もっとも雄弁な人物であった。このかれが、ロムルスの神性の信仰を驚嘆して語ったのは、時代がすでに開化されて偽りのつくり話を受けいれなくなっていたからである。しかし、ロムルスの神性を信じたのはほかならぬローマであり、しかもローマは小さく、はじまったばかりのときではなかったか。

そののち、その伝統が保持される必要が生じ、ある意味で母乳に育てられるかのようにこの迷信によって育てられた。そしてその国は成長してかくも偉大な帝国となり、支配者たろうとした他のどのような民族にむかっても、みずからの考えをあたかも高いところから散布するように、権力の高みからばらまいたのであった。そのため、諸民族はじっさいには信じていなかったが、すくなくともロムルスを神といったのは、自分たちに隷属を強いるこの国にたいして、その国の創設者のことで衝突することを避けたためである。かれらはロムルスをローマと名付けることはしたくなかったのであって、それというのは、その神性の信仰は、誤謬への愛からおこったためではなく、愛の誤りからおこったのだからである。

それにたいし、キリストは永遠の天上の国の創設者であるけれども、その国がキリストを神と信じるのは、それがキリストによって建てられたからではなく、むしろ、キリストを神と信じたゆえにそれが建てられたからである。ローマは、それが建てられ奉献されたのちに創設者をいわば神として神殿に祭ったのであるが、この天上のエルサレムは、信仰の土台に立ってキリストである神を創設者とし、そのため、この神によって建てられ奉献されたのである。ローマはロムルスを神と信じたのはかれを愛したからであるが、天上の国はキリストを神であると信じたゆえにこれを愛したのである。

それゆえ、ローマは、すでにその愛の対象をもっており、その愛の対象からたやすく虚偽の善をも信じることができたのであるが、それに照応して、わたしたちの国は、すでに信仰の対象をもち、そのため、無謀に虚偽の善を愛することなく、むしろ正しい信仰をもって真実の善を愛するのである。じっさい、キリストが神であることを説得したあの大いなる奇跡は別として、神の霊に吹き込まれた、完全に信じるに値する預言が先行したのであり、それは父祖たちにおいてはキリストにおける未来の成就が信じられていたが、いまでは、かれにおいて成就したことが示されたのである。しかし、ロムルスについては、かれがローマを建設し、それを支配したことが語られ読まれるのであるが、これはおこったかぎりであって、それがおこる前に預言されてはいない。他方、ロムルスが神々のうちに受けいれられたのは、もろもろの書き物が信じられたこととして記録しているが、このことがじっさいにかれにおこったとは教えていない。

というのも、このことがじっさいにおこったことを確認するどのような不思議なしるしもないからである。その乳母は雌狼で、何か大きな不思議なしるしが存在したと見られているが、それは、ロムルスが神であることを証明することのできるような性質のもの、また、それほど大きなものであろうか。じっさい、この雌狼が娼婦でなくて獣であり[二]、しるしは兄弟の狼に共通であったとしても、弟のほうは神とされてはいないのである。しかし、ロムルスであれヘラクレスであれ、あるいはそのような他の人間であれ、だれかがそれを神であるといって禁じられ、その禁止に従うよりは、むしろ死を選んだということがかつてあったであろうか。また、どんな民族が、ローマの名を恐れて強制されたということ以外に、ロムルスを自分たちの神々に入れて礼拝したことがあったであろうか。他方、キリストを神とするのを拒むよりも、むしろ、どんなに多くの、そしてどれほど残忍な仕方であろうと、死を選んだ多くの人びとをだれが数えることができるであろうか。

さらに、ローマの主権のもとにおかれたある国々は、もしもロムルスを拝しなかったならローマ人たちの心にあらわれるであろうとおもわれたごく小さな怒りをも恐れて、ロムルスを神として拝するよう強いられたのであったが、これに対し、全地の諸国民にわたって存在する多くの殉教者は、ローマ人の感情を害する軽い恐れとは異なる無数のさまざまな刑罰と、どんな刑罰よりも恐ろしい死そのものにたいする恐怖とによっても、キリストを神として拝し告白することから後退することはありえなかったのである。

しかもキリストの国は、この迫害の時代、地に寄留して、大いなる民を味方としながらも、

時間的な救いのために自分たちを迫害する不敬虔な者たちと戦うことをしなかった。むしろ、永遠の救いを得るために戦わなかったのである。この国の民は、縛られ、牢獄に入れられ、むち打たれ、拷問を受け、焼かれ、虐殺され、皆殺しに合った。――だが、かれらの数は増したのであった。というのは、かれらにとって安全のために戦うとは、救い主のために時間的な安全を軽蔑することにほかならなかったからである。

わたしの誤りでなければ、キケロの書の第三巻において、最良の国は、その信仰のためあるいは安全のためでなければ武器をとることはしないと論じているのをわたしは知っている。かれは他の箇所で、安全のためとはどういうことか、また、安全とはどういう意味に解したらよいかを示している。「貧窮、追放、なわ目、むち打ちといった罰は、きわめて鈍感な人間にもつらく感じられるので、私人たちはしばしばこれを逃れ、むしろ、すばやく見舞う死のほうを選んだ。しかし、国にとっては、個人を罰の苦しみから解放すると見られている死そのものが罰である。したがって、死は人間にとって必然的なものであり、しかもしばしば求められもするが、国家にとっては自然的な消滅といったものは何もない。もしも国が混乱し、滅び、消えていくとしたら、小さいものを大きなものになぞらえていえば、それはあたかもこの全世界が滅び消えていくようなことである[三]」。

キケロがこのように語ったのは、プラトン主義者たちのように世界は消滅することはないと考えたからである。したがって、明らかにかれは、安全のために国が武器をとることを欲したのである。そうすれば、国はこの世界においていつまでも存続するようになるというわけであ

る。かれがいっているように、永遠というのは、ちょうどオリーブや月桂樹やその他常緑の濃密な茂みは、葉が落ちるとつぎの葉が出て保たれるように、個人が死ぬとつぎの人が生れてくるかぎりのものと考えられている。じっさい、かれがいうように、死は、しばしば個々の人間を罰から解放するとしても、しかし国全体の死はつねに罰である。ここからして、当然、サグントゥム人(四)たちが正しい行為をおこなったかどうかが問われてよいのであるが、それは、かれらが、自分たちをローマ国家につないでいる信仰を破るよりも、むしろ国家全体が滅びるほうがましであるとおもったときのことである。それによって、地上の諸国家のすべての市民から賞賛を受けたのであった。

しかし、わたしは、どのようにしてキケロの主張に従うことができるのか、わからない。キケロは、信仰のためか安全のためかでなければ戦ってはならないといったのであって、一方を失うことなしには他方をまもることができないような二つのことが同時に一つの危険のなかでおこるばあい、それら二つのうちのどちらか一方を選ぶべきだということはいっていないのである。たしかに、サグントゥム人たちが安全を選んだのであれば信仰は捨ててしまわねばならなかったであろうし、もしも信仰をまもろうとしたのなら、じっさいにそうであったように安全を失わねばならなかったのである。けれども、神の国の安全は、信仰と共に、信仰をとおして保持される、あるいはむしろ獲得されるようなものである。信仰が失われれば、だれもそこに至ることはないであろう。この考えが、この上もなく堅固で確固たる心をもつ人びとをとらえて、かくも多くの、そしてかくも高貴な殉教者たちを生んだのである。かれらは、だれひと

りとして、神であると信じられたロムルスによってそのような考えをもつことはなかったし、また、もつことはできなかったのである。

(一) キケロ『国家』二の一〇。
(二) リウィウス『歴史』一の四、本書第十八巻第二十一章参照。
(三) キケロ『国家』三の二三。
(四) 本書第三巻第二十章参照。

第七章

世界がキリストを信じるのは、人間の説得によるのではなく、神の力による

しかしながら、わたしたちがキリストについて語っているときに、ロムルスの虚偽の神性について言及するのはまったく馬鹿げたことである。すくなくともロムルスがキケロよりもほとんど六百年前に生きて、そして、その時代は人びとがいうように、何らかの不可能なことを否定するほど高度に開けていたのなら、ましてそれから六百年あとのキケロの時代は、はるかにいっそうそうではなかったか。ことに、そののちのアウグストゥスとティベリウスのもとでは、もっと開けた時代であったことは確かであるから、人間の心は、キリストの肉の復活や昇天については我慢できないことであったろう。人びとはきいても一笑に付し、その心はそのような

観念を閉め出してしまったであろう。これらのできごとは、真理そのものである神の力、あるいは、神の力である真理が不思議なしるしをもって明らかに示したのでなければ、そのことは不可能であり、また現実におこらなかったのである。

したがって、かくも多くの、かくも大きな迫害の恐怖と反対にもかかわらず、キリストの復活が先におこり、つぎにすべての人において新しい時代がはじまるためにおこったこと、また、肉の不死が確固たる信仰でもって信じられ、この信仰が恐れることなく宣べ伝えられ、殉教者たちの血によって種がまかれたとき、(一)それは全世界にわたっていっそう豊かに発芽するに至ったのである。というのも、預言者たちの告知がまず先に読まれ、その道を力の証明が指し示し、習慣に反するとしても理性に反しない新しい真理が説かれたために、狂い立って迫害を加えていた世界が信仰をもって服従するに至ったからである。

(一)「殉教者の血は種である」という有名な比喩はテルトゥリアヌスにおいて最初に見られる(『弁明』二一の五〇)。

第八章

世界がキリストを信じるためにおこった奇跡について

かれらは、あなたがたがかつておこったといっている奇跡がいまおこらないのはなにゆえで

あるか、という。わたしは、世界がまだそれらを信じる前に信じるようになるために必要であった、ということができるであろう。いまなお信じようとしてしるしを求めている人は、みずから、世界が信じたにもかかわらず信じないことの大きなしるしである。しかし、かれらがこのようにいうのは、それらの奇跡が過去においておこったにもかかわらず、いまそれらを信じないようにさせるためである。それでは、キリストが肉をまとったまま天にあげられたことがこのような深い信仰をもっていたるところで賛美されているのはどうしてであるか。この開けた時代に、おこりえないすべてのことが退けられているとき、まったく不可思議で信じがたいことが、いかなる奇跡もなしに世界において信じられているのはどうしてであるか。それとも、もしかしてそれは信じられることであって、それゆえに信じられたのだとかれらはいおうとしているのであるか。それならば、かれらはどうして信じないのであるか。それゆえ、簡潔にいって、ここにわたしの困難な問題がある。見られなかった信じがたいことが、すくなくともじっさいにおこって見られた他の信じがたいことによって信じられるに至ったのか、あるいは、その出来事が、それを支えるために他の奇跡を必要としないほど信じられるものであるので、それはわたしたちの敵対者のはなはだしい不信仰をとがめているのであるか。

わたしがこの難問を立てたのは、まったく愚かな人びととの議論を避けるためである。じっさい、キリストがよみがえった肉と共に天に昇ったという唯一の、そして最大の救いの奇跡によって証明される多くの奇跡がおこったことを、わたしたちは否認することはできない。これらの奇跡は、けっして偽ることのない同じ書物にすべて記録されているもので、人びとが信じ

る者とされるためにおこったのである。それらは信仰を生み出すために知られるようになったのであり、それらが生んだ信仰をとおしていっそうひろく知られるようになった。たしかにそれらは諸国民のあいだで、信じられるようになるために読まれたのである。信じられたのでなかったなら、諸国民のあいだで読まれることはなかったであろう。じっさい、いまも奇跡がキリストの名のもとに、秘跡によってか、祈りによってか、あるいはその聖徒たちの遺物によっておこっている。しかしそれらは、かのはじめの奇跡と同じ栄光でひろまるほど明らかに目立っているわけではない。

聖なる諸書の正典——それは決定されるべきであった——は、これらはじめの奇跡が至るところで朗読され、すべての民の記憶にとどめられるようにしたのであるが、それにたいして、いまおこっている奇跡は、それがどこでおこっているにせよ、国全体にも、あるいは特定の近隣地方にも、ほとんど知られてはいない。じっさい、それがおこったところにおいてさえ、ごく少数の人びとだけが知っていても、残りの人びとには知られてはいない。とくに国が大きいばあいにはそうである。その話が他の場所で他の人びとによって語られるとき、信仰深いキリスト教徒から信仰深いキリスト教徒に伝えられるにもかかわらず、それを困難なしに疑うことなく信ずるように、聖書の大きな権威によって確証されるというわけではない。

わたしがミラノにいたとき、そこでおこった奇跡は、盲人の目をあけたので、ひろく知られるようになったが、それは、ミラノは重要な都市で、その当時皇帝が住んでいたからである。また、おびただしい人びとの群れが、殉教者プロタシウスとゲルウァシウスの身体を見るため

に集まり、奇跡がこれらの目撃者の前でおこったのであった。これらの身体は失われ、どこに行ったかまったくわからなかったが、そのとき、司教アンブロシウスに夢の中でその隠れ場所が告げられ、発見されたのであった。そこには盲人もいたが、かれは長いあいだの暗闇から解放され、昼の光を見るようになった(一)。

　これに反し、カルタゴにおいて、代理総督の顧問であったイノケンティウスの癒しについては、ごくわずかの人びとしか知らない。わたしたちはその場に居合わせ、自分の目でそれを見たではないか。というのは、わたしがわたしの兄弟アリピウス(二)と共に海をこえて渡って来たときのことであったからで(三)、わたしたちはすでに神のしもべであったけれどもまだ叙階されてはいなかった。イノケンティウスはわたしたちを迎え入れ、そのとき自分の家に留まることをゆるしてくれた。かれはきわめて敬虔な人で、家全体を管理していたのであった。かれは、多くのこみいった腫物を直腸にも、そして他のもっと深いところにも持っていて、それが医者によって癒されたのであった。医者はすでにそのある部分を切り取り、いまも治療をつづけていた。しかし、手術における長くはげしい苦痛は耐えがたいものであった。

　しかし、一つの腫物はまだ残っていて、それは医者にも気付かれず、ひじょうに深いところに隠されていたので、取り除くことができなかった。それはメスによって切開される必要があったからである。他の全部が切開によってなおったのちも、この一つだけは残っていて、どんなに努力しても無駄であった。病人は宙ぶらりんのまま、二度目の手術を受けるのをひじょうにこわがっていた(このことを告げたのはこの家の別の医者である。それ以外の医者たちは最

初の切開のやりかたが上手でなかったのを知っていたので、それをゆるさなかった。イノケンティウスは怒ってその医者を家から追い出し、帰ってくるのをゆるさなかった）。病人は突然口を開いていった。「あなたたちはもう一度手術をしようとしているのか。あなたたちがいてほしくないとおもっているあの医者にわたしのほうからしてくれというのか」。かれらはその医者を経験のない者だといって嘲笑し、よき人のことばと約束をもって、この恐怖をもった病人を宥めた。

多くの日が過ぎ去り、かれらがおこなったことに何の効果もないことが明らかになった。しかし、医師たちは約束に固執してメスを用いず、薬の力で腫物をおさえようとした。そのとき、かれらはアンモニウスというもうひとりの医者をよんだ。かれはまだ生きていて、その技術ゆえにかなりの評判であったが、かれはよく調べたのち、同様の保証を与え、かれらの熱意と経験から好ましい結果を約束した。その権威に信頼した病人は、もうなおった気分となり、二度目の手術を告げた家付きの医者を冗談めいた快活さでもって笑ったのであった。

それからどうであったか。一日を全部用いても終わりそうにないからそれは省略して、消耗し困惑した医者たちは、メスを用いなければけっしてならないといい出すようになった。病人はおどろいて青ざめ、ひじょうな恐怖に打ちひしがれた。そして、やっと気をとりもどして口を開くことができたとき、かれらが立ち去り、二度と来ないようにと命令した。そして泣くのに疲れ果て、他のことに思いをめぐらせることもできなかったが、直面している窮境に迫られて、当時奇跡の外科医という評判をもっていたアレクサンドリアのある医者に使いをやり、

他の医者には怒って禁じた手術をおこなうよう頼んだのであった。その外科医はやって来た。しかし、芸術家のように傷跡を見て、先の医者たちがやったことを点検したあと、かれは高貴の人のようにそのつとめをおこない、病人を説得して、これほどの困難なことは、以前からはたらいていた医者たちが最後まで治療をおこなうほうがよいと述べ(かれはみずからそれを観察して驚嘆したのである)、もう一度手術しなければ治癒することは不可能であろうと付け加えた。さらに、その傷跡を見て、先の医者たちの技術はまったくすぐれていて、その勤勉さと注意深さには驚嘆させられるので、その人びとから仕事の名誉をうばいとるのは自分の主義に反することになるともいった。そこで、医者たちにたいする病人の信頼は回復し、そのアレクサンドリア人の立ち会いのもとに、医者たちはメスで腸を切開することとなった。それ以外の仕方ではなおらないというのが全員の一致した意見だったのである。

手術は次の日までつづいた。しかし、医者たちが立ち去ったとき、この家の主人のはなはだしい痛みからおこった呻きは家中にひびき、あたかも葬式の悲痛のようで、わたしたちはそれを抑えることはできないほどであった。この病人を毎日訪れていた聖者たちがいた。至福の記憶のサトゥルニヌスは当時ウザリスの司教であり、グロススはカルタゴの教会の司祭であった。また、その教会の助祭たちもいて、かれらのうちのひとりであったアウレリウス(四)はいまもこの世に生きているただひとりの司祭であるが、ふさわしい尊敬を受けている。わたしたちはかれと共に神の不思議なわざを想起し、このことについてしばしば語り合ったのであるが、かれは、わたしがいま書いていることをよく憶えていたのである。

これらの聖者たちは、いつものように夕方訪れたとき、病人は悲惨な涙を流して、朝になったら、その苦痛のかわりに死が訪れるように懇願した。というのは、先の罰による恐怖はかれをひじょうに無気力にしたため、かれは医者たちの手にかかって滅びるように定められているのは確実だとおもったからである。聖者たちはかれを慰め、神に信頼して、男らしく神の意志にしたがうように促した。そこでわたしたちは祈りの場所に歩いて行った。いつものようにひざまずき、地に向かって身をかがめたとき、病人はまるでだれかに突き動かされたように前に進み出て、祈りはじめたのであった。その祈り、苦しみ、動揺、涙の流出、呻き、全身をゆってほとんど息を止めるほどのすすり泣きは、だれがことばにいい表わすことができようか。

他の者が祈ったかどうか、また、かれらがこの人から注意をそらすことができたかどうか、わたしはいうことができない。わたしは祈ることがまったくできずに、わたしの心のなかで短いことばを発することができるのみであった。「主よ、あなたがこの祈りをきいてくださるのでないなら、あなたの民のどのような祈りをきいてくださるのでしょうか」。かれが祈りつつ息を引きとる以外に何もできないとわたしにはおもわれた。わたしたちは起き上がり、司教の祝福を受けてのち立ち去ったが、病人は、訪問者たちに朝になったらもどって来てほしい、落ち着いた心であなたがたの促しに従うだろうと懇願した。恐ろしい夜が明けた。神のしもべたちは約束したとおりにもどって来た。医者たちもはいって来た。手術に必要とされるものがすべて用意された。ものもいえないほどの不安のうちに、恐ろしい鉄の道具がはこび込まれた。

ひじょうに高い権威をもつ訪問者たちは無気力となった病人の心を慰め励ましながら、病人

の身体を手術台の上にのせた。包帯が解かれて傷の箇所があらわにされた。医者はそれをよく調べて切開のためメスがとられた。医者はよく見ながらその手を定めた。そして、目をこらしてさまざまの方向からこれを調べ、ついに傷口が固定するのを見た。よろこびがわきおこり、あわれみと全能の神の恵みのはたらきの賛美が、すべての口から、よろこびの涙と共にあふれ出た。これらのことをわたしはことばでいい表わすことができない。それは語られるよりもむしろ想像されるほうがよいであろう。

同じカルタゴにイノケンティアという女性がいた。きわめて信仰心の篤い、この都市で高い階級に属する婦人であった。かの女は胸に癌があり、医者たちのいうところによれば、それはどんな薬によってもなおらないものであった。それゆえ、一般的には、癌が大きくなる部分を身体から切り離して、癌を取り出すという方法があった。そうでなければ、いくらかでも長く生きたいとおもっても、この病気は死を招くことは避けられないのであるから、ヒッポクラテス(五)のことばにしたがって、あらゆる治療から見放されるのである。かの女はこのことを、ひじょうに熟練し、かつ自分の家と親しい間柄であった医者からきかされて、祈りによって、ただ神にのみ助けを求めていたのであった。

復活祭が近づいたとき、かの女は夢のなかで、洗礼盤のそばに並んでいる女たちを見ていると、そのなかの最初に洗礼を受けた女がやって来て、癌におかされている場所をキリストの傷跡でもって示してくれるであろう、と告げ知らされたのであった。じっさいにこのことがおこった。そしてかの女はただちに癒された。医者は、かの女がいくらかでも長く生きたいとのぞ

んでも、どんな治療の方法もないといっていたのであるが、かの女を調べてみると、完全になおっているのを見いだした。もちろん、かれは、かの女がどういう仕方でなおったか、熱心にたずねたが、それは、ヒッポクラテスのいったことにまさる治療法を知りたかったのであろうと解される。

医者が、何がおこったかをかの女にきいたとき、かれの侮蔑的な声と顔つきはキリストに侮辱のことばを出しはしないかとかの女が恐れていたとおりであった。しかし、かれは、敬虔で厳粛なことばで、「あなたがわたしにいおうとしていたことは、何かおどろくべきことではないかとわたしはおもっていました」と答えたといわれる。かの女がこれをきいておどろいて見つめているとき、かれはすぐにこう付け加えた。「キリストが癌をなおしてくださったことは何とおどろくべきことでしょう。キリストはかつて四日間死んでいた人をよみがえらされたのです(六)」。

わたしはこのことをきいたとき、はげしく憤慨したのであるが、それは、この大きな都市で、この覆い隠すべくもない人物におこった奇跡が、このように隠されたままであるということである。そこでわたしはかの女に忠告し、ほとんど非難すべきであるとおもったのである。かの女は、それについて沈黙をまもらなかったと答えたので、わたしは、当時かの女とひじょうに親密にしていた既婚婦人たちに、かの女たちがそれについて以前から知っていたかどうか、きいてみたのであった。かの女たちはまったく知らないと答えた。そこでわたしはかの女に、「ごらんなさい、あなたとこれほど親しくしている人びとでさえ何もきいていないというので

すから、どうして沈黙をまもらなかったなどというのですか」といった。わたしが短く問いただしたので、かの女はこのことがらの成りゆきのすべてをそのまま自分の親しい人びとに示した。人びとはこのおどろくべきことがらをきいて神を賛美するようになったのであった。

また同じ都市に痛風を病んでいたひとりの医者がいた。かれは洗礼を受けるために自分の名前を登録していたが、その秘跡を受ける前の晩に夢を見た。すなわち、ダエモンと解されるちぢれ毛の黒人の少年たちが現れ、その年に洗礼を受けるのは止めるようにといったのであった。かれはそれに従わなかった。するとかれらはかれの足を踏みつけ、かれがそれまでに経験したこともないはげしい苦痛をひきおこしたのである。しかしかれは進み出て、かれらに屈することなく自分が誓ったとおりに再生の水で身を清めるのを遅らせなかった。洗礼を受けたとき、そのひじょうな痛みから解放されたのみでなく、それ以後は痛風からも完全に解放されて、そののち生涯にわたって足を痛めることはなくなった。しかし、だれがこの話を知っているであろうか。とにかく、わたしたちとそれをききおよんだごくわずかな兄弟たちだけがそれを知っているのである。

あるときクルビス(七)の俳優であった人が洗礼を受けたとき、麻痺だけでなく重いヘルニアをも癒されたのであった。かれは再生の泉からあがってきたとき、癒されて、両方のくるしい重荷から解放され、あたかも身体のどこにも悪いところがない人のようであった。しかし、このことを知っているのは、クルビスの人と、どこかでそれをきくことのできたごくわずかな人以外にだれがいるであろうか。わたしたちは信頼して疑うことのできない人びとからさきにきいて

いたけれども、とくにかれが聖なる司教アウレリウスの命令によってカルタゴにやって来たので、このことを確めたのである。

わたしたちの近くにヘスペリウスという護民官がいる。かれはフッサラの地区にズベディとよばれる地所をもっている。かれは、自分の家畜と奴隷が傷ついたことから、かれの家が邪悪な霊たちの襲撃にあったのだとわかり、わたしの不在のときに、司祭たちに、だれでもよいから祈りによってそれを負かしてほしいと頼み込んだのであった。そのうちのひとりが赴いて、そこでキリストのからだをささげて、この禍いが止むように全力をそそいで祈った。神の憐れみがただちにはたらいて禍いは終わった。ところで、ヘスペリウスは、キリストが葬られて三日目によみがえられたエルサレムからもってきた聖なる土をある友人から受けとったのであった。かれはそれを、自分が災難にあうことがないようにと寝室に吊して置いたのであった。

しかし、自分の家が魔の侵害から清められたとき、この土についてはどうしたものかと思案し、それを尊ぶという気持から、寝室にそれ以上置いておくのはよくないとおもうようになった。たまたまわたしは当時わたしの同僚であったシニティスの教会の司教マクシミヌス(八)と隣接の地に出かけていた。ヘスペリウスはわたしたちに帰ってくるようにと頼んだので、わたしたちは帰ってきた。かれはすべてのことをわたしたちに語り、そして、この土をどこかに移してその地点に祈りの場所を建設してほしい、そうすれば、キリスト教徒たちがそこに集まって神に帰せられるべき礼拝をおこなうことができるだろうと懇願した。わたしたちはこれをしりぞけず、この申し出を実行に移した。さて、そこには足の麻痺したいなかの若者がいた。かれは

かれは両親に頼んだ。かれはおこったことをきいて、すぐにその聖なる地点につれて行ってほしいと両親に頼んだ。かれはそこへ運び込まれた。そして祈った。かれの足は癒されてその場所を去って行った。

ヒッポ・レギウスから三十マイルたらずのところに、ウィクトリアナとよばれる屋敷がある。その屋敷のなかに、ミラノの殉教者プロタシウスとゲルウァシウスの遺物がある。ここにひとりの若者がつれてこられたのであるが、かれは夏の真昼に川で馬を洗っていたときにダエモンに襲われたのであった。かれが瀕死の状態で、あるいは死人にひとしい様子でここに横たえられたとき、この屋敷の婦人が夕方の賛美と祈りのために自分の下女と幾人かの修道女を伴って来て、賛美歌をうたいはじめた。

その若者はその声に突然の衝撃を受けたかのように昏睡状態からさめて、おそろしいわめき声を立てながら祭壇につかまり、動こうともせず、動くこともできず、それに結び付けられたかのように、あるいはこびりついたかのようになっていた。ダエモンは悲鳴をあげてゆるしを乞い、どこで、いつ、どのようにしてその若者のなかにとりついたかを告白した。最後にダエモンは若者から離れてやるといったが、しかし離れるときはからだをばらばらにするといって肢体やからだの部分の名を呼びあげた。このようにいいながらダエモンはその若者から離れたのであった。じっさい、かれの眼はあごまでずり落ちて、その根にあたる眼窩からは血管によってつながっていたのであり、かつて黒かった眼の中心部分は全体として白くなっていた。

そこに居合わせてこの光景を見た人びとは、かれの叫び声をきいてそこに集まってきた人びとと共に、ひざまずいてかれのために祈った。かれらは若者が正気にもどって立ちあがったの

を見てよろこんだのではあるが、かれの眼がこのような状態になったのを悲しんで、医者を呼んでくるようにといった。そのとき、かれをここへ運んで来た義兄弟が、「ダエモンを追い払った神は力あるかたであり、聖徒たちの祈りをきいれて、その眼をもとどおりにしてくださる」といった。そしてこの義兄弟は、とび出してぶら下がっていた眼をもとにもどしてそれに布を当てて固定し、一週間すればなおるだろうとおもうといった。このことがおこなわれて眼はすっかり回復したのであった。この場所で多くの他の癒しがあったが、それについて述べるのはあまりに長たらしくなるであろう。

わたしはヒッポにいる処女を知っている。かの女はダエモンにとりつかれたとき、司祭に祈ってもらい、司祭の涙の混じった油を塗ると、ただちに癒された。わたしはまた、ある司教のことも知っている。かれは、会ったことのないひとりの若者のために祈ったのであった。するとただちにその若者はダエモンから解放されたのである。

わたしたちの町ヒッポに、フロレンティウスという貧しく敬虔な老人がいた。かれは仕立業によって生計を賄っていたが、マントを失い、他のものを買うお金をもっていなかった。それで、わたしたちのあいだではその記憶がひじょうに大切にされているところの二十人殉教者の記念堂に行き、大きな声で何か着るものが与えられるよう祈った。かれの祈りはたまたまそこに居合わせた幾人かの若者たちによってきかれ、かれらはかれを笑いものにしようとして、老人が立ち去ったときあとを追い、かれが着るものを買うため五十フォリスを殉教者に乞うたのではないかとからかっていった。かれは黙って歩いていたが、海岸に来たとき、大きな魚が

打ちあげられてあえいでいるのを見て、居合わせた者たちの手を借りてこれをつかまえ、カトスとよばれる善良なキリスト教徒の料理人のところにもって行き、ことの次第を話し、三百フォリスで売り渡した。かれはこの金で織布を買い、自分の妻にできるだけ上等のマントをつくってもらおうと考えた。ところが、カトススが魚を割ると、その腹のなかに金の指輪を見いだしたので、同情とおそれの気持に強いられて、これを老人に返し、「ごらんなさい、二十人殉教者は何という仕方であなたに着るものを与えたことでしょう」といったのであった。

栄光ある殉教者ステファノ[九]の遺物が司教プラエイェクトゥスによって運ばれて、アクアエ・ティビリタナエについたとき、多くの人びとが群れをなして集まってきた。そのなかに盲目の女がいて、運んでいる司教のところにつれて行ってほしいと懇願した。司教は、自分が運んでいた花をかの女に与えた。かの女はそれを受けとり眼のところにもっていった。するとただちにかの女の視力は回復した。かの女は、おどろいている人びとの前に進み出て、狂喜し、自分で自分の道を進み、もはや先導者を必要としなくなった。

この高名な殉教者の遺物は、ヒッポの植民地に近いシニティスの城に置かれた。その地の司教ルキルルス[一〇]が人びとを前に立て、また、かれのあとにつづかせるようにして運んだのである。ところで、この司教は長いあいだ腫物に苦しめられていて、かれの親密な友人である医者によって手術されるのを待っていた。ところが、その聖なる荷物を運んでいるうちに突然それが癒されたのであった。じっさい、それ以後は、かれの身体に腫物は見られなくなった。

エウカリウスはヒスパニア出身の司祭で、カラマ[一一]に住んでいた。かれは長いあいだ結石病で

苦しんでいた。しかし、司教ポシディウスが運んできた前述の殉教者の遺物によって癒されたのであった。そののちに他の病気に襲われ、いよいよ悪化したために、死者のように横たえられ、親指はすでに重ね合わされることになった。ところが、司教の上着が殉教者の記念堂におくられ、それが持ち帰られてそこに横たえられた身体の上に置かれたとき、この高名な殉教者の助けによって回復したのであった。

同じところにマルティアリスとよばれる高位の人がいた。かれはすでに高齢であり、キリスト教にはひじょうな反感を示していた。かれは信仰深い娘をもっており、娘の婿もかの女と同じ年に洗礼を受けていた。マルティアリスが病気になったとき、かれの娘とその夫は、キリスト教徒になるようにと激しい涙をもって懇願したが、ききいれられず、かえって大きな憤慨を買って遠ざけられてしまった。そこで娘婿は聖ステファノの記念堂に行き、マルティアリスのために力のかぎり祈り、神がよい心を与えてキリストへの信仰をしりぞけない者となってくれるよう願ったのであった。はげしい呻きと涙とをもって、真剣な熱烈さと敬虔の念とをもってこれをおこなった。かれは、そこを立ち去るとき、祭壇から、もっとも近くにあった花の幾本かを取って持ち帰り、夜が更けてからそれを病人の枕許に置いた。すると見よ、夜明け前にマルティアリスは司教を呼んでくるように叫んだのである。そのとき司教はわたしと共にヒッポにいたのである。それゆえ、マルティアリスは司教がいないことを知って、司祭たちに来てもらいたいと頼んだ。かれらはやって来た。かれは自分が信仰することをいい表わし、おどろきかつよろこんでいるみんなの前で洗礼を受けたのであった。それからのち、かれが生きるかぎ

り、「キリストよ、わたしの霊を受けてください」(一三)ということばをつねに口に出していた。かれはこれが至福の人ステファノがユダヤ人たちによって石で殺されたときの最後のことばであったことは知らないけれども――。これらのことばはマルティアリスの最後のことばともなった。というのは、かれはこののちほどなくして死んだからである。

同じ地において痛風によって苦しむ二人の市民と一人の寄留者とが同じ殉教者によって癒されたのであるが、寄留者のほうは啓示によって痛むときどうしたらよいかを知らされ、そのとおりにしたとき、その痛みは和らげられたのである。

アンドゥルスは領地の名であるが、そこに殉教者ステファノの記念堂をもつ教会があった。ひとりの小さい子どもがその境内で遊んでいたとき、車を引いていた牛たちが乱入してきた。子どもは車輪に押しつぶされ、けいれんしてそこに横たわり死なんばかりとなった。母親が子どもを抱きあげ記念堂に置いた。すると、子どもは蘇生しただけでなく、傷跡も残さなかったのである。

カスパリアナとよばれる近くの荘園にひとりの修道女がいた。かの女は病気で苦しみ、絶望的であったとき、かの女の外衣がアンドゥルスの記念堂に持ち込まれた。しかし、それがもどってくる前にかの女の息は絶えた。ところが、両親がその外衣を死体の上にかけると、かの女は息を吹きかえし、健康をとりもどしたのであった。

ヒッポでは、バッススというシリア人が、危険な病気にかかっている娘のためにこの殉教者の記念堂で祈り、かの女の衣服を持って来た。そのとき、幾人かの少年たちが、かの女が死ん

だという知らせをもって走って来た。しかし、かれは祈っていたので、かれの友人たちは少年たちをとどめて、かれに告げるのを制止した。というのは、かれが通りに出て泣き叫ぶのではないかと恐れたからであった。かれが家に帰ると、家の中は悲嘆に鳴りひびいていたが、持ち帰った衣服を娘の上に置いた。するとかの女の生命はもどって来たのであった。

さらに、同じわたしたちの町で、収税吏のイレナエウスの息子が病気になり、死んだ。その身体は横たえられ、悲嘆にくれる人びとによって葬りの準備がなされたとき、慰めのことばをかけていたかれの友人のひとりが、同じ殉教者の祭壇の油を塗ればよいという暗示を与えた。そのとおりにすると、息子は生き返ったのであった。

同じくわたしたちの町にエレウシヌスという護民官がいて、幼くして病気で死んだ子を、その町にある殉教者たちの記念堂に置き、そこで涙ながらの祈りをおこなった。そしてその子どもを抱きかかえると、息子は生き返っていた。

さて、わたしはどうすべきであろうか。わたしはこの著作を完成させるというわたしの約束によって拘束されているので、わたしが知っているすべてのことについてここに言及することはできない。しかし、わたしの友人たちの多くは、わたしがここに書いたところのことを読んで、わたしと同じようによく知っている多くの奇跡がここに書かれていないのを悲しむことは疑えない。わたしはここで、いま、かれらにゆるしを乞い、すべての話を続けることは、どれほど長く、また骨の折れる仕事であるかを考えてもらおうとおもう。この著作の目的が、わたしがそうするように強いているわけではないのである。じっさい、ほかのことは省くとして、

植民地のカラマとわたしたちのところでおこったこの殉教者、この上もなく光栄あるステファノによる癒しの奇跡だけでも多くの巻を満たすことになるであろうし、そして、そのときでさえ、すべてを収録することはできず、むしろ、人びとに読まれるためにはそれらのことだけを記したもののほうがよいのである。

わたしはそのようなものが現れるのをのぞんでいた。昔と同じ神の力によるしるしがこの時代にもしばしばおこっており、それらがひろく人びとの記憶から忘れ去られてしまってはならないからである。ヒッポ・レギウスに記念堂が建ってまだ二年も経っていないのに、多くの不思議がそこでおこったことは確実である。それらは記録されてはいない。それを書けばほとんど七十巻のものができたであろう。カラマの記念堂はそれよりずっと以前に建てられている。その記録はもっと頻繁に出されているので、ヒッポのそれとは比較にならないほど多いのである。

ウザリスはウティカに近い植民地である。そこにおいて同じ殉教者によって多くの奇跡がなされたことは、わたしたちの知るとおりである。その記念堂はヒッポのわたしたちのものよりもずっと以前に、司教エウォディウス(二三)によって建てられたのであった。しかし、そこでは記録をつくるならわしはない。あるいはむしろもともとなかったのである。それというのも、そこではおそらくいまになってはじまったからであろう。すなわち、わたしたちがすこし前に滞在したとき、ペトロニアという高い階層に属する婦人がいて、重く長い病気が奇跡的に癒されたのであって、それはあらゆる医者の助けもゆるさないものであった。そこでわたしたちは、先

に述べたこの地の司教の同意を得て、かの女に、人びとに読まれるための記録を残すようにつよく勧めた。かの女はまったく従順にそれに従ったのであった。わたしはこの著作のさし迫った重要なことがらに急がねばならないけれども、かの女の書きとめた話に触れないわけにはいかない。

かの女のいうには、かの女はあるユダヤ人に説得されて、髪をたばねるひもに指輪を通し、このひもを身体に巻いてかの女の衣服の下に隠すようにいわれたのであった。この指輪は、その宝石の下に牛の腎臓に見いだされた石がはいっていた。かの女はこれを治療薬のようにくりつけて聖なる殉教者の聖堂へと向かった。ところが、カルタゴをあとにしてバグラダ川のほとりにあるかの女の別荘に留まり、朝起きて旅をつづけようとすると、かの女の足もとにその指輪が地に落ちているのを見ておどろき、それを結んだ髪のひもをさぐってみた。それは以前と同じように結び目も結ばれ、しっかりとからだに巻きつけられているのがわかった。それゆえに、かの女は指輪がとび出て落ちたのではないかとおもった。かの女はまた、からだがすっかりよくなったことがわかり、このおどろくべき出来事は将来の癒しの一種の保証だと考え、からだに巻いていたひもを解き、指輪と共に川に投げすてたのであった。

このことは、母の処女を失わずして主イエスが生れられ、また、戸が閉まっているときに部屋にはいって来て弟子たちに会われたことを信じようとしない人びとにとっては信じられないであろう。しかし、この話をよくしらべてみて、それが真実であることを見いだすならば、他の話も信じるであろう。この婦人は高い階級の高貴な家に生れ、高貴な人と結婚し、カルタゴ

に住んでいる。この重要な都市と重要な人物が、それをたずね求める者に事実をかくすことはないのである。そのとりなしによって婦人を癒した殉教者自身、処女である母からの御子であることを信じたのであった。この御子は閉じられた戸を通って弟子たちの前に現れたかたであり、とくに、そしてこれこそがわたしの述べることの目的なのであるが、死からよみがえった肉と共に天に昇られたかたであって、殉教者はこれらのことを信じたのである。もろもろの偉大なわざがこの殉教者によってなされたのは、かれが自分の魂を信仰をもってこれらのことのためにかけたゆえである。

このように、現在においても、わたしたちが聖書に読むところのわざをなされた同じ神が、みずから選んだ人びとによって、また、みずから選んだ仕方によって、多くの奇跡をおこなっておられる。しかし、いまおこなわれている奇跡は以前のそれのようにひろく知られてはいないし、いわば指から落ちる砂利のように記憶からこぼれ落ちることのないよう、頻繁に読んで心に刻みこまれることもない。じっさい、ヒッポにおいて、わたしたちは、あのように祝福を受けた人びとの話を民衆の前で読むことをはじめたのであるが、出て来た人が一度きくだけである。そして多くの人は出て来ないのである。その結果、数日のちには出て来た人もきいたことは忘れてしまって、かれらがきいたところのことを、出て来なかったことがわかっている人びとに知らせることにはほとんどならないのである。

わたしたちの町にひとつの奇跡があった。わたしがすでに述べた奇跡よりも重要であるというのではないが、しかし、よく知れわたっていて、ヒッポの町では、それを目撃しないとか、

すくなくともそれについてきいたことのない人、何らかの理由で忘れてしまった人はひとりもいないとおもわれるのである。カッパドキアのカエサレア出身の、その市民のなかでは立派な十人の兄弟姉妹(うち七人が男、三人が女であるが)がいた。その母親は最近夫を失い、孤独であった。かの女は自分の子どもたちにひどい仕方で扱われてかれらを呪うようになり、神の罰がかれらの上にくだって、かれらはみな、身体の各部分が震えて苦しむようになった。かれらは、そのまったく醜い姿によってひきおこされる市民たちの凝視に耐えられず、あちこちをさまよい歩き、ローマのほとんど全域を遍歴した。

かれらのうちの二人、兄のパウルスと妹のパラディアがわたしたちの町にやって来た。かれらの惨めさはすでに他の多くのところでもひろく知られていた。かれらがここに着いたのはおよそ復活節の十四日前で、毎日教会に来て、そこの栄光あるステファノの記念堂を訪れ、神のゆるしを乞い求め、また、以前の健康な身体にもどしてほしいと祈っていた。かれらの行くところはどこでも町中の注視を受けていた。多くの人びとが、かれらをどこかで見かけ、その震えの理由を知っていた。それらの人びとは機会があるごとに他の人びとにその話をしたのであった。

復活祭が来た。まさにその日曜の朝、多くの人びとがすでに集まっていたとき、その若者は殉教者の遺物のある聖なる記念堂の格子にすがりついて祈っていた。突然、あたかも眠ったかのようにばったりと倒れてそこに横たわったが、以前はその眠りにおいてさえたえずあった震えがもはやなかったのであった。そこにいた人びとはおどろいた。ある人びとはろうばいし、

またある人びとは足が地につかなかったり、苦痛を感じたりした。かれらがその若者を起こそうとしたが、多くの人びとがそれを抑えて、しばらく待って何がおこるかを見ようといった。そのとき、突然若者は起きあがった。かれはもはや震えていなかった。かれは癒されていたのでそこに立ち、かれを見つめている人びとの顔を見つめたのであった。

だれが神を賛えるのを控えたであろうか。教会は感謝の叫びに満ちあふれた。かれらは、これから出ようとしていたわたしのところに走って来てこれを知らせてくれた。かれらは次々に走って来てわたしに語ってくれたが、それは何度きいても新しいもののようであった。わたしもよろこび、神に感謝をささげたが、その若者自身が多くの人びとと共にやって来て、わたしのひざもとにかがんで、わたしの接吻を受けたのであった。それからわたしたちは人びとのところに行った。教会は人びとであふれており、「神に感謝せよ、神が賛えられますように」というよろこびの声が鳴りひびいていた。その叫びはあちこちからおこり、だれも沈黙していなかった。わたしは会衆を祝福した。人びとはさらに大きな熱烈さをもって叫んだ。ふたたび沈黙がもどってきて、聖書の定められた箇所が読みあげられたのであった。

それからわたしは説教壇に来て、その時節のための、そしてこの出来事のよろこびとしあわせのために、ふさわしい短いことばを語った。というのも、この神の力のわざによって、神のことばをきく機会を人びとに与えるだけでなく、むしろ人びとの心に深くおもいめぐらすようにするのがよいとわたしは考えたからである。若者はわたしたちと共に朝食をとり、そして、兄弟姉妹と母親との悲劇的な物語りのすべてを語ってくれたのであった。そこで、説教の翌日、

わたしは、その話してくれたことをひろく人びとに読まれるようにそれを記録すると約束した。この約束は復活祭の日曜日から三日ののちに実現された。わたしはその兄と妹の二人をさきに説教した司教座の階段に立たせて、この記録を読みあげた。

全会衆は、男たちも女たちもひとしく二人に注目した。兄のほうは動揺もなく立っていたが、妹のほうは全身震えていた。これまで兄のほうにおこった神の憐れみのはたらきを見なかった人びとは、今度はその妹のほうにおこるのを見たのであった。かれらは、兄のばあいにおいて感謝すべきことと、妹のために祈りとしてささげることとを悟ったのである。この記録の朗読が終わりかけたとき、わたしは二人に人びとの眼前から立ち去るようにと指示した。そしてそれから、わたしは事の仔細をくわしく説明しはじめたのだった。ところが、わたしが語っているそのときに、新たな感謝の叫びの声が殉教者の記念堂からきこえてきたのである。

わたしの語ることばに耳を傾けていた人びとは振り返ってそのほうへと走り出した。少女は立っていた階段から下りて聖なる殉教者のところで祈るために急いだのであった。そして、格子に触れるやいなや、その兄と同じようにあたかも眠ったように倒れ、そして癒されて立ちあがったのである。そこでわたしは、何がおこったのか、このよろこびに満ちたざわめきはどうしたのか、とたずねたとき、かれらは、かの女のよくなった状態で当人を記念堂から連れ出し、わたしがいた礼拝堂へ導いて来た。

そのとき、男たちからも女たちからも賛嘆の叫び声がおこり、その声は涙を混じえて、いつ果てるとも知れなかった。少女はさっきまで震えて立っていた場所に連れもどされた。兄とは

まったく異なったままであったのを悲しんでいた人びとは、かの女がいまや兄と同じようになったのを見てよろこんだ。かれらは、かの女のために祈るよりさきに、かくもはやくかれらの意志がこたえられたことを知ったのである。かれらはことばのない叫びをもって神の賛美のうちによろこんだ。その声はわたしたちにもほとんどききとれないほどであった。かれらの心のうちにわきあがったものは、ステファノがキリストのために血を流したその信仰でなければ何であったであろうか。

（一）　アウグスティヌス『告白』九の七の一六および『再論』一の一三の七参照。
（二）　アリピウスはアウグスティヌスのもっとも親密な友人。タガステの司教となる。アウグスティヌスと同じ時期にキリスト教信仰に回心した。『告白』や手紙にしばしば登場する。
（三）『告白』九の一二の三参照。
（四）　アウレリウスはカルタゴの司教。その名はアウグスティヌスの手紙に幾度か出てくる。
（五）　ヒッポクラテスについては本書第五巻第二章参照。
（六）「ヨハネによる福音書」一一の三九。
（七）　クルビスはカルタゴの近くの町。
（八）　シニティスはヒッポの近くの町。マクシミヌスはさきにドナティストの司教であったが、のちカトリック教会に復帰した。
（九）「使徒行伝」六—七参照。
（一〇）　ルキルルスはマクシミヌスの後継者。
（一一）　カラマについては本書第十四巻第二十四章参照。

（一二）「使徒行伝」七の五九。
（一三）エウォディウスはアウグスティヌスの若い時代の友人。『告白』九の八の一七参照。

第九章

キリストの御名によってなされる殉教者の奇跡は、かれらのキリストへの信仰を証しするものである

これらの奇跡も、キリストが肉において復活し、その肉と共に天に昇られたと宣言する信仰を証言するものでなければ何であろうか。というのも、殉教者たちはすべてこの信仰を証した者であるからである。殉教者たちはこの信仰を証して、この世の憎しみに満ちた敵意と残酷さとに耐え、そして、これに抵抗によってではなく死によって打ち勝ったのである。かれらはその信仰のために死んだが、主の御名のために殺されたゆえに主から祝福を得ることができたのである。この信仰のためにおどろくべき忍耐が先行し、これらの不思議なわざにおいてこの力が伴ってきたのである。じっさい、もしも永遠の生命に至る復活がキリストにおいてすでにおこっていないとするならば、あるいは、キリストの到来を告知する預言者たちによって預言されたようにおこることもないとすれば、この復活を宣言する信仰のために殺された殉教者たちは、いかにしてあのような不思議なわざをなしえたであろうか。

じっさい、神は永遠なかたであって、ご自身によって時間的な諸物を動かし、あるいはそのしもべたちを動かして、あのようなわざをなされたのである。そして、神がそのしもべたちによってはたらかれるとき、そのわざの一部は身体の状態において生きる人間としての殉教者の霊をとおしてであるか、あるいは、これらすべての不思議なことを天使たちをとおしてであり、神は、不可視的で、かたちなく、変わることのない仕方で命じてそれをさせられたのである。この後者のばあいには、殉教者たちによってなされたといわれるものは、かれらの祈りに応えられたものであって、かれら自身が直接的にはたらいてなされたものではない。それとも、ある奇跡はこのようにしておこるのだとしても、ほかにも人間の理解をまったくこえた仕方でおこったのかもしれない。いずれにしても、奇跡は、永遠の生命に至る肉の復活を宣言する信仰を証言するものである。

第十章

殉教者のダエモンに対する優越性、およびそれらの奇跡の相違について

ここでわたしたちは、おそらく異教の神々もまた何らかの奇跡をおこなったではないかと反論されるであろう。もしも異教徒たちが、自分たちの神々を、わたしたちのあいだで死んだ人びとと同列においたとすればそういうことになる。それとも、かれらは、ヘラクレスやロムル

スのように、またその他神々のうちに数えられたと考えられている多くが、死んだ人間から神々となったのだと認めようとしているのであろうか。しかしながら、わたしたちにとって殉教者は神々ではない。なぜなら、神はわたしたちにとっても殉教者にとっても唯一の同じかたであると知っているからである。すくなくとも、異教の神々の神殿でおこったと伝えられる奇跡は、わたしたちの殉教者の記念堂でおこった奇跡とまったく較べようもないのである。

しかし、もしもいくらか似たところがあったとしても、パロの魔術師がモーセによって打ち負かされたように、(一二)その神々はわたしたちの殉教者によって打ち負かされたのである。さらに、汚れた高慢で満ちたダエモンらは、自分たちが異教徒の神々になろうという野心によってそういうわざをおこなったのであるが、わたしたちの奇跡は、殉教者たちが、あるいはむしろ神がかれらを協働させ、またはかれらの祈りに応えるような仕方でなされたのであって、それは信仰の進歩のためである。その信仰によって、わたしたちは殉教者たちが神々であるとはおもわず、わたしたちにとっても、かれらにとっても、唯一の神であると信じている。したがってこのようになる。すなわち、異教徒は自分たちの神々のために神殿を建て、祭壇を設け、祭司職を確立し、犠牲をささげるが、それに対してわたしたちは殉教者を神々のように扱ってそのために神殿を建てることはせず、その霊が神のもとに生きる人間として記念堂を建てるのである。わたしたちはその記念堂のなかに祭壇を設けて殉教者に犠牲をささげるようなことはしない。犠牲は、殉教者とわたしたちとの唯一の神にささげられるのである。かれらはその告白によって世に勝ったのであるから、この犠牲において、かれら自身の場所において、ふさわしい秩序

のもとに「神の人」とよばれるのである。しかしかれらは犠牲をささげる祭司によって呼び出されることはない。たとえ記念堂において犠牲をささげるとしても、それは殉教者たちにたいしてではなく、神にたいしてささげるのである。なぜなら、その人は神の祭司なのであって、殉教者の祭司ではないからである。じっさい、犠牲そのものはキリストのからだにほかならず、かれら自身がそのからだであるから、かれらに犠牲がささげられることはないのである。それでは、わたしたちは、奇跡の業をなすどのような者を信じたらよいのであるか。これらの業をおこなった人びとに神々と認められることを欲する者たちであるか。それとも、神とキリストが信ぜられるために不思議なことをおこなう者たちであるか。それとも、自分の名誉をも聖なるものとなすことをのぞまず、かえって、正当にたたえられてよいすべての業を、そのかたの栄光となす人びとであるか。というのも、たしかにかれらの魂がほめたたえられるのは主においてであるからである。〔二〕この後者をこそ信ぜられなければならない。それというのも、かれらは真理を語り、奇跡をおこなうのだからである。

じっさい、かれらが苦難をうけたのは真理を語ったためであり、また、このことによって奇跡をなしえたのである。かれらが語る真理のうち、もっとも重要なものはこれである。すなわち、キリストは死者のうちよりよみがえって肉における復活の不滅性を最初に示されたのであり、そして、このことが新しい時代のはじまりに、すなわちこの世の終わりにわたしたちにおこるであろうことを約束されたのである。

（一）「出エジプト記」八の一八参照。

（二）「詩篇」三四の二参照。

第十一章

地上の身体は天においては存在しえないというプラトン主義者の主張にこたえて

さて、これらの理性論者たち（神はかれらの想いの空しいことを知っておられる[一]）は、神のこの大いなる賜物、すなわちからだのよみがえりに反対する。かれらは元素の重さにその論拠をおいている。かれらは、たしかにそれをかれらの師プラトンから学んだのであるが、宇宙の両極に二つのひじょうに大きい物体が、中間にある空気と水の二つの元素によって連結され、結び付けられているというのである[二]。かれらがいうには、底辺から上方に向かって最初にあるのは土、次にある元素は水、三番目は空気、そしてその上にあるのは天であって、ここには地上の物体はありえないのである。というのは、それぞれの元素は自分の重さによって平衡を保っているのであって、そのため、それぞれが自分にふさわしい場所を占めているからである。

見よ、何という論拠でもって、愚かさに動揺させられた人間の弱さが、神の全能に対抗していることであろう。空気は土から数えて三番目の元素であるけれども、その空気のなかには多くの地上の身体があるではないか。神は、地上の身体をもつ鳥たちに、その羽と翼の軽さゆえに飛ぶ能力を与えられたのであるから、この神が、不死のものとなした人間の身体に、もっと

も高い天においてでさえ住む力を与えることができないと考えるべきなのであるか。プラトン主義者たちの主張によれば、飛ぶことのできない地上の動物――そのなかには人間も含まれる――は、水の動物である魚が水のなかに生きるのと同じように、地上に生きなければならないとされる。それでは、地上の動物が、二番目の水のなかだけでなく、三番目の空気のなかでも生きるようになったのはどうしてであるか。

土に属しているが、土の上にある二番目の元素のなかで生きるように強制されたなら、ただちに窒息してしまって、かえって第三番目の空気のなかで生きることができるのは、なにゆえであるか。ここでは元素の秩序の外にあるのであるか。それとも誤りは自然界にあるのではなく、むしろプラトン主義者たちの議論にあるのであるか。わたしはすでに第十三巻のなかで、[三]多くの重い地上の物体、たとえば鉛が、職工によって、ある形が与えられれば水に浮かぶことができるということについて言及したが、これを引用するのを控えよう。しかし、人間の身体に、天に昇ってそこに存在することができる性質を与える力を、全能の創造者に否定すべきことなのであろうか。

わたしが上に述べたところのことについて、かれらは、自分たちが確信している諸元素の秩序をよく考え、論じているが、まったく答えを見出せないでいる。というのも、下から上へ向かって、土がまずはじめに、水が第二番目に、空気が第三番目に、天が第四番目にあるとしても、魂の本性はこれらすべての上にあるからである。アリストテレスはそれを第五番目の物体と呼んだが、[四]それに対してプラトンは物体とは呼ばない。もしも第五番目のものがあるとすれ

ば、それは他のすべてのものの上になければならない。しかし、それは物体ではないのであるから、他のすべての物体的なものをはるかにこえていることになる。それでは、それは地上の身体のなかでは何をしているのであろうか。それは他のどれよりも純化されたものであるが、この物体の塊のなかで何をはたらいているのであろうか。それは他のどれよりも軽いものであるが、この重いもののなかで何をはたらいているのであろうか。それは他のどれよりも速いものであるが、こののろいもののなかで何をはたらいているのであろうか。これほどすぐれた本性の力によっても、それに属している身体を天にまで上げることはできないと考えねばならないのであろうか。現在の状態において、地上の身体の本性が魂をこの地上にとどめておくことができるのであれば、魂は、いつかは地上の身体をより高いところに上げることができないのであろうか。

いま、かれらがわたしたちの殉教者の奇跡に対抗させて自分たちの神々によってなされたことを奇跡だとしているところのものを吟味するためにに考えてみるならば、わたしたちは、それらのことがわたしたちの側を支えるものであり、そして、わたしたちにひじょうに役立つものであることがわかるのではないであろうか。かれらの神々のなした大きな奇跡のなかでも、ウァルロによって報告されているウェスタの処女にかんするものがある。[五]かの女は身を汚したのではないかと疑われ、生命の危険にさらされていたのであった。かの女はティベルの水をふるいに満たして、一滴もこぼさず判事のところにそれを運んだのである。いったい、だれがその重い水をふるいに保たせたのか。だれが一滴の水も地に落ちないようにしたのか。かれらの答

えは、「ある神、あるいはあるダエモンである」というのであろう。もしも神であるとすれば、この世界をつくった神よりも偉大な神であろう。もしもダエモンであるとすれば、この世界をつくった神に仕える天使よりも力あるものであろう。そして、もしもより劣った神、あるいは天使やダエモンが液体の元素の重さを支えることができたので、水の自然本性が変わったとおもったのなら、あらゆる元素をつくられた全能の神にとっては、地上の身体の重さを取り去り、生命を与える霊が住もうとのぞんでいる同じ元素のなかで、その生命の与えられた身体を住まわせることはできたのではなかろうか。

さらに、かれらは空気をその上にある火とその下にある水との中間においているのであるが、わたしたちはしばしば空気が水と水との間に、そして水と土との間にあるのを見出すのである。これはどうしてであるか。雲が水から成り、空気が雲と水との間に見出されるのを、かれらはどうするのであろうか。わたしはきくが、諸元素の重さと序列がそのようになっているとすれば、低い空気の下にある地をはげしい勢いで流れる水が、以前は低い空気の上にある雲のなかにあったことをどうするのであろうか。とくに、水が空気と土との間に位置するように、空気が天と水との間に場所を定められるとするならば、空気が雲もなくつき抜けた天と、覆うものもなく世界に拡がっている地との間にあるのはどうしてであるか。

最後に、プラトンによって説明された諸元素の秩序においては、二つの両極、すなわち火と土は、二つの中間物体、すなわち空気と水によって結び付けられている。火は天に位置づけられ、地は世界の一種の土台として底にあり、したがって地は天にあることはできない。もしも

そうであるとしたら、火そのものが地の上にあるのはどうしてであるか。この説明にしたがえば、土と火の二つの元素はもっとも低い場所ともっとも高い場所というそれらの固有の場所になければならず、もっとも低い場所にあるものがもっとも高い場所にあったり、もっとも高い場所にあるものがもっとも低い場所にあったりすることはゆるされないはずである。

それゆえ、かれらは、土の小片でさえ天に存在したり、また、いつか将来存在するであろうことはないと考えている。同様に、火の小片を地上に見ることはできないのである。しかし、じっさいには、火は地上にあるだけでなく、山の頂きから噴火するように地の内部にもある。さらに、人びとの用いる火は地上に存在することをわたしたちは知っている。そしてそれは地から出るものであることを見ている。かたい木と石から火が産出されるが、これらは疑いもなく土的な物体である。

かれらはこれに反論して、元素的な火は静かで、純粋で、無害であり、永遠であるが、目に見える火は騒々しく、煙を伴い、破壊したり破壊されたりするものである、といっている。しかし、永続的に火を噴く山々や地の穴を火が破壊することはない。かりに、わたしたちが見ている火が純粋な火とはちがって、地上の場所にふさわしいありかたをしているとしよう。それなら、なにゆえかれらは、地上の物体の自然本性が、いつか天にふさわしく不壊のものとなることをわたしたちに信じさせようとしないのであるか。それができないのであれば、諸元素の重さと秩序にかんするかれらの議論は、全能の神がわたしたちの身体をつくり、天に住むことができるようになしたことにまさるものではないのである。

（一）「詩篇」九四の一一。
（二）プラトン『ティマイオス』三二A、B。
（三）本書第十三巻第十八章。
（四）アリストテレス『天体論』四の六、キケロ『トゥスクルム論議』一の二七の六五参照。
（五）本書第十巻第十六章参照。

第十二章

復活信仰に対する不信仰者たちの嘲り

しかし、かれらは肉の復活についてのわたしたちの信仰を微に入り細に入りたずねて、たとえば、「早産児についてはどうか。かれらは復活するのか」というような問いでもって嘲笑するのをつねとしている。そして、「まことにあなたがたにいう、あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはない（一）」という主のことばをとりあげて、かれらは問うのである。「すべての身体も同じ大きさと力をもつのか。それとも、それぞれ異なった形と大きさをもつのか」と。もしも同じであるのなら、早産児はどうなのか。もしも早産児が復活するのなら、この世ではけっしてもたなかった大きさをもつことになりはしないか。しかし、かれらは産まれ出たのではなく、流れてしまったのであるから、復活しないのだとすれば、同じ問いを小さな子どもた

ちにも移して、早死したそのときに達しなかった大きさになるのはどうしてであるか、と問う。

しかし、わたしたちは、これらの小さな子どもたちが復活しないとはいっていない。子どもたちは産まれただけでなく、復活することもできるのである。そこで不信仰者たちはたずねる。復活したときの等しい身体の背丈と大きさとはどれだけのものであるか、と。そして、すべての人が地上で最大で最長の身体と同じ背丈と大きさをもつのであれば、かれらは子どもたちにかんしてのみならず、大部分の人についてもたずねて、「この地上でもったと同じだけのものをもつとすれば、ここで欠いていたところのものが、のちに加わるのはどうしてであるか」という。

しかし、使徒は、「わたしたちはみな、キリストの満ちみちた年の大きさにまで達するであろう[二]」といい、また別の箇所で、「神はかれらを御子のかたちに似たものとしようとして、あらかじめ定めてくださった[三]」といっている。もしもわたしたちが、このことは、キリストの王国にはいるすべての人間が、キリストの身体と同じ大きさと姿になるという意味に受けとるならば、そのときかれらはいう。「多くの人びとが身体の大きさと背丈において縮小されなければならないだろう。そして、身体の量が減るとすれば、あなたがたの髪の毛一本も失われないだろうという約束はどうなるのか」。まったく、髪の毛の問題については、刈った分がすべてもどってくるのかどうかと問われるかもしれない。もしもそうなったなら、その姿の醜悪さは、それを見るすべての人を恐れさせるに十分であろう。

つめについてはどうであるか。切った部分がすべてもどってくるのは必然であると見られるであろう。不死の状態にある身体は、この滅びゆく状態にある身体よりも美しいはずであるが、その美しさはどこに認められるであろうか。しかし、それらがもどってこないのなら、それは滅びたことになるわけである。そこでかれらは、髪の毛一本も失われないであろうという保証についてはどうなっているのか、というのである。かれらは、やせた人、ふとった人についても同じように議論を産み出す。もしもすべての人が等しくなるのなら、ある人がやせていて、ある人がふとっていてはいけないのである。そこで、ある人は加えられ、ある人は削減されることになる。このばあいには以前と同じ状態になるのではなく、あるばあいには以前なかったものを受けとり、あるばあいには以前もっていたものを失うことになるのである。

わたしたちの敵対者らは死体の腐敗と消滅についても論じる。ある部分は塵になり、ある部分は空中に消える。ある人びとは野獣によって食いつくされ、ある人びとは火で燃やされる。さらに、ある人びとは難破や他の水の事故によって溺れ、その肉は水のなかで腐敗し消滅する。しかし、敵対者らは、これらのことをよく考えず、これらの身体がすべて集められて完全に修復されるということを信じることができない。かれらは、それが偶然であるか生来のものであるかはともかく、身体の醜さや欠陥をもてあそび、そのような損われた身体はどのように復活するか問い求め、恐れと嘲りとをまじえて奇形児について語るのである。

もしもわたしたちが、この種のものは何も復活した人の身体に再現されることはない、と答えたとすれば、かれらは、主キリストが死者からよみがえったとき、その身体に傷あとがあっ

たというわたしたちの話を引いて反論しようとする。(四) しかし、これらすべての問いのうち、もっとも困難なのは、「空腹に強いられて人肉食いとなった者によって食べられた身体は、どちらの身体のうちにもどるのか」というものである。その肉は、そのようなものによって養われて生きた者の肉になり、空腹のやつれが産み出した欠乏を満たしたのである。

それでは、その肉は、元来その人のものであった、その人にもどるのであるか。それとも、のちにその人の肉となった、その人にもどるのであるか。かれらの問いは、復活信仰を嘲笑するためになされるのである。そして、かれら自身が人間の魂に差し出す約束は、プラトンのように、真の不幸と偽りの幸福との交替であるか、あるいは、ポルフュリオスのように、さまざまの身体を行きめぐったのちに、もとの不幸な状態にもどるのではなく、いつかそれに終わりを告げる、ということである。(五) しかしながら、この終わりは、不滅の身体をもつことによってくるのではなく、どんな身体からも逃げることによっておこるのである。

(一)「ルカによる福音書」二一の一八。
(二)「エペソ人への手紙」四の一三。
(三)「ローマ人への手紙」八の二九。
(四)「ヨハネによる福音書」二〇の二七参照。
(五) 本書第十巻第二十九章、三十章、および第十二巻第二十七章参照。

第十三章

流産児には、もしもそれが死者のうちに数えられるのなら、復活はあるか

敵対者たちがわたしに対して展開してきた反論は、明らかにわたしの立っている立場と矛盾しているので、神の憐れみがわたしの努力を支えてくださるかぎり、わたしはこれに答えようとおもう。かつて胎内で生きていたが、そこで死んだ流産児については、それが復活するということを、わたしはあえて肯定も否定もしない。しかし、それらの子どもたちが死者の数から除外されるのでないなら、死者の復活からその子どもたちが除外されるということが、いかにしてありうるのか、わたしにはわからない。

というのは、すべての死者が復活するのではなく、また、母親の胎内において人間の身体をもっていたとしても、ある人間の魂は、身体なしに永遠に至るかもしれないからである。それとも、生きかつ死んだ身体をどこに残そうとも、すべて人間の魂は、かつてもっていた身体を、復活の身体として受けとるかもしれない。後者においては、母親の胎内で死んだ者たちがすべて死者の復活にあずかることはないとどうしていいうるか、わたしにはわからない。しかし、これらいずれの考えがとられるとしても、流産児が復活にあずかるとすれば、新しく生まれた子どもについていえることは、流産児にもいわれるのだと解されるべきである。

第十四章

幼児たちは復活の際、かれらがもつはずであった身体的成熟をもつのであるか

それでは幼児にかんしては、わたしたちは何というべきであろうか。かれらは、その死んだときの小さな身体のまま復活するのではないとしか、わたしにはいえない。神の不可思議ですばやいはたらきによって、かれらは時間のゆっくりした経過をとおして達するであろう成熟を得るであろう。というのも、「あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはない」(一)という主のことばにおいては、すでにあったところのものが失われないだけでなく、欠いていたところのものが加えられることを否定しないからである。幼児は死んだとき、完全な身体の大きさはなかった。たとえ完全な幼児であっても、十分な身体の成熟はなかった。それ以上大きくなりえないという限度に達していなかった。

すべての人間は完全さの限度をもっており、人はそれをもって孕まれ生まれるのである。しかし、人間はそれを可能性としてもっているのであって、現実にその大きさでもって生まれたわけではない。それはちょうど、たとえば歯やその他のそのようなものが、誕生のときにはいくつか欠けているけれども、身体のすべての部分がすでに種子のなかに隠されているごとくである。このように、それぞれの人の質料的実体のなかに、すでに可能的に一種の範型がおかれており、そこにはまだないもののいわば輪郭が描かれている。そして、まだ存在しないもの、

というよりはむしろそこに隠されているものは、時の経過のうちに存在するようになる、というよりはむしろ現れてくるものである。したがって、この範型もしくは可能性との関連において、幼児は、背丈が長いとか短いとか決められているので、長いとか短いとかいわれうるのである。

この範型にしたがって考慮するなら、復活に際して身体に何らかの欠けるものがありはしないかと恐れる必要はない。なぜなら、たとえすべての身体が等しいものとして定められて、すべての人が巨人の大きさに達したとしても、そして、そうでなければ、もっとも大きい人はその背丈を縮小することになるが、それは、髪の毛一すじでも失われることはないというキリストのことばに反するのであって、すべてのものを無からおつくりになった創造者の供給源をこえることはありえないからである。神は不思議な制作者であって、加えるべきものを知っておられるのである。

（二）「ルカによる福音書」二一の一八。

第十五章

すべての死者の身体は、復活のとき、主の身体と同じ大きさをもつのであるか

しかしながら、キリストは、たしかに死なれたときと同じ大きさの身体をもってよみがえら

れたのである。わたしたちは、すべての人の復活の時がくるとき、かれが弟子たちに知られた姿で、かれらの前に現れられたときもっていなかった大きさ、すなわち、人間のなかでももっとも大きい人と等しい大きさの身体をもつであろう、といってはならない。しかしまた、もしもわたしたちが、主よりも大きな身体をもつ人びとはすべて、主と同じ大きさに縮小されるのだと主張するならば、髪の毛一すじも失われることはないと約束されたにもかかわらず、多くの人の身体から多くの肉が失われることになるであろう。

それゆえ、それぞれの人は、たとえその人が死んだときは老年であったとしてもその青年時代にもっていた大きさの身体を、あるいは、成熟する以前に死んだとすればその人が達したであろう大きさの身体を受けとるのである。キリストの満ちみちた年の大きさについての使徒のことばにかんしては、(二)キリスト教徒の信仰を受けいれた諸国民のうちなるすべての肢体の完全さが、そのかしらの完全さに至ったとき、十分な年の数に達するという意味に解されるか、それとも、このことばもまた、身体の復活についていわれたもので、死者の身体は、青年時代にもっていた大きさ以下でも以上でもなく復活するのであって、それゆえ、キリストが地上において達したとわたしたちが考えている年齢と力強さとをもって復活するという意味に解されるか、そのいずれかであろう(この世のもっとも学識ある人びとも、約三十歳を人間の成熟の年と規定している。その時期が終わると、それ以後は中年と老年に向かうのである)。したがって、使徒によって語られたのは、キリストの身体の大きさや背丈についてではなく、キリストの満ちみちた年の数であったのである。

（一）「エペソ人への手紙」四の一三。

第十六章

「御子のかたちに似たものとなる」

使徒パウロは、「御子のかたちに似たものとしようとして」あらかじめ定めてくださった、と語っている。これは内的人間にかんして理解することができる（だからして、使徒は他の箇所でいっている。「あなたがたはこの世にならってはいけない。むしろ、心を新たにすることによってつくりかえられなさい」。それゆえ、わたしたちはこの世にならうことを避けてつくりかえられるとき、神の御子に似たものとなるのである）。わたしたちはまた、このような意味において受けとることもできる。すなわち、キリストが可死性においてわたしたちに似たものとなられたように、わたしたちは不死性においてかれに似たものとなるということである。これは明らかに身体の復活に関連している。

しかし、これらのことばが、復活した身体の形を意味しているのだとすれば、さきにいわれた大きさにしても、ここにいわれる形の一致にしても、その身体の量にかんしてではなく、年齢にかんしてであると解されるべきである。したがって、すべての者は、青年期にもった、あるいはもつはずであった大きさの身体をもって復活するであろう。そして、たしかに、その身

体の形が、幼児のものであろうと老人のものであろうと、すこしも損なわれたものではない。というのは、復活においては、精神も身体も、弱さをとどめないであろうからである。だからして、もしもだれかが、すべての人間はだれも、その人が死んだときにもっていたのと同じ身体をもって復活するのだと主張するとしても、わたしたちは反論に長い時間をかける必要はないのである。

(一)「ローマ人への手紙」八の二九。
(二) 同上、一二の二。

第十七章

女性は復活した身体においてもその性を保持するのであるか

「わたしたちすべての者が、全き人となり、ついに、キリストの満ちみちた年の大いさに達するまで(一)」ということば、そして、「神の御子のかたちに似たものとしようとして(二)」ということばのゆえに、ある人びとは、復活においては、女は自分たちの性を保持するのではなく、すべての人が男として復活するのである、なぜなら、神は男を塵からつくられたが、女は男からつくられたからである、という。しかし、わたしとしては、復活においては両性とも存在するということを疑わないほうが、より賢明な考えであるとおもうのである。というのも、かの生

においては、恥の原因となる性的欲望は存在しなかったからである。罪を犯す以前は、男と女は裸でいて恥ずかしいとはおもわなかったのである。(三) したがって、すべての欠陥がかれらの身体からとり除かれるならば、かれらの自然本性は保持されるであろう。

女性の性は欠陥ではなく、自然本性である。女性の肢体は、かつての使用に適応されるものとはならず、解放されるようになるであろう。それは、復活のときには懐妊と出産の必要から新しい飾りとなり、見る者の情欲をかきたてることはないであろう。情欲は存在しないであろう。かえって、神の知恵と憐れみが称えられ、神は、無から創造されただけではなく、おつくりになったものの腐朽から解き放つかたとして称えられるであろう。人類のはじめに、眠っている男の脇腹からとられた一本のあばら骨から女がつくられたのであるが、(四) 創造者はこのわざによって、このときすでにキリストとその教会についての預言を意図されたにちがいない。男の眠りは、明らかにキリストの死を表わした。キリストは十字架につけられて気を失ったとき、槍で突かれたその脇腹から血と水が流れたが、(五) わたしたちはそれが秘跡であると知っており、それによって教会が建てられるのである。

じっさい、聖書は、この「建てる」という用語を用いているのであって、神が女を「つくられた」とか、「かたちづくられた」というのではなく、「神はあばら骨で女を建てられた」(六) と読まれるのである。だからして、使徒もまた、キリストの体、すなわち教会を建てる、といっているのである。(七) したがって、女は、男と同じように神の被造物なのである。女が男からつくられたということは、教会の一致を強調しており、また、わたしがいったように、そのような仕

方でつくられたということによって、キリストとその教会とが象徴的にいい表わされているのである。

それゆえ、二つの性を確立されたかたは、その両方を復原されるであろう。そこで、復活を否定するサドカイ人が、死んだ夫の妻がその七人の兄弟たちとつぎつぎに結婚したが（というのは、かれらはみな律法の命ずるところにしたがって、死んだ人の子孫を産むことをのぞんだからである）、この妻はだれに属するのであるか、とイエスに問うたとき、イエスは答えて、「あなたたちはまちがっている。あなたたちは聖書も神の力も知らないからである」[八]といわれたのである。そして、イエスは、「あなたたちの問うその女は、女ではなくなり、男となるであろう」といおうとされたのであろうか。そうではなかった。イエスがいわれたのはこのことであった。すなわち、「復活の時には、かれらはめとったり、とついだりすることはない。かれらは天にいる御使いのようなものである」。かれらが御使いのようであるのは、不死性と浄福においてであって、肉においてではない。また、その復活においてでもない。天使は死ぬことはありえないから、復活の必要はないのである。

それゆえ、主は、復活した生における結婚の存在を否定されたのであって、女の存在を否定されたのではない。また、このように答えられたのは、たとえ未来においてそうでないことを予知していたとしても、女としての性が存在しないというほうが、よりすみやかに、そして容易に解決しうるような仕方でそのような問いが出されたからである。しかし、イエスは、女にかんして「とつぐことはない」といわれ、男にかんして「めとることはない」といわれたとき、

未来にも両性が存在することを確信されていたのである。それゆえ、この世の生においては、めとったりとついだりする人びとが存在しつづけるであろうが、かの世においては、このようなことはおこなわれないのである。

(一)「エペソ人への手紙」四の一三。
(二)「ローマ人への手紙」八の二九。
(三)「創世記」二の二五参照。
(四)同上、二の二一参照。
(五)「ヨハネによる福音書」一九の三四参照。
(六)「創世記」二の二二。
(七)「エペソ人への手紙」四の一二参照。
(八)「マタイによる福音書」二二の二九以下。

第十八章

全き人キリストとそのからだである教会

さらに、使徒は、わたしたちはみな、全き人に至るであろうということを語っているが、これはその全体の文脈を考察しなければならない。かれはつぎのようにいっている。「降りてき

た者は、同時に、あらゆるものに満ちるために、もろもろの天の上にまで上られたかたなのである。そしてかれは、ある人びとを使徒とし、ある人びとを預言者とし、ある人びとを伝道者とし、ある人びとを牧者、教師として、お立てになった。それは、聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせ、わたしたちすべての者が、神の子を信じる信仰の一致とかれを知る知識の一致とに到達し、全き人となり、キリストの満ちみちた年の大いさにまで至るためである。こうして、わたしたちはもはや子供ではないので、人のいつわりと、誤謬にまよわすたくらみとのままに、いろいろな教えの風に吹きまわされたり、もてあそばれたりすることがなく、愛にあって真理をおこない、万事において成長し、かしらなるキリストに達するのである。かれによって全身が結ばれ、すべての節々の助けにより組み合わされ、それぞれの部分は分に応じてはたらき、からだを成長させ、愛において建てられるのである[二]」。

ここで、全き人とは何を意味するかをわたしたちは知るのである。すなわち、かしらと身体とが一つになり、そして、それらは然るべき時に完成されるであろう。肢体は日々にこの身体に加えられ、教会が建てられるのである。この教会については、「あなたがたはキリストのからだであり、ひとりびとりはその肢体である[三]」といわれ、また、他の箇所では「教会であるかれのからだのために[三]」といわれ、さらに他の箇所では「わたしたちは多くいても、一つのパンであり、一つのからだである[四]」といわれている。そして、身体を建てることについて、ここではこういわれている。「聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせる」。それからわたしたちが引用したことばが加えられて、「わたしたちすべての者が、神の

子を信じる信仰の一致とかれを知る知識の一致とに到達し、全き人となり、キリストの満ちみちた年の大いさにまで至る」云々、といわれている。ここにいわれている大いさと身体について、いかに理解すべきであるか、かれは説明している。すなわち、「万事において成長し、かしらなるキリストに達するのである。かれによって全身が結ばれ、すべての節々の助けにより組み合わされ、それぞれの部分は分に応じてはたらき」といっているのである。

それゆえ、それぞれの部分に大いさがあるように、そのすべての部分から成る身体全体にも「キリストの満ちみちた年の大いさ」といわれている満ちみちた大いさがあるのである。この完成については、使徒はキリストについて述べた他の箇所でもいっている。「そして神はかれ（キリスト）を万物の上にかしらとして教会に与えられた。この教会はキリストのからだであって、すべてのものを、すべてのもののうちに満たしているかたが、満ちみちているものに、ほかならない[五]」。もしもこのことばが、復活した身体のかたちにかんしていわれたとするなら、「全き人」というばあいの「人(ヴィル)（男）」は「人間(ホモ)」に代わって用いられたものであって、女もまたそこに含まれていると考えることを妨げるものはないであろう。「主をおそれる人(ヴィル)はさいわいである[六]」といわれているのも同様である。ここでも、主をおそれる女が含まれていることは明らかである。

(一)「エペソ人への手紙」四の一〇以下。
(二)「コリント人への第一の手紙」一二の二七。
(三)「コロサイ人への手紙」一の二四。

(四)「コリント人への第一の手紙」一〇の一七。
(五)「エペソ人への手紙」一の二三以下。
(六)「詩篇」一一二の一。

第十九章

復活した身体の完全さについて

ところで、毛髪と爪については、わたしはどのように答えたらよいであろうか。身体に属するいかなるものも滅びず、身体にいかなる欠陥もないということが理解されるならば、身体のかたちを異常なものとする余分なものがあって、それが肢体のある部分に加わり、そのかたちを醜悪なものにするといったことはありえないことも、ただちに理解されるであろう。たとえば、粘土で陶器をつくり、これを壊してもとの粘土に返し、ふたたびその全部を用いて同じ陶器をつくったなら、最初把手であった部分がまた把手となり、最初底であった部分がまた底になるということは、かならずしもない。しかし、そのばあいには、全部が全部にもどったのである。すなわち、粘土の全部が陶器となったのであって、棄てられた部分はないのである。

それゆえ、刈った毛髪と切りとった爪とをもとのところに返すのは、その身体を醜くするので、そのようなことはなされない。しかし、復活の際に各人の身体から失われるものは何もな

い。それというのは、身体のどの部分にあるものも、諸部分の調和を乱すことなく、物質の可変性によって同じ肉へもどってくるのだからである。「あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはない(二)」と主がいわれているのであるが、これは毛髪の長さではなく、数についていわれたと解するのがはるかにふさわしいのであって、だからして他の箇所で、「あなたがたの頭の毛までも、みな数えられている(三)」といわれたのである。

　だからといって、わたしは、自然本性的に身体に属するものがその身体から失われるだろうといおうとするのではない。そうではなく、生まれたときに奇形だったもの(それは、たしかに、死すべきものが罰せられることを明らかにするものにほかならない)が回復されて、その完全な実体がのこり、醜さはなくなる、といいたいのである。芸術家が何らかの理由で醜い像をつくり、その像をもう一度溶かして美しいものに仕上げたばあい、失われたのは物質的実体ではなく、かたちの醜さなのである。そして、最初につくった像の、醜くて全体の調和がとれないと感じた部分を切りとり、分離したのではなく、材料の全体を混ぜ合わせたのであるから、醜さをつくり出したり、材料を減らしたりしたのではない。もしもそうだとすれば、全能の製作者について、何と考えるべきであろうか。

　全能の製作者が、ありふれた奇形だけでなく、この世の生の悲惨さをもち、聖徒たちの未来の幸福とはまったく釣り合わないまれなものや怪奇なものも、すべて人間の身体の醜さをとり除くことができないであろうか。それは自然的であったとしても、身体の材料のむだによって産み出された醜いものであるが、その材料を減少させることなく、とり除くことができないで

あろうか。

それゆえ、やせた人とふとった人のことを心配して、かれらはこの世においてもちたくないようなものをあの世においてももつのではないかとおそれる必要はない。というのは、身体の美しさは、色の甘美さを伴った諸部分の調和であるからである。諸部分の調和がないとき、ゆがみのゆえであるか、あるいは、小さすぎたり大きすぎたりするゆえに、不快になるのである。したがって、諸部分の不調和から生じる醜さは、ゆがんだものが正され、過度に小さいもの――創造者はそれがどこからくるのか知っておられる――が大きくされ、過度に大きいものがその素材をそのまま保存しながら縮められるとき、なくなるのである。さらに、「義しい者がかれらの父の御国で、太陽のように輝きわたる[三]」とき、その色はどれほどうるわしいことであろうか。

キリストが復活されたとき、その身体の輝きは、弟子たちの目には隠されていたのだと信じなければならない。それは、その身体に欠けていたのではなく、人間の弱い目はそれにたえられなかったのであって、弟子たちによって直接見られ、知られなければならなかった。主がかれらに傷跡を示して触れさせられ、パンと魚を食べられたのであったが、主は食物を必要としなかったのに、それをとりうる力のあることを示そうとされたことも、弟子たちが主を知るためであった。

ところで、ときとして、人はそこに現にあるものでも、そこにある他のものを見ているかぎり見ないのであるが、それはちょうど、主の身体の輝きがそこにあるのに他のものを見ていて、

それを見ないのと同様である。この状況はギリシア語で「アオラシア」[四]とよばれる。わたしたちの翻訳家はこの語をラテン語で表わすことができず、『創世記』では「盲目(カエキタス)」と訳されている。これはソドムの人びとにおこったところのことである。[五]かれらは義しい人のとまっている家を襲ったが、見つけることができなかったのであった。もしもかれらがほんとうの盲目であって、何も見えなかったのであれば、家の中にはいろうとして戸口に押しよせることはできず、かれらを導く案内人にたずねさせたことであろう。

どのようにしてかは知らないが、わたしたちは御国において、至福の殉教者たちがキリストの御名のゆえに蒙った身体の傷跡を見たいと願うのである。それは、かれらにたいする愛のゆえである。わたしたちはおそらくそれを見るであろう。これらの傷跡には、醜さがあるのではなく、尊厳があるのであり、そして、かれらの徳の美しさが輝いているであろう。その美しさは身体のうちにある美しさであるとしても、身体に属するものではない。しかし、殉教者たちの肢体が切りとられ、ある部分がなくなってしまったとしても、復活のときにはその部分が欠けるということはない。というのは、「あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはない」と語られているからである。

しかし、もしも、光栄ある傷のしるしが、新しい世において不死の肉に残るということがふさわしいことであるとすれば、打たれたり切られたりした傷跡は、その部分が失われたのではなく、回復されたのではあるけれども、肢体が切り落されたその箇所に見られるものとなるであろう。したがって、身体におこった失陥は、そのときにはもはやなく、そして、これらの徳

のしるしが失陥と考えられたり、また、その名でよばれたりしてはならないのである。
(一)「ルカによる福音書」二二の一八。
(二) 同上、一二の七。
(三)「マタイによる福音書」一三の四三。
(四) ἀφθαρσία.
(五)「創世記」一九の一一参照。

第二十章

復活の身体の完全さについて

野獣や火によって滅ぼされた身体、あるいは、塵や灰となって散って行った部分、あるいは、水のなかに溶解し空気のなかに消えて行った部分にかんしては、全能の創造者がそれらをよみがえらせ、ふたたび生命を与える力を呼びもどすことはできない、と考えてはならない。また、自然界のもつしるしや秘密のように、わたしたちの感覚をひそかに遠ざけるものがあるが、それが万有の創造者の知識に隠され、あるいは、その力から逃げ去るだろう、と考えてはならない。偉大な異教の著述家キケロは、神をできるかぎり定義しようと試みた。かれがいうのはこうである。「神は自由な、そして拘束されない精神である。いかなる物質性、可死性からもま

ぬがれ、すべてのものを動かし、永遠の運動をもっている」(一)。これは、キケロが偉大な哲学者たちの教説のなかに見いだしたところのものである。したがって、すべてのものを知っている者に何か隠されているものがあろうか、すべてを動かす者の力から何か呼びもどせないような、逃げ出しているものがあろうか、というなら、それはかれら哲学者たちのことばによって語っているのである。

だからして、すでに、他のどんな問いよりも困難と見られる問いも解決される。それは、人肉を食って生きている人がいて、この食べた人も食べられた人も死んだばあい、復活のときに、その肉はどちらの人に返されるか、というものである(二)。人が飢餓におそわれ、どうにもならなくなって人肉を食べたとしよう。このいまわしいことが幾度かおこったことは、古い記録が証明しており、また、わたしたちの時代でも、不幸な経験として教えている(三)。ところで、その食べた肉が全部腸の管を通って出て行き、そのため、食べた者の肉に変わったり転じたりするものは何も残らない、というようなことを、真なる論拠によって主張しようとする人がいるであろうか。じっさい、以前はやせていたが、いまはそうではないのは、それを食べたことでかつての肉体的不足が補われたことを証明しているのである。

しかし、わたしはすこし前に、どうしたらこの難題を解くことができるかをいくつか暗示しておいた。すなわち、飢えをみたした何らかの肉は空気中に放出されたが、全能なる神は、その逃げ去ったものを呼びもどすことができるとわたしたちはいったのである。それゆえ、食べられて他の人間のものとなった肉は、最初にあったとおりの人間の肉に回復しはじめるのであ

る。しかし、すでに食べてしまった他人の肉は、それを食べた者にとっては、いわば借り物なのであって、それはちょうど人から金を借りたときは、それが得られたところへもどさなければならないのと同様に考えねばならない。

しかし、また、飢えが奪い取ったところのこの人の肉が回復するのは、空気中に飛び散ったものを呼びもどすことのできるかたによってなのである。じっさい、全能者は、たとえその肉が完全に消えてしまって、そのわずかの部分たりとも自然界の裂け目にないほどであっても、欲するならばそれを再びつくり出すであろう。しかし、人間の髪の毛は滅びえないのに、飢えのために食べられて消失したかくも多くの肉が滅びるなどと考えるのは、「あなたがたの髪の毛一すじでも失われることはない(四)」といわれた真理のことばのゆえに愚かなことである。

すべてこれらの議論が、わたしたちのもつ尺度にしたがって考察され、考量されるとき、わたしたちはつぎのような結論に至るであろう。すなわち、永遠の生命に至る肉の復活において、身体がもつ大きさの基準は、それぞれの人の身体に植え付けられた範型にしたがって達成されるべき、あるいはすでに達成された成熟期のもつそれであって、どの肢体もすべてふさわしい大きさを得てその美を保つのである。この美を保つために、ある部分を占めるものが不快なほどに大きいばあいには切り取られることがあっても、そしてこのことが全体にわたってひろげられるとしても、滅び失せるのではなく、諸部分の調和がこれによって保持されるのである。それゆえ、全体の美を保持するために、個々の肢体において過度であって美しくないものが、すべての部分に分け与えられるとするならば、その結果として、身体の大きさが増し加わるこ

とがありうるとおもうのは、けっして愚かではない。
あるいはまた、各人は、死んだときの身体の大きさで復活すると主張する者がいても、敵意をもってそのような意見をしりぞけてはならない。そのとき消失するのは、すべての醜さ、すべての弱さ、すべての鈍さ、すべての腐敗であり、そして、その他の御国にふさわしくないものだけである。その御国においては、復活と約束の子らは、身体や年齢においてではなく、すくなくとも至福において、神の御使いたちと等しくなるのである。(五)

(一) キケロ『トゥスクルム論議』一の二七の六六。
(二) 本書本巻第十二章参照。
(三) アラリックのローマ侵攻の際のことである(四〇九年から四一〇年)。
(四) 「ルカによる福音書」二一の一八。
(五) 「マタイによる福音書」二二の三〇。

第二十一章

聖徒たちの新しい、霊的な身体について

したがって、生きた身体から、あるいは、死後の死体から消失したすべてのものは回復されるであろう。そして、墓のなかに残された者と共に、古い魂的な身体から新しい霊的な身体に

変わってよみがえり、不滅性と不死性とにまとわれるであろう。深刻な出来事のゆえに、あるいは、敵の凶暴性によって、その身体がまったく打ち砕かれ、空気や水のなかにまき散らされて、もしかしてどんな場所にも存在できなくなることができたとしても、髪の毛一すじでさえ失われるのをゆるさない全能の創造者から取りあげられることは、どうあってもできないのである。

それゆえ、肉は霊に服属して霊的なものとなるであろう。しかし、肉は肉であって霊ではないのであって、それはちょうど、霊が肉に服属したなら肉的となるが、なおそれ自身は霊であって、肉でないのと同様である。わたしたちはこのことを現在のわたしたちの罰の歪められた状態のなかで経験している。というのも、使徒が、「わたしはあなたがたには霊的な人に対するように語ることはできない。むしろ肉的な人に語るようである」[一]といったとき、このあなたがたとは、肉にしたがって生きるかぎりの肉的な人ではなく、霊にしたがって生きるかぎりの人なのである。人は、この世において、霊的とよばれるとしても、身体においてはいまだ肉的であり、その肢体のうちには別の律法があって、心の律法と戦っているのを知っている。[二]しかし、その同じ肉が復活して「魂的な身体でまかれ、霊的な身体によみがえる」[三]ということばが成就されるとき、身体においてさえも霊的となるであろう。

しかし、その霊的身体の恩恵が、どのようなものであり、どれほど大きいものであるかということを、わたしたちはまだ経験していないので、わたしは、それについて何かを記述するのは無分別なことではないかとおそれている。けれども、神をほめたたえるゆえに、わたしたち

は希望のよろこびについて沈黙をまもることはできない。そして、聖い愛に燃えた心の底から、これらのことばが出てくるのである。「主よ、わたしはあなたの家の美しさを愛します(四)」。したがって、神の助けを得て、わたしたちは、それがわたしたちの現在の経験をこえているがゆえにふさわしく記述することのできないよろこびが、どれほど大いなるものであるかを、この悩みの多い世にあって善き者にも悪しき者にも注がれる恵みの賜物によって、なしうるかぎり推測しようとおもう。

わたしは、神が人間を正しい仕方でつくられたときのことについては省略しよう。すなわち、楽園の豊かさのうちにあったあの夫婦のしあわせな生活については省略しよう。それというのは、それはあまりに短かかったからであって、かれらの子どもたちによっても感じられなかったほどである。しかし、わたしたちが知り、わたしたちがいまいるところのこの世において、わたしたちが善性においてどれほど進歩していようと、わたしたちがそこにいるかぎり、その諸々の試練を、というよりはむしろ、すべての試練を永久にのがれることはないのであるが、人類にかかわる神の善性のしるしが何であるか、だれが完全に描くことができるであろうか。

(一)「コリント人への第一の手紙」三の一。
(二)「ローマ人への手紙」七の二三。
(三)「コリント人への第一の手紙」一五の四四。
(四)「詩篇」二六の八。

第二十二章

最初の罪ゆえに人類にもたらされた悲惨から救われるのは、ただキリストの恩恵をとおしてのみである

人類の最初の起源にかんして、死すべき者のすべての子孫が罰のもとにおかれたことは、わたしたちのこの生――それが生とよばれうるとして――が、かくも大きな悪にみちていることで証明される。これを示しているのは、あのおそるべき無知の深淵でなくて何であろうか。それはすべての過誤の根源であり、アダムの子らはことごとくその暗い深みへ呑み込まれたので、人間は労苦と悲しみと恐怖なくしてそこから解放されることはできない。

空しいものや有害なものへの愛自体がこれを示しているのではないであろうか。それから出るものは、悩み多い憂い、心の動揺、失望、恐れ、狂気じみたよろこび、争い、口論、戦い、裏切り、怒り、敵意、欺瞞、へつらい、詐欺、盗み、強奪、不信、高慢、野心、ねたみ、人殺し、親殺し、残酷、狂暴、悪事、肉欲、無遠慮、無作法、不貞、姦淫、姦通、近親相姦、男と女の不自然な非行(それはあまりにも不潔で、その名をいうのもいとわしい)、冒瀆、共謀、偽証、不正な裁判、暴力、強盗、そして、他のそのような、心にすぐに浮かんでこないが、人間のこの世の生からけっしてなくならないものである。

たしかに、これらは悪しき人間に属するものであるが、アダムのすべての子らがもって生ま

れた、過誤と転倒した愛の根から生じているものである。真理についてのはなはだしい無知(これはすでに幼児において明らかである)、および空しいものについてのひじょうな欲望(それは少年になって現われはじめる)とを伴ってこの世に入ってきたか、そのため人びとをしてその欲するように生きさせ、欲するとおりのことをさせるならば、わたしがここに列挙した、あるいは列挙することのできなかったその他の悪事や罪過のすべてのなかに、あるいはその大部分のなかに落ち込んでしまうということを、だれが知らないであろうか。

しかし、神の統治は罪人を見捨てることはなく、神の憐れみは怒りのうちに抑制されていない(二)。したがって、神は禁止と教えとを示して、人類がそれをもって生まれたこれらの暗闇に対する警戒心をかれらに与え、その攻撃に抵抗させるのであるが、それにもかかわらず、これらの掟は、わたしたちに多くの労苦と苦痛をもたらすのである。じっさい、小さい子どもたちに、その愚かさを抑えるためにわたしたちが用いるさまざまな恐怖は何であろうか。教育、教師、棒、皮ひも、枝むち、その他すべての矯正手段は、聖書が教えるように愛する子の横腹を打って(三)、かれらが粗暴なまま成長するのを抑えるためであり、また、強情を張って教育をまったく受けつけない、あるいは、ほとんど受けつけない、といったことをなくすためである。

これらの罰はすべて、わたしたちがその悪を伴ってこの世にやって来た無知をとり除き、邪悪な欲望を抑制するためでなければ何であろうか。わたしたちは、想起するためには労苦をもってするが、忘れるためには労苦はなく、学ぶためには労苦をもってするが、無知でいるためには労苦はなく、活動的であるためには労苦をもってするが、怠惰でいるためには労苦はない、

というのは、どういうことであろうか。ここからして、わたしたちの損なわれた自然本性が、いわば自分の重みにしたがって傾いて落ちていくのは何に向かっているのか、そして、そこから解放されるためにはどれほどの助けが必要であるか、が明らかとなるのではないであろうか。怠惰、無気力、怠慢、無関心、——これらはたしかに労苦を逃れようとする悪徳である。労苦は、わたしたちにとって有益であるときでさえ、それ自身は罰だからである。

しかし、年長者は、罰なしにみずから欲するところのことを少年に教えられないとしても——年長者が欲するところのことは少年の益になることはほとんどないのであるが——、それ以外にも、人類はどれほど多くの、そしてどれほどきびしい罰によって苦しまされていることであろうか。それらは、悪しき者たちの不正と不義のためのものではなく、すべての者に共通する悲惨な条件なのである。だれがそれらすべてを語りえようか。だれがそれらすべてを自分の思考のうちにとらええようか。子どもを失い喪に服することによる、財産をなくしたり法廷で罰せられることによる、人びとの欺きやだましごとによる、虚偽の疑いによる、他人のあらゆる暴行や犯行による恐怖や悲嘆は、どれほど大きいことであろうか。

人びとは、かれらの仲間によって略奪され、捕えられ、鎖でしばられ、投獄され、追放され、苦しめられ、肢体を切り刻まれ、感覚を失わされ、迫害者の淫乱な情欲を満たすために身体が制圧される、など、多くのこのような恐ろしいことがしばしばおこるのである。さらに、外部からやってくる恐ろしい無数のことがある。暑さと寒さ、嵐と洪水、雷鳴と稲妻、あられと落雷、地震と地割れ、建物の崩壊による圧死、家畜による襲撃や悪意ある恐怖、有毒な果実や水、

野獣の襲来、など。これはたんに怪我をするだけであるが、ときには嚙まれて致命的なばあいがある。たとえば、狂犬に嚙まれておこる狂犬病である。

ふだんは従順で飼い主に従う動物も、ときには恐怖をよびおこすもととなり、ライオンや毒蛇よりも恐ろしくなり、それに触れた人に狂犬病のような有害な作用をおよぼし、どんな野獣よりも悪く、親や妻や子どもを恐れさせるものである。海を行く人はどれほど災いを受けることであろうか。陸地を旅する人はどうであろうか。

どこを歩くときにも不慮の事故におそわれない人がいるであろうか。ある人は健全な足で広場から家に帰ったが、倒れて自分の足を打ち、その傷で生涯を終えたのであった。すわっているときのほうが安全だとひとはおもうかもしれない。しかし、祭司エリは、すわっている椅子から落ちて死んでしまった。(三) 農夫たちの、いやすべての人びとの農作物にかんする恐れは、どれほど多くの、どれほどはなはだしい天と地からの災害や、荒れ狂う動物たちからやってくることであろうか。しかしながら、かれらは、たいがい、その穀物を集めて倉に保管しておけば安全だとおもっている。けれども、わたしたちも知っているとおり、突然の洪水によって、人びとが逃げまどうあいだに、すぐれた収穫物は押し流されてしまい、だめになったのであった。

さらに、ダエモンの無数の襲撃に対して、だれが自分の無垢を確信できるであろうか。それ以上無垢な者はない洗礼を受けた子どもたちですら、神が許したがゆえに、ダエモンによってしばしば苦しめられるのであるが、このことは、とくに、この世の不幸がいかに辛く、あの世がいかにのぞまれるべきであるかを、わたしたちに明らかにしているのである。また、身体そ

のものについても、さまざまな病気に由来する多くの悪があり、それらすべてを医学書に収めることはできないほどである。そして、その多くにおいて、じっさい、そのほとんどにおいて、治療や薬自身が苦痛であって、そのため患者は、苦しい治療によって苦しい最後から解放されるということになる。

さらに、異常な暑さは、人びとを渇きの極限にまで至らしめ、人の尿をも、また自分自身の尿までも飲むようにさせるのではないであろうか。飢えもまた、人肉を食べることを抑制できず、死人を見つけて食べるだけでなく、気が狂ったときには、信じがたいほどの残酷さをもって母が子をも食べるようにさせるのではないであろうか。最後に、本来的には休息という名でよばれる眠りでさえ、しばしば夢のなかに現われる幻によって不安にし、事実でないのに事実と識別されないほどありありと見させる大きな恐怖でもって、惨めな魂と感覚とを混乱のなかへ投げ入れるのであるが、だれがそれをことばで描くことができるであろうか。

目覚めているときでさえ、幻覚に陥って、病気になったり、薬の作用によって、いっそう惨めな状態になる。じっさい、邪悪なダエモンらは、そのような幻によって、健康な者をもさまざまな仕方で欺くのであるが、もしもかれらが人を自分たちの側につけることができないときは、すくなくとも人びとの感覚を引きつけ、かれらがなしうるどのような虚偽の説得をもおこなって楽しむのである。

この、一種の地獄ともいうべき悲惨な生から解放してくれるものは、わたしたちの神であり主であられる救い主キリストの恩恵以外にはない(かれの名はイエスであり、たしかに救い主

という意味である(四)。そして、何よりもその恩恵は、この世の生ののちにくるもっと悲惨な生、というよりはむしろ死、からわたしたちを救うのである。その死は永遠につづくであろう。というのも、この世において、聖物や聖者たちをとおして大きな慰めや和らぎが与えられるのではあるが、しかし、求める者にたいして恵みがつねに分け与えられるとはかぎらないからである。宗教がこのようなことのために求められてはならない。それはそのような諸々の悪からまったく自由である彼岸の生のために求められるべきである。恩恵が、この諸々の悪のうちにある善き人びとを助けるとすれば、それは、その人びとがより信仰深くなればなるほど、よりいっそう勇気ある心をもってそれらの不幸に耐えることを示すためである。

この目的のために、哲学もまた有益であるとこの世の学識ある人はいっているが、トゥルリウスは、神々は少数の者のためにのみ真の哲学を授けたといっている(五)。かれがいうには、それ以上に大きな賜物は神々から人類に与えられなかったし、また、与えられることができなかったのであった。わたしたちの敵対者でさえ、何らかの哲学ではなく真の哲学をもとうとして、神の恩恵に依っていることを何らかの仕方で告白するよう強いられているのである。さらに、この世の生の悲惨さに対するただ一つの助けである真の哲学が、神によって少数の者にのみ与えられるのであれば、このことから、人類が断罪されたのは、これらの悲惨さの罰の償いのためであることがまったく明らかとなる。しかし、かれらが認めるように、これ以上大きな神の賜物はないのだとすれば、多くの神々を拝する者たちでさえ、それ以上に大いなるものはないといっている唯一の神からでなければ、その賜物は与えられない、とわたしたちは信じなけれ

ばならない。

(一)「詩篇」七七の一〇参照。
(二)「集会の書」三〇の一二参照。
(三)「サムエル記上」四の一八参照。
(四)「マタイによる福音書」一の二一参照。
(五) キケロ『アカデミカ』一の二の七参照。

第二十三章

義人の受ける苦しみについて

この世の生において善人にも悪人にも共通の災いのほかに、義人は自分自身に固有の困難をもっている。かれはその困難をもって悪徳とたたかい、そのたたかいのなかで試練と危険に苦しめられている。ときには激しかったり、ときには比較的ゆるやかであるとしても、肉の欲するところは霊に反し、霊の欲するところは肉に反することがやまず(一)、そのため、わたしたちは欲するところのことをおこなわず、悪しき欲望をすべて滅ぼすことをしないのである。しかし、わたしたちが神の助けを得てなすべきところのことは、その欲望に同意せず、かえってこれをわたしたちの意志に従わせるよう全力をつくすことである。わたしたちはいつも目覚めて監視

していなければならない。――真理に似たもっともらしい意見に欺かれないように。巧みなことばにだまされないように。誤謬の闇に巻き込まれないように。善を悪であると、悪を善であると信じないように。恐怖がなすべきことからわたしたちをそらすことがないように。欲望にかられてなすべきでないことに落ち込むことがないように。怒ったまま日が暮れることのないように。(二) 敵意がわたしたちを悪をもって悪に報いさせることのないように。(三) 不名誉で無節度な悲嘆がわたしたちをのみ込むことのないように。感謝の心を失って親切な行為を遅らせることのないように。悪いうわさ話によって善き良心が弱くされることのないように。他人の軽率な意見によってわたしたちが道に迷ったり、他人の誤った意見に動かされて勇気を失うことのないように。罪がわたしたちの死すべき身体を支配して、その欲望に従うことがないように。わたしたちの肢体を不義の武器として罪にささげることがないように。(四) 眼が欲望に仕えることのないように。征服欲がわたしたちを征服することがないように。悪しきよろこびをよびおこすものにわたしたちの視覚や想いをおくことがないように。恥ずべきことばやわいせつなことばによろこんで耳を傾けることのないように。わたしたちの好むもので神の法がゆるさないものをなすことがないように。この労苦と危険とにみちた戦いのなかで、わたしたちが自分自身の力で勝利を得ようと期待することのないように。あるいは、勝利を得たとしても、それを自分の力に帰することのないように。使徒もいっているように、神の恩恵に帰すべきである。「感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜わったのである」。(五) また、他の箇所では、「わたしたちを愛してくださったかたによって、わたし

たちは、これらすべてのことにおいて勝ち得て余りがある」(六)といっている。

それにもかかわらず、わたしたちは、たとえどんなに勇敢にわたしたちに戦いをいどんでくる悪と戦い、あるいは、悪を征服してくびきの下につなぐことができたとしても、わたしたちがこの身体のうちにあるかぎり、神に向かって「わたしたちの負い目を赦してください」(七)といわないですむ理由はすこしもないことを知らなければならない。しかし、わたしたちが不死の身体をもって永遠に生きるかの御国においては、戦闘も負い目もなくなるであろう。そのようなことは、たとえわたしたちの自然本性がはじめに創造された正しい状態でありつづけたとしても、けっしてありえないであろう。したがって、わたしたちを危険におとしいれ、わたしたちが最後の勝利によって解放されることを切望する、この闘争そのものが、この世の悪に属しており、わたしたちはこれらのすべての悪の証拠によって、この世が罰のもとにあるということを承認するのである。

(一)「ガラテヤ人への手紙」五の一七。
(二)「エペソ人への手紙」四の二六。
(三)「ローマ人への手紙」一二の一七。
(四)同上、六の一二以下。
(五)「コリント人への第一の手紙」一五の五七。
(六)「ローマ人への手紙」八の三七。
(七)「マタイによる福音書」六の一二。

第二十四章

この世の生は罰のもとに服しているけれども、創造者によって多くの善に満たされていることについて

さて、人類のこの世における悲惨な状態は罪に対する罰であるが、その悲惨な状態においても神の義が称えられるのであって、すべてのものを創造し、統宰する神の善性が、どれほど多くの善をもってその創造したすべてのものを満たしているか、考えなければならないのである。その第一に、人間の罪に先立って「生めよ、ふえよ、地に満てよ(一)」といわれたあの祝福がある。そして、罪ののちも神はこれを取り消そうとはされず、罰せられたにもかかわらず、その子孫のうちに豊かに実を結ぶ力が残されたのであった。最初の罪の欠陥は、種のもつ不思議な力も、そして種が種を生み出すといういっそう不思議な力をも、取り消すことはできなかった。それは、人間の身体のなかに、ある意味で織り交ぜるような仕方で植え付けられ、罪によって死の不可避性がわたしたちに課せられたにもかかわらず、残っている力である。そして、人類のあのいわば奔流へと二つの川が流れ込んでいる。そのひとつは最初の両親から出ている悪であり、いまひとつは創造者によって与えられた善である。

最初の悪には二つの要素がある。すなわち罪と罰である。そして最初の善には他の二つの要素がある。すなわち生殖と形成(種の同一性)である。悪はわたしたち自身の向こう見ずから生

じた罪と神の判決から来た罰とであるが、これについてはすでに十分に論じたのであった。そこでわたしが述べたいとおもうのは、罪によって損なわれ、罰せられた自然本性にも、神自身がお与えになった、そしていまもなお与えておられる神の善についてである。

じっさい、神は断罪されたにもかかわらず、与えられたすべてのものを奪い取ることはされなかったのである。もしも神が奪い取られるならば、人間はまったく存在しなくなるであろう。また、人間は罰によって悪魔に隷属するようにされたときでさえ、神は人間からご自身の力を取り除くことをされなかった。というのも、悪魔でさえも神の支配の外にあるのではないからである。じっさい、自然本性は悪魔にも存在するが、それは最高に存在するかたがそれをつくり、ある仕方で存在するものは何でも、存在をそれに与えられたからである。

したがって、いま述べた二つの善は、神の善性のいわば水源から流れ出て、罪によって壊敗し罰によって断罪された自然本性のなかにはいってきたのである。そのひとつは生殖で、神が七日目にその御業を終えて休まれた最初の世界創造において祝福によって与えられたものである。いまひとつは形成であって、神はこれを今日までつづく御業のなかで与えておられる。(三) じっさい、神がそのはたらきの力をこの世界から引き上げられるならば、その被造物は、その道を進み、決められた運動をもって時の経過を通過することはできず、それらがつくられた状態のうちに幾分かでもありつづけることもできない。

それゆえに、神は人間を、増加の力を付け加えるようにしておつくりになったのであって、それによって、人間が他の人間を生み、その子孫に、生殖の必然性ではないが可能性を渡すこ

とができるようにされたのである。しかし、すくなくとも、神が欲せられるときには、この力を個々人から取り去って子どもを生まぬようにされたが、最初の夫婦にたいし、人類全体へのあの祝福によって与えられた力を、これといっしょに奪うことはされなかった。この生殖力は人間の罪のために奪われるということはなかったが、もしも罪を犯さなかったならばあったであろうような状態にはない。人間は、栄華のうちにあったが、罪を犯したのちは獣のようになり、(三)獣と同じような仕方で子を産むのである。しかし、人間は、理性において神の像に似せてつくられたのであり、(四)そのいわば火花はまったく消えてしまったわけではない。

ところで、この生殖に形成が加わらなかったならば、人間の類としての形やありかたが保たれなかったであろう。さらに、人間が性交をおこなわず、神が人間でもって地上を満たすことを欲せられなかったとしても、神は男女の結合なしにひとりの人間を創造されたのであるから、そのようにしてすべての人間を創造することがおできになるはずである。けれども、神の創造的な力なくしては、二人が結合して子どもを産む者となることはできなかった。

それゆえ、使徒は、人間が敬虔と義によって形成される霊的創造を、このような肉的創造になぞらえていっている。「大事なのは、植える者でも水をそそぐ者でもなく、成長を与える神である」(五)。同様に、ここではつぎのようにいうことができるであろう。「大事なのは交接する者でも種を生む者でもなく、形を与える神である。また、大事なのは懐胎したものを産み出し、子を育てる母親ではなく、成長を与える神である」。

すなわち、今日に至るまでつづく神の創造的なはたらきにより、種をつくってそこからそれ

自身を展開させ、わたしたちには隠され、見えない包みをひろげて、そこから眼に見えるこの美のさまざまな形を示したのである。神は非物体的本性と物体的本性とを、また、先におかれた本性とあとにつづく本性とを不思議な仕方で結合させて魂あるものをおつくりになった。その御業の大いなること、おどろくべきことは、理性的動物であって、そのことゆえに地上のすべての動物にまさってすぐれている人間だけでなく、どんなに小さなねずみをもよく眺めるならば、精神をおどろかせ、創造者への賛美をよびおこすであろう。

したがって、人間の魂に精神を与えたのは神である。この精神において、理性と知性とは、子どもにあってはある意味でまだ眠ったままで、いわば無いにひとしい。しかし、もちろん、年齢が進むにつれて目覚め、それによって知識と教えとを受けとることができるようになり、真理を知り、善を愛することができるようになる。精神はこの能力によって知恵を吸収し、徳を獲得し、思慮と勇気と節制を得、もろもろの誤謬やその他の生まれながらにもっている悪徳とたたかい、その結果、その心をただ神の至高にして不変なる善のみを求めることによってのみ、それに打ち克つのである。たとえ、そのことができなかったとしても、このような善を受けいれる能力は、神によって理性的本性のうちに立てられたのである。その善がいかに大きいか、全能者の御業がいかにおどろくべきものであるか、だれがふさわしく語り、また思考するであろうか。

何よりも、善き生を生きて、不死の幸福に達するための力がある。その力は徳とよばれるが、それはキリストにおける神の恩恵によってのみ約束の子らと御国の子らに与えられるのである。[六]

そして、これのほかに、人間の才能によって、何らかの必要に応じて、あるいは快楽を満たそうとして、発見し発展させた多くの重要な術がある。それらは余分であり、かえって危険で有害でさえあるのであるが、これらのもののうちにある精神と理性の力は、きわめてすぐれたものであることを示しており、それらを発見し、学び、実践させることができる自然本性の善がどれほど大きいものであるかを証明しているのではなかろうか。

人間の勤勉さは何とすばらしい、何とおどろくべき衣服を仕立て、建築物を建てるに至ったことであろうか。農業や航海術における進歩はどうであろうか。陶器や彫像や絵画は何とさまざまに工夫され、つくり出されたことであろうか。劇場では、観客に何とおどろくべきことが、聴衆には何と信じがたい物語が展開されたであろうか。非理性的動物を捕え、殺し、飼うことにおいて、何という、そしてどれほど多くのことが案出されたことであろうか。

人間自身に対してどれほどの種類の毒と武器と戦具が用意され、死すべき者をまもり健康をとりもどすため、どれほど多くの治療薬と治療手段が用意されたことであろうか。味覚を満足させるためにどれほどの調味料が、また、食欲を増すためにどれほど多くの刺激物が見つけられたことであろうか。心の想いを伝え説得するためにどれほど多くの、どれほど多種多様な記号があるであろうか。そのうち、ことばと文字とが第一の地位を占めている。魂をよろこばせるためにどれほど飾りたてられた修辞があり、どれほどさまざまな詩があるであろうか。耳をたのしませるためにどれほど多くの楽器と、どれほど多くの歌の韻律とが見いだされたことであろうか。幾何学と算術についてのどれほどの知識があり、そして、どれほどの洞察力でもっ

て星の位置と回転の秩序をとらえたことであろうか。自然の諸現象にかんする知識をどれほど豊富に貯えたことであろうか。もしもわたしたちがそのすべてをたい積してまとめて述べるかわりに、個々についてくわしく述べようとしたなら、だれが語りつくしうるであろうか。最後に、哲学者たちと異端者たちとがその誤謬と虚偽とをまもることにおいて用いる大きな才能がどれほど輝やいているか、だれがそれを見積ることができるであろうか。

わたしたちがいま語っているものは、この世の可死的な生を飾る人間的精神の自然本性についてであって、あの不死なる生に至るべき信仰と真理の道についてではない。かくも大きな力をもつ自然本性の創造者は、たしかに真なる最高の神であるから、そして、おつくりになったすべてのものを支配し、至高の権能と至高の義をもっておられるのであるから、人類の始祖たる最初の人間によってはなはだしく大きな罪が先行しなかったなら、それらのものが悲惨のうちに陥ることはけっしてなかったであろうし、救われるであろうある者たちを除いて、この世の悲惨から永遠の悲惨へ進むということもけっしてなかったであろう。

さらに、身体においてさえ、それは可死性において獣と共通していても強さにおいてはその多くのものに劣るのではあるが、どれほどの神の善性が、また、どれほどのかくも大いなる創造者の摂理が明らかであることであろう。感覚器官と身体のその他の部分とがよく配置され、身体全体の姿、形、大きさが適正に整えられていて、身体が理性的魂に仕えるようにつくられていることを示しているのではないであろうか。たとえば、わたしたちは非理性的な動物の顔は地に向いているのを見るが、人間はそのようにつくられてはおらず、その姿勢は直立し

ていて天に向かっているのであって、これは天上的なものを想うようにさとしているのである。(七)

さらに、舌や手に賦与されている不思議な運動は、話したり書いたり多くの芸術や工芸を完成するのに適し、また順応しており、このことは、身体をみずからに結び付けて仕えさせている魂がどのようなものであるかを十分に明らかにしているのではないであろうか。各部分の必要性はいわないまでも、すべての部分に調和のある一致が見られ、それらの等しさと釣合いを見ると、それらにおいては美よりも有用性をより大きな基準としてつくられたのかどうか、わからないほどである。じっさい、身体において、美の場所をもつことなくしてただ有用性のためだけにつくられたものは何も見あたらないのである。

このことは、もしもわたしたちが、たがいに結合し適合しているすべてのもののあいだに、どんな数的基準をもっているかを知るならば、いっそう明らかとなるであろう。おそらく人ははっきり見える外面的な部分において与えられた作品を見るとき、これらの巧みさを発見することができるであろう。しかし、複雑に結び付いた骨や神経や内臓や隠れた生命的部分のように、わたしたちの目には見えない部分については、それを見つけうる人はいない。

解剖学者とよばれる外科医が残酷な熱心さをもって死体を解剖し、また、かれらが切って調べている間に死んだばあいであっても、人間の肉のなかに隠れているすべてのものがまったく非人間的に調べあげられて、治療の対象と方法と場所を学んだとしても、いわば楽器のような、ギリシア語でハルモニア(八)といわれるところの身体全体の外的内的結合をつくっている、いまわ

たしが語っている数を見いだす人はだれもいないし、また、あえてだれも見いだそうとはしないのである。もしもそれを知りえた人がいたとすれば、美しさをあらわす何ものもないところの身体の内部に理性的な美を見いだしてよろこび、目を用いる精神の判断によって、これこそ目をよろこばせるあらゆる外的な形姿にまさるものと見なすであろう。

たしかに身体には、有用性からではなく、ただ美をもつためにだけあるものがある。たとえば男の乳首や顔のひげである。ひげは、男にとって飾りであって保護でないことは明らかである。これは女の顔にないことから示される。女はより弱いので、そのような保護が与えられるのがよりふさわしいのであろう。それゆえ、身体のいかなる部分であっても、ただ機能的にのみ存在して美のために存在しないようなものは見あたらない(だれもそのことを疑わない)のであるが、しかしまた、美のためにのみ存在して有用性のために存在しないようなものもないのだとすれば、身体の創造においては、尊厳さのほうが有用さに先んじたことは容易に理解されるとおもわれる。

じっさい、有用性は移り行くのであり、わたしたちはその美しさによってたがいに相手をいかなる情欲ももつことなくたのしむ時がやってくるであろう。このことこそ、「あなたは賛美と美を身にまとっておられる[九]」という『詩篇』にいわれている創造者の賛美へと関係づけられるべきである。

人間は罰せられてこの世の労苦と悲惨のうちへ投げ出されているのではあるが、神の寛容によって、他の被造物の美と有用性を眺め、用いることがゆるされている。どのようなことばで

もってそれをいいつくしうるであろうか。天と地と海の多種多様な美しさ、太陽と月と星の光の豊かさとおどろくべき美しさ、樹々の陰、花の色と香、さまざまな、そして多くの鳥とその歌声や光る翼、形や大きさにおいて数えきれない動物、そのなかのもっとも小さなものでさえ、わたしたちの大きな驚嘆をひきおこす(というのも、わたしたちは鯨の大きな体よりも蟻や蜂の働きによりおどろかされるからである)。また、ときには緑と多様な色の変化、ときには紫、ときには碧といった、いわば異なった衣服のように色を変える海の壮大な光景。

さらに、荒れ狂うときの光景も何と愉快であることか。波にもてあそばれている舟乗りとしてでなく、落ち着いて眺める者としてであるがゆえに、より大きなたのしみをもたらすのである。わたしたちの飢えをみたす食物は至るところに、何と豊かにあることであるか。料理人の腕前や労苦によって生み出されたのではなく、自然の豊かさによって分配された味は、食べ飽きた者をもおどろかせるほど多様である。健康をまもり、回復させてくれるための手段は何と多くあることであるか。昼と夜の交替は何とよろこばしいことであるか。そよ風の何と涼しいことであるか。植物や動物によって何と多くの衣服の材料が供給されていることであろうか。だれがこれらすべてのことを数えあげることができるであろうか。

わたしはこれらのことを集めて、いわば積みあげただけであるが、もしも多くの荷物を入れた、いわば包みを解いて、そこにあるものをひとつひとつ論じようとするならば、どれだけ時間があってもたりないであろう。そして、これらすべては、至福な者の報いではなく、罰のもとにある悲惨な者の慰めである。したがって、そのような者にも、かくも多くの、かくもすば

らしい、かくも大きな慰めがあるとすれば、至福な者の報いはどれほどであろうか。死に定められた者にもこのようなものをお与えになった神は、生命に定められた者にはどれほどのものをお与えになるであろうか。この悲惨の世において、独り子が死に至るまでこれほど大きな苦しみに耐えることをかれらのためにのぞまれた神は、かの至福の生においてどれほど大きな善を受けとらせられるであろうか。だからして使徒は、かの御国に定められた者についていっている。「ご自身の御子をさえ惜しまないで、わたしたちすべての者のために渡されたかたが、どうして御子のみならず万物をも賜わらないことがあろうか」(一〇)。この約束が成就するとき、わたしたちはどのようなものになるのであろうか。わたしたちの状態はどのようになるのであろうか。わたしたちは、わたしたちのために死なれたキリストによってすでにこれほどの保証を受けたのであれば、かの御国において受けるであろう善はどれほどであろうか。人間の霊は、それがいかなる悪徳ももたず、それに服従することもなく、これに屈することもなく、そのたたかいが称賛される相手も失せて、この上もなく平和と徳において完成されるとき、どのようなものとなるであろうか。神の知恵が最高の幸福を伴って、いかなる困難もなくその源から流れ出るところでは、誤謬も労苦もないすべてのものについての知識は、どれほど完全で、どれほどうるわしく、どれほど確実であろうか。身体があらゆる意味で霊に従い、その生にとって必要なものをすべて霊から受けとり、他の栄養を必要としないとき、その身体はどれほどすばらしいものとなるであろうか。じっさい、肉の実体をもちながらも、いかなる肉的な腐敗ももたないとき、それは魂的でなく霊的な身体となるであろう。

(一)「創世記」一の二八。
(二)「ヨハネによる福音書」五の一七参照。
(三)「詩篇」四九の一二。
(四)「創世記」一の二七参照。
(五)「コリント人への第一の手紙」三の七。
(六)「ガラテヤ人への手紙」四の二八参照。
(七)「コロサイ人への手紙」三の一参照。
(八) *ἀφωνία.*
(九)「詩篇」一〇四の一。
(一〇)「ローマ人への手紙」八の三二。

第二十五章

身体の復活を拒否する人びとの頑迷さについて

ところで、この世の生を終えたのち、完全な至福のもとに享受するであろう魂の善については、わたしたちと著名な哲学者たちとのあいだに論争はないのであるが、しかし、かれらは肉の復活については、わたしたちと論争して、これをなしうるかぎりにおいて否定するのである。けれども、信者が増えるにしたがって、これを否定する者の数はすくなくなっていった。学識

ある者も学識のない者も、この世の知者も愚かな者も、かれらには不合理とおもわれるところのことをみずからの復活によって証明したキリストへと信仰深い心をもって回心したのである。世界は神が預言されたところのことを信じたが、神はまた、世界がこれを信じるであろうということをも預言されたのである。もちろん、ペテロの魔術(一)が、神を強制してはるか昔にこれを預言させ、信者たちの賛美を得させるといったこともなかった。

というのも、異教の神々が恐れるのはこの神なのであって、すくなくともポルフュリオスはそれを認め、自分たちの受けた神託によってこれを証明しようと願っているからである。わたしはこのことをすでに幾度か述べたことであったが(二)、もう一度それを想い出してもらうだけのことはあると考える。かれはこの神を父にして王なる神とよんで賛美しているのである。世界は信じるであろうと預言されたところのことを、この世の人びとと共に信じることをしない者たちによって欲せられた仕方で理解するようなことがなからんことを。世界は信じるであろうとはるか昔から預言されていたとおりに信じるに至ったという意味に受けとられるべきであって、世界は信じるであろうという預言を世界と共に信じることを拒んだごくわずかな者のおしゃべりのように受けとってはならない。

かれらはその預言を別の意味で信じなければならないというのである。それは、もしも自分たちが聖書に記されていることがむなしいと主張したとすれば、自分たちがこれほど大きな信頼をよせている神を侮辱することになるからだ、ということである。しかし、かれらがもしも、聖書は世界が信じたのとは別の意味で理解されなければならないというのであれば、たしかに

神をいっそうはげしく侮辱していることになるであろう。というのは、世界がもつに至るであろうその信仰を、神ご自身が称賛し、神ご自身が約束し、神ご自身がその約束を成就されたからである。

肉が復活して永遠に生きるようにさせることは神にとって不可能であろうか。それとも、それは悪しきことであり、神にとってとるに足らないことであるから、神がそれをなされるであろうと信じてはならないのであろうか。しかし、神があれほど多くの、あれほど偉大な不思議をなすことにおいて示される神の全能について、わたしたちはすでに多くのことを述べたのであった。[三] それゆえ、かれらがもしも全能者のなしえないことを見つけようと欲するならば、わたしはいうが、神は人を欺くことはできない、[四] ということのみをもつであろう。

それゆえ、わたしたちは、神はなしえないことをなすと信ずることをしりぞけることによって、神はただなしうることをなすと信ずべきである。したがって、かれらが、神は人を欺くことができるということを信じないのであれば、かれらは、神はなそうと約束されたことを信じるであろう。そして、かれらはそれを、神は世界が信じるようになるであろうと預言されたのであるから、世界はそれを信じるようになったのだという意味において信じるであろう。神は、世界がこの信仰をもつであろうことを称賛され、世界が信じるであろうことを約束され、そしていま、世界が信じるようになったことを示されたのである。それでは、復活が悪であるということをどこから証明しうるのであろうか。そこでは腐朽はないであろう。腐朽は身体にとって悪である。諸元素の秩序の問題については、わたしはすでに論じたのであった。[五] また、その

他の人びとが差し出すさまざまの予想についても、わたしたちは十分に語ったのであった。不滅の身体において予想される運動のすばやさについて、また、現在の身体の完全に均斉のとれた健康な状態も不死の身体には較べるべくもないことについては、第十三巻において十分に明らかにしたとわたしはおもっている。(六) これらさきの巻を読まなかった人、あるいは、読んでも想起できない人は、わたしがそこで述べたところのことを読むようにしてほしい。

(一) 本書第十八巻第五十三章、第五十四章参照。
(二) 本書第十九巻第二十三章、第二十巻第二十四章参照。
(三) 本書第二十二巻第四章―第九章参照。
(四) 「ヤコブの手紙」一の一三参照。
(五) 本書第八巻第十一章、第二十二巻第十一章。
(六) 本書第十三巻第十八章参照。

第二十六章

魂は至福となるためにはあらゆる身体を逃れるべきであるというポルフュリオスの主張は、プラトンによってくつがえされている

しかし、ポルフュリオスは、魂が至福となるためにはあらゆる身体を逃れねばならない、と

いったと哲学者たちはいっている。それゆえ、かれらにしたがって、あらゆる身体から逃れるのでないかぎり魂は至福ではないとすれば、不滅の身体をもつであろうとわたしたちがいうのは無益だということになる。この反論に対しても、わたしはいまあげた巻で必要なかぎりすでに論じたのであったが[一]、ここでは次の一点にかんしてのみ注意を喚起しておきたい。プラトンはこれらすべての哲学者たちの師であるが、その書物を訂正して、天的な身体をまとっていると考えられた神々もまた、至福となるためにはその身体を脱ぎすてて死んでしまわなければならない、といわねばならないのである。しかしながら、神々の創造者たる神は、同じ身体のうちにありつづけるという意味での不死が伴いうると約束したが、これは神々のもつ本性によるのではなく、神みずからのもつ力ある意図のゆえである。

同じ箇所でプラトンはまた、肉の復活はありえないゆえに信じられないと主張する人びとにも反論している。じっさい、この哲学者によるならば、創造されざる神がみずから創造した神々に不死を約束したとき、神みずから不可能なことをなすであろうといったことは、まったく明白である。プラトンはその箇所で神にこう語らせている。「あなたたちは起源をもったものであるから、たしかに、不死であることもできなければ分解されないものであることもできないのであるが、にもかかわらず、あなたたちはけっして分解されぬであろう。どんな死の運命によっても滅びることはないであろう。しかしまた、わたしが意図したところ以上に強力であることもないであろう。わたしの意図は、あなたたちが生み出されたかのときにあなたたちを結び付けた絆の強さよりもあなたたちの永続性のためにいっそう強い絆となるのである」[二]。ひ

とは、愚かでなく耳があるかぎり、このことばを聞いて、プラトンによれば神々をつくった神は不可能なことをなすと約束したのだということを、まったく疑わないであろう。じっさい、かれは、「あなたたちは不死ではありえないが、わたしの意志によって不死でありうる」といったのであって、これは、「不可能なことも、わたしがなすかぎり、あなたたちにとって可能となる」ということにほかならないのではないであろうか。したがって、プラトンにおいては、この不可能なことをなすであろうと約束した神は、肉をよみがえらせて、不朽、不死、霊的なものとなすはずである。

世界は信じるようになるであろうという神の約束を世界が信じるようになったのに、また、プラトン自身もいうとおりに、神はこの不可能なことをなすであろうとわたしたちが叫んでいるのに、なおも、かれらは、神は不可能なことを約束したと叫んでいるのはなにゆえであるか。それゆえ、魂が至福を得るためには、すべての身体を逃れるべきではなく、むしろ、不滅の身体を受けとらねばならないのである。そして、魂は、どのような不滅の身体をもつならば、可滅の身体のなかでうめいていたときよりも自分によりふさわしいものとしてよろこぶであろうか。

というのも、魂はそのようになるならば、ウェルギリウスがプラトンにしたがって語った、

かれらは、またもや帰るべき肉体を欲しはじめる[三]

といった恐ろしい願望をもつことがないからである。わたしが意味するのは、かれらがもどりたいと願う身体をもち、そして、それをけっして失うことがないような仕方で、たとえ短い時

間でさえ死によって身体から離れることのないような仕方でもつときには、もとの身体にもどろうといった願望をもつことはない、ということである。

（一）本書第十三巻第十六章。
（二）同上参照。プラトン『ティマイオス』四一aおよびb。
（三）ウェルギリウス『アエネイス』六の七五一。

第二十七章

プラトンとポルフュリオスとのあいだにある矛盾した見解について——もしもかれらがたがいにその見解において譲りあうなら、かれらは真理からかけ離れることはないであろう

プラトンとポルフュリオスがそれぞれ、もしもその見解を交換することができたなら、二人ともキリスト教徒になったかもしれないようなことをいっているのである。プラトンは、魂は永久に身体をもたずにいることはできない、といっている。[一] というのも、知者の魂でさえ、どれだけけかの長い時間を経たのち、もとの身体にもどってくるのだからである。他方、ポルフュリオスは、魂が父のもとへ還って、完全に浄められたときには、この世の悪へともどることはけっしてない、といっているのである。[二]

　したがって、もしもプラトンが自分の見た真理を、すなわち、正しい人と知者の魂でさえも完全に浄化されたのちまた人間の身体にもどるであろうということを、ポルフュリオスに伝え、そして、ポルフュリオスのほうも、自分の見た真理を、すなわち、聖なる魂は悲惨で可滅的な身体にけっしてもどりはしないであろうということを、プラトンに伝えたとすれば、どうであろうか。[三] もしもこれらの見解が別々にもたれるのではなく、二人とも同一のことを主張しているのだとすれば、二人とも、魂は身体にもどり、そして、そこにおいて不死で至福に生きるということになることを知るであろう、とわたしはおもう。

　それというのは、プラトンにしたがえば、聖なる魂でさえ人間の身体にもどり、他方、ポルフュリオスにしたがえば、聖なる魂はこの世の悪にもどらないからである。そこで、ポルフュリオスはプラトンと共に「魂は身体にもどるであろう」というべきであり、また、プラトンはポルフュリオスと共に「魂は悪にもどらないであろう」というべきであろう。そうすれば、かれらは、魂はいかなる悪も蒙らない身体にもどるということで一致するであろう。そのような身体は、神が、至福なる魂はそれ自身の肉をもって永遠に生きるであろうと約束された身体にほかならないであろう。わたしが見るかぎり、かれら二人は、たやすくわたしたちに同意して、聖徒たちの魂は不死の身体にもどるであろうと告白し、そして、聖徒たちがそのなかにあってこの世の悪に耐え、この世の悪からの解放を願って敬虔と信仰とをもって神を拝したところのあの身体にもどると認めるであろう。

（一）　本書第十三巻第十六章参照。

(二) 本書第十巻第二十九章、第十二巻第二十七章参照。
(三) 本書第二十二巻第十二章参照。

第二十八章

プラトン、ラベオ、またはウァルロでさえ、もしもかれらの見解が一つに結び付けられるならば、復活にかんする真の信仰に資することになる

わたしたちの仲間の多くは、プラトンを、そのこの上もなくすぐれた弁論と多くの真実の洞察とのゆえに愛好し、死者の復活にかんしてもわたしたちと同様の見解をもっていた、という。(一)しかしながら、トゥルリウス・キケロは、その著『国家』においてこの点に言及して、プラトンは戯れに語ろうとしたのであって、真実を語ろうとしたわけではない、と言明している。というのは、かれは、人が復活してプラトンの論に一致する、あることを語った、といっているからである。(二)ラベオ(三)もまた、同じ日に死んだ二人のひとがいて、かれらが十字路で出会い、それからそれぞれ自分の身体にもどるよう命じられたが、かれらはたがいに相手の身体のなかで生きようと決め、その後、ふたたび死ぬまでそのようにした、という話を伝えている。

これらの著作家たちは、身体の復活が事実起こったと語っているのであるが、それは、わたしたちの知る、復活してもう一度この世の生命を得たが、しかしもう一度死ななかったのでは

ないという意味ではない人びとのようである。しかし、マルクス・ウァルロは、『ローマ人の種族について』という書のなかで、いっそう不思議な出来事を記録している。これについては、かれ自身の文章を引用するのがよいとおもう。[四]「ある誕生日の星占師たちは、人間はギリシア人たちがパリンゲネシアとよんでいるところの再生を経験したと記している。それは四百四十年ののちにおこることであって、以前人のなかで結合していたのと同じ身体と魂とがふたたび結合することだ、とかれらは記している[五]」。

ウァルロにせよ、星占師たちにせよ(ウァルロはかれらの名前をあげることとなしにその言説を記しているので、わたしはかれらがだれであるか知らない)、そのいっていることは虚偽であろう。なぜなら、魂が以前まとっていたのと同じ身体にもどったならば、その後そこから離れ去ることはけっしてないからである。しかしながら、この言説は、わたしたちの敵対者がつねに饒舌を弄している復活の不可能性にかんする論議をひっくり返し、破壊する。じっさい、このように考える人、あるいは考えた人は、空気や、塵や、灰や、液体や、肉食獣の身体や、あるいはほかならぬ人間の身体に変わってしまった死体が、もう一度もとの状態にもどるのは不可能だとはおもわないからである。

それゆえに、プラトンとポルフュリオス、というよりもむしろかれらに愛着を感じながらいま生きている人びとは、プラトンがいうように聖なる魂はもう一度身体にもどるということ、しかし、ポルフュリオスがいうようにけっして悪にもどるのではないという信念において、わたしたちに同意するであろう。ここからして、キリスト教信仰が教えているところであるが、

魂はいかなる悪もなく永遠に至福の生に生きる身体を受けとるであろうという帰結に至ることになる。しかも、これに加えて、魂は以前と同じ身体にもどるというウァルロの言明をあげるならば、肉の永遠の復活にかんするかれらのすべての疑問は解消されることになる。

(一)　エウセビオス『福音書の準備』一一の三五参照。
(二)　キケロ『国家』六。
(三)　ラベオについては本書第二巻第十一章。
(四)　*παλιγγενεσία*.
(五)　本書第十八巻第二章参照。

第二十九章

来たるべき世において聖徒たちが神を見るその直視とはいかなるものであるか

さて、わたしたちはいま、主がわたしたちを助けようとしてくださるかぎり、聖徒たちが、もはやその肉を肉にしたがって生きるのではなく、霊にしたがって生きるとき、かれらが霊的で不死なる身体において何をなすかを見ることにしよう。とはいえ、ほんとうのことをいうと、その活動、というよりはむしろ休息と静穏がどのようなものであるか、わたしは知らないのである。わたしはそれをわたしの感覚器官でもって見たことはないからである。しかし、もしも

わたしがそれを精神でもって、すなわち知性でもって見たというとしても、かくも卓越したものを見るわたしの知性はどれだけのものであり、何であるであろうか。というのも、使徒がいうように、そこには、「あらゆる知性をこえる神の平和がある」からである。これはわたしたちだけの知性であるか。それとも、おそらく聖なる天使たちの知性も含まれるのであるか。神の知性でないことはたしかである。

それゆえ、もしも聖なる天使たちが神の平和のうちに生きるのであれば、たしかにかれらはすべての知性をこえる平和のうちに生きるのである。それがわたしたちの知性をこえているということは疑えない。しかし、もしもそれが天使の知性をもこえているとするなら、「あらゆる知性を」といった使徒は、そのなかに天使の知性をも含めているのであって、それゆえ、わたしたちは、神ご自身が休む神の平和を知るのは神であって、わたしたちも、いかなる天使たちも、それを神が知るように知ることはできない、という意味においてこのようにいわれたのだと受けとらねばならない。したがって、「あらゆる知性をこえる」というとき、疑いもなく神ご自身の知性はそのなかに含まれていないのである。けれども、わたしたちもまた、わたしたちにゆるされた限度において神の平和にあずかるようにつくられたのである。したがって、わたしたちは、わたしたちにゆるされた限度において、わたしたちのうちに、わたしたちのあいだにある平和の、また神と共にある平和の完成を知るのである。同様に、聖なる天使たちも、かれらにゆるされた限度においてその平和を知る。しかし、人間は、精神の力がどれほどすぐれていても、いまは、はるか低い程度においてそれを知るのみである。

わたしたちは、「全きものが来るまでは、わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない」[二]、そして、「わたしたちは、いまは、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう」[三]といった人がいかに偉大であったかをおもい浮かべねばならない。聖なる天使たちはすでにこのような仕方で見ているのである。かれらは、わたしたちの天使とよばれるのであるが、それというのは、わたしたちはすでに闇の力から救い出され[四]、霊の担保を受けてキリストの御国へと移され、これらの天使たちに属することを開始しているからである。わたしたちはかれらと共に、かの聖く、そしてもっともよろこびに満ちた神の国——これについては、わたしはすでにこの書のすべての巻で述べてきた——にあずかっているのである。

それゆえに、神の御使たちはまた、わたしたちの御使とよばれるのであり、同様に、神のキリストが、わたしたちのキリストとよばれるのである。かれらが神の御使であるのは、かれらは神を見捨てなかったがゆえであり、また、かれらがわたしたちの御使であるのは、かれらはわたしたちを、自分たちの同市民としてもちはじめたがゆえである。主イエスはいわれた。「あなたがたはこれらの小さい者のひとりをも軽んじないように、気をつけなさい。あなたがたにいうが、かれらの御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである」[五]。それゆえ、わたしたちもまた、かれらがすでに見ているように見るようになるであろう。しかし、わたしたちはいまはまだこのように見ているわけではない。

このゆえに、すこしまえに引用したように、「わたしたちは、いまは鏡に映して見るように

おぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう」と使徒はいったのである。したがって、この直視はわたしたちにとって、信仰の報いとして保留されているのである。これについて使徒ヨハネは語っている。「かれが現われるとき、わたしたちは、自分たちがかれに似るものとなることを知っている。そのまことのみ姿を見るからである」(六)。ところで、ここにいう父のみ顔とは、父の啓示であると解されねばならない。それは、わたしたちがもっている身体の部分として名付けられているようなものではない。

だからして、霊的身体をもつ聖徒たちの活動がどのようなものであるかと問われても、わたしはそれをすでに見たこととしては語ることはできず、ただ信じることを語ることができるのみである。『詩篇』に、「わたしは信じた、それゆえにわたしは語った」(七)と読まれるとおりである。したがって、聖徒たちは神を身体において見るであろうとわたしがいうとしても、わたしたちがいま、太陽や月や星や海や地や地上のすべてのものを見るのと同じように身体の目をとおして見るかどうか、これはやさしい問題ではない。たとえば、聖徒たちが、欲するときに目を閉じたり開いたりできないような種類の身体をそのときもつのかどうか、いうことは困難である。しかも、そこでは、ひとが目を閉じて神を見ないことがあるかどうか、いうことはいっそう困難である。

じっさい、預言者エリシアは、身体的にそこに居合わせていないのに、かれの僕ゲハジがシリアのナアマンからの贈り物を受けとるのを見た(八)。ナアマンはエリシアによってらい病を癒してもらった人である。しかし、僕のほうは、自分の主人がそこにいて見ていたわけではなかっ

たので、自分がやったことはひとに知られないとおもっていたのである。まして聖徒たちは霊的身体において、いっそうすべてのものを見ているのではないであろうか。目を閉じているときのみならず、身体においてそこに居合わせていないときもである。使徒が、「わたしたちの知るところは一部分であり、預言するところも一部分にすぎない。しかし、全きものが来るときには、部分的なものはすたれる」といったとき、かれが語るところのあの全きものの成るときである。

それにつづいて、使徒は、普通の人びとの生命だけでなく特別な聖性を与えられた人びとの生命をも含めて、来たるべき生命とこの世の生命とのあいだにある相違を、なしうるかぎり比喩でもって明らかにしようとしている。かれはいう。「わたしが幼な子であったときには、幼な子らしく語り、幼な子らしく考えていた。しかし、おとなとなったいまは、幼な子らしいことを捨ててしまった。わたしたちは、いまは、鏡に映して見るようにおぼろげに見ている。しかしその時には、顔と顔とを合わせて、見るであろう。わたしの知るところは、いまは一部分にすぎない。しかしその時には、わたしが知られているように知るであろう(九)」。

したがって、この世において不思議な力をもった人びとの預言的な力も、来たるべき生命にくらべれば、幼児とおとなとのちがいがある。しかし、エリシアは、かれ自身がそこに居合わせていなかったけれども、自分の僕が贈り物を受けとったのを見たのである(一〇)。それゆえ、全きものが来て、この朽ちる肉体が魂の重荷となることはもはやなく、むしろ朽ちないものとなって何ものも妨害することがないならば、聖徒たちは、見るべきであるところのものを見るのに

肉の目を必要としないのではないであろうか。エリシアはそこに居合わせずに僕を見るのにそれを必要としなかったからである。

七十人訳によれば、預言者はゲハジにこういった。「あの人があなたに会うために車から引き返して、あなたが贈り物を受けとったとき、わたしの心はあなたと一緒にそこにいたではないか」（二二）。しかし、司教ヒエロニュムスのヘブライ語からの訳はこうである。「あの人があなたに会うため車から引き返したとき、わたしの心はそこにいたではないか」。それゆえ、預言者は、疑うことなき神の不思議な力に助けられて自分の心のうちに見たことを語ったのである。しかし、神がすべての者にあって、すべてとなられるとき（二三）、かの賜物のすべてはどれほど豊かであることか。

にもかかわらず、肉の目はみずからのはたらきをもち、霊はそれを霊的身体をとおして用いるであろう。かの預言者は、そこにいない僕を見るための肉の目を必要としなかったが、そのことは、現にあるものを見るのに肉の目を用いないということではない。とはいえ、かれが自分の目を閉じても霊によって見ることができるのは、ちょうどみずからそこに居合わせていないときにも、その現にないものを見たのと同様である。それゆえ、聖徒たちがかの生において目を閉じたときには神を見ないであろうといってはならない。かれらは霊においてつねに神を見つづけているのである。

しかし、問題は、かれらが身体の目を開けて、それによっても神を見るかどうかということである。というのも、霊的な身体のうちにある霊的な目が、わたしたちがいまもっているよう

な目と同じはたらきをなしうるとしても、その目によって神が見られるのではないことは疑えないからである。したがって、場所のうちに包含されず、どこにおいても全体であるような非形態的存在を見るものがあるとすれば、そのようなものはまったく異なる力をもっていることになるであろう。じっさい、わたしたちは、神は天と地におられるというのであるが(神ご自身が預言者をとおして「わたしは天と地に満ちる」(二三)といわれたとおりである)、これは、神の一部分が天に、一部分が地にあるという意味ではない。神は全体として天にあり、全体として地にあり、異なる時にではなく同時にである。このようなことは形態的本性にはありえないことである。

したがって、聖徒たちの目の力は、ひじょうにすぐれたものであるであろうが、しかし、それは、蛇や鷲の目よりも鋭いというのではなく(これらの動物がどれほどつよい視力をもっとしても、物体以外のものを見ることはできないからである)、非物体的なものを見るということである。このようなひじょうにすぐれた視力が、一時的にせよ、聖なる人ヨブには、その可死的な生のなかでさえ、その目に与えられたのであろう。かれは神に向かってこういっているからである。「わたしはあなたのことを耳で聞いていましたが、いまは目であなたを拝見いたします。それでわたしはみずから恨み、ちり灰のなかで悔います」(二四)。ここでは、使徒が、「あなたがたの心の目を明らかにしてくださるように」(二五)といった、心の目の意味に解することを禁ずるものは何もない。神が見られるとき、この目をもって見ることを、キリスト教徒はだれも疑わない。キリスト教徒は、教師であられる神が、「心の清い人たちはさいわいである。かれら

では、身体的な目でもって見るかどうかというあの問題に、わたしたちはかかわらねばならない。

は神を見るであろう(二六)」といわれたことを、信仰をもって受けいれるからである。しかし、そこ

「すべての肉は神の救いを見るであろう(二七)」と記されているが、これが、「すべての人は神のキリストを見るであろう」という意味に解されうるのは何ら困難ではない。キリストはたしかに身体において見られたのであり、そして、キリストが生ける者と死せる者とを審くために来られるとき、身体において見られるであろう。キリストが神の救いであることは、聖書のほかの箇所に多く見られるが、しかし、もっとも明らかなのは、幼児キリストを手に抱いていったかの尊い老シメオンのことばである。「主よ、いまこそ、あなたはみ言葉のとおりにこの僕を安らかに去らせてくださいます。わたしの目がいまあなたの救いを見たのですから(二八)」。

また、さきに言及したヨブのことばは、ヘブライ語原典によると、「わたしはわたしの肉において神を見るだろう(二九)」となっている。これは疑いもなく肉の復活の預言である。しかし、かれは「わたしの肉によって」といったわけではない。じっさい、もしもそのようにヨブがいったのだとすれば、肉によって、肉において見られるのはキリストたる神であると解されうるであろう。しかし、このようにも解されうる。すなわち、「わたしはわたしの肉において神を見るだろう」は、「わたしは神を見るとき、わたしの肉においてあるだろう」という意味に解されうる。使徒のいった「顔と顔とを合わせて(三〇)」ということばは、身体的な目をもつ身体的な顔によって神を見るというように信じなければならないのではない。わたしたちは霊によってた

えまなく神を見るのである。

　というのも、それが内なる人の顔でないならば、同じ使徒がつぎのようにいうことはないであろう。「わたしたちは、顔おおいなしに主の栄光を見つつ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。これはあたかも主の霊によるかのようである」(二一)。『詩篇』においてうたわれている「主に近づき、光に照らされよ。そうすればあなたがたは顔を赤らめることはない」(二二)ということばも、これと異なる意味に解してはならない。

　じっさい、わたしたちが神に近づくのは信仰によってであり、信仰は心にかかわることがらであって、身体にかかわることがらではないからである。けれども、わたしたちは、霊的な身体がどのような新しい機能をもつのかを知らないのである(じっさい、わたしたちの語っていることは、わたしたちの経験をこえたことがらなのである)。したがって、わたしたちの理解をこえることがらがあり、聖書の権威がこれに助けを与えてくれないばあいには、「死すべき者の考えは、おどおどしていて、わたしたちの計画は、確かではありません」(二三)と『知恵の書』に読まれることが、わたしたちにおいて妥当せざるをえないのである。

　哲学者たちの議論によれば、知性的なものは精神の目によって見られ、感覚的なもの、すなわち物体的なものは身体の感覚によってとらえられる、と主張されている。そのため、知性的なものが身体によって、また物体的なものが精神自身によって見られることはできない。もしもこの理論がまったく確実なものとして立てられるならば、たとえ霊的な身体であろうと身体の目によって神を見ることがありえないことは、まったく確かであろう。しかし、じっさいに

は、この理論は、真の理性および預言者の権威によって笑うべきものとされるのである。いったい、だれが、神はこれらの物体的なものを知らない、などとあえていうほどに真理から離れているであろうか。しかし、それでは、神はそのような物体的なものを知るための目をそなえた身体をもたなければならない、ということになるのであろうか。さらに、すこしまえに述べた預言者エリシアの話は、身体によらずに霊によっても物体的なものが知られるということを十分に示しているのではないか。

じっさい、僕が贈り物を受けとったことは、身体的に起こった出来事であるが、預言者はこれを身体によってではなく、霊によって見ていたのである。それゆえ、物体的なものが霊によってとらえられることは明らかである。すると、霊的な身体の力もまた、霊が身体によって見られるほど大きくあるのではないであろうか。というのも、神は霊だからである。[二四] さらに、ひとはだれでも自分の生命を――その生命によっていま人は身体のうちに生き、この地上的な肢体を養って生きたものとするのであるが――身体の目によってではなく、内なる感覚によって知るのである。しかしながら、他者の生命は、見えないものであるけれども、身体によって見るのである。じっさい、生命をもつ身体と生命をもたない身体とを区別するためには、身体と生命とを同時に見るのでなければならないが、これは身体によってでなければ見られないのである。しかし、生命が身体なしにあるばあいには、身体的な目によって見ることはないのである。

このようなわけで、わたしたちは、そのとき、新しい天、新しい地[二五]のものとなる新しい世界

の身体を見るであろう。それは、いたるところに現前して、すべての形態的なものを統治する神を、そのときわたしたちがもつであろう身体をとおして、また、わたしたちがどこに目を向けていても見ることのできるであろう身体をとおして、透きとおるほどの明瞭さをもって見るのと同様であろう。このことはありうるし、またきわめて確実である。そしてそれは、いま神の見えないものを、[二六]つくられたものをとおして、あるいは鏡をとおしておぼろげに一部分だけを見、知解するのとは異なっている。[二七]そのときには、わたしたちの信じる信仰は、身体の目によって見られる物体的なものの形象よりもはるかにつよい現実となるであろう。この世の生においては、人びとのあいだで生き、生命の運動を展開しているのであるが、わたしたちがかれらを見たとき、かれらが生きているのを信じるのではなくて、むしろそれを見て知るのである。そこで、もしもかれらに身体がなかったならば、かれらが生きているのを知ることはできない。わたしたちがすこしの疑いもなくかれらのうちに生命を見るのは、その身体によってである。このように、来たるべき世において、わたしたちがもつであろう霊的なまなざしを向けるところでは、どこでもこの身体によって非物体的な神が万物を支配しておられるのを直視するであろう。

それゆえ、神はこのような目によって見られるであろう。その目は、かのすぐれた状態のなかにあって、非物体的な本性を識別する精神にも似た能力をもっているのである。けれども、このことを聖書の事例や証言によって明示するのは困難であり、不可能ですらある。むしろ、つぎのようにいうほうが理解するのにいっそう容易であろう。すなわち、神は、わたしたちが

各人によって、各人相互に、またその人自身において霊的に見られるような仕方で知られ、また見られるであろう。神は、新しい天、新しい地において、そのとき成るであろうすべての被造物のうちに見られるであろう。また、神は、霊的な身体のまなざしがどこに向かうときでも、身体によって、あらゆる身体のうちに見られるであろう。

わたしたちの考えは、両方ともゆるされるであろう。そして、使徒のことばが成就されるであろう。使徒は、「ときが来るまでは、何事についても審いてはならない」といったのであった。つづけて使徒はこう付け加えている。「主が来られるまで。主は暗いなかに隠れていることを明るみに出し、心のなかで企てられていることをあらわにされるであろう。そのときには、神からそれぞれほまれを受けるであろう[三八]」。

(一)「ピリピ人への手紙」四の七。
(二)「コリント人への第一の手紙」一三の九。
(三)同上、一三の一二。
(四)「コロサイ人への手紙」一の一三参照。
(五)「マタイによる福音書」一八の一〇。
(六)「ヨハネの第一の手紙」三の二。
(七)「詩篇」一一六の一〇。
(八)「列王紀下」五の二六参照。
(九)「コリント人への第一の手紙」一三の九—一二。
(一〇)「知恵の書」九の一〇参照。

(一一)「列王紀下」五の二六。
(一二)「コリント人への第一の手紙」一五の二八参照。
(一三)「エレミヤ書」二三の二四。
(一四)「ヨブ記」四二の五、六。
(一五)「エペソ人への手紙」一の一八。
(一六)「マタイによる福音書」五の八。
(一七)「ルカによる福音書」三の六。
(一八)同上、二の二九。
(一九)「ヨブ記」一九の二六。
(二〇)「コリント人への第一の手紙」一三の一二。
(二一)「コリント人への第二の手紙」三の一八。
(二二)「詩篇」三四の五。
(二三)「知恵の書」九の一四。
(二四)「ヨハネによる福音書」四の二四参照。
(二五)「ヨハネの黙示録」二一の一参照。
(二六)「ローマ人への手紙」一の二〇参照。
(二七)「コリント人への第一の手紙」一三の一二参照。
(二八)同上、四の五。

第三十章

神の国の永遠の至福と永遠の安息について

そこにはもはやいかなる悪もなく、いかなる善も隠されず、すべての者にあってすべてとなられる神の賛美のために時間が用いられるかの至福は、いかに大きいことであろう。(一) いかなる怠惰もやみ、何らかの欠乏によって強いられる労苦もないところでは、何かほかのはたらきがなされるのであるか、わたしは知らない。つぎのように読まれ聞かれる聖なる歌がわたしの心に描き出される。「あなたの家に住み、つねにあなたをほめたたえる人はさいわいです」(二)。

いまは、やむをえない多様な仕事のために備えられている肢体も器官も、そのとき、不滅の身体にあっては、すべてが必要のためでなく、まったく確実で永遠なる至福のためのものとなって神の賛美のために用いられるであろう。わたしがすでに述べたところの身体の数的調和(三)は、いまは隠されているが、そのときには隠されることがないであろう。身体全体の内外に配備されたそのすべての部分は、そのとき明らかにされる他の大きな、そしておどろくべきわざと共に理性的精神に火をともして、偉大なる製作者たる神をたたえさせ、理性的な美をよろこぶようにさせるであろう。

そのとき、そのような身体の運動がどのようなものであるか、わたしは無造作に描こうとはしない。というのも、それはわたしの考えのおよばないことだからである。しかしながら、動

いているにせよ、静止しているにせよ、その形姿は美しいであろう。美しくないものはそこにありえないゆえに、すべてのものが美しくあるであろう。たしかに、霊の欲するところにはつねに身体があるであろう。また、霊は、霊をも身体をも飾ることができないものを欲することはないのである。そこには、誤りやおもねりによって称賛する者はなく、真の光栄があるであろう。真の名誉が、それにふさわしい人に拒否されることはなく、ふさわしくないすべての人には与えられないであろう。それにふさわしくない者はそこに入ることがゆるされていないのであるから、ふさわしくない者はどんなにのぞんでも得られないのである。そこには真の平和があるであろう。だれも自分自身からも外側にいる敵からも攻撃されることはないからである。

徳の報いは神ご自身であるであろう。神は徳を与えられたのであり、みずからは、それよりも善く、それよりも大いなるもののありえないかたとして、ご自身を約束されたのである。神が預言者をとおして、「わたしはかれらの神となり、かれらはわたしの民となるであろう(四)」と語られたのは、「わたしはかれらを満ち足らせよう。わたしは、人びとによって真に求められたもの、すなわち生命、健康、食物、富、光栄、栄誉、平和、その他あらゆる善きものとなるであろう」という意味以外のものではない。使徒は、「神がすべての者にあってすべてとなられる(五)」といったが、そのことばも正しく解されるならばこのとおりである。神はわたしたちの願い求めるものの終局である。わたしたちは永遠に神を見るであろう。神は飽くことなく愛され、うむことなくたたえられるであろう。神こそすべての者にたいする賜物、愛、活動となられ、永遠の生命にあずかるすべての者によって共有される。

しかし、功績にたいする報いとして与えられる名誉や光栄の段階がどれほどあるかということを、だれが想像できようか。ましてだれが語りえようか。それが存在するであろうということは疑えない。かの至福の国も、みずからのうちに大きな善を見るであろう。そこでは、劣った者がすぐれた者をうらやみ、天使たちが大天使たちをうらやむことはない。だれも受けなかったものを受けようとはおもわないが、すでに受けた人とはかたい絆で結ばれているのである。ちょうど、身体においても、指は目になろうとはのぞまないがごとくである。それぞれが全身の肢体において結ばれて、調和のある結び付きのうちに包含されているからである。したがって、人が他の人よりも少ししか賜物を受けていないとしても、それ以上はのぞまないという賜物もまた受けているのである。

ところで、かれらが罪のうちにあってよろこぶことができないという事実は、かれらが自由意志をもたないということではない。むしろ、意志は、罪を犯すよろこびから解放されて、罪を犯さないことのよろこびへと固定されたときのほうが、いっそう自由である。じっさい、人間が最初に正しくつくられたときに与えられていた最初の意志の自由は、罪を犯さないことのできる能力であったが、しかし罪を犯すこともできたのである。しかし、この最後の自由は、罪を犯すことができないということによってより力あるものである。これもまた神の賜物の結果であって、自然本性の可能性によるのではない。神となることと、神にあずかることとは別である。

神の本性は罪を犯すことができない。しかし、神の本性にあずかる者は、罪を犯すことがで

きないということを神からの賜物として受けとるのである。さらに、神の賜物の諸段階がまもられねばならなかった。最初にひとが罪を犯さないことのできる自由意志が与えられ、そして、最後に罪を犯すことのできない自由意志が与えられる。また、最初のものは功績を得るためであり、最後のものは報いを受けとるためである。しかし、人間の自然本性は、罪を犯すことができたために罪を犯したのであるがゆえに、罪を犯すことのできない自由へと至るためには、いっそう大きな恵みによって自由とされなければならない。

というのも、アダムが罪を犯すことによって失われた最初の不死性は、死を避けることのできるものであったが、最後の不死性は死ぬことのできないものである。このように、最初の自由意志は罪を犯さないことができたが、最後の自由意志は罪を犯すことができないのである。じっさい、ひとは幸福への意欲を失うことができないように、敬虔と正義への意欲をも失うことはないであろう。しかし、わたしたちは罪を犯すことによって、敬虔と幸福を保持することがなくなる。しかし、幸福が失われても、幸福への意欲は失われないのである。たしかに、神ご自身は罪を犯すことはできないがゆえに、神は自由意志をもつことを否定すべきであろうか。

それゆえ、かの御国においては自由意志が存在するであろう。それは、すべての人において同じであり、各人において分割されないものであることであろう。それは、あらゆる悪から自由であり、あらゆる善によって満たされ、永遠のよろこびをたえまなく楽しむことであろう。それは、すべての罪も、すべての罰も忘れ去ることであろう。しかし、自分が自由にされたこ

とを忘れてその解放者への感謝を忘れるということはないであろう。それゆえ、理性的な知識にかんするかぎりでは、過去の諸々の罪を忘れることはないであろうが、経験的な知覚にかんするかぎりでは、もはや想い出すことはないであろう。じっさい、熟練した医者は、医術において知られるかぎり、ほとんどすべての病気を知っているが、身体によって知覚されるものはみな、みずから経験していないかぎり知らないのである。

それゆえ、悪についての二種類の知識がある。ひとつは精神の力によって明らかになるものであり、いまひとつは経験的知覚に内属するものである(たしかに、すべての悪徳は賢者の教えによって知られるが、他方では愚者の悪しき生によって知られるものである)。そのように、悪の忘却に二種類ある。ひとつは探求し教えられたことを忘れるものであり、いまひとつは経験し蒙ったことを忘れるものである。聖徒たちが過去の悪を想い出さないのは、第一の忘却によるものである。かれらはすべての悪を逃れるので自分たちの感覚からまったく消し去られるからである。

けれども、聖徒たちのうちにあって偉大なものとなる知識の力は、かれら自身の過去の悲惨のみならず、罰せられた者の永遠の悲惨をもかれらに隠されていることはない。そうでなければ、もしもかれらがみずからの憐れむべきであったことを知らないとしたならば、どうして詩人は「わたしは主の憐れみをとこしえにうたうでしょう(六)」というであろうか。かの御国にとって、わたしたちをその血によって救い出したキリストの恩恵の栄光をうたう以上によろこばしいものはまったくないのである。そこでは、「静まって、わたしこそ神であることを知れ(七)」と

いうことばが成就するであろう。これは、夕べをもたない真の最大の安息であって、主が世界をおつくりになる最初のわざのなかでいわれたものである。そこではこう読まれる。「神は第七日にそのつくったすべてのわざから休まれた。そして神は第七日を祝福し、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざから休まれたからである[八]」。

神の祝福と聖別によってわたしたちが満たされつくりかえられるとき、わたしたち自身もまた、あの第七日となるであろう。そこにおいて、わたしたちは静まり、神自身を見るであろう。ところが、わたしたちが神から離れ去って「あなたがたは神のようになるだろう[九]」という誘惑者の声に耳を傾けたとき、わたしたち自身が神のようになることを欲したのであった。わたしたちは、神を棄てるのではなく、神にあずかることによって神のようになるべきであるのに、わたしたちをおつくりになった真実の神から離れ去ったのである。わたしたちは神なしに何をなしたであろうか。わたしたちは神の怒りのなかに落ちるのみであった[一〇]。しかし、神によってつくりかえられ、神のより大きな恩恵によって完全なものとされて永遠のうちに休らうのである。そして、神がすべての者にあってすべてとなられるとき[一一]、神自身を見、神によって満たされるであろう。

わたしたちのすべての善き業は、それがわたしたちのものではなく神の業であると解されるとき、この安息を得るためにわたしたちのものとして数えられるのである。もしもわたしたちがそれをわたしたちに帰するならば、奴隷的なものとなるであろう。安息日について「奴隷の業をしてはならない[一二]」といわれているからである。だからして、預言者エゼキエルによってい

われているのである。「わたしはまたかれらに安息日を与えて、わたしとかれらとの間のしるしとした。これは主なるわたしがかれらを聖別したことを、かれらに知らせるためである」[一三]。わたしたちが完全に休み、かれが神であることを完全に見るとき、このことを完全に知るであろう。

聖書の表現にしたがって、諸時代を日々として数え、それによって時代区分をあげるならば、この安息は明らかに第七日となるであろう。第一の時代がいわば第一日で、アダムから洪水に至るまでである。第二の時代は洪水からアブラハムまでである。これらはその時代の経過において等しくあるのではないが、諸世代の数にかんしていえば、それぞれ十世代が見られる。その時代から、福音書記者マタイが区切っているように[一四]、キリスト降誕に至るまで三つの時代がある。それぞれが十四世代によって説明される。第一はアブラハムからダビデまで、第二はダビデからバビロン捕囚まで、第三はそこからキリストの肉における生誕までである。このようにわたしたちは五つの時代をもつこととなる。わたしたちはいま第六の時代にいるのであるが、しかし、世代の数によって測ることはできない。それというのも、「時期や場合は、父がご自分の権威によって定めておられるのであって、あなたがたの知るかぎりではない[一五]」といわれているからである。このあと、いわば第七日に神は休まれるであろう。そして、わたしたちがそうである同じ第七日を、わたしたちは神ご自身のうちにあって休みとなすであろう。

しかしながら、これらの各時代についてくわしく述べようとするならば、長い仕事になるであろう。重要なことは、この第七日は、わたしたちの安息であり、その終わりは夕べではなく、

いわば主の永遠の第八日であるということである。それは、たんに霊のみでなく、身体の永遠の安息をも予示するキリストの復活によって聖なるものとされた日である。そこにおいては、わたしたちは休み、そして見るであろう。わたしたちは見、そして愛するであろう。わたしたちは愛し、そして称賛するであろう。これこそ終わりなき終わりにおけることである。じっさい、わたしたちの終わりとは、いかなる終わりももたない御国へと至ることにほかならないからである。

わたしは、主の御助けによって、この大きな仕事を果たすべき義務から解かれるときがきたとおもわれる。ある人びとにとってはあまりに長すぎ、ある人びとにとってはあまりに短かすぎたかもしれないが、それはわたしにはわからない。けれども、これで十分であるとおもう人がいたならば、わたしにではなく、神に、わたしと共に感謝をささげてほしいのである。アーメン、アーメン。

(一)「コリント人への第一の手紙」一五の二八参照。
(二)「詩篇」八四の四。
(三)本書第二十二巻第二十四章参照。
(四)「レビ記」二六の一二。
(五)「コリント人への第一の手紙」一五の二八。
(六)「詩篇」八九の一。
(七)同上、四六の一〇。

（八）「創世記」二の二、三。
（九）同上、三の五。
（一〇）「詩篇」九〇の七参照。
（一一）「コリント人への第一の手紙」一五の二八参照。
（一二）「申命記」五の一四。
（一三）「エゼキエル書」二〇の一二。
（一四）「マタイによる福音書」一の一七参照。
（一五）「使徒行伝」一の七。

訳者の使用したテキストおよび訳書

S. Aureli Augustini Episcopi De Civitate Dei Libri XXII ex recensione B. Dombart, quartum recognovit A. Kalb. Vol. I, Lib. I–XIII, Vol. II, Lib. XIV–XXII. Lipsiae in Aedibus B. G. Teubneri MCMXXVIII, MCMXXIX.

S. Aureli Augustini Episcopi Hipponensis De Civitate Dei Contra Paganos Libri XXII edited, with an introduction and appendices by J. E. C. Welldon, D. D. Vol. I, Lib. I–XI, Vol. II, Lib. XII–XXII. London Society for Promoting Christian Knowledge, 1924.

Sancti Aureli Augustini Episcopi Opera (Sect. V Pars 1 & 2), De Civitate Dei, ex recensione Emanvel Hoffmann, 1899, 1900 : in "Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum", Vol. XXXX Pragae, Vindonae, Lipsiae.

Augustinus, De Civitate Dei, In Auswahl bearbeitet von Josef Fischer. Text 2. A. 1954. in „Aschendorffs Sammlung lateinischer und griechischer Klassiker", Münster. (Aschendorffsche Verlagsbuchhandlung)

Augustinus, De Civitate Dei, 2 Tomi, in "Corpus Christianorum, Series Latina, XLVII, XLVIII" 1955. (Brepols)

Augustine, Concerning The City of God against the Pagans. A new translation by Henry Bettenson, with an introduction by David Knowles. 1972. (Penguin Books)

St. Augustine, The City of God. Translated by Demetrius B. Zema, S. J. and Gerald G. Walsh, S. J. with an introduction by Etienne Gilson, New York, Fathers of The Church, Inc. 1950.

The Works of Aurelius Augustine, Bishop of Hippo, The City of God. Translated by Principal Marcus Dods, D. D. Edinburgh, T. & T. Clark. 1949.

St. Augustine, The City of God Against The Pagans, with an English translation by George E. McCracken, William M. Green, David S. Wiesen, Philip Levine, Eva Matthews Sanford, William Chase Greene. Volume 1–7. London, William Heinemann. (The Loeb Classical Library)

St. Augustine's City of God. Abridged and translated by J. W. C. Wand (Oxford), 1963.

Basic Writings of Saint Augustine, edited, with an introduction and notes by Whitney J. Oates. Vol. Two (The City of God : Bks. I, $II_{14,21}$, $IV_{2,4}$, V, VI_5, VII_6, VIII, IX_{15}, X_2, XI, XII, XIII, XIV, XV, XVI, XVII, XVIII, XIX, XX, XXI, XXII). Transl. by M. Dods, assisted by G. Wilson (Translator of Bks. IV, XVII, XVIII) and J. J. Smith (Translator of Bks. V, VI, VII, VIII). (Random House Publ.) New York, 1948.

St. Augustine's City of God, translated by Marcus Dods in "A Select Library of the Nicene and Post Nicene Fathers of The Christian Church" First Series, Vol. II. (W. M. B. Eerd-

mans Publishing Company) 1956.

Saint Augustine : The City of God (De Civitate Dei). A translation into English by John Healey, 2 Vols. 1909, Edinburgh (John Grant).

Saint Augustine : The City of God (De Civitate Dei), 2 Vols. John Healey's Translation, with a selection from Vives' Commentaries, edited by R. V. G. Tasker, M. A, B. D. Introduction by Sir Ernest Barker in "Everyman's Library" (J. M. Dent & Sons Ltd.). London, 1950.

R. H. Barrow : Introduction to St. Augustine, The City of God, being selections from the De Civitate Dei including most of the XIXth book with text, translation and running commentary, 1950, London (Faber & Faber).

Aurelius Augustinus, Der Gottesstaat. In deutscher Sprache von Carl Johann Perl. Otto Müller Verlag, Salzburg.

Aurelius Augustinus vom Gottesstaat. Vollständige Ausgabe eingeleitet und übertragen von Wilhelm Thimme, Artemis-Verlag Zürich, 1955. (Band 3, 4 der Werke des Augustinus)

Augustinus, Der Gottesstaat. Die staatswissenschaftlichen Teile übersetzt, mit teilweisem lateinischen Begleittext versehen und behandelt von Karl Völker. 1923. Verlag von Gustav Fischer, Jena.

Des heiligen Augustinus zwei und zwanzig Bücher von der Stadt Gottes, aus dem Lateinischen der Mauriner Ausgabe übersetzt von J. P. Silbert. 2 Bde., 1826. Wien, Druck und Verlag von

J. B. Wallishausser.

Ausgewählte Schriften des hl. Aurelius Augustinus, Kirchenlehrers, nach dem Urtexte übersetzt aus dem Lateinischen der Maurinerausgabe übersetzt von Ulrich Uhl, Zweiter Bd. 1873, Dritter Bd. 1874 : in „Bibliothek der Kirchenväter, Auswahl der vorzüglichsten patristischen Werke in deutscher Übersetzung, herausgegeben unter der Oberleitung von Dr. Valentin Thalhoser".

Des heiligen Kirchenvaters Aurelius Augustinus Ausgewählte Schriften aus dem Lateinischen übersetzt, I Band & II Band : Gottesstaat, übersetzt von Alfred Schröder, Einleitung von Joh. Nepomuk Espenberger : in „Bibliothek der Kirchenväter", 1911, 1914, München, Verlag Josef Kösel & Friedrich Pustet.

La Cité de Dieu de saint Augustin. Traduction nouvelle par L. Moreau, Édition avec le texte latin, 3 tomes Paris. Librairie Garnièr Frères.

Oeuvres complètes de saint Augustin, traduit pour la première fois en français sous la direction de M. Raulx, Tome Treizième La Cité de Dieu, traduction par M. Saisset, 1869. Bar-le-Duc, L. Guerin & Cie, Editeurs.

Oeuvres de saint Augustin, 33–37, cinquième série. La Cité de Dieu. Texte de la 4e éd. de B. Dombart et A. Kalb, Introduction générale et notes par G. Bardy, Traduction française de G. Combès 1959～60. Paris. (Desclée de Brouwer)

Saint-Augustin Évêque d'Hippone : Oeuvres Complètes Tome XXIII, XXIV, XXV. Traduites en français et annotées par Péronne et al. Le texte latin et les notes de l'édition des Bénédictines, 1873. Paris, Librairie de Louis Vivès, Éditeur.

アウグスティヌス『神の国』(1)、赤木善光、泉治典、金子晴勇訳、アウグスティヌス著作集第十一巻、教文館、一九八〇年。

アウグスティヌス『神の国』(2)、茂泉昭男、野町啓訳、同著作集第十二巻、教文館、一九八二年。

アウグスティヌス『神の国』(3)、泉治典訳、同著作集第十三巻、教文館、一九八一年。

アウグスティヌス『神の国』(4)、大島春子、岡野昌雄訳、同著作集第十四巻、教文館、一九八〇年。

アウグスティヌス『神の国』(5)、松田禎二、岡野昌雄、泉治典訳、同著作集第十五巻、教文館、一九八三年。

アウグスティヌス『神の国』、J・W・C・ワンド編、出村彰訳、日本基督教団出版局、一九六八年。

ミ

ム

メ

ユ

ヨ

ラ

リ

ヘ

ホ

マ

ハ

ヒ

ト

ナ

ニ

ソ

ス

セ

コ

キ

イ

ウ

事項索引

ア

アウグスティヌス 神(かみ)の国(くに)（五）〔全5冊〕

1991年4月16日 第1刷発行 ©

訳 者 服(はっ)部(とり)英(えい)次(じ)郎(ろう)
藤(ふじ)本(もと)雄(ゆう)三(ぞう)

発行者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-3265-4111(案内)

定価はカバーに表示してあります 印刷・製本 法令印刷

落丁本・乱丁本はお取替いたします Printed in Japan

ISBN4-00-338057-6